

長崎国際大学大学院

人間社会学研究科

博士学位論文

エスニック・ツーリズムと社会変容に関する研究
ー中国南西部広西チワン族自治区の少数民族を事例としてー

地域マネジメント専攻

1411D02

覃 建恩

平成 29 年 6 月

目 次

序論	1
第1節 研究の背景と問題点	1
1. エスニック・ツーリズム	1
(1) エスニック・ツーリズムの定義	1
(2) 中国におけるエスニック・ツーリズムの位置づけ	3
2. エスニック・ツーリズムと民族的アイデンティティ	4
(1) アイデンティティ	4
(2) 民族的アイデンティティ	5
3. エスニック・ツーリズムと民族社会の変容	6
(1) 欧米の社会変動	7
(2) 日本の社会変動	9
(3) 中国の社会変動	10
(4) 観光革命から見る中国観光	11
4. エスニック・ツーリズムとまちづくり	15
5. 研究事例	18
第2節 先行研究と本研究の目的および方法	20
1. 先行研究	20
2. 論文の目的および方法	21
第3節 理論の考察	22
第4節 本論文の構成	24
第I部 中国におけるエスニック・ツーリズム	26
第1章 中国少数民族	27
第1節 中国の少数民族の現況	27
第2節 チワン族の歴史と文化	31
1. チワン族に関する先行研究	31
2. チワン族の年中行事	34
(1) 春節	36
(2) 三月三	37
(3) 端午節	37
(4) 莫一大王節	38
(5) 中元節	38
(6) 中秋節	38
(7) 重陽節	39
3. チワン族の建築様式	39
第3節 ヤオ族の歴史と文化	40
1. ヤオ族に関する先行研究	40

2. ヤオ族の人口および名称	44
3. ヤオ族の起源に関する問題	46
4. ヤオ族の居住環境と分布地	53
第4節 布努ヤオ族の歴史と文化	55
1. 布努ヤオ族の族源と居住環境	55
2. 布努ヤオ族の社会経済	57
3. 布努ヤオ族の伝統文化	59
(1) 布努ヤオ族の服飾文化	59
(2) 布努ヤオ族の建築様式	63
(3) 布努ヤオ族の祭り文化	65
第5節 まとめ	67
第2章 西部大開発におけるエスニック・ツーリズムの進展	68
第1節 西部大開発の構想	68
第2節 西部大開発の実施と経済効果	73
第3節 西部大開発におけるエスニック・ツーリズムの進展	82
第4節 まとめ	91
第3章 西南中国におけるエスニック・ツーリズムの展開	92
第1節 雲南省におけるエスニック・ツーリズムの展開	94
1. 雲南省の少数民族	94
2. 2000年代までの雲南省のエスニック・ツーリズム	96
3. 西部大開発における雲南省のエスニック・ツーリズム	99
第2節 貴州省におけるエスニック・ツーリズムの進展	102
1. 貴州省の少数民族	102
2. 貴州省のエスニック・ツーリズムの展開	102
3. 貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州の観光動向	105
第3節 広西チワン族自治区におけるエスニック・ツーリズムの進展	106
1. 広西チワン族自治区の少数民族	106
2. 西部大開発における広西チワン族自治区の観光動向	108
3. 広西チワン族自治区のエスニック・ツーリズム	110
第4節 考察	113
第5節 まとめ	115
第4章 エスニック・ツーリズムにおける少数民族文化の観光活用	116
第1節 観光資源の定義と分類	116
1. 日本における観光資源の定義と分類	116
2. 中国における観光資源の定義と分類	118
第2節 河池市の少数民族の観光資源	120

1. 河池市の概況	120
2. 河池市の観光資源	123
3. 河池市における少数民族の文化観光資源	124
4. 観光インフラの整備	127
(1) 交通の整備	127
(2) 観光事業所の整備	127
第3節 河池市における少数民族の伝統文化の観光活用	128
1. チワン族における伝統文化の観光活用	128
(1) 宜州市における劉三姐の観光開発	128
(2) 三月三	130
(3) 蚂拐（カエル）節	131
2. ヤオ族における伝統文化の観光活用	132
3. マオナン族における伝統文化の観光活用	132
4. ムーラオ族における伝統文化の観光活用	133
5. 河池市における文化観光の経済効果	134
第4節 まとめ	135
第Ⅱ部 エスニック・ツーリズムと文化変容	137
第1章 エスニック・ツーリズムにおける祭りの「擬似イベント化」	138
第1節 祝著節	138
1. 祝著節に関する研究	138
2. 祝著節の概要	138
3. 祝著節のあり方	139
4. 研究対象地域の概況	141
第2節 エスニック・ツーリズムにおける祝著節の変質	142
第3節 銅鼓文化に対するツーリズムの影響の認識度の分析	147
第4節 宗教の文脈からみる伝統祭りの「混乱」	152
第5節 まとめ	155
第2章 エスニック・ツーリズムにおける銅鼓文化の変容	156
第1節 少数民族の銅鼓文化	156
1. 銅鼓文化に関する研究	156
2. 銅鼓の分布地域	157
第2節 銅鼓文化の概要	158
第3節 近現代における銅鼓文化の概況	161
第4節 銅鼓文化の観光活用のあり方	162
第5節 まとめ	166
第3章 エスニック・ツーリズムにおける演出された民族文化	167

第1節 中国民族文化の観光資源化の動態	167
第2節 白褲ヤオ族伝統文化の観光資源化	167
1. 白褲ヤオ族の概況	167
2. 白褲ヤオ族の伝統文化と社会変動	169
3. 「観光脱貧」と伝統文化の観光資源化	169
4. 白褲ヤオ族社会の観光の実態	170
5. 中国白褲瑤民俗風情園の観光事情	171
6. 企業化された管理の王尚屯	173
7. 白褲瑤生態博物館および他の観光動向	174
第3節 白褲ヤオ族の伝統文化の観光資源化についての考察	176
第4節 まとめ	178
第4章 エスニック・ツーリズムにおける布努ヤオ族の文化変容	179
第1節 エスニック・ツーリズムにおける大化ヤオ族自治県の観光動向	179
1. 大化ヤオ族自治県の概況	179
2. 大化ヤオ族自治県の布努ヤオ族の人口と分布地	180
3. 大化ヤオ族自治県の観光動向	181
第2節 大化ヤオ族自治県の観光資源	182
第3節 観光開発が布努ヤオ族の伝統文化に与えた影響	189
1. 観光開発が布努ヤオ族の服飾文化に与えた影響	189
(1) デザインと耐久性、生産体制	189
(2) 伝統服飾の着用方式の有無と季節性	191
(3) 色の組み合わせ	192
(4) 装飾の図案	193
(5) 精神的象徴	194
2. 観光開発が布努ヤオ族の建築文化に与えた影響	194
3. 観光開発が布努ヤオ族の祭り文化に与えた影響	199
(1) 祭り場所と服装の変化	199
(2) 精神崇拜活動から娯楽活動へ	199
第4節 考察	200
1. 観光開発か近代化か	200
2. 広西チワン族自治区におけるエスニック・ツーリズムとまちづくりの調和	201
第5節 まとめ	203
結論	204
謝辞	209
参考文献	210

卷末資料	220
要旨	224
要旨 (英文)	229

序 論

第 1 節 研究の背景と問題点

1. エスニック・ツーリズム

(1) エスニック・ツーリズムの定義

「観光」という言葉は、中国古典の『易経』「風地観」の一節にある「觀国之光、利用賓于王（国の光を観る、もって王に賓たるによろし）」という言葉から生まれたと言われている。いわゆる「觀国之光」の「觀」は、旅行において「見る」および「観察する」ことを意味している。「光」については色々な解釈が可能だと思われるが、例えば、「風光」「輝く」「光明」などの意味をもっている。要するに、「觀国之光」の「光」は、珍しい風光、遺跡、地域の輝く人物、独特な風俗習慣、歴史文化などものといえよう。しかて、現代において観光という言葉は一般的に、「人は日常の定住地を離れて再びそこへ戻る予定で、他の所や他国々の文化や制度などを視察し、珍しい風景などを観賞・観覧する目的で旅行する」¹ことを定義される。

そして本研究で取り上げるエスニック・ツーリズムの概念については、観光客が日常の定住地を離れて、自然の中で生活する地元の住民の居住地を訪問することであると定義できる。こうしたツーリズムのあり方を説明するために、観光研究分野では「エスニック (ethnic)」・ツーリズム、「部族 (tribal)」・ツーリズム、「ネイティブ (native)」・ツーリズム、「アボリジナル (aboriginal)」・ツーリズムなど様々な用語が使われてきた。また、各国の研究者の見解の相違によって、エスニック・ツーリズムの用い方も異なる。日本と欧米の観光研究では、エスニック観光は「エスニック・ツーリズム」と呼ばれることが多い。これに対して中国では、「民族観光」という言葉が用いられ、台湾では「異族観光」と称されている。

幸田 (2003) はエスニック・ツーリズムを「“土着の人びと”のエキゾチックな暮らしぶりに関心が向けられるようなもの」と定義し、文化観光の一形態としている。

また、竹尾 (2008) は、エスニック・ツーリズムとは、「観光目的地において、先住民のライフスタイルや文化などを観光資源とする旅行であり、その地域に住む人々やその暮らしを知り、理解することを目的とした観光や旅行」であると定義し、少数民族の生活や伝統をテーマにした観光と捉えている。

バレーン・L・スミス (1977) は観光人類学の観点から、1970 年代に世界的な規模に広がった観光活動が、訪れるもの (ゲスト) と受け入れる地域社会 (ホスト) の相互関係の中でいかなるインパクトを生じさせるかという問題を論じ、観光行動を 5 つの型に分類している。それらは、すなわち「エスニック・ツーリズム (ethnic tourism)」、「カルチャー・ツーリズム (cultural tourism)」、「ヒストリカル・ツーリズム (historical tourism)」、「エンバイロメンタル・ツーリズム (environmental tourism)」と「レクリエーション・ツ

¹日本観光政策審議会 (1995 年):「今後の観光政策の基本的な方向について」の観光の定義。

ーリズム (recreational tourism) 」である。

スミス (1977) は、「エスニック・ツーリズム」とは「土着の人々、または時として異国情緒をもつ人々の習慣が風変わりで面白い (quaint) という理由で、世間に売り込まれているような観光の形態である」という。この場合、目的地での行動には「地元民の家や村への訪問や、舞踊・儀式の見物、素朴な工芸品や骨董品の買い物」などが含まれる。

こうしたスミスの観光類型論は観光研究に大きな影響を与えたので、ここで他の4つの類型も比較の意味で取り上げておくと、次のようになる²。まず「カルチャー・ツーリズム」とは、「オールドスタイルとしてわれわれの心のなかに残る家屋や手織りの織物、馬や牛車や鋤、そして機械製でない手作りの工芸品など消えてしまった生活習慣のなごりである絵画的な美しさや地方色の豊かさを求める観光活動形態」である。「ヒストリカル・ツーリズム」は「過去の輝かしい歴史を強調した博物館である大聖堂を巡回するような観光の形態」である。また、「エンバイロメンタル・ツーリズム」は「しばしば少数民族観光に付随的で、地域社会の物質文化および自然の環境にどのように適応して存在しているかを知るもの」である。そして、「レクリエーション・ツーリズム」はスポーツや湯治、観光リゾート、そして性的刺激そのものであり、リラックスなどから美食や休養などをおもな目的とする。

これに対してコーエン (1988) は、エスニック・ツーリズムは観光の一つの種類であり、先住民が自分の伝統文化を観光資源し、観光客の消費需要を満足させることである。その中では、自然資源と文化資源および珍しい少数民族の風習が融合されている。また、エスニック・ツーリズムはある社会とその歴史文化に関する豊かな内容を含んでいると言う。

またウェイラーとホール (1992) によると、エスニック・ツーリズムとは「異なる民族 (ethnic) および、異なる文化的背景をもつ人びととの直接的な接触であり、本物のあるいは親密な接触への希求によって主に動機づけられる旅行」である。

さらにバトラー (1996) は、エスニック・ツーリズムという語ではなく、先住民観光 (Aboriginal tourism) という語を用いている。それは主に先住民の民族文化を観光資源とした一つの観光形態であり、それを基礎として観光客を誘致する。これはまた『異族観光』と呼ばれていると規定している。

そしてブルーナー (2001) は、「エスニック・ツーリズムとは、外国あるいは本国からの観光客が観光する時に他の民族を観察することである。これらの民族は通常、種族、少数民族、原始的、田舎の農民というようなラベルを貼られている」と述べている。

台湾の民族研究者である謝 (1994) は、「異族観光とは自分の文化、民族、言語や民族習慣などと違う観光地を訪れる観光活動である。異族観光は風景を観賞するだけではなく、もっとも重要なのは人を観賞する」ことであると言う。

本論文では「エスニック・ツーリズム」という用語に統一して論述していくが、その内容としては、以上に述べてきたエスニック・ツーリズムに関する様々な概念を包含するものとする。

²Valene L. Smith (1977) : *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. University of Pennsylvania Press. (バレーン・L・スミス 著, 三村浩史監 訳 (1991)『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房、6-8 頁)

(2) 中国におけるエスニック・ツーリズムの位置づけ

発展途上国の国々では、多くの少数民族が集中して住んでいる未開発地において、それぞれの言語、服飾、建築物、生活習慣、風俗、祭り、民間芸術、民間芸能、特産物、調理法などを観光資源として活用することにより、ユニークな民族の特色があふれた観光開発に取り組む、いわゆるエスニック・ツーリズムが積極的に試みられている。そして、このようなエスニック・ツーリズムは経済を促進するための有効な手段として、多くの国々で重視されている。

56 の民族によって形成されている中国では、長谷川（2006）が指摘しているように、改革開放路線への転換以降「西部大開発」の政策が打ち出され、内陸部の経済発展と現代化を目指すなかで、少数民族地域の観光開発に大きな期待が寄せられている。そして、1980年代初頭からエスニック・ツーリズムが中国全域に波及していくようになった。特に雲南省政府は観光産業の育成を政策課題として重視し、少数民族の伝統文化や風俗習慣の観光資源としての有効活用に取り組みはじめ、巨大な経済効果をもたらした。

こうした潮流の中で、中国における少数民族の典型的事例と言われる雲南省に位置する西双版纳（シーサンパンナ）の傣（タイ）族自治州には、多くの少数民族が居住している。そこで、雲南省政府は、「民族文化」を重要な観光資源の核とした「民族観光」を展開し、観光産業を当該地域の主要産業と位置づけ、積極的な観光地建設を行っている。

前田直人（2003）の『西双版纳傣族自治州の民族観光における文化表象の交錯：民族であるための方法について』が指摘しているように、西双版纳では、1980年代から本格的に観光開発が胎動し、現在も「濃厚な民族文化」を核とする観光地の開発が続けられている。西双版纳の観光開発の流れをまとめると、以下の通りとなる。まず、1978年に「全州旅遊外事工作會議」が開催されたことで観光開発が始まった。そして、1985年に国家が景洪³、勐海⁴両県を外国人に開かれた地区として承認し、同年の7月には西双版纳傣族自治州旅遊局が発足したことで、観光業の管理体制が整備された。また、西双版纳では、1980年代後半にはヤオ（瑤）族の「盤王節」、ハニ（哈尼）族の「嘎湯帕節」、ジノー（基諾）族の「特懋克節」が相次いで国家、または州政府の承認を受け、中国における重要な民族の祭りとして制度的に認知された。さらに、1988年に「西双版纳州民族風情園」が開園され、1990年代に入ってから空港の建設、主幹道路の整備、宿泊施設や観光地の建設が次々と進められていくことになる。そして最終的には1999年に曼春満というタイ（傣）族の村落を中心に「民俗村」が開園し、同年の5月に宿泊施設も完備する公園型の総合施設である西双版纳原始森林公園が開業して、西双版纳のエスニック・ツーリズムは本格的に展開されることになった。そして、こうした雲南省の少数民族文化の観光開発を皮切りに、中国西南部のエスニック・ツーリズムブームが始まったのである。

雲南省と隣接する広西チワン族自治区でも、国の政策の下で、エスニック・ツーリズムが盛んになってきている。そして、中国政府は、1992年に「友好観光年」を開催し、中国

³景洪（ケイコウ）は雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州に位置する県級市、同州首府の所在地である。

⁴勐海（モウカイ）は雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州に位置する県である。

西南部の少数民族を扱う「民族風情直面」が含まれたが、それは地域の特性を活かして主題化されたエスニック・ツーリズムであった。例えば、1993年に広西チワン族自治区政府は、チワン族の民謡を観光資源として活用し、南寧市で「広西国際民歌節」を開催した。1999年にこの祭りは「南寧国際民歌節」と名称を変え、「99（南寧）民族服飾博覧会」、「広西民族風情展演」などの民族文化に関するプログラムを盛り込み、国の内外から多くの観光客を誘致し、多大な経済的効果をもたらした。さらに、2000年代に入ると、「西部大開発」政策の実施によって、中国西北部および西南部の県レベルの少数民族居住地域で「民俗風情游」がよく見られるようになった。

現在では、中国の東部沿海地域に住んでいる時間的・経済的余裕のある漢民族の人たちが、未開発地の魅力に惹かれ、異文化を体験するために、少数民族居住地域を訪れることがよくみられるようになってきている。しかし、このようなエスニック・ツーリズムの進展は他方でまた、地元住民と観光客との間の文化的価値観の相違、経済的な格差などによって、両者のコンタクトゾーンに摩擦を絶えず生じさせており、そこには少数民族の伝統文化の変質や破壊という問題も現れてきているのである。

2. エスニック・ツーリズムと民族的アイデンティティ

エスニック・ツーリズムを研究する際に、文化変容は重要な論点として古くから観光人類学の領域ではさまざまな議論が大いになされている。そして、文化変容の問題と文化持続が常にとともに考察されるようになってきている。また、文化変容を考察するに際しては、特に少数民族社会の文化変容を検討する時には、必ず研究対象の人々がどのようなアイデンティティをもっているのかを確認したうえで、彼らがどのように文化的特徴やその他の手段を用いて自らのアイデンティティを表現しているのかに明らかにしなければならない。中谷（2000）によれば、アイデンティティは西洋の哲学思想では古くから議論され、特に近代以降には変わらぬものとは何かを問い続ける認識論の主要テーマとして、いわゆる「同一性」に関する論争の中心となった⁵。そして、本論文でもエスニック・ツーリズムと民族社会の変容を考察するに際して、民族的アイデンティティとは何かが重要な論点の一つとなるため、アイデンティティという語の概念について検討することが必要である。

(1) アイデンティティ

アイデンティティ (identity) という語の概念にはさまざまな解釈がある。この用語を、単に同一性というに留まらず、独特の含意で用いた最初の人物はアメリカの精神分析学者エリク・H・エリクソンである。彼はアイデンティティを、自我アイデンティティと集団アイデンティティの2つの意味において定義した。

まず、個人の自我アイデンティティについて、エリクソン（1959）は「〈身体を自由に動かせるようになること〉と〈文化的な意味〉が一致することを通して、あるいは〈身体をきちんと動かせる喜び〉と〈社会的な承認〉が一致することを通して、子供たちにより

⁵中谷猛（2000）：『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理－国民国家論研究のためのノート』立命館法学、2000年3・4号下巻（271・272号）、681頁。

現実的な自尊感情をもたらす」と述べている。この「自尊感情」は、「やがて成長し、手ごたえを持って実感される集団の未来に向かって自我が確実に学んでいる、という確信」、あるいは「社会的リアリティの中で明確な位置づけを持った自我に発達しつつある、という確信」に変わると述べている⁶。そして、このような感覚を、エリクソンは自我アイデンティティと呼んだのである。

また、集団アイデンティティについてエリクソンは、「経験を組織化するその集団に固有の基本的な方法が、乳児の初期の身体的経験に伝えられ、それを通じて、乳児の芽生え始めた自我にも伝えられてゆく」と述べている。

そして、細見（2008）はこのようなエリクソンのアイデンティティ論に関して次のような解釈を述べている⁷。

元来「アイデンティティ」はもちろん「同一性」という意味であって、必ずしも人間の心理的主体や「自我」にそくした問題とはかぎらない。ある物質的な対象 A がまさしく A であることもまた、その当の対象 A の「アイデンティティ」（同一性）であるし、リンゴとオレンジがどちらも果実という意味では同一であるという事態にも「アイデンティティ」は存在する。前者は個体としてのアイデンティティであり、後者はクラス(集団)としての「アイデンティティ」ということになるだろう。そしてこれらの場合にもやはり、他の個体、他のクラスとの関係抜きには、それぞれの「アイデンティティ」を語ることが不可能であることは、言うまでもない。

こうしたことから一般的にアイデンティティとは、個人的、集団的、あるいは民族としての自分自身をどのように捉えるかに関わるものであるとされる。

（２）民族的アイデンティティ

アンソニー・ギデンズ（1989）によれば、エスニシティとはある人たちのコミュニティを他のコミュニティから区別する文化的習わしの見地を指しており、そのエスニック・グループの成員が自分たちを社会の他の集団と文化的に異なる存在とみなし、また逆に他の集団もそう考えていることを意味している。また、その最も一般的な特徴は、言語（実際の、または想像上の）、歴史ないし祖先、宗教、衣服様式や装飾様式であることをギデンズは指摘している。さらに、マイノリティ・グループについてギデンズは、「マジョリティの人たちに比べて不利益を被り、また、何らかの集団的連帯意識を、つまり共属感情をいただいている」ことを指摘している⁸。このような共属感情については、R.M.マッキーヴァー

⁶Erik H. Erikson (1959) : *Identity and the Life Cycle*. New York: International Universities Press. (エリク・H・エリクソン 著, 西平直・長島由恵 訳 (2013) : 『アイデンティティとライフスタイル』誠信書房、4-8 頁。)

⁷細見和之 (2008) : 『アイデンティティ/他者性』岩波書店、2-3 頁。

⁸Anthony Giddens (1989) : *Sociology. Polity Press*. (アンソニー・ギデンズ 著, 松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・立松隆介・内田健 訳 (2009) : 『社会学 (第 5 版)』而立書房、496-500 頁。)

(1917) が共同体感情と呼び、コミュニティが共通の生活の場であることから住民間に生じる共属の感情であるとのべている。さらに、マッキーヴァーによれば、エスニシティとは共同生活が行われ、その成員が多かれ少なかれ自由に日常生活の多様な局面において、他の成員と関係を有する何らかのサークルのことであり、その属性は 2 つある。1 つは、社会階級や地位を表したり、あるいは遊牧、未開、文明、人口稠密、好戦的等々のような状態を表す属性である。もう 1 つは、トーテム信仰、カースト的抑圧、封建制、産業化等々のような共通の習慣や生活様式を表す属性である。そのうえでマッキーヴァーは、「エスニシティはある程度の社会的凝集性をもつ共同生活の一定領域である」と指摘した⁹。

また、丸井 (2012) はアイデンティティ研究の全体的な流れを歴史的に見ると共に、近年のそうした研究の実際の形を概観した上で、マクロな視点から集団としての人々の民族的・国家的・文化的アイデンティティの在り方と、その表れとしての言語使用や言語選択の状況を論じた研究を取り上げている。その結果、さまざまな研究者によって扱われているアイデンティティは、ほとんどが「〇〇人」という概念に当たるものであり、その帰属を示す集団は国家であったり、民族であったり、地域であったり、それらが複合したものであったりしているが、各々の研究では、対象者の言語使用の状況に、その集団への帰属意識が表れていることが示されている¹⁰。このような集団への帰属意識は、A.D.スミス (1979) が集団の感覚・感情・態度であり、文化的な独自性の意識もしくは集団的帰属感であるが、それらの感情が集団の起源神話・歴史的記憶・文化・郷土などによって形成されたものであることを指摘している¹¹。

以上検討してきた議論から考えると、民族的アイデンティティとは、共通の生活の場であることから住民間に生じる共属の感情であり、それら共属の感情は民族集団の起源神話・歴史的記憶・文化・郷土などによって形成されたものと言ってよいであろう。

そして、エスニック・ツーリズムの進展が、少数民族のアイデンティティにインパクトを与え、それによって彼らの民族的アイデンティティがどのように変化するかを、本論文では考察するのである。

3. エスニック・ツーリズムと民族社会の変容

前述したように、中国の観光業は 1978 年からの経済改革の実施によってその発展が著しいものとなった。そして、雲南省はエスニック・ツーリズムの先頭を切り、少数民族の居住地には巨大な経済波及効果がもたらされた。しかしその一方、近代化の影響のみならず、エスニック・ツーリズム発展の過程が民族社会に影響を与えていることは間違いない。したがって本論文では、エスニック・ツーリズムと民族社会の変容がどのような関係にあるかという問題を、西南中国におけるエスニック・ツーリズムと民族社会の変容を中心に

⁹R.M.マッキーヴァー 著,中久郎・松本通晴 監訳 (2009):『コミュニティ』ミネルヴァ書房、450 頁、507 頁。

¹⁰丸井ふみ子 (2012):「アイデンティティ研究の動向:異文化接触・言語との関係を中心に」『言語・地域文化研究 (18)』東京外国語大学大学院、193-209 頁。

¹¹A.D.スミス 著, 巢山靖司・高城和義 訳 (1999):『ネイションとエスニシティ』,名古屋大学出版会、57 頁。

論しながら、近代化が少数民族の社会に及ぼす影響も留意しつつ検討する。その際また、観光活動の飛躍によって少数民族の社会変動がどのように生じるかについても詳細な検討を行う。

民族社会の変容だけではなく、一般に社会の変動は決して現代に特有な現象なのではなく、歴史上絶え間なく繰り返されてきたものである。中国の社会変動を考察する前に、ここで欧米と日本における近代化と社会変動の問題について概観していく。

(1) 欧米の社会変動

18 世紀以前には、世界のどの社会においても文明はほとんど農業を基礎として進んできた。大部分の人々は農村で暮らして生計を立てていた。文化的中心である都市の住民は、周囲の農村に依存して生活せざるを得なかった。そのため、政治と社会権力およびそれに伴う地位は、全て農地をどれほど所有するかによって決定されていた。領主や小地主は土地を統治し、農民と奴隷たちはその土地で苦しい苦働に従事するほかなかった。農民と都市の住民とが一緒に生存することによって 1 つの機能を有する有機的社会が形成されていたのである。

しかし、18 世紀中頃から 19 世紀初頭にかけて、イギリスに始まる機械制工場と蒸気力の利用を中心とした技術革新とそれに伴う社会の変化、すなわち産業革命（Industrial Revolution）が起こった。長谷川（2012）によると、「産業革命は、18 世紀後半のイギリスに始まる、綿工業（木綿工業）での手工業に替わる機械の発明、さらに蒸気機関の出現とそれにとまなう石炭の利用という生産技術の革新とエネルギーの変革」をいう。その影響は、生産技術方面からみると、工場手工業に代わって機械制工場が主となり、肉体労働が機械による生産に代わったということである。また、社会関係の変化をみると、農民階級による効率の低い生産様式が消え、工業資本階級と工業無産階級が急速に成長し、資本家と労働者という社会関係からなる資本主義社会を確立させた。さらに、生産技術の革新とエネルギーの変革は、機械工業、鉄工業、石炭工業などの重工業に波及し、鉄道や蒸気船の実用化を実現することによって交通革命をも引き起こした。すなわち、もともと農業を基盤としていた旧来の社会文明は、このような工場制機械工業の出現という技術革新を中心とした産業革命の前に激しく動揺し、それに伴って資本主義生産様式を確立させ、基本的な生産基盤を農業社会から工業社会へと転換させたのである。

この後、ほぼ 1830 年代からはヨーロッパの他の国でも産業革命が開始された。まず、フランスでは七月王政時代以降に、金融貴族と銀行事業が確立され、産業革命が大きな進歩を遂げた。フランスの産業革命は、イギリスと同じような形で綿工業から始まり、1840 年代には鉄道建設ブームの中で、イギリスからの鉄鉱石と石炭などの原材料の輸入とともに、綿工業と冶金工業などの産業が大規模に進展された。そうした産業における大量の労働者は、フランスのわずかな大都市と工業区へなだれ込んだために、都市が急激に膨張し、急速に資本主義化が進むとともに、労働問題と社会問題が深刻になってきた。また、ヨーロッパ大陸の他の国々をみると、1830 年に独立を達成したベルギーの産業革命の進歩は著しく、交通運輸の便利さの故に、西ヨーロッパの貿易商業の中心となっていた。ついで 1840 年代にはドイツの産業革命が、綿織物などの軽工業から製鉄、機械などの重工業への転換

をなし遂げて、鉄道や道路の建設が国家的事業として推進された。

1890年代にはロシアが産業革命の時期を迎えた。ロシアでは、クリミア戦争の敗北に衝撃を受けたアレクサンドル 2 世が 1861 年に農奴解放令を出したことによって、上からの近代化が始まり、先進国の技術を取り入れて上からの産業革命を進めた結果、1890 年代に工業化が進んだ。そして 20 世紀に入ると、日露戦争の敗北、第 1 次世界大戦の長期化などの中で革命運動が起こり、資本主義社会の十分な生育を見ないままに、1917 年のロシア革命（第 2 次）で一気に社会主義体制を実現した。

アメリカの産業革命は、1790 年代にイギリスの綿工業をモデルとして推進され、その後 1815 年以降、機械装置の改良を契機として生産力は強力に成長し、アメリカ東部の各州に綿工場が建設された。そして、産業革命の恩恵によって、18 世紀の半ばまでにアメリカの冶金工業、鉱業などの重工業の総生産額は農業総生産額を超え、貿易赤字国から貿易黒字国となっている。それと同時に、大量の人々が農村から都市に移転したことや外国移民の流入によって、さまざまな労働問題が生じ、都市では貧困と不健康な状態が深刻な社会問題を発生させた結果、労働者自らが団結して権利を守るために、社会主義運動も起こっている。

以上述べたように、18 世紀中頃から 19 世紀初頭までの欧米社会では、おもに機械化された工場制度の確立によって、資本主義的生産様式が発達し、それと同時に産業雇用の発展、都市の拡張、人々の賃金労働者化などの社会変動も引き起こされた。また、産業革命の進展は社会における諸階級の新しい構造を生みだし、農民階級の分解とともに、労働者階級の膨大化が生じ、その中から資本家という新しい支配階級が時代の主役として登場してきた。

この時代には、農民階級の労働形態と生活形態が大きく変化した。19 世紀初頭から 20 世紀初頭までの欧米社会では、農業国としてのあり方が工業文明を中心とする国のあり方にとって代わられることに伴い、労働者階級の人口が爆発的に増加した。ミシェル・ボー（1996）は、「この時代を画したいま一つの基本的動きとして注目すべきものは、労働者階級の確立」で、「四大資本主義国（イギリス、アメリカ合衆国、ドイツ、フランス）において、労働者階級は合わせてほぼ三千万人に上った。もし資本主義的工業化の波に洗われた他の諸国までに加えれば、この数字は四千万を超えるだろう」と述べている。さらに、ボーが「世界全体で集計してみると、1913 年当時には、ほぼ一五〇〇万人の労働者が労働組合に組織されていた」と述べているように、労働時間の長さの短縮に向けて運動という社会問題が生み出され、欧米諸国の街頭ではデモ行進、ストライキなどの社会問題がしばしば生み出し、運動が引き起こされた¹²。すなわち、欧米諸国では人々が、農村を捨てて、都市に流入し、都市圏住民の著しい増加によって、工業化と都市化が、短期的には悲惨な影響を惹き起こしたのである。また、この 100 年の間に旧来の有閑階級であった貴族に代わり、工業化により利益を得た工場経営者や貿易業者、有力商人等の新興階層が新たな余暇の担い手となっていた。一方、大衆の抗議運動が現れたことによって、生活条件と労働

¹²ミシェル・ボー 著・筆宝康之・勝俣誠 訳（1996）：『資本主義の世界史 1500－1995』藤原書店、212-218 頁。

時間の改善がなされ、社会階層の広い分野で「富」と「余暇」の増大がもたらされた。そして、これまで特権階級の占有物であった余暇が労働者階級の手にも入り得る時代になったのである。さらに、鉄道、蒸気船・豪華客船による観光産業の発展も著しくなった。例えば、19世紀半ばに、世界初の万国博覧会がロンドンのハイドパークで開催され、約600万人の観覧者を集めた。その時、団体旅行の先駆者であるトーマス・クックが鉄道で万国博への客の輸送を行った。

(2) 日本の社会変動

日本の産業革命は、資本主義の先進国といわれている欧米諸国に比べると一世紀以上遅れ、1868年の明治維新による近代化の始まりと連動して19世紀の末頃からはじまった。

日本は1854年に開国して世界資本主義のなかに放り込まれ、1868年に明治維新を達成し、その過程で権力をにぎった藩閥政府が殖産興業政策によって急速な近代化を進めた。そして、近代日本は西洋諸国に学びながら工業化を進め、特に1890年代から20世紀初頭に日清・日露戦争によって急速に進展した。

大石（1998）によると、日清・日露の両戦争が日本資本主義の確立とその帝国主義への同時転化を決定づけ、戦争の賠償金を基礎に、軍備拡張を基軸とし、製鉄所建設と鉄道・電話の拡張、海外貿易拡大などの効果をもたらした¹³。日本の産業革命は、生産における技術革新と急速な経済成長をもたらしたのみならず、従来の農業社会の構造を根底から崩壊させ、農民の比率を減らし、商工業従事者の激増と、重工業に従事する労働者の数の大幅な増加をもたらした。そして、この時期に日本人の労働体系が変化し、それまでの農業中心社会から工業中心社会へと転換したのである。このような労働形態の変化によって、定期的な収入を得ることができ、余暇時間も増加した日本の中流階層が増大した。すなわち、日本では、江戸時代から余暇が農民に浸透していたが、日清・日露の両戦争後の時期にますます余暇時間が拡大し、観光産業の発展が急速に進行したのである。

また、第二次世界大戦の敗戦によって、日本の経済は崩壊したが、戦後には大きく改革されることになった。その時期に、世界的な労働時間短縮と余暇の量的拡大の動きが日本にも波及した。1947年制定の労働基準法によると、労働者の年次平均労働時間は、戦時下の最大3500時間に対して2200～2400時間へと減少している。また、1950年代後半から、日本が高度経済成長を開始すると、好景気の影響で、民衆の所得と余暇時間が増加しつつあり、消費ブームが発生し、三種の神器（冷蔵庫・洗濯機・白黒テレビ）のような物質的なものが出現するだけでなく、精神的レジャー観光ブームも起こった。そして、1964年海外旅行が自由化されたことにより、日本人が海外に出ていくことが容易になり、それまでの富裕層だけではなく、海外旅行が普通の民衆たちにとっても手に届くものとなっていった。日本の国際観光が盛んになってきたのである。

¹³大石嘉一郎（1998）：『日本資本主義の構造と展開』東京大学出版会、14-15頁。

(3) 中国の社会変動

中国は、世界で最も古く文明が現れた地域の一つで、2000 年以上続いた絶対君主制による封建王朝の歴史を持っている。そうした中国で近代化がその兆しを見せはじめたのは清朝の末期のことであった。

18 世紀末までには、清朝とヨーロッパとの貿易はイギリスがほぼ独占していた。19 世紀初頭には、イギリスが貿易黒字を転換するために、麻薬であるアヘンを中国に輸出を始めた。1839 年に、清朝政府はアヘンの毒害を止めるために、林則徐に命じてアヘン貿易の取り締りを強行し、これに対する制裁としてイギリスはアヘン戦争を引き起こした。しかし、1840 年から 2 年間にわたったアヘン戦争に、清朝は敗北した。その後、イギリスをはじめとするヨーロッパの列強による中国の半植民地化が進んだ。また、1890 年代半ばには、清朝は日清戦争にも敗れ、その結果、日本と清朝の間の下関条約の締結により、李氏朝鮮の独立が認められ、中国の王朝が長年続けてきた冊封体制が崩壊した。その後、清朝は改革を進めたが、沿岸地域を租借地とされるなど、イギリス、フランス、ロシア、ドイツ、アメリカ合衆国、日本などの帝国による半植民地化の動きは止まらなかった。そして 20 世紀に入ると、中国の社会は大きく変動し、激動の時代を迎える。多くの研究者が指摘しているように、中国の 20 世紀は、清朝末期、中華民国、中華人民共和国の三つの時期に分けられる。

第一は、清朝末期である。1911 年に辛亥革命が起こり、各地の省が清からの独立を宣言した。翌年の 1912 年 1 月 1 日に、革命派首領の孫文によって南京で中華民国の成立が宣言され、2 月 12 日に中国の君主制は廃止された。この革命によって、およそ 250 年続いた清は滅亡し、封建的社会関係が崩壊して共和国の時代に入ったのである。

第二は、中華民国の時期である。中華民国が成立した後、1916 年から 1928 年までの間に軍閥が群雄割拠する軍閥時代となり、同時に日本やフランスやアメリカ合衆国などの帝国による中国の半植民地化が続けて進行したのである。そして 1921 年には中国共産党が成立し、毛沢東の指揮のもと、農村を中心としてその支配領域を広げていった。そうした中で、日本の支援により 1931 年に満州国¹⁴が建国され、中国の統一が損なわれることになった。1937 年には、日本軍が中国本土に侵入し、日中戦争が始まった。1941 年 12 月に太平洋戦争が始まってから 4 年後の 1945 年 9 月 2 日には、日本が降伏することで日中戦争が終わった。中国は、戦勝国として有利な立場を有することとなり、日本だけでなく、ヨーロッパ諸国も租界を返還するなど、中国の半植民地化は一応の終わりを見せた。しかし、国民党と共産党との対立が激化して、国共内戦が勃発し、結果として中国共産党が勝利した。そして、1949 年 10 月 1 日に毛沢東が中華人民共和国の成立を宣言したのである。

第三は、中華人民共和国の時期である。1949 年に中華人民共和国が成立した後に、様々な改革策が打ち出された。1953 年より社会主義化が進み、人民政治協商会議に代わって全国人民代表大会が成立、農業生産合作社が組織された。そして 1958 年には、大躍進政策を開始し、人民公社化を推進した。さらに、1966 年に文化大革命が起こり、1976 年に文

¹⁴中国ではこの国家を認めておらず、偽満州国と呼んでいる。

化大革命が終った 3 年後には、中国の経済の改革開放が始まった。1978 年に、文化大革命で疲弊した経済を立て直すため、現実派の鄧小平は「四つの近代化」を掲げ、市場経済体制への移行を試み、資本主義経済導入などの開放政策を取り、近代化を進めたのである。1990 年代には、経済の改革開放が進み、「世界の工場」と呼ばれるほどに経済は急成長した。しかし、急激な経済成長に伴う貧富格差の拡大や環境破壊などの問題を惹き起こした。

特に、沿岸部と内陸部との、あるいは東部と中西部との経済格差が急激に拡大していくという問題が深刻になっていった。そして、このような地域間の経済格差を縮小するために 1996 年から始まった第 9 次 5 カ年計画の中では、西部の経済振興が重要な課題として注目され、1999 年には西部大開発プロジェクトが策定された。国家発展計画委員会によるこの西部大開発プロジェクトにおいては、都市の基本的なインフラ整備とエネルギー開発だけではなく、中西部では豊富な観光資源を活用し、外部からの消費を呼び込もうとするものであった。また、西部大開発プロジェクトにおいては中国国内的経済発達地域からの投資を誘致するとともに、国際的には特に日本および韓国などの経済的に発達した国からの積極的な投資も期待された。

(4) 観光革命から見る中国観光

前述したように、18 世紀中頃から 20 世紀末までの間に世界では三度の産業革命が発生したが、それに伴って各国の社会のあり方も激変した（表 1）。そして、観光旅行の大衆化は 19 世紀中頃にヨーロッパで生じたが、それは産業革命によって余暇の増加、インフラの整備、旅行産業の拡大といった恩恵がもたらされた結果であった。したがって、ここで産業革命について検討することが必要であると思われる。

最初の産業革命は、18 世紀中頃から 19 世紀初頭にかけてイギリスに始まる機械制工場と蒸気力の利用を中心とした技術革新であるが、それは機械が肉体労働に取って代わる時代であった。その結果、農民は農村から離れて都市に移住し、商工業従事者が激増したが、なかでも鉱工業に従事する労働者の数が大幅に増えた。その一方、都市部の資本家富の蓄積と共に、人々の余暇時間が増大するという傾向もみられた。

表 1 三つの産業革命の流れ

産業革命の経緯	主導国	革新技術	インフラ	社会変化
第一次産業革命 (1760～1870 年代)	イギリス	蒸気エンジン	運河	労働者階級の 確立
第二次産業革命 (1870～1970 年代)	アメリカ	電気、内燃機械、 自動車	蒸気船、鉄道、 電話、電信、	資本主義、 都市化の進展
第三次産業革命 (1970 年代～現在)	日・欧米	IT、バイオテク ノロジー	通信ネットワーク、 ジェット機	高速・大量の物 交換の実現

資料：角山栄・川北稔・村岡健次（1992）『生活の世界歴史〈10〉産業革命と民衆』の内容をもとに筆者作成

第二次産業革命は、1870 年頃からイギリス、アメリカ、フランス、ドイツなどで始まった電力と石油という新エネルギー源を利用した各種の機械と、化学合成物質などの新素材とを結びつけた重化学工業によって主導された。この時期には、工場労働が一般化し、労働者階級が形成され、都市への労働力集中がさらに進行して、都市化が始まり、インフラの整備も向上した。

第三次産業革命は、1970 年代から現在にかけての日本と欧米を中心とする原子力、空間技術、IT、新エネルギー技術、バイオテクノロジーなどの応用による情報産業技術革命である。この時期は、ジャンボジェット機やコンテナ船などの導入による輸送革命、さらに人工衛星を利用した通信ネットワークとインターネットの普及によって、高速・大量の物流情報システムが構築された。交通機関の整備、特に高速交通網の整備は、地域間の交流拡大に大きな効果があり、新しい通信ネットワークとインターネットの応用によりさらに高速の情報交流が促進された。

以上のような産業革命を背景として、1994 年に国立民族学博物館で「観光の 20 世紀」をテーマにした国際シンポジウムが開催された際、北海道大学の石森秀三は近代観光が世界の諸民族に与えたインパクトをより明確に把握するために、「観光革命」という新しい概念を提起した。彼は 19 世紀以降、およそ 50 年周期で観光革命が起こっていると考え、人類はこれまでに 3 度にわたる「観光革命」を経験していると出張した（表 2）¹⁵。

表 2 観光革命の流れ

観光革命の経緯	時期	内容	背景	文明史的区分
第一次観光革命	1860 年代	地球規模での観光活動の活発化	インフラ整備（スエズ運河、アメリカ横断鉄道）	産業社会（第二の波）
第二次観光革命	1910 年代	欧州・米国を中心とした観光活動の活発化	交通機関の発達（大型客船、航空機、自家用車）	
第三次観光革命	1960 年代	先進諸国における国際旅行の大衆化	ジャンボジェット機の就航	
第四次観光革命	2010 年代	新興諸国における国際旅行の大衆化	新興諸国における経済発展	情報社会（第三の波）
		先進諸国における観光の質的大変革	先進諸国における脱工業化社会＝情報社会の到来	

資料：石森秀三・山村高淑（2009）「情報社会における観光革命：文明史的に見た観光のグローバルトレンド」『JACIC 情報』第 24 巻第 2 号、6 頁の表を引用

¹⁵石森秀三編（1996）：『観光の 20 世紀（20 世紀における諸民族文化の伝統と変容）』ドメス出版、14-15 頁。

すなわち、第一次観光革命は 1860 年代から 1910 年代にかけてヨーロッパで生じた構造的変化を意味している。この時期には、ヨーロッパで国内観光旅行の大衆化が本格化するとともに、富裕な有閑階級による外国観光旅行ブームが生じた。

第二次観光革命は 1910 年代から 1960 年代にかけて、第一次世界大戦をきっかけにしてアメリカを中心に生じた。この時期には、アメリカで自動車ブームによる国内観光旅行の大衆化が生じるとともに、第一次大戦に従軍した中産階級の人びとを中心にしてヨーロッパ観光旅行ブームが生じた。

第三次観光革命は 1960 年代から 2010 年代にかけて、ジャンボジェット機の就航を契機にして、北の先進諸国において地球的規模で生じた。つまり、旅行の大衆化によって引き起こされた観光革命である。

また、50 年周期で観光革命が起こっていると考えた石森は第三次観光革命の終焉に続いて、アジアを中心に 2010 年から第四次観光革命が始まることを予測した。

確かに、2000 年代になると、アジア圏の各国における観光業の発展には拍車がかかることになった。そして、石森は 2009 年にあらためて観光革命論を検討した結果、インターネットに代表される情報技術の高度化、情報インフラの革新的進歩やメディアコンテンツの多様化によって、第四次観光革命が起こりつつあるとして、それを「観光情報革命」と呼んだ¹⁶。

石森によると、第四次観光革命には主に二つの側面が予想される。一つは中国を中心とした新興諸国における、経済発展を背景とした国際旅行者の爆発的増大であり、もう一つは成熟した先進諸国における、脱工業化社会の進展にともなう観光の質的大変革である。

以上のような産業革命による社会変動と観光革命に関する議論をふまえると、中国の観光業にはどのような変化があると考えられるであろうか。ここでは、中国における海外旅行者数と国内観光者数から分析したい。

表 3 に示すように、1996 年の中国における海外旅行者数はわずかに 759 万人であったが、20 年の時を経た 2015 年には、1 億 2,786 万に達し、約 16.8 倍の大幅な伸びを見せた。消費金額は、1997 年には 102 億ドルであったが、2015 年までに 22 倍の成長を示し、2,290 億ドルとなった。また、国内観光客数をみると、1996 年は 6 億 3,900 万人で、2015 年には 40 億人に達した。国内観光の消費金額は、1996 年は 1,376 億元で 2015 年には 3 兆 312 億円となった。さらに、1999 年から 2015 年までの間に海外旅行者数は増加し続け、2000 年に 1000 万人を超え、2014 年までにはさらに大幅に増加して、1 億人を超えた。

2003 年には SARS の影響で国内観光客数が減少したが、2004 年には回復し、2015 年まで成長を続けた。このような、国内観光客数の大幅な成長は、中国の観光業に大きな影響を与えている。中国西部大開発が進められている西部地区でも観光基本施設が大規模に整備され、西南部の少数民族地区を訪問する人々が増加しつつある。

¹⁶石森秀三・山村高淑（2009）：「情報社会における観光革命：文明史的に見た観光のグローバルトレンド」『JACIC 情報』第 24 巻第 2 号、7 頁。

表 3 中国人の海外旅行者と国内観光客数およびその観光消費の推移（1996～2015 年）

年	海外旅行者		消費		国内観光客		消費	
	人数 (万人)	比率 (%)	金額 (億ドル)	比率 (%)	人数 (万人)	比率 (%)	金額 (億元)	比率 (%)
1996	759	6.3	－	－	63,900	1.6	1,376	19.0
1997	843	11.1	102	－	64,400	0.8	1,638	29.0
1998	818	－3.0	92	－9.8	69,600	8.1	2,113	13.2
1999	923	12.8	109	18.5	71,900	3.3	2,391	18.4
2000	1,047	13.4	162	48.6	74,400	3.5	2,832	12.2
2001	1,213	15.9	178	9.9	78,400	5.4	3,176	10.9
2002	1,660	36.9	204	14.6	87,800	12.0	3,522	10.1
2003	2,022	21.8	174	－14.7	87,000	－0.9	3,878	－11.2
2004	2,885	42.7	257	47.7	110,200	26.7	3,442	36.9
2005	3,106	7.7	293	14.0	121,200	10.0	4,711	12.2
2006	3,452	11.1	261	－10.9	139,400	15.0	5,286	17.9
2007	4,095	18.6	298	14.2	161,000	15.5	6,230	24.7
2008	4,584	11.9	410	37.6	171,200	6.3	7,771	12.6
2009	4,766	4.0	420	2.4	190,200	11.1	8,749	16.4
2010	5,739	20.4	480	14.3	210,300	10.6	10,184	23.5
2011	7,025	22.4	690	43.8	264,100	25.6	12,580	53.5
2012	8,318	18.4	1,020	47.8	295,700	12.0	19,305	17.6
2013	9,819	18.1	1,287	26.2	326,200	10.3	22,706	15.7
2014	11,659	18.7	1,648	28.1	361,100	10.7	26,276	15.4
2015	12,786	9.7	2,290	39.0	400,000	10.8	30,312	12.8

資料：中華人民共和国国家統計局「中国国家年鑑」により筆者作成

注：海外旅行者の人数は香港、マカオ、台湾へ訪問の人数を含む。

さらに、訪日中国人観光客をみると、2010 年に 141 万人であったが、2011 年には東日本大震災の影響により数が減少し、104 万人となった（図 1）。2012 年には訪日中国人の数は回復し、142 万人達したが、同年に尖閣問題が起こり、2013 年の訪日中国人は約 100 万人に減少した。2014 年になると、訪日中国人観光客が急増し、241 万人となった。さらに 2015 年になると、訪日中国人観光客が大規模に増加して 499 万人となり、史上最高の数となった。このような訪日中国人観光客をはじめとして、海外旅行者数が大規模に成長は国際観光の促進に多大な影響を与えていると思われる。

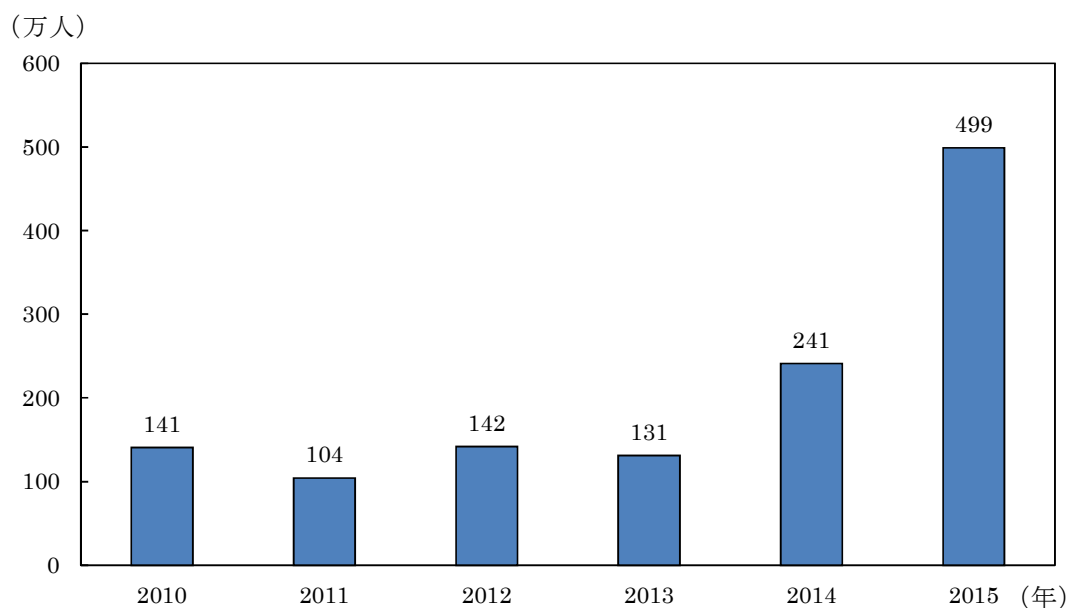


図 1 訪日中国人観光客の推移

資料：日本政府観光局の統計により筆者作成

4. エスニック・ツーリズムとまちづくり

観光は重要な経済セクターとして、経済への直接的な波及効果のみならず、地域活性化を促進する役割も果たしている。現在、日本の各地で観光振興がまちづくりや地域再生化に大きく貢献することが期待されており、観光とまちづくりとを結びつけた活動や取り組みが見られるようになっている。

そして、日本では、こうした観光とまちづくりの結びつきという問題について様々な議論が引き起こされている。章（2014）が「まちづくり」という言葉は、1950年代にまで遡ることができ、日本の各領域で発生する問題と向き合い、解決法を模索する中で今日に至るまでこの言葉が頻繁に用いられるようになったことを指摘した。さらに章によれば、21世紀に入ってから日本は、少子・高齢社会に突入し、人々のライフスタイルが大きく変化する中で、公共サービスに求められるものも多様化・複雑化していったが、そしてこのような社会ニーズに対してまちづくりのテーマは更に細分化され、観光、福祉、景観、環境衛生、防災、防犯、中心市街地活性化など、さまざまな領域にわたって議論されるようになり、日本各地で広く展開されている¹⁷。

その一方で、西村（2009）は、まちづくりが基本的に地域社会を基盤とした地域環境の維持・向上運動であるのに対して、観光は資源としての地域環境の利用をベースとして地域経済の推進活動であり、そのベクトルの向きがまったく異なっていることを指摘した。その上で西村は、「観光まちづくり」という用語は21世紀における観光のあり方を考える議論の中から生まれてきたが、観光とまちづくりの問題は地域を考える際の三つの基本的

¹⁷章潔（2014）：『長崎の祭りとまちづくりー「長崎くんち」と「ランタンフェスティバル」の比較研究』長崎文献社、3-5頁。

な柱である地域社会、地域環境、そして地域経済の間の関係そのものをどのように調和させていくことができるのか、という問題として考えられなければならない、と指摘した。

また、西村はそれら三つの柱の従来関係を検討した結果、地域経済の発展は地域社会に変容をもたらし、地域環境を悪化させがちであるが、地域環境を保全しようとする地域経済は停滞し、地域社会は維持される一方で変化に乏しいものになるおそれがある、地域社会の維持を重視すると、地域環境は保全されるだろうが地域経済の活力は失われがちになると述べた。

そして西村は、地域社会、地域環境、地域経済の新しい関係が図2に示すようなかたちで考えられ、観光まちづくりという用語につながってきたことを指摘している。すなわち、観光まちづくりとは地域社会が主体となって地域環境を資源として活かすことにより、地域経済の活性化を促そうとする活動の総体なのである¹⁸。

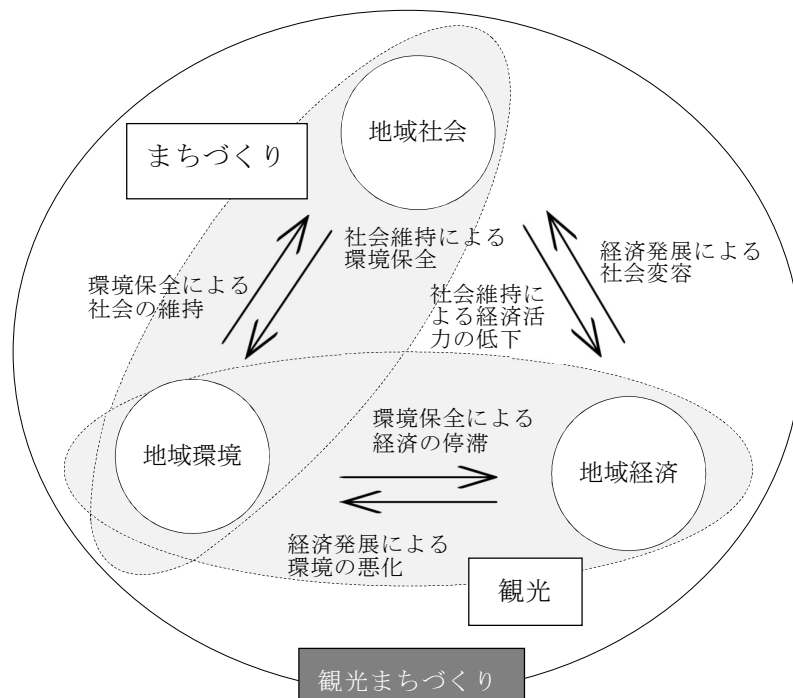


図2 地域社会と地球環境と地域経済の関連図

資料：西村幸夫編（2009）『観光まちづくりーまち自慢からはじまる地域マネジメント』11頁の図1を引用

¹⁸西村幸夫編（2009）：『観光まちづくりーまち自慢からはじまる地域マネジメント』、日本交通公社、11-12頁。

また、野原（2008）は表4に示すようにさまざまな先行研究を踏まえた上で、観光まちづくりを4つに分類している。このような日本における観光とまちづくりとの結びつきに関する問題を、そのままただちに中国の現代社会に適用することには難点がある。しかし、観光には地域活性化の問題を、地域社会、地域環境、地域経済という三つの柱の相関関係として捉えようとする視点は、本論文で考察対象とする西南中国についても妥当するようと思われる。

中国西南部広西チワン族自治区では、観光産業の一環としてのエスニック・ツーリズムの進展が少数民族の社会に多大な影響を与えている。また、「観光脱貧¹⁹」を西部の貧困地域における重要な地域振興政策の一つに据え、その一層の発展を図ろうとする政府の姿勢は、2010年代に入ってさらに明確となっており、その実施によってエスニック・ツーリズムの発展がさらに推進される傾向にある。したがって本論文では、エスニック・ツーリズムとまちづくりをどのように調和させていくことができるのかという問題を、地域社会、地域環境、地域経済の三つをめぐる地域マネジメントにおける観光まちづくりの視点から検討する。

表4 観光まちづくりの4タイプ

No.	現状 (から)	手段 (を用いて)	目的 (へ)	概 要
1	観光	まちづくり	観光	従来型の観光地がこれまでの形態では立ち行かなくなり、コンテンツとして、まちづくりを含めた新たな観光スタイルを模索する。
2	観光	まちづくり	まちづくり	観光地も持続的な居住地の1つであるという地域の側に立って、生活と観光の調和を図りながら、持続再生型の観光地をめざす。
3	まちづくり	観光	観光	祭りや地域文化を大事にした結果、外部から多くの人を訪れるようになったため、交流を含めた地域活性化に役立てようとめざす。
4	まちづくり	観光	まちづくり	観光客や来訪者の視点をうまく取り入れ、地域の魅力や方向性を考えながら、観光と地域のまちづくりを動かすキッカケとする。

資料：野原卓（2008）「観光まちづくりを取り巻く現状と可能性」『季刊まちづくり』第19号、30頁

¹⁹貧困地区では、観光業の発展を通して貧困脱出を実現できるようにする。

5. 研究事例

西南中国は、チベット自治区と隣接した雲南省や、広西チワン族自治区、貴州省、四川省、重慶市を含み、ラオス、ミャンマー、ベトナムなどの国々の国境に近く、チベット系や東南アジア系の少数民族が主に稲作で生計を立てている。本論文では、中国西南部に位置する広西チワン族自治区河池（ホーチー）市に居住している少数民族を事例として取り上げる（図3）。

1978年から改革開放路線への転換以降「西部大開発」の政策を打ち出し、内陸部の経済発展と現代化を目指すなかで、少数民族地域の観光開発に大きな期待が寄せられている。そして、1980年代初頭からエスニック・ツーリズムが中国全域に波及していく中で、特に雲南省がエスニック・ツーリズムの先頭を切り、少数民族の居住地には巨大な経済波及効果がもたらされた。雲南省と隣接する広西チワン族自治区でも、チワン族やヤオ族などの少数民族の特色ある伝統文化や特殊な生活様式などを観光資源として活用し、エスニック・ツーリズムの振興に取り組むようになった。

このような伝統文化の活用によるエスニック・ツーリズムの振興は、大きな経済効果と貧困からの脱出という目的の下で、少数民族の社会発展のために企画されたのである。しかし、こうしたエスニック・ツーリズムは、少数民族の生活を改善することに寄与する一方で、文化の「商品化」という問題や伝統文化の保存という課題をも生み出した。すなわち、近代化の影響のみならず、観光開発によって流入する外来文化と伝統文化の両立という問題が生じ、少数民族は民族的アイデンティティ喪失の危機に立たされているのである。

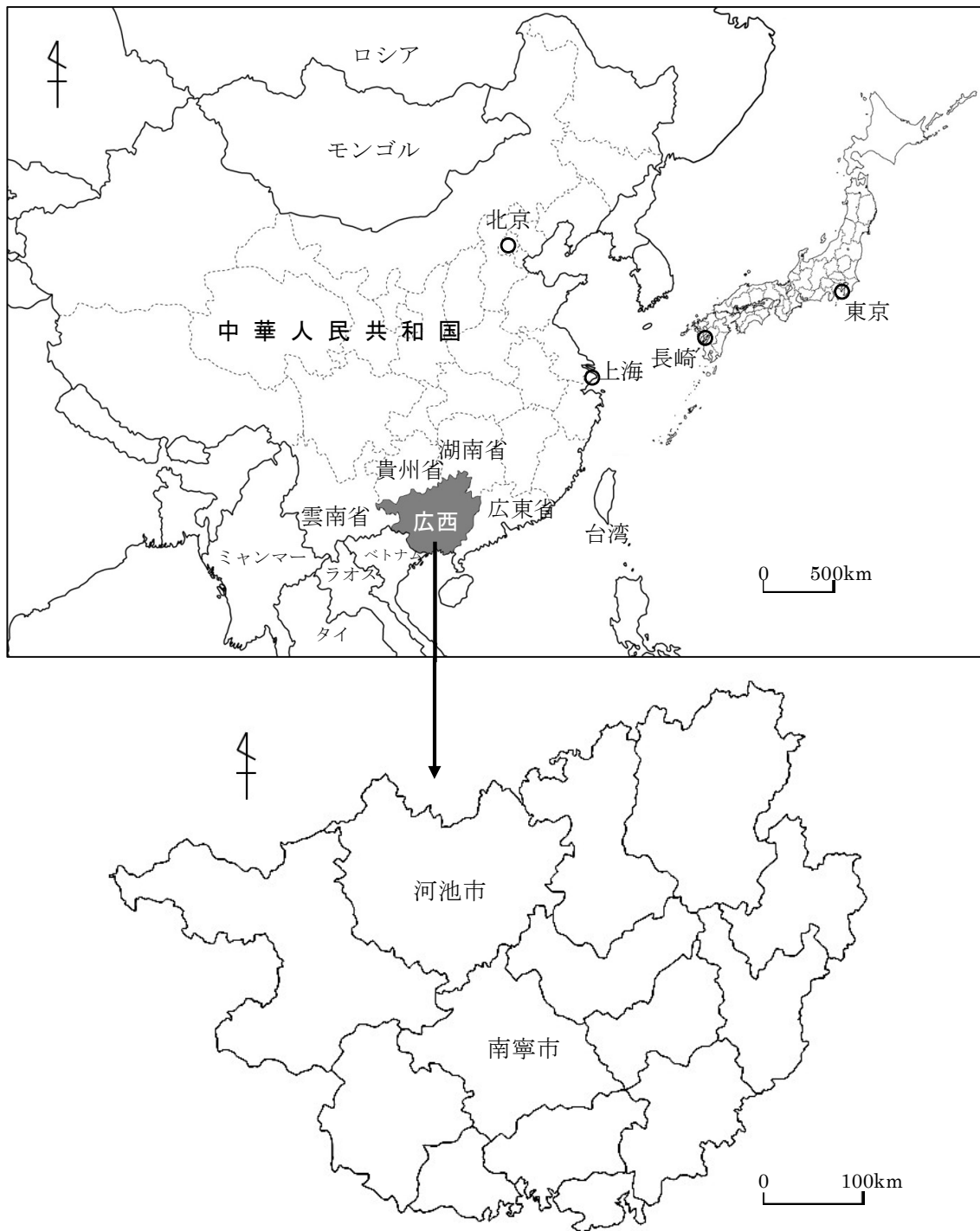


図3 研究対象地域である広西チワン族自治区河池市の位置
(筆者作成)

第2節 先行研究と本研究の目的および方法

1. 先行研究

エスニック・ツーリズムにおける少数民族に関しては、多くの優れた先行研究があるが、主な先行研究としては以下のものを挙げることができる。

まず、日本の考古学および人類学の先駆者としても著名な研究者である鳥居龍蔵は、1902年の7月30日から翌年3月13日までの7ヵ月と13日間にわたって、西南中国への調査を行った後、中国西南少数民族に関する多くの著作・報告書を刊行した。鳥居の『中国の少数民族地帯をゆく』（1980年）は、各少数民族独自の文化と漢民族との複雑な交流の実態を活写しており、今日でも貴重な文献となっている。しかし、鳥居が調査したのは南中国のうちでも北部の少数民族のみであり、南中国における漢族進出以前の姿および南部の民族について調査はなされていないのである。

曾士才は、1985年に貴州省の清水江流域に暮らしているミャオ族の調査を始め、それ以降も貴州省の観光に関する研究を続けている。観光開発による貴州省の状況の変化を分析し、1980年代の自然観光、1990年代のエスニック・ツーリズム、21世紀に入ってからのエコツーリズムという形で変化してきていることを指摘した。また、2001年に発表された論文「中国における民族観光の創出-貴州省の事例から」の中で、民族観光のプランナーであり、民族文化をになう主体でもある中央政府や省政府、自治州政府までの様々なレベルにおける考え方の違いについて考察している。すなわち、地方政府や民族エリートの観光行政における管理・運営のほかに、日常的に村の指導者たちと接触する旅行局・旅行社にも焦点を当てて考察しているのである。さらに、曾是伝統文化のオーセンティシティについても検討したが、貴州省の各地で観光客に提供されている伝統文化が実は観光用に作られたものであることを実証した。

塚田誠之（2000）は、『壮族文化史研究-明代以降を中心として』の中で、壮族（チワン族）の文化史に注目することによって、明代以降を中心に歴史民族学の視点から検討し、主に衣食住、年中行事、婚姻などの文化要素を明らかにした。とくに、漢族の各面にわたる影響を不断に受け入れていく状況の下で、チワン族が「漢化」の過程を経てきたことを指摘した。また、塚田（2014）は、チワン族の文化資源を取り上げ、中国では文化資源の「有用性」や「何かに役立ち」、「利益や効用を得る」という側面が強調されたことを提示している。すなわち、中国では民族の「文化資源」は、とくに「観光を含む文化産業と結びついて経済的な利益を生む資源」を指すことを指摘したのである。さらに塚田は、中国の文化資源研究においては、政府や研究者および企業の検討が不可欠であることを提起した。

菅野博貢（2001）は、雲南省西双版纳（シーサンパンナ）傣（タイ）族自治州景洪市で進行する急激な都市化に伴って流入した漢民族と、先住民族である傣族との間で生じる問題を明らかにしている。伝統的な少数民族文化が、現代化の影響を受けることによって、ますます変化の速度を早めていることを指摘した。

長谷川清（2001）は、「民族文化」の商品化、「民俗村」の形成と変遷および観光政策、そして「民族文化」という三つの視点から、中国西双版纳タイ族自治州における、観光化

及びエスニック観光と民族社会変容がどのような関係にあるかを捉えた。なかでも特に政府からの計画がエスニック観光の大きな推進力となってきた点を指摘したことは重要である。また、2006年の「エスニック観光と『風俗習慣』の商品化—西双版纳タイ族自治州の事例」の中で、西双版纳タイ族自治州における、観光化及び観光開発の変遷過程を明らかにし、少数民族の伝統文化や風俗習慣がどのようにして商品化され、観光用の民族文化として新たな価値を付加されていったのかを、タイ族の事例に基づいて検討している。

瀬川昌久（2003）は、中国南部の少数民族を対象として、中国政府の「改革開放政策」の下で、辺境の少数民族地域における貧困脱出と地域振興のために、彼らの生活や文化を資源とする民族観光を振興させ、それが民族文化の再編ないしは伝統文化の再定義の動向をひき起こしつつあることについて整理・分析している。そのため瀬川は、清末以前、民国期、中華人民共和国成立から文革期まで、そして改革開放政策以降の4つの局面に分けて、中国において漢族と少数民族との間の相互関係のあり方がどのように推移してきたかを、海南省のリー族、ミャオ族の事例をはじめ、貴州、広西、雲南などの少数民族の事例をも挙げて検討している。その結果、少数民族の人々は今日の経済交流の活発化の中で、「漢族になることを欲しているのではなく、自らの民族のアイデンティティの確立を希求し、現にそれを実践しているに他ならないが、結果的には、圧倒的に漢族の支配する国家の政治・経済・文化システムの中に組み込まれることになる」ということを捉えた。

山村高淑（2004）は、地域開発政策の下に急激な観光地化が進行している中華人民共和国の雲南省において、集落観光開発に最も成功しているとされる麗江納西（ナシ）族自治県黄山郷自華行政村を対象として、集落の観光開発における地域住民と行政との関係性のあり方を、実地調査に基づき検証した。その結果、地域社会が観光開発において自律性を発揮しえた背景として、①開発の初期段階における「第三者組織」の役割、②集落規模と開発範囲の一致、③伝統的な社会基盤や社会秩序の存在、が重要な要因となったことを明らかにした。

長谷千代子（2008）は、雲南省タイ族の水かけ祭りを事例として取り上げ、エスニック・シンボルとして有名な水かけ祭りが、政府側も少数民族側もともに優良な「民族伝統文化」として守ろうとしている一方、観光化というグローバルな変動の中で、変容しつつあることを明らかにした。

以上述べてきたように、中国におけるエスニック・ツーリズムに関する研究は、そのほとんどが少数民族観光の拠点である雲南省と貴州省を軸として展開されている。しかし、エスニック・ツーリズムの進展が遅れた広西チワン族自治区に関する研究は少ないため、本研究が西南中国広西チワン族自治区の少数民族におけるエスニック・ツーリズムを研究事例として取り上げることには、重要な意義があると考えられる。

2. 論文の目的および方法

本論文では、西南中国広西チワン族自治区河池市の少数民族におけるエスニック・ツーリズムを研究事例として、それが民族社会をどのように変容させているかを明らかにすることを目的とする。

そのため、まず先行研究によってエスニック・ツーリズム発展の背景を概観し、発展過

程で生み出される問題点を把握する。また、歴史文化と民族誌に関する文献資料を分析し、研究対象地域における少数民族社会の伝統文化の歴史的経緯を明らかにする。こうした理論的研究と同時に、エスニック観光地としての河池市の現状について調査を実施し、同地の少数民族の社会発展動態を明らかにするとともに、アンケート調査の結果の分析により、エスニック・ツーリズムが少数民族の意識をどのように変化させているかを把握する。さらに、地元住民の生活の変化について聞き取り調査を行い、エスニック・ツーリズムに対する彼らの態度および評価を考察する。

具体的なフィールドワークの内容は以下の通りである。まず、2014年8月20日から9月10日までの間に河池市の少数民族居住地域で第一次の現地調査を行い、主に少数民族における銅鼓文化の歴史的変遷と観光活用の実態について調べた上で、エスニック・ツーリズムにおける少数民族の文化や祭りの観光活用の現状を考察した。また、2015年5月21日から6月10日までの間に第二次、同年7月13日から23日までの間に第三次の現地調査を実施し、主にエスニック・ツーリズムにおける伝統的祭りの「観光資源化」と「擬似イベント化」という問題点について考察した。さらに、2016年2月3日から3月3日及び8月8日から23日までの間に第四・五次の現地調査を実施し、ヤオ族の伝統的に維持されてきた祭りの実態を調べ、ヤオ族文化の代表的な研究者である蒙靈²⁰にインタビューを行うとともに、観光開発における伝統的祭りのあり方を実際に調査した上で、「夢・巴馬」という山水と少数民族文化を舞台にした光のショーについても考察した。また、2017年4月28日から5月21日までの間に第六次の現地調査を実施し、主にヤオ族の伝統的な祭りである祝著節が本来行われてきた場所の実態を調べ、村人が直接に参加・実施する祝著節のあり方がどのようなものであったかを、村人への聞き取りによって調査した。

本研究で広西チワン族自治区河池市を研究地に選んだ理由は三つある。第一の理由は、西南中国に位置する河池市は少数民族の人口が多く、地理的な要因によってそれら少数民族の伝統文化が比較的良好に保存されているからである。第二の理由は、かつて西部大開発が推進され、また近年では「観光脱贫」政策が打ち出されたことにより、少数民族の伝統文化を観光資源とする開発事業が盛んだからである。第三の理由は、観光収入が重要な位置を占める産業となっており、その影響を受けて少数民族の社会構成が激変しているからである。

第3節 理論の考察

今日各国の政府は観光産業による経済発展を期待しており、観光産業の発展と拡大が人類の社会に多大な影響を及ぼしている。20世紀からさまざまな学者が観光産業の発展が社会に与える影響に注目し、その中でも特にエスニック・ツーリズムに関わる研究分野では観光と文化との関係についてさまざまな研究が行われてきた。

ダニエル・ジョセフ・ブーアスティン（1964）は、20世紀のアメリカにおける精神構

²⁰蒙靈：中国広西チワン族自治区巴馬ヤオ族自治県出身で、巴馬ヤオ族自治県東山郷政府の役人を勤めていた。ヤオ族文化の代表的な研究者の一人である。

造や生活経験の変容について検討し、その変容を「疑似イベント (pseudo-events)」という言葉で概括した上で、現代の観光は「疑似イベント」になっており、軽薄で本物とはいえない活動であることを批判した。しかし、この見解はさまざまな人類学者からの批判を招き、その先陣としてはディーン・マッカネル (1976) を挙げることができる。マッカネルは、「演出された真正性」という考え方を提起し、疑似イベントは観光の社会関係が生んだものであり、むしろ観光客自身はオーセンティシティ (authenticity) つまり真正でリアルな「本物」を求めているが、観光においては「演出された真正性」が与えられるのだと主張する。マッカネルの「演出された真正性」に関する議論は、社会学者であるアーヴィング・ゴッフマン (1959) によって用いられた「表舞台 (front stage)」と「裏舞台 (back stage)」に基づいている。つまり、ゴッフマンの日常生活を演劇論的な観点から分析すると、表舞台は「ホストとゲストが、あるいは顧客とサービス提供者が出会う場所」で、裏舞台は「内輪のメンバーが出番までリラックスしたり準備をしたりする場所」であるが、観光客は「表舞台」を見るだけでは満足できず、常に「裏舞台」を覗こうとすると主張している。しかし、この表舞台と裏舞台という区分は実際の観光の場面においては難しいとマッカネルは考える。マッカネルによると、表舞台と裏舞台には六つのステージがある。第 1 ステージは、先に挙げたゴッフマンの言う表舞台である。第 2 ステージは、舞台裏のように装飾された観光的表舞台である。第 3 ステージは、舞台裏に見えるように全体的にしつらえられた表舞台である。第 4 ステージは、観光客を見ることが出来る舞台裏である。第 5 ステージは、観光客がときにちょっと覗いてもよいように整頓され、少し改良された舞台裏である。第 6 ステージは、観光客が最後に到達することができる舞台裏である。このように、観光客が求めるのは、真実なものを見ることが出来る「舞台裏」であり、まさにマッカネルが言うような「演出された真正性」を探求していると考えられるのである。

1990 年代にはジョン・アーリ (1990) が、現代観光は、非日常性を求める観光客と日常性を生きる住民との根本的差異の上に成り立っていると指摘した。観光の「まなざし」とは、日常生活から離れた異なる景色、風俗習慣、町並みなどに対して視線を投げかけることであり、「ロマンチック」対「集团的」、「真正」対「非真正」、「歴史的」対「現代的」の対比を背景としてもたらされるとしている。エスニック・ツーリズムは観光客が日常生活から離れた異なる民族的な風俗習慣や村落の景観などの非日常的なものに対して、アーリが指摘するような観光のまなざしを向けるものであり、観光地住民にとっての日常性が観光客にとっての非日常性であり、そのことを観光地住民も受け入れることによって成立している。

バレーン・L・スミス (1977) が著した『観光・リゾート開発の人類学-ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』では、ホスト (host) とゲスト (guest) の関係という視点から観光活動において、外部からホスト社会へインパクト、ゲスト旅の動機や経験の多様化、両者の相互関係に関することを論じた。前田 (2003) は、スミスの論考に倣う形で「ホスト-ゲスト」の交錯する場から「観光活動が現地に与えるインパクト」を捉えようとする見方が主流を占めるようになってきていることを指摘した。このような研究においては観光客が少数民族の居住地域を訪れ、その観光行動によって現地に与えるインパクトを批判するものが多い。

第4節 本論文の構成

本論文は序論と2部から構成され、具体的内容は以下の通りである。

序論では、本研究の背景と問題点、先行研究と論文の目的および方法、理論の考察、論文の構成について記述する。

第Ⅰ部は4章から構成されている。第1章では、中国の少数民族の歴史文化を考察する。まず、中国の少数民族の人口の推移とその分布を検討する。次に、本論文の研究対象の一つであるチワン族に関する先行研究を、年中行事や建築文化などの面から取り上げ、チワン族の歴史文化を把握する。また、本論文のもう一つの研究対象であるヤオ族に関する先行研究、人口および名称の由来、起源問題、居住環境と分布地などの面から捉え、ヤオ族の歴史文化を分析する。さらに、ヤオ族の分支の一つであり本研究の対象である布努ヤオ族の居住環境、社会経済、伝統文化を明らかにし、歴史文化を把握する。第2章は、西部大開発の構想と実施及びその経済効果を取り上げ、この政策の実施がエスニック・ツーリズムに与えた影響について分析する。まず、西部大開発の範囲および基本的な実施状況を把握した上で、西部大開発政策の構想と策定について検討する。また、中国の第十次、十一次、十二次の五カ年経済計画の実施における西部大開発の経済効果について分析する。さらに、西部大開発におけるエスニック・ツーリズムの進展について取り上げ、西部地区の観光資源を把握するとともに、1995年から2015年にかけての期間における5年ごとの西部各地区の観光動向を分析し、国家の観光政策の実施がエスニック・ツーリズムに与えた影響について検討する。第3章では、西南中国におけるエスニック・ツーリズムの展開を理解するために、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の三つの地区のエスニック・ツーリズムの発展動向を把握する。それらの地区の現況を考察するとともに、西南中国エスニック・ツーリズムの観光開発の類型について検討する。第4章では、河池市のさまざまな観光資源と少数民族の文化観光資源を取り上げ、西部大開発によって河池市の観光業が推進されるとともに、少数民族の伝統文化が観光活用されてきたことを検討する。また、市場経済の発展と社会文明の進展により、貴重かつ多様な民族の文化が画一化しつつあり、それを防ぎ、文化の多様性を保持するためには観光振興が有効な手段であると同時に、他方では多くの問題を引き起こしていることについても考察する。

つづく第Ⅱ部も4章から構成されている。第1章では、河池市布努ヤオ族の祝著節を事例として取り上げ、エスニック・ツーリズムの影響下でその祭りがイベントへと変質しつつあることを考察する。また、布努ヤオ族の銅鼓文化が観光政策の目玉として扱われることにより大きく変容していくことが、民族的アイデンティティとどのように関わっているかを、イベント参加者に対するアンケート調査の分析結果により考察する。第2章では、中国広西チワン族自治区河池市の布努ヤオ族の銅鼓文化を取り上げ、それが観光政策との関係の中で変容していくことが、民族的アイデンティティにどのような影響を及ぼすかを考察する。また、銅鼓文化に対するツーリズムの影響の認識度を、アンケート調査の結果によって考察する。第3章では、広西チワン族自治区河池市南丹県の白褲（パイクー）ヤオ族の伝統文化の観光動態を取り上げ、その中で伝統文化の観光資源化についてどのような問題点があるかを考察する。また、観光活動が活発化することによって地域住民の社会

に大きな影響が及ぼされ、観光開発の直接的な効果として経済利益を得ることができるようになったことで、村民たちの観光化への志向性が高まったことを考察する。そして、白褲瑤生態博物館（エコミュージアム）が白褲ヤオ族の伝統文化の保護にとって有益であることを検討する。さらに、白褲ヤオ族の伝統文化の保存とその観光資源化についてどのような問題が生じているかを考察する。第4章では、少数民族居住地域への観光客の流入によって、布努ヤオ族の伝統文化がどのように変容したかを明らかにする。具体的には、観光開発が布努ヤオ族の服飾、建築文化、伝統的祭りなどの伝統文化に与えた影響を検討する。

第 I 部 中国におけるエスニック・ツーリズム

第 1 章 中国少数民族

第 1 節 中国の少数民族の現況

中国は多民族の国で、世界で最も人口の多い国でもある。総人口は約 13 億人(2010 年)。56 の民族を持っている。その中で、漢族が総人口に占める割合は 92%で、少数民族の人口は 8%である。漢族以外の 55 の民族は人口が相対的に少ないため、習慣上、「少数民族」と呼ばれている。これらの少数民族は、主に中国の西北部、西南部、東北部などに分布している。

表 I -1-1 中国各民族の人口

(単位：人)

民族の表記		年別全国調査人口			
日本語	中国語	1964 年	1982 年	2000 年	2010 年
漢	漢	651,296,368	936,674,944	1,137,386,112	1,220,844,520
モンゴル	蒙古	1,965,766	3,411,367	5,813,947	5,981,840
回	回	4,473,147	7,228,398	9,816,805	10,586,087
チベット	藏	2,501,174	3,847,875	5,416,021	6,282,187
ウイグル	維吾爾	3,996,311	5,963,491	8,399,393	10,069,346
ミャオ	苗	2,782,088	5,021,175	8,940,116	9,426,007
イ	彝	3,380,960	5,453,564	7,762,272	8,714,393
チワン	壮	8,386,140	13,383,086	16,178,811	16,926,381
ブイ	布依	1,348,055	2,119,345	2,971,460	2,870,034
朝鮮	朝鮮	1,339,569	1,765,204	1,923,842	1,830,929
満	滿	2,695,675	4,304,981	10,682,262	10,387,958
トン	侗	836,123	1,426,400	2,960,293	2,879,974
ヤオ	瑤	857,265	1,411,967	2,637,421	2,796,003
ペー	白	706,623	1,132,224	1,858,063	1,933,510
トウチャ	土家	524,755	2,836,814	8,028,133	8,353,912
ハニ	哈尼	628,727	1,058,806	1,439,673	1,660,932
カザフ	哈克	491,637	907,546	1,250,458	1,462,588
タイ	傣	535,389	839,496	1,158,989	1,261,311
リー	黎	438,813	887,107	1,247,814	1,463,064
リス	傈僳	270,628	481,884	634,912	702,839
ワ	佤	200,272	298,611	396,610	429,709
シェ	畲	234,167	371,965	709,592	708,651
カオシャン	高山	366	1,650	4,461	4,009
ラフ	拉祜	191,241	304,256	453,705	485,966

表 I-1-1 中国各民族の人口（つづき）

民族の表記		年別全国調査人口			
日本語	中国語	1964 年	1982 年	2000 年	2010 年
スイ	水	156,099	286,908	406,902	411,847
トンシャン	東郷	147,443	279,523	513,805	621,500
ナシ	納西	156,796	251,592	308,839	326,295
チンポー	景頗	57,762	92,976	132,143	147,828
キルギス	柯爾克孜	70,151	113,386	160,823	186,708
トウ	土	77,349	159,632	241,198	289,565
ダフル	達斡爾	63,694	94,126	132,394	131,992
ムーラオ	仫佬	52,819	90,357	207,352	216,257
チャン	羌	49,105	102,815	306,072	309,576
プーラン	布朗	39,411	58,473	91,882	119,639
サラ	撒拉	34,664	69,135	104,503	130,607
マオナン	毛南	22,382	38,159	107,166	101,192
コーラオ	仡佬	26,852	54,164	579,357	550,746
シボ	錫伯	33,438	83,683	188,824	190,481
アチャン	阿昌	12,032	20,433	33,936	39,555
プミ	普米	14,298	24,238	33,600	42,861
タジク	塔吉克	16,236	26,600	41,028	51,069
ヌー	怒	15,047	22,896	28,759	37,523
ウズベク	烏孜別克	7,717	12,213	12,370	10,569
オロス	俄羅斯	1,326	2,917	15,609	15,393
エヴェンキ	鄂温克	9,681	19,398	30,505	30,875
ドアン	德昂	7,261	12,297	17,935	20,556
ボウナン	保安	5,125	9,017	16,505	20,074
ユーグ	裕固	5,717	10,568	13,719	14,378
キン	京	4,293	13,108	22,517	28,199
タタール	塔塔爾	2,294	4,122	4,890	3,556
トールン	独龍	3,090	4,633	7,426	6,930
オロチョン	鄂倫春	2,709	4,103	8,196	8,659
ホジェン	赫哲	718	1,489	4,640	5,354
メンパ	門巴	3,809	6,248	8,923	10,561
ロッパ	珞巴	—	2,065	2,965	3,682
ジノー	基諾	—	11,962	20,899	23,143
識別されていない民族		32,411	799,705	734,438	640,101
外国人の中国籍加入者		7,416	4,937	941	1,448

表 I-1-1 中国各民族の人口（つづき）

民族の表記	1964 年	1982 年	2000 年	2010 年
全国統計	691,220,404	1,003,920,034	1,242,612,226	1,332,810,869
少数民族合計	39,924,036	67,245,090	104,490,735	111,324,800
少数民族人口の全国比率	5.8%	6.7%	8.4%	8.4%

資料：中国統計局「中国人口調査資料」により筆者作成

表 I-1-2 中国の少数民族の人口と居住地（2000 年）

少数民族表記		人口 (万人)	居住地とその比率 (%)
日本語	中国語		
チワン	壮	1,617.88	広西 (91.4) 雲南 (6.5)
満	満	1,068.23	遼寧 (50.4) 河北 (17.6) 黒龍江 (12.1)
回	回	981.68	寧夏 (17.7) 甘肅 (12.7) 河南 (10.1) 新疆 (7.9)
ミャオ	苗	894.01	貴州 (50.0) 湖南 (21.0) 雲南 (12.1) 四川 (7.2)
ウイグル	維吾爾	839.94	新疆 (99.7)
トウチャ	土家	802.81	湖南 (31.5) 湖北 (31.0) 四川 (18.9) 貴州 (10.8)
イ	彝	776.23	雲南 (61.7) 四川 (27.1) 貴州 (10.8)
モンゴル	蒙古	581.39	内モンゴル (70.2) 遼寧 (12.2) 新疆 (3.4) 吉林 (3.2)
チベット	蔵	541.60	チベット (45.6) 四川 (23.7) 青海 (19.8) 甘肅 (8.0)
プイ	布依	297.15	貴州 (94.4) 雲南 (1.3)
トン	侗	296.03	貴州 (56.0) 湖南 (30.0) 広西 (11.4)
ヤオ	瑤	263.74	広西 (62.1) 湖南 (21.5) 雲南 (8.1) 広東 (6.3)
朝鮮	朝鮮	192.38	吉林 (61.5) 黒龍江 (23.6) 湖南 (7.2)
ペー	白	185.81	雲南 (84.0) 貴州 (7.6) 湖南 (7.2)
ハニ	哈尼	143.97	雲南 (99.5)
カザフ	哈克	125.05	新疆 (99.6)
リー	黎	124.78	海南 (91.8) 貴州 (7.2)
タイ	傣	115.90	雲南 (99.0)
シェ	畚	70.96	福建 (54.9) 浙江 (27.4) 江西 (12.1) 広西 (4.2)
リス	傈僳	63.49	雲南 (96.9) 四川 (2.8)
コーラオ	仡佬	57.94	貴州 (98.3)
トンシャン	東郷	51.38	甘肅 (83.3) 新疆 (15.1)
ラフ	拉祜	45.37	雲南 (99.2)
スイ	水	40.69	貴州 (93.2) 広西 (3.7) 雲南 (2.2)
ワ	佯	39.66	雲南 (98.8)
ナシ	納西	30.88	雲南 (95.6)
チャン	羌	30.61	四川 (99.0)
トウ	土	24.12	青海 (85.0) 甘肅 (11.0)

表 I-1-2 中国の少数民族の人口と居住地（2000 年）（つづき）

少数民族表記		人口 (万人)	居住地とその比率（％）
日本語	中国語		
ムーラオ	仫佬	20.74	広西（97.9）
シボ	錫伯	18.88	遼寧（69.5） 新疆（19.1）
キルギス	柯爾克孜	16.08	新疆（99.0）
ダフル	達斡爾	13.24	内モンゴル（59.0） 黒龍江（35.0）
チンポー	景頗	13.21	雲南（99.2）
マオナン	毛南	10.72	広西（98.3）
サラ	撒拉	10.45	青海（87.8） 甘肅（7.7）
プーラン	布朗	9.19	雲南（99.4）
タジク	塔吉克	4.10	新疆（99.9）
アチャン	阿昌	3.39	雲南（99.7）
プミ	普米	3.36	雲南（98.8）
エヴェンキ	鄂温克	3.05	内モンゴル（88.8） 黒龍江（9.8）
ヌー	怒	2.88	雲南（98.0）
キン	京	2.25	広西（86.8） 貴州（5.4）
ジノー	基諾	2.09	雲南（99.0）
ドアン	徳昂	1.79	雲南（99.6）
ボウナン	保安	1.65	甘肅（90.6） 青海（5.0）
オロス	俄羅斯	1.56	新疆（59.8） 内モンゴル（32.4）
ユーグ	裕固	1.37	甘肅（96.0）
ウズベク	烏孜別克	1.24	新疆（99.7）
メンパ	門巴	0.89	チベット（99.1）
オロチョン	鄂倫春	0.82	黒龍江（51.5） 内モンゴル（44.5）
トールン	独龍	0.74	雲南（95.1）
タタール	塔塔爾	0.49	新疆（98.8）
ホジェン	赫哲	0.46	福建（17.9） 河北（8.4）
カオシャン	高山	0.45	黒龍江（88.3）
ロッパ	珞巴	0.30	チベット（96.0）

資料：杜国慶（2009）「中国少数民族の分布に関する考察」『立教大学観光学部紀要』第 11 号、106 頁の表

1 引用、一部データ修正

注：台湾の少数民族は含まない。

表 I-1-1 によれば、中国の少数民族は 55 である。そのうち、2010 年のデータによると、中国の少数民族の人口は 111,324,800 人、全国比率は 8.45%、2000 年の比率より減少したにもかかわらず、少数民族の総人口は 2000 年より約 683 万人増加し、そのうちチワン族が人口 16,926,381 人と最も多い。最少少数民族の人口はタートル(塔塔爾)族 3,682 人であり、少数民族間の人口規模の差は極めて大きい。また、少数民族の本論文で取り上げるヤオ族の人口は、1964 年の 857,265 人から 2010 年の 2,796,003 人に増加した。さらに、各々の少数民族の分布地については、表 I-1-2 に示している。

第 2 節 チワン族の歴史と文化

1. チワン族に関する先行研究

チワン族の文化については、中国内外でさまざまな先行研究があり、チワン族研究は今日まで百年以上の歴史を有している。『壮族通史』(1997)によると、チワン族研究については三つの段階に分けられる。

第一段階は、19 世紀末から 1920 年代までの外国人によるチワン族の研究である。前述したように、1840 年代のアヘン戦争に清朝が敗北した後、中国はイギリスをはじめとするヨーロッパの列強により半植民地状態になった。1890 年代半ばには、日清戦争にも敗れ、沿岸地域を租借地とされるなど、イギリス、フランス、ロシア、ドイツ、アメリカ合衆国、日本などの帝国主義列強による半植民地化の動きは止まらなかった。こうしたなかで、19 世紀の末には、列強が中国南方各省を侵略するために、南方各省の地理、歴史、民族の風俗習慣、言語などの情報を収集する必要性が生じた。そして、植民機関の役人、伝道士および学者などのさまざまな人々が南方の各省を訪れ、地元先住民に関わる情報を収集・記録し、重要なデータを残した。例えば、1885 年に A.R.Colquhoun の著書"Amongst The Sham"にロンドン大学の Tettien de Lacouperie 教授が記した緒言"The Cradle of The Sham Race"は、チワン族文化を踏まえた最も初期の論考である。また、それ以後も、フランスの学者である Pierre Lefevre Pontalis が 1897 年にオランダで発表した"L'invassio Thaie Indchine"、イギリス人 H.R.Davis が 1909 年に出版した"Yunnan, The Link between India and Yangzi"などの著作の中でチワン族の起源と分布に論及している²¹。

第二段階は、1920 年代から 1949 年の中華人民共和国成立までの間のチワン族研究である。この時期には、主として中国人研究者が成果を挙げた。1911 年の辛亥革命の後に、清が滅亡し、中国では封建的社会関係が崩壊して共和国の時代に入った。1920 年代に中華民国政府は、辺境の少数民族地域を支配するために、様々な同化政策を実施した。例えば、教育の面では「苗瑤教育館」、「広西省特種教育師資訓練所」などを設立するという政策が施行された。このような強制的な同化政策に対して地元先住民が抵抗し、民族関係が先鋭化していった。そして民族問題が厳しくなる状況下で、中国の学者たちが辺境国土の喪失と少数民族に関心を抱き、少数民族の研究を始めたのである。この時期のチワン族に関わ

²¹覃乃昌 (2001):「20 世紀的壮学研究」広西民族研究、2001 第 4 期 29 頁。

る代表的研究は、1928年に国立中山大学言語歴史研究所の紀要に掲載された鍾敬文の論文「僮民考略」と、石兆棠の論文「僮人調査」である。また、1931年には魏覺鐘の「苗瑤僮」、1934年には石兆棠の「柳州僮人的片断紀述」も発表されている。さらに、1936年には商務印書館が日本の学者である鳥居龍蔵の「苗族調査報告」の中で、チワン族の文化および生活習慣などの領域について論考している²²。

第三段階は、1949年の中華人民共和国成立から今日に至るまでのチワン族の研究である。中華人民共和国が成立した後には、民族平等政策が実行され、『中華人民共和国憲法』（1954年）では、「中華人民共和国の各民族は一律に平等である」と規定している。この原則の精神に基づき、『中華人民共和国民族区域自治綱要』（1954年）などの法律・法規は民族平等について具体的かつ明確な規定を制定した。また、中国共産党は、「民族平等、各民族一致団結、共同繁栄」の民族政策を行っている。さらに、この時期には政府から人的な支援および研究資金の投入によって、壮族の歴史文化に関する大規模な調査がなされて、大量の資料が獲得され、チワン族に関する研究は新たな段階に入り、大きな研究成果が得られた。例えば、1951年に中央民族訪問団の学者たちは、広西チワン族自治区を訪れ、チワンの歴史、言語、風俗習慣を調査し、多くの研究資料を編纂・出版した。また、1953年には、民族平等の政策を貫徹、実行するため、中国政府は民族識別調査活動を組織し、55の少数民族を認定・公表した。この頃には、広西民族事務委員会が役人や学者から成る民族識別グループを派遣し、龍州、平果、竜勝などの県でチワン族の調査研究を行って、数多くの研究報告を公表した。さらに、1956年に少数民族の社会歴史資料を保護するために、広西少数民族社会歴史調査団が全区域的に少数民族の社会歴史文化調査を展開したが、5年の努力を経て、大新、凌樂、宜山、環江、南丹、田東、東蘭、那坡、西林、隆林、百色、武鳴、上林、上思などの県に居住しているチワン族の社会歴史文化を調査し、約100万字にも及ぶ資料を収録した。その後、1966年に文化大革命が始まると、チワン族研究は中断されたが、1976年に文化大革命が終わると、その翌年1977年にはチワン族研究が回復された。1978年の経済改革・開放路線以降、中国は経済的な成長を遂げてきたが、チワン族の研究は続けられた。そして1988年に黄現璠他の編による『壮族通史』、1997年に張声震編による『壮族通史』増補改訂版などの著書が出版されたことでチワン族の研究は新たな時代に入った²³。

1980年代の経済改革から今日までの間には、チワン族研究における分野では中国人研究者だけではなく、国際的な研究の舞台に日本人研究者も登場するようになった。金丸良子（2002）によると、中華人民共和国成立後、日本人研究者など外国人研究者が実施した少数民族に関するフィールドワークおよび調査・研究は3段階に分けることができる。すなわち、第1段階は、1949年から1970年代にかけて政治的な原因によって、外国人が中国を自由に訪問することができなくなった時期で、主たる中国人研究者の著書と論文、該当地域の地方誌などの参照資料に基づく観察研究が主であった。第2段階は、1980年代に入ってからで、外国人研究者が友好訪問という形式で短期間に中国を訪れ、少数民族居住地に

²²覃乃昌（2001）：「20世紀的壮学研究」広西民族研究、2001第4期30頁。

²³覃乃昌（2001）：「20世紀的壮学研究」広西民族研究、2001第4期31頁。

滞在・参観した時期で、主に雲貴高原の少数民族を対象とする研究が行われた。第3段階は、1990年代であり、中国の大学など専門機関での学生あるいは若手研究者が語学を学ぶために日本に留学したが、これを契機として逆に日本人研究者が中国人研究者の協力を得て、少数民族居住地域でフィールドワークを行うことができるようになり、さまざまな研究成果が出された。その中で、チワン族研究の分野で活躍する日本人研究者である塚田誠之は、1980年代からチワン族の研究を始め、今日までおよそ36年間にわたって数多くの研究論文と著作を公刊した。例えば、1983年の「唐宋時代における華南少数民族の動向－左・右江流域を中心に－」²⁴、1985年の「明代における壮（Zhuang）族の移住と生態－明清時代壮族史研究（一）－」²⁵、1988年の「明末清初の広西におけるチュアン（壮）族－王子性・黄之隽の著作の分析を中心に－」²⁶、1989年の「チュアン族と漢族との通婚に関する史的考察－17世紀末から20世紀初を中心に－」²⁷、1992年の「中国・広西北部龍勝県壮（チュワン）族の莫一大王祭－年中行事に現れた壮族文化の一側面－」²⁸などの論文を公表した。また、2000年代になると、2000年の『壮族社会史研究－明清時代を中心として』²⁹と『壮族文化史研究－明代以降を中心として』³⁰の二つの著書が出版された。さらに塚田は、2005年の『中国の民族表象－南部諸地域の人類学・歴史学的研究』³¹、2008年の『民族表象のポリティクス－中国南部における人類学・歴史学的研究』³²、2014年の『中国の民族文化資源－南部地域の分析から』³³、2016年の『民族文化資源とポリティクス－中国南部地域の分析から』³⁴などの数多くの編著書および共編著書も出版した。

前述したように、数多くの研究で指摘されている通り、チワン族研究については三段階に分けられるが、一方でその分類は1990年代末までの学者の論点に限られている。しかし、西部大開発プロジェクトの実施後、あるいは2000年代に入って少数民族の伝統文化を中心とする観光開発が盛行・拡大している状況の下で、チワン族研究は1990年代から今日までの間を第4段階として位置づけることができると思われる。何故なら改革開

²⁴塚田誠之（1983）：「唐宋時代における華南少数民族の動向－左・右江流域を中心に－」『史学雑誌』92(3)：40-66頁。

²⁵塚田誠之（1985）：「明代における壮（Zhuang）族の移住と生態－明清時代壮族史研究（一）－」『北大史学』25:37-55頁。

²⁶塚田誠之（1988）：「明末清初の広西におけるチュアン（壮）族－王子性・黄之隽の著作の分析を中心に」『史朋』22：20-36頁。

²⁷塚田誠之（1989）：「チュアン族と漢族との通婚に関する史的考察－17世紀末～20世紀初を中心に－」『民博通信』43：59-67頁。

²⁸塚田誠之（1992）：「中国・広西北部龍勝県壮（チュワン）族の莫一大王祭－年中行事に現れた壮族文化の一側面」『民族学研究』57(1)：21-39頁。

²⁹塚田誠之（2000）：『壮族文化史研究－明代以降を中心として－』第一書房。

³⁰塚田誠之（2000）：『壮族社会史研究－明清時代を中心として－』国立民族学博物館研究叢書[3]、国立民族学博物館。

³¹長谷川清・塚田誠之編：（2005）『中国の民族表象－南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社。

³²塚田誠之編（2008）：『民族表象のポリティクス－中国南部における人類学・歴史学的研究』風響社。

³³武内房司・塚田誠之編（2014）：『中国の民族文化資源－南部地域の分析から』風響社。

³⁴塚田誠之編（2016）：『民族文化資源とポリティクス－中国南部地域の分析から』風響社。

放後に、中国の観光業は急速な成長を遂げ、それに伴って少数民族を中心とする観光開発も著しく発展してきたが、その一方で広西チワン族自治区では 1990 年代初めはエスニック・ツーリズムの動きが始まり、2000 年代にそれが盛んになったことによって、チワン族の文化に大きな影響を与えていると思われるからである。また、世界のグローバル化によって、チワン族と他の民族との接触が頻繁になる中で、チワン族の人々の間に起こった文化的アイデンティティの揺らぎ、さらに市場経済の活発化に伴う固有の伝統的な文化の商品化あるいは崩壊などの問題が起こるようになったことも、この時期の特徴の一つである。したがって、この時期には西南中国諸民族の伝統文化が資源化されていく過程を検討し、特に 1990 年代以降に少数民族居住地域の各地で盛んとなった民族のシンボルの再発見と観光化との結びつきに関わる研究が多くなっている。また、2006 年に日本の国立民族学博物館の研究プロジェクト「民族文化資源の生成と変貌-華南地域を中心とした人類学・歴史学的研究」の中で、民族文化資源の位置づけをめぐるポリティクスにかかわる研究が行われたが、そこで検討された主要な課題の一つが、行政機関によって主導された宣伝・出版活動の問題である。このプロジェクトの研究成果としては、次のように述べられている。

21 世紀に入り過度の観光化の反省から再発見されていった雲南・タイ族の宗教テキスト「貝葉」に代表される「貝葉文化」、商業資本と結びつき巨大な観光スポットとして脚光を浴びた広西・チワン族の劉三姐信仰、2003 年に世界記録遺産に認定されたトンバ經典などの場合の事例などがとりあげられ、民族文化が資源化されていくなか、宗教実践・地域文化・文化空間等の面で生じた多様な変容の諸相が分析・検討された。また、文化の資源化が、市場経済といった社会の変動と結びついていること、さらにはまた文化の規格化がはかれるとともにそれが日常的な宗教実践との乖離といった緊張も同時に生み出していることなど、その社会的影響や効果といった側面にも光が当てられている。

こうした中国の市場経済が飛躍的に発展するにともない、中国西南部に居住する諸民族の文化の動態を文化資源という観点から検討したこのプロジェクトで指摘されているように、1990 年代から今日まではチワン族研究の第 4 段階と位置づけることが妥当であると思われる。

2. チワン族の年中行事

上で述べたような様々な研究によって、チワン族の文化については、衣食住、年中行事、習俗などの面から検討がなされてきた。『壮族通史』(1988)によると、チワン族には様々な年中行事があり、主な祭日は旧暦 1 月 1 日から 15 日までの「春節」、3 月 3 日の「三月三」、5 月 5 日の「端午節」、7 月 14 日から 15 日までの「中元節」、8 月 2 日の「土地公節」、8 月 15 日の「中秋節」、9 月 9 日の「重陽節」であるが、チワン族の特徴として注目に値するのは 3 月 3 日の「三月三」である。また、塚田 (2000) は『壮族通史』(1988) の記載に基づいてチワン族の年中行事を検討しており、主要な行事は以下の表の通りである。

表 I-1-3 チワン族の年中行事の概要

No.	月日	行事名称	壮語の称謂と意味
1	12月30日 (小月なら29日)	年三十晩 (除夜)	ハムハダッ 「除夕」(除夜)
2	1月1日～15日	春節、「螞拐節」 (東蘭、鳳山一带)	シエン (ルッチョン) 「春節」
3	2月2日 (不定期)	春社節 (保陽春節)	シャー (ゲンシャー) 「社」(「喫社」)
4	2月3日	花炮節	—
5	2月19日	花王節	—
6	3月3日	三月三	サムニエン、ツォーサム 「三月初三」
7	4月8日	拝秧節 (牛魂節)	スイニエン・ツォーバー「四月初八」 (シェン・ホイワイ、「牛魂節」)
8	5月5日	端午節	ヌーニエン・ツォーヌー
9	6月2日	莫一大王節 (五穀廟節)	—
10	6月6日	土地公誕辰	ゴン・トゥーダイ 「土地公」
11	6月末	莫納節	—
12	7月7日 7月12日～16日	中元節 (鬼節)	ツァッニエン・ツエッセー
13	7月20日	達汪節	—
14	8月3日	社節	(2月と同じ)
15	8月15日	中秋節	パッニエン・ツェーハー 「八月十五」
16	9月9日	重陽節	ギウニエン・ツォーギウ 「九月初九」
17	9月	霜降節	—
18	9月19日	観音節	—
19	10月10日	十成節	—
20	11月中	喫冬 (冬至節)	ドンジー 「冬至」
21	12月23日	送竈節	ワンザウ 「竈王」

資料：塚田誠之（2000）『壮族文化史研究－明代以降を中心として－』第一書房、56～61頁の表により

筆者作成

(1) 春節

春節は、中国の正月における 4000 年以上の歴史をもつ伝統的な祝日であり、中国だけではなく、全世界の華人にとって最も大切な祝日である。チワン族は、漢族と同様に、中国の漢代以降における伝統的暦法あるいは太陰太陽暦に基づき、正月を過ごす³⁵。春節の期間は、1 月 1 日から 15 日までの半月間であるが、地域によって差異もある。準備期間は春節が間近になった 5 日前あるいは 10 日前から始まり、人々は故郷に帰省し、年越し用品を買う。チワン族の習俗にしたがって、旧暦の 12 月 30 日（除夜）には、吉祥と祝賀気分を表す絵や対聯を掛け、部屋と庭を大掃除した上で、生き生きとした植物で部屋を飾り、新しい年を迎える。また除夜には、各家で鶏、鴨を屠り、家族揃って祖先を祀った後に、それらの肉を共に食する。夜には、家族が囲炉裏を囲み、世間話をする。また、鶏鳴の刻に花火や爆竹を鳴らし、新年を慶賀して、よい年を迎える。初一（旧暦の 1 月 1 日）には、知人を訪問し、互いに新年の挨拶に交わす。初二（2 日）から初五（5 日）までの間には親戚同士の年始訪問が盛んに行われる。嫁に出した娘が初二（2 日）から初三（3 日）に実家に帰る。一般的には、富裕な家庭は初二（2 日）から十五（15 日）までの間に鶏、鴨などの家畜を屠り、毎日肉料理を食する。

また、春節の期間に以上の行事だけではなく、表 I-1-3 に示したように、広西チワン族自治区の河池市の東蘭県・巴馬ヤオ族自治県・鳳山県一帯では地域ごとに「螞拐（マージワイ³⁶）節」が行われる。それは毎年旧暦の正月の初一（1 日）あるいは初二（2 日）に銅鼓を鳴らして村人を集め、カエルを捕えて殺した後に、盛大に葬式をして神の所に送り返し、人間界の報告と同時に祈願の内容を神に伝えてもらおうとする祭祀である。

螞拐節は、古来に伝承されてきた祭りであり、毎年正月 1 日から 30 日までの間に行われる行事である。梁庭望（2000）によると、その行事の内容には、「找螞拐」、「唱螞拐」と「孝螞拐」、「葬螞拐」の三つの段階があり、すなわち螞拐の捕獲、古い「螞拐歌」を歌うとともに螞拐を祭り、螞拐を埋めることである³⁷。

第一段階の「找螞拐」では、正月 1 日に螞拐を捕獲する。3～5 のチワン族の村が連合し、老若男女が螞拐捕獲隊を組んで、田畑に冬眠している螞拐を捕獲する。そして、人々は銅鼓を鳴らしながら音の響きに合わせて、田畑で草や石をひっくり返し、幸運を祈って他人によりも早く螞拐を発見しようとする。最初の発見者は「螞拐の郎」あるいは「螞拐の父」の名が付けられ、非常に光栄なもの認められて、すぐに爆竹を鳴らしながら天地に情報が伝えられる。また、発見者は群衆から推薦され、祭りの主催者（祭司者）となることが決定する。さらに、人々は螞拐の死体を村に運びながら宝棺（竹筒）内に入れて密封し、宝棺の端に紙銭などを掛けて二人で担い、楽隊を随行させながら、銅鼓と爆竹の音に合わせて螞拐亭（涼亭）に搬送し祭る。

第 2 段階の「唱螞拐」と「孝螞拐」では、正月 1 日から月末までの間に古い「螞拐歌」を歌い、螞拐を祀る。この期間には昼の間に、少年たちは螞拐を担って百人の人を随行さ

³⁵塚田誠之（2000）：『壮族文化史研究－明代以降を中心として－』第一書房、62 頁。

³⁶螞拐とはカエルのことであり、チワン族の言語ではマージワイと読む。

³⁷梁庭望（2000）：『壮族文化概論』広西教育出版社、473 頁。

せながら村を巡り、各家を祝賀するとともに、古い「螞拐歌」を歌い、主人から餅、肉の粽、赤く染めた卵などの食べ物あるいは金を与えられる。夕方には、もらった食べ物や金を牛車に満載して帰って来て、村民たちに分配して、共に食べる。夜には、涼亭に戻り、仮面舞と螞拐舞を踊り、対歌が盛大に行われ、螞拐の霊を守る。このような行事は、25 日間にわたって続けられる。

そして 25 日後に、螞拐節のピーク、すなわち第 3 段階の「葬螞拐」に到達する。人々は吉時を選んで、鶏、アヒルを屠り、五色のご飯を蒸して親戚を招き、朝食後に螞拐を昨年埋葬した場所に集合し、螞拐を新たに埋葬する前に、長者が昨年埋めた宝棺を開ける。梁庭望（1987）『壮族民俗誌』では、昨年埋めた宝棺を掘り出して、その螞拐の骨の色で翌年の吉凶を占うことが述べられている。つまり、もしも螞拐の骨が灰色あるいは黒色を呈していれば、翌年は凶年であること予示すると理解され、この場合には人々は線香を焚き厄が去ることを祈る。その一方、骨の色が金色を呈していれば、翌年は吉年であることを予示すると理解され、その場合には人々は銅鼓を叩きながら歓呼し、爆竹を鳴らして新しい螞拐を埋葬する。葬式後に、人々はかがり火を囲んで歌ったり、踊ったり、螞拐の魂を天の神様に届ける。

（2）三月三

チワン族が旧暦の三月に行う行事の中で、重要なのが「三月三」である。『壮族通史』（1988）の記載によると、「三月三」は、掃墓（墓参）の日であり、期間的には 15 日まで続く。漢族はこれを清明節に行く。また、各家で五色の糯米飯を作り、鶏肉、鴨肉、豚肉などの料理および酒とともに墓地へ持参する。家族の年寄りの人が儀式を司って、雑草を刈り、紙幡を挿した後に、墓前に料理を並べて焼香し、墓に向って三回礼拝し、爆竹を鳴らした後、供物を下げて皆でその場で食べる。

「三月三」は、漢族の清明節のような墓参りの祝日というだけではなく、歌の祝日とも言える。チワン族の居住地は、「歌の海」と言われている。チワン族の人々は、歌を好み、農閑期や祝日、冠婚葬祭の時には、各地で一問一答の形式で歌い合う歌垣を行っている。チワン族の人々の間で、伝説上有名な歌姫は劉三姐であり、最も尊敬されている歌の神様である。毎年旧暦 3 月 3 日には、周辺に住む若い男女は祭り用の立派な服装を着て集まり、デュエットで歌を歌うことが多い。この歌垣には多くの人々が集まり、時には何万人の人が集まることもある。さらにこの日は、娯楽と若い男女の社交や恋愛の舞台であり、きれいな飾りつけをした舞台が用意され、イベントが行われる。三月三は、広西チワン族自治区のチワン族のみならず、漢族・ヤオ族・ミャオ族などの広西チワン族自治区に住む各民族にとっても極めて重要な祝日である。

（3）端午節

端午節は、漢族の影響により、チワン族が旧暦の 5 月 5 日に戦国時代の「楚」の愛国詩人屈原を記念するためのさまざまなイベントが行われる祭日である。この日には、チワン族独特の工夫が凝らされた粽を作り、祖先を祭る。また、この時期に病気や災厄をさけるために、薬草を摘み健康を祈願する習慣があった。そして、一部の薬草は家屋に挿し、雄

黄を浸した酒を飲み、一部の薬草からは汁を搾り出して湯に入れ、入浴する。さらに、河川の近くに住むチワン族の人々は、漢族と同様に竜船の競争も行っている。チワン族竜船の競争は漢の時代まで遡ることができ、広西で発見された西漢時期の銅鼓の鼓面に竜船の紋様を彫っているものがある。

(4) 莫一大王節

6月の行事の中で一番大きなものは、莫一大王節であり、チワン族地区の全てに共通する行事ではないが、広西北部・西北部に居住しているチワン族の人々にとっては大きな祭りである。莫一大王節は、伝統な祭りの一つとして毎年旧暦の6月2日に行なわれ、「五穀廟祭」とも呼ばれている。莫一大王神の伝説によると、莫一大王節は莫一大王の誕生日であり、彼がチワン族を救い、五穀を豊かにする上で功績があったため、チワン族の人々が彼の恵みに感謝し、村の前に廟を建て、家にも霊牌を供奉するようになった。また、塚田（2000）によると、莫一大王神は人々の無病息災や順調な生活、村落の土地を守護し、災害や疫病を鎮めたり、予防する霊力を持ち、穀物の豊作を保証するチワン族の神祇である。そして、日常の祭祀においては、各家庭ごとに鶏、アヒル、豚などの供物を供える。非日常の祭りの場合は、6年ごとに、全村あげで大規模な行事を行い、村長が儀式を司るとともに、村人たちから資金を集めて豚と羊を買い屠った後に莫一大王廟で盛大な行事を行なっている。

(5) 中元節

中元節は、7月中旬に祖先を祭る祭日であり、広西チワン族自治区では「鬼節」または「七月半」とも呼ばれている。もともと中元節は旧暦の7月15日であるが、始まりの日や特に重視される日は地域によって異なっており、チワン族では7月14日に盛大な儀式で祖霊を祭ることが行われる。行事の期間は一般的には旧暦の7月7日から始まり、13日、14日、15日、16日までの間に行われたが、富裕な家庭では6日の間に毎日行事を行っている。また、塚田（2000）によると、行事の期間についてチワン族地区の幾つかの県では7月6日・7日から15・16日までの場合もある。行事の内容は、7日に祖先の霊を迎え、アヒルを殺して供物として祭り、14日に正式の祭りを行う。そして、14日の夜から15日の朝にかけて祖先の霊を送る³⁸。さらに『壮族通史』（1988）の記載によると、7月7日にこの1年間に新たに死去した者の霊を祭り、14日には新旧の死者の霊をともに祭る。

(6) 中秋節

旧暦8月15日の中秋節は、中国では月餅、果物などの供物を供えて月を祭る日となされている。中国には古くから賞月の習慣があったが、中秋のそれに固定化したのは唐代以後であり、チワン族の場合現在でも盛大な行事が行われている。中秋賞月は元来、漢族地区から導入されたものであったようである。その日にはチワン族の各家で鶏、アヒルを屠

³⁸塚田誠之（2000）：『壮族文化史研究－明代以降を中心として－』第一書房、108頁。

り、祖先を祭った後に食事を共にし、夜には月餅や果物を供えて月を観賞する。また、花灯（飾り灯籠）や柚（ザボン）灯を作って観賞する。さらに、『壮族通史』（1988）によると、多くの家々は河川の中あるいは池の土手に竹製の筏を設け、その上に月を観賞するための祭壇を建て、家族の人々が夕食後に共に月餅、果物などの供物を供えて月を祭り、酒と茶を飲んだり、世間話をしたりする。さらに、筆者の調査によると、広西の西北部に暮らしている一部のチワン族は、月を祭る時に祭壇の上に月餅、梨、リンゴおよび柚を三つずつ並べ、線香を柚の上に挿し、祭壇の両側にロウソクを灯している。家族の人々は祭壇を囲んで、世間話をする。

（7）重陽節

旧暦の9月9日は、「重陽節」と呼ばれる祝日に当り、中国ではこの日に古来の風習により高い所に登る習慣がある。漢族の間では、この日に「登高」の風習があり、家族が揃って高い所に登り、またミズキ科の植物である茱萸を身に付け、菊の花を浸した菊花酒を飲んだり、蒸し菓子を食べたりするなどの行事を行う。これに対して、チワン族の場合はもともと漢族のような行事を行なわなかったが、梁庭望（2000）が指摘したように、9月は水稻収穫の季節であり、チワン族の人々は重陽節を慶祝したものの、登高と茱萸を身に付けるという風習はなかった³⁹。その一方、祖先を祭り、老人の誕生を祝う行事を行う地方はよく見られ、地域によっては収穫祭が行われる場合もある。

塚田（2000）は『壮族文化史研究—明代以降を中心として—』において、「九月の行事として重陽節の登高行事は漢族を中心に行われ、郷村のチワン族の間にはさほど普及せず、むしろ漢族同様に墓参を行ったり、収穫祭の行事が行われたように思われるのであり、期日と名称において漢族の影響を受けながらも内容については必ずしも同じではなかった」述べている。すなわち、歴史上漢族と頻繁的に接してきたチワン族は多かれ少なかれ漢族の文化を受容してきたが、毎年恒例として行われる重陽節その他の年中行事は、漢族と同じような期日や名称が用いられるにもかかわらず、地域や民族による違いで内容に大きな違いが見られるのである⁴⁰。

3. チワン族の建築様式

チワン族の居住地域は、亜熱帯性気候であるため、降水量が多く高温多湿となっており、こういう気候条件に適応してチワン族の建物は、主に「干欄式」建築スタイルによるものが多い。『壮族簡史』（1980）によると、「干欄」とはチワン族言語からの音訳で、「干」は「上」、「欄」は「家」、合わせて「上の家」という意味である⁴¹。しかしこの「干欄式」の建築物は、必ずしもチワン族に特有のものではなく、雲南省及び貴州省の山々の奥地に暮らしているさまざまな少数民族の建築物も「干欄式」の形である。つまり、中国でも降水量が多い西南部の山地に住んでいる少数民族の集落では、「干欄式」の建築物がよく見られる

³⁹梁庭望（2000）：『壮族文化概論』広西教育出版社、482-483頁。

⁴⁰塚田誠之（2000）：『壮族文化史研究—明代以降を中心として—』第一書房、119頁。

⁴¹『壮族簡史』編纂組（1980）：『壮族簡史』広西人民出版社、119-120頁。

ようになっているのである。「干欄式」の建築物は、もともと「人」型の屋根を丸太で支え、竹と瓦と草などの材料を用い、木で部屋を覆っている。部屋の壁は、木の板と泥土を積み上げて構成されている。通常は2階建てで、その造型は様々であるが、上に人が住み、下で家畜を飼い、風通しがよい。

チワン族の昔の建物は、基本的に木造であり、構造が簡単で、築くことがたやすいものであった。時代の流れと共に、チワン族は複雑な形の建物を築くことができるようになった。その一方、建物の基本的な構造は変わらず、いわゆる「上に人が住み、下で家畜を飼い」という形は不変である。『壮族簡史』（1980）によると、「干欄式」の建物は、降水量が多く高温多湿の気候に対応し、獣類を防ぐために、長い期間の間にいくらの形の点では変化しても、基本な構造はそのまま残している。しかし、現代化の進展によりさまざまな「干欄式」の建築物の姿は消えつつあり、その代わりにコンクリートの建物が建てられるようになってきた。

第3節 ヤオ族の歴史と文化

1. ヤオ族に関する先行研究

ヤオ族に関しての研究は、歴史文献に関する記述から学術的な研究に至るまで、中国の内外でさまざまな研究がある。中国人によるヤオ族の研究は、隋代の『後漢書』にまで遡及することができるが、その中ではヤオ族の祖先に関して長沙武陵蛮に居住しているとの記載がみられる。そして『瑤族通史』（2007）によると、ヤオ族研究については三つの段階に分けられる。

すなわち、第一段階は、漢代から清代末期までの歴史文献の記録研究である。東漢時代の應劭『風俗通義』と晋朝の幹宝『搜神記』にはすでに盤瓠についての伝説が記載されており、南宋の範曄による『後漢書』にはヤオ族の祖先は「長沙・武陵蛮」であることが述べられている。南朝（梁）以後、唐代初期の姚思廉『梁書・張纘伝』には「零陵・衡陽等郡有莫徭蛮者、依山陰為居、歷政不賓服」とあり、初めてヤオ族の名に関して「莫徭」という言葉が歴史文献資料の中に現れるようになった。その後、漢代の歴史書籍と古典籍の中には、ヤオ族の祖先に関する記録がしばしば現れた。しかし、それらの書籍はすべて統治者が漢字を用いて書いたものであり、内容は主にヤオ族に対する統治、討伐、弾圧など記録であった。また、歴代封建王朝においては多分野の学者たちがヤオ族の民族起源、歴史、遷徙、政治、経済、文化と風俗習慣等状況について漢字で記録した。例えば、宋代の範成大『桂海虞衡誌』と周去非『嶺外代答』等の著書には、宋代嶺南のヤオ族の歴史文化が詳細に述べられた。その一方で、ヤオ族の民間ではヤオ族の知識人たちが漢文で自民族の歴史文化を記していた。例えば、ヤオ族の民間で著された『過山榜』と『盤王大歌』には、代々伝承されてきたヤオ族の歴史文化が漢文で明記されている。また、一部のヤオ族の間では家系図、石碑や墓石に書かれた文字により自民族の起源、変遷、社会経済についての状況などが何世代にもわたって流伝した。清代にはヤオ族に関わる専門的な著書も現れた。例えば、諸匡鼎『徭撞伝』、李来章の『連陽八排風土記』、姚束之の『連山綏徭廳誌』と『評徭述略』及び魏祝亭『兩粵徭俗記』等の歴史書である。清代末期以後、日本、フラ

ンス、ロシアなどの国々においてヤオ族の研究が始まったが、研究者の数が少ないため、著作はほとんどない。19 世紀末から 20 世紀初期にかけては、西洋の宣教師や学者が中国華南の少数民族地区を訪れ、ヤオ族と接触しながら、数多くの研究報告を出した。例えば、1911 年にドイツ人 Leuschner が『華南的徭族』を出版した。また、20 世紀初期に、フランスの駐ベトナムの植民地政府役人と学者が、ベトナム北部の少数民族を研究したが、彼らから出版した著作が『東北部民族誌研究』（1906）、『東京山地居民』（1908）、『印度支那民族誌研究』（1908）、『上東京自防湫至諒山の各民族』（1924）等であった。さらに、日本における考古学および人類学の先駆者として著名な研究者である鳥居龍蔵は、1902 年から翌年 3 月までの 9 ヶ月間にわたって西南中国を調査し、その後、中国西南少数民族に関する多くの著作・報告書を刊行した。特に、鳥居龍蔵の『中国の少数民族地帯をゆく』（1980 年）は、ヤオ族を含む他の少数民族の独自の文化と漢民族との複雑な交流の実態を活写しており、今日でも貴重な文献となっている。これらの著作は、ヤオ族の生活状況を詳細に記述しており、ヤオ族文化を対象とする国際的な研究の端緒となったと言われた。

第二段階は、20 世紀の中華民国初期から 1940 年代末期までの研究である。清代末期には、西洋の民族学研究の方法論がすでに中国に流入していた。そのころ中国で有名な民族研究者であった蔡元培は、民族研究において初めて西洋的な民族学方法論を提唱したが、彼の最初の研究対象はヤオ族であった。また、1928 年 2 月から 8 月までの間に、中国中央民族学研究グループの顔復礼と商承祚が広西凌雲県の 6 つの村を訪れて民族研究を行い、翌年に紅頭瑤、藍靛瑤、盤古瑤、長髮瑤の生活習俗状況を中心とする研究『広西凌雲徭人調査報告』を発表した。その後、1930 年 3 月と翌年の春に、広州中山大学の生物研究グループが広東曲江、乳源、樂昌および広西大瑤山の古陳などの地域で生物サンプルを採取したが、その際同時にその地域におけるヤオ族の社会生活と習俗などの調査も行い、1935 年 9 月に『兩廣徭山調査』という調査報告を出版した。しかし、さまざまな制限があったため、その調査報告にはヤオ族の服装、食事、居住環境と交通手段などの基本的な生活状況についての記述しかない。また、1935 年 10 月に、燕京大学の民族学者費孝通と王同惠夫妻が花藍ヤオ族を研究するために、広西大瑤山南部地区を訪問した。しかし、調査の途中に王同惠が山の崖から転落し、研究のために命を捧げることとなったが、費孝通が妻の遺稿を整理しながら、翌年の 6 月に妻の名義で『花藍徭社会組織』を出版した。さらに、1936 年に徐益棠が大瑤山での四ヶ月間にわたる研究調査に基づき、翌年には大瑤山ヤオ族の社会経済と喪葬儀礼等の方面の報告が『金陵学報』、『辺政公論』、『中国文化研究』および『辺疆研究論叢』等の刊行物に掲載された。1937 年 11 月に、中山大学文科研究所、文学院史学系、生物系および広州市博物館の楊成誌、江應樑、王興瑞等の 10 人が広東曲江県荒洞ヤオ族村寨で調査を実施し、翌年『広東北江徭人調査報告』を出版した。

しかし、この時期には、日中戦争があったため、1940 年代にはヤオ族の研究にはほとんど進展がなかった。そうした中で、戦争にもかかわらずわずかな著書と論文が発表された。例えば、曾昭璇「粵北徭山地理考察」（1943）、雷澤光『廣西北部盤古徭的還願法事』（1943）、張昆「苗徭語声調問題」（1943）、徐益棠『廣西象平間徭民之村落』（1944）、岑家梧『徭麓社会』（1946）、陳誌良「恭城大土徭的礼俗与伝記」（1948）、唐兆民『徭山散記』（1948）等の論文および著書である。

『瑤族通史』(2007)によると、この時期には中国の学者はヤオ族の研究に極めて熱心であり、研究範囲も広がり、西洋の民族学の研究方法論を適用したため、ヤオ族研究の上で大きな成果が得られた。その一方、大部分の人はプロフェッショナルな研究者ではないが、あるいは多くの人々がただ便宜的にヤオ族につき合ったのみで、自らの見聞と感想を記述するだけにとどまっていた。そして、この時期はヤオ族研究の広さと深さという点からみると、研究者たちが自分の社会的・階級的制約性に拘束され、研究の多くは成功しなかった。

第三段階は、中華人民共和国成立(1949)から1990年代末までの時期である。この時期は、いわばヤオ族研究が画期的に展開した時期であり、さらに三つの段階に分けることができる。

すなわち、第一段階は中華人民共和国成立(1949)から1966年までの間である。この時期に中国政府は、100人の研究グループを組織し、10年の期間にわたってヤオ族の社会歴史に関する大規模な研究調査を展開し、大きな研究成果をもたらした。特に、1951年6月には中央政府の60人の訪問団が広西、広東、湖南、海南島等の少数民族居住地域を訪れ、民族学者の費孝通や楊成誌らの指導の下に民族識別調査を実施した。その後、1953年に中央と地方民族事務局の研究チームによる協同研究によって、すでに民族名称を所有する少数民族と未確認の少数民族との識別確認をした。この民族識別調査を通じて、ヤオ族の人口、分布地、支系構成、語言概況、社会形態などの情報を把握することができただけでなく、またヤオ族の民間に存在する書籍、文学作品と宗教に関わる資料を入手することができた。さらに、50年代中期からは各地の政府が民族社会歴史調査グループをヤオ族居住地区に派遣し、全面的にヤオ族の社会状況を調査すると同時に、社会改革を推進しながら、ヤオ族の政治、経済と文化事業を促進させた。長期の研究調査を基づく『瑤族簡誌』と『瑤族語言簡誌』等の著作の編集も始められ、1962年11月には第一回の「壮瑤族学術研討会」も開催された。しかし、1950年代の人民公社政策や大躍進政策の実施、1957年からの反右派闘争によって、ヤオ族の研究も影響を受け、特にヤオ族の宗教信仰に関わる研究は中止された。一方で、この時期には国際的にもヤオ族に関する専門的な研究が始められた。

第二段階は、1966年から1976年までの文化大革命の時期である。この時期には中国国内のヤオ族研究はまったく進められなかったが、その一方で、国際的なヤオ族研究は発展した。10年間の文化大革命の影響によりヤオ族の研究活動はわずかに1974年から1976年の間に明代大藤峽瑤民の蜂起とヤオ族の教育に限定して進められたが、他方でソ連の民族学者による華南ヤオ族に関する研究が始められた。しかし、西洋の学者は中国を訪れることが禁止されていたため、タイとラオス北部山地のヤオ族に関する研究を展開した。1970年代中期から80初期に、フランス、タイ、日本、アメリカ、オーストラリアなどの国の人類学者たちが次第にヤオ族の研究に従事するようになった。このように、国際的にはヤオ族に関するさまざまな著作が出版された。例えば、日本では白鳥芳郎編の『瑤人文書』(1975)と『東南アジア山地民族誌』(1978)、竹村卓二の『瑤族の歴史と文化』(1981)があり、またアメリカではコーネル大学の『瑤英詞典』(1968)、フランスでは Jacques Lemoin の『瑤族宗教儀式絵画』(1982)などの著作がある。それ以外にも数多くのヤオ族

を対象とする研究論文が発表された。

第三段階は、1978 年から 90 年代末までの時期である。この期間は、中国の内外でヤオ族の研究が空前の発展を見せた時期であった。1978 年 12 月に中国共産党が「解放思想、实事求是」の思想路線を確立し、改革開放が推進したことで、ヤオ族の研究も回復した。その後、『中国少数民族』（1981）、『瑤族語言簡誌』（1982）、『瑤族簡史』（1983）、『瑤族過山榜選編』（1984）、『广西瑤族社会歴史調査』（1985）などの著作が出版された。1980 年代初期の文化大革命に対する「撥乱反正（世の乱れを治め、正しい世の中に戻す）」後に、国内の民族学者の名誉が回復され、費孝通の指導の下に、民族学者たちはヤオ族居住地域の山地に入って調査研究を続け、例えば胡起望と範宏貴の『盤村瑤族』（1983）などの貴重な研究報告が得られた。また、胡起望、徐仁瑤、黄鈺、韓肇明、姚舜安、張有雋、鄧文通、玉時階等の人々が湖南、広東、広西（巴馬、十萬大山、南丹）等の地域でヤオ族を調査し、さまざまな報告が出された。さらに、一部の芸術研究者たちが 1950 年代から 60 年代の間の調査データに基づき、ヤオ族の山村部で調査を継続し、『瑤族歌堂曲』（1981）、『密羅陀』（1981）、『瑤族民歌選』（1982）、『瑤族風情歌』（1983）、『瑤族民間故事選』（1984）および『白褲瑤社会』（1989）等の著作を出版した。1990 年代になると、ヤオ族の研究は、海外の学者たちとの協同研究により、さらに大きな成果をもたらした。この時期に出版された著作は張有雋『瑤族伝統文化変遷論』（1992）と張有雋他編『中国原始宗教資料叢編・瑤族』（1998）、黄鈺『評皇券牒集編』（1990）、黄鈺と黄方乎『国際瑤族概述』（1993）、趙廷光『論瑤族伝統文化』（1990）、李信文『南粵民族博覧』（1994）、吳永章『瑤族史』（1993）、劉小春ほか主編『桂東瑤舞探秘』（1992）、李本高『瑤族〈評皇券牒〉研究』（1995）等である。これらの著書や論文はヤオ族の起源、移住、伝統文化と社会経済などの方面の研究に新しい観点と貴重な資料を提供してきた。

以上見てきたように、多くのヤオ族研究で指摘されている通り、ヤオ族研究は三つの段階に分けられるが、その区分はチワン族の研究と同じように 1990 年代末までの学者の論点に限られている。しかし、2000 年代に入ると、西部大開発プロジェクトの実施によって、少数民族の伝統文化を中心とする観光開発が盛んとなり、拡大している状況の下で、ヤオ族研究は 1990 年代から現在までの間に新しい研究段階に入ったと思われる。すなわち、観光開発の隆盛によって市場経済が急速に社会に浸透し、ヤオ族の社会に多大な影響を与えるようになったという背景の下に、ヤオ族の研究は第 4 段階として位置づけることができる新たな段階に入ったと思われる。

その理由は前述したように、改革開放後に中国の観光業は急速的な成長を遂げ、それに伴って少数民族を中心とする観光開発も著しく発展してきたが、その一方で西部の数多くの省・自治区および地方郷村に至るまで 1990 年代初めにエスニック・ツーリズムの動きが芽生え、2000 年代にはそれが盛んになることによって、地方郷村における少数民族の生活世界にまで大きな影響を与えていると思われるからである。この時期は、いわゆる西部の振興期であるが、地方郷村の少数民族文化も観光資源化されるようになっていった。そのため、1990 年代以降に少数民族居住地域の各地で盛んとなった民族のシンボルの再発見と観光化との結びつきに関する研究が多くなり、ヤオ族研究も新しい研究段階に入った。

2. ヤオ族の人口および名称

ヤオ族は、中国に居住しているだけではなく、はるか遠く東南アジアのベトナム・タイ・ラオスなどの国々の山岳地帯にまで広く分布している。第二次世界大戦後、一部のヤオ族は移民としてアメリカやヨーロッパ各国に移住した。

世界におけるヤオ族の人口は 350 万人を超え、ベトナム (80 万人)、ラオス (2.5 万人)、タイ (5 万人)、ミャンマー (1,000 人あまり)、アメリカ (5 万人)、フランス (1,000 人あまり)、カナダ (100 人あまり) などに分布している。2010 年に実施された中国第 6 次人口センサス集計データによると、中国におけるヤオ族の人口は 279.6 万人で、世界のヤオ族人口のおよそ 80% を占めている⁴²。主に広西チワン族自治区に分布しているが、一部は湖南、雲南、広東、貴州などの省に分布している。その居住状況の特徴は、全体としては分散していることにあるが、集中して居住しているところもみられる。

ヤオ族は中国の長い歴史をもつ民族の一つで、そのルーツは古代の「荊蛮」、「長沙武陵蛮」、「莫徭」、「蛮徭」であるとみられている。『瑤族簡史』(1983) によると、ヤオ族の名称は、古くから文献に現れており、唐代の姚思廉が記した『梁書・張纘伝』には「零陵・衡陽等郡有莫徭蛮者、依山險為居、歴政不賓服」、長孫無忌の『隋書・地理誌』には「長沙郡又雜有夷蜒、名曰莫徭」、『宋史・蛮夷列伝』には「蛮徭者、居山谷間……不事賦役、謂之徭人」、週去非の『嶺外代答』には「徭人者、言其執徭役於中国也」等の記録が残されている⁴³。そして、上記の歴史文献資料には「莫徭蛮」、「蛮徭」あるいは「徭人」等の名称が用いられており、これがヤオ族の名称の源であると言われている。

また、『瑤族通史』(2007) の記載によると、中国古代では、民族間で具体的に名称を区別することがなく、南方に居住しているすべての民族は、一般的に「蛮」あるいは「南蛮」と総称されていた。ヤオ族の祖先は南北朝以前には、「荊蛮」、「長沙蛮」、武陵蛮」または「五溪蛮」と呼ばれている。南北朝と隋唐五代の時期 (西暦 420-960 年) には、「莫徭」という名称が初めて歴史の文献で記録されている。族称の変遷については、唐代から南方に移住する過程で、他の民族とコンタクトすることにより、名称が変化していったのである。『瑤族歴史探究』(2015) によると、唐代末期から宋代初期までに、湖南省洞庭湖沿岸一帯に居住しているヤオ族は次第に南方に移住したが、その時期の歴史文献の中では、「徭役」という言葉の「徭」の名を付けることがよく行われている。例えば、「莫徭」、「蛮徭」あるいは「徭人」と呼ばれ、または「蛮」、「獠」、「山徭」、「山越」などの名称が使われている。元代には、ヤオ族は大規模に広西・広東省に移住し、封建統治階級によりもともと「徭」から「徭」に変え、「蛮徭」、「徭人」、「徭民」などの蔑称をつけて呼ばれていた。この呼称は、中華民国の初期までに使用され続けていた。さらに、1920 年代には広東中山大学の研究者グループの提言により昔の蔑称である「徭」が「徭」に変更され、学界では次第に「徭」という呼称でヤオ族が呼ばれるようになっていった。中国共産党成立後に、ヤオ族の名称は統一的に「徭」とされたが、新中国成立後にヤオ族の人々自身の望みにより「徭」が「瑤」に変えられ、今日に至るまでその呼称が用いられている。

⁴² 中華人民共和国国家統計局 (2010) : 『中国 2010 年人口普查資料』中国統計出版社。

⁴³ 瑤族簡史編写組編 (1983) : 『瑤族簡史』広西民族出版社、10 頁。

また、ヤオ族は「勉」、「金門」、「布努」、「拉珈」、「炳多優」などと自称している。『瑤族簡史』（1983）によると、同じヤオ族であっても居住地の自然環境、生業、服飾、頭の飾りなどにより数十種の異なった呼称がある。例えば、盤瑤、山子瑤、頂板瑤、花藍瑤、過山瑤、白褲瑤、紅瑤、藍靛瑤、八排瑤、平地瑤、茶山瑤、背簍瑤などがそれである。

ヤオ族の支族の分類については、言語系統別に四つの方言に大別することができる。すなわち、勉（ミエン）語、苗（ミャオ）語、侗（トン）語、漢語という四つの方言である。具体的には、表 I-1-4 に示しているように区分される。

ヤオ族に関する研究の領域では、言語の上でヤオ族の支族構成は四つに分けられた。すなわち、第一支族は、勉（ミエン）語を話すヤオ族であり、または瑤語支系とも呼ばれている。この支族の自称は、尤綿、董本尤、土尤、谷岡尤、祝敦尤綿、標曼、史門などであり、ヤオ語系の言語を話す集団の中で人口が最も多く、分布地にも広くわたっている。主に、広西チワン族自治区、湖南省、雲南省、広東省、貴州省、江西省に居住している。

第二支族は、苗（ミャオ）語を話すヤオ族であり、または布努ヤオ族支系とも呼ばれている。彼らは布努、努努、布諾、瑤格勞、努茂、尤諾などと自称するが、他称は布努ヤオ族、花ヤオ族、白褲ヤオ族、紅ヤオ族、花藍ヤオ族、八洞ヤオ族、青褲ヤオ族、長衫ヤオ族などである。その中では、布努ヤオ族の人口が最も多く、人口は苗語系の総人口の 97% を占めている。主に、広西チワン族自治区、貴州省、湖南省、雲南省に暮らしている。

第三支族は、侗（トン）語を話すヤオ族である。自称は拉珈であり、他の民族からは茶山ヤオ族あるいは那溪ヤオ族と呼ばれている。茶山ヤオ族は主に広西チワン族自治区に居住している。那溪ヤオ族の人口は約 2 万人余であり、主に湖南省に分布している。

第四支族は、漢語を話すヤオ族である。他称は平地ヤオ族、白領ヤオ族であるが、平地ヤオ族は炳多優と自称し、白領ヤオ族は尤家と自称している。主に、広西チワン族自治区に居住している。

表 I-1-4 中国におけるヤオ族支族の構成

語系	名称	自称	主要居住地区
勉(ミエン)語	盤ヤオ族、八排ヤオ族	尤綿、董本尤 土尤、谷岡尤 史門、標曼 祝敦尤綿	広西チワン族自治区 湖南省、雲南省、広東省 貴州省、江西省
苗(ミャオ)語	布努ヤオ族、花ヤオ族 白褲ヤオ族、紅ヤオ族 花藍ヤオ族、八洞ヤオ族 青褲ヤオ族、長衫ヤオ族	布努、努努 布諾、瑤格勞 努茂、尤諾	広西チワン族自治区 貴州省、湖南省、雲南省
侗(トン)語	茶山ヤオ族、那溪ヤオ族	拉珈	広西チワン族自治区 湖南省
漢語	平地ヤオ族、白領ヤオ族	炳多優、尤家	広西チワン族自治区

資料：奉恒高主編（2007）『瑤族通史』民族出版社、4～6 頁の内容をもとに筆者作成

各地のヤオ族の人たちの間では言語の差異が大きく、お互いに言葉が通じないほどである。ヤオ族の人たちは日常的にはチワン語と漢語を使用することができる。自民族の文字は持たず、漢語の文字を使用している。ヤオ族の宗教は複雑であり、自然崇拜とトーテム崇拜を行っている人が多いが、道教を信奉している人もいる。

3. ヤオ族の起源に関する問題

ヤオ族の起源問題についてはさまざまな学説がある。本来ヤオ族は自民族の文字は持たず、中国の歴史の中で記述されたヤオ族に関する歴史は漢民族によるものに限定される。したがって、現時点では不明あるいは不正確な部分が多数存在すると思われる。田畑久夫・金丸良子（1995）は、「ヤオ族に関する漢籍資料は、一部を除き、各時代における正史にみられるように、当時の文化の中心地に居住している知識階級の執筆になるものが大多数を占める。そのため、記述内容がそれぞれの王朝の正統性を強く主張する必要から、他の多くの少数民族に関する記述と同様に、ヤオ族に関する内容が必ずしも正確なものであるといいがたい」と指摘している。

ここでは、主に学者の著書および歴史文献・資料を中心として、ヤオ族の起源を検討したい。ヤオ族の起源問題については、1960年代からさまざまな学者たちによってすでに議論されてきている。日本の研究者である岡田（1993）が中国の学界における1960年代から1980年代初期までのヤオ族の起源に関する従来の学説について概観しており、その概略は以下の通りである⁴⁴。

まず、1962年7月に広西チワン族自治区民族事務委員会の主催中に、ヤオ族の起源については三つの説が議論された。第一の説は、ヤオ族の祖先が「山越」から出ており、その原住地を会稽、現在の江蘇・浙江一帯とするものである。第二の説は、云峰の提唱するもので、ヤオ族の祖先は「武陵蛮」（五溪蛮）で、その原住地は湖南・湖北の洞庭湖の間であり、特に湖南西部から貴州にかけてであるとする。第三の説は、周宗賢・李幹芬の提唱するもので、ヤオ族の祖先は「蛮」から出ており、その原住地は今の湖南であるとする。

また、1970年代の末にヤオ族の起源問題が再び中国の学界で取り上げられた。すなわち、1979年11月に、広西壮族自治区民族研究所等の主催により、ヤオ族歴史学術討論会が南寧市で開かれ、その一環として『瑤族簡史』出版に向けての研究活動があったことを岡田は指摘している。

ここでは、『瑤族簡史』（1983）第一章「瑤族名称和源流」の第二節「民族源流」からその内容を紹介してみたい⁴⁵。これによると、ヤオ族の起源について、概観すれば四つの説がある。

第一の説は、ヤオ族の祖先は「山越」であり、原住地は今日の江蘇・浙江一帯であり、主源地は会稽山（浙江省紹興）と南京十宝殿である。

第二の説は、ヤオ族の祖先は「長沙・武陵蛮」であり、原住地は湖南の湘江・資江・沅江流域と洞庭湖沿岸地域であるが、湖北・四川・貴州・江西・安徽・河南・陝西等の省も

⁴⁴岡田宏二（1993）：『中国華南民族社会史研究』汲古書院、58-61頁。

⁴⁵瑤族簡史編写組編（1983）：『瑤族簡史』広西民族出版社、12-14頁。

含まれている。

第三の説は、ヤオ族の祖先は「五溪蛮」であり、原住地は湖南と貴州の間である。

第四の説は、ヤオ族の来源は多元的であり、すでに「長沙・武陵・五溪蛮」の構成区分があり、また「山越」の区分もあるとする。

このような四つの説に基づいて、さらに『瑤族簡史』ではヤオ族の起源問題については、その歴史が長いにもかかわらず、史料が十分に存在しないため、今日まで定説はまだないと述べている。しかし、多数派の意見あるいは客観的な説としては、ヤオ族の祖先は「長沙・武陵蛮」あるいは「五溪蛮」であり、原住地は長沙・武陵両郡すなわち湖南の湘江・資江・沅江地域と洞庭湖沿岸地域であるとする。その理由としては、次のように見解が述べられている。

古代では、中国の南方にはすでにたくさんの先住民族を居住し、一般には「蛮」あるいは「南蛮」と呼ばれている。「荆蛮」は蛮の一族であり、原住地は今日の湖南・湖北・江西・安徽等の地域である。漢代に、長沙・武陵郡に属する湘江・資江・沅江流域一帯に居住する少数民族は「長沙・武陵蛮」と称した。沅江は武陵郡に流し、五つの支流を持ったため、文献資料により「五溪」と呼ばれ、五溪地域の少数民族を「五溪蛮」と称した。また、『梁書・張纘伝』、『隋書・地理誌』、『宋史・蛮夷列伝』、『桂海虞衡誌』、『天下郡国利病書』等の史籍に、湘江・資江流域および五溪地域には早くからヤオ族の先民が居住しており、この地域一帯はまさに「長沙・武陵蛮」の活動地域であると記されている。さらに、今日の湖南辰溪県のヤオ族によると、彼らは古代から今日まで湘江・資江流域に住んでおり、どこにも移住したことがないということである。また『後漢書・南蛮伝』の記載によれば、漢代の「長沙・武陵蛮」は、今日のヤオ族の風俗習慣や伝説と類似している。このように、ヤオ族と「長沙・武陵蛮」は歴史上非常に密接な関係をもっており、「長沙・武陵蛮」の中にヤオ族の先祖が含まれる。

表 I-1-5 近代までのヤオ族の移住経路

時代	世紀	主要な居住地
秦漢	BC3～AD2	湖南省（湘江、資江、沅江中下流域、洞庭湖沿岸）
南北朝	5～6	長江、淮河流域
隋・唐	6～10	湖南省、広東省北部、広西チワン族自治区東部
五代	10	湖南省五溪地区
宋	10～13	湖南省、広西チワン族自治区、広東省北部
元・明	13～17	広西チワン族自治区、広東省
明末～清末	17	広東省、広西チワン族自治区、貴州省、雲南省

資料：『瑤族簡史』（1983）13～14 頁より筆者作成

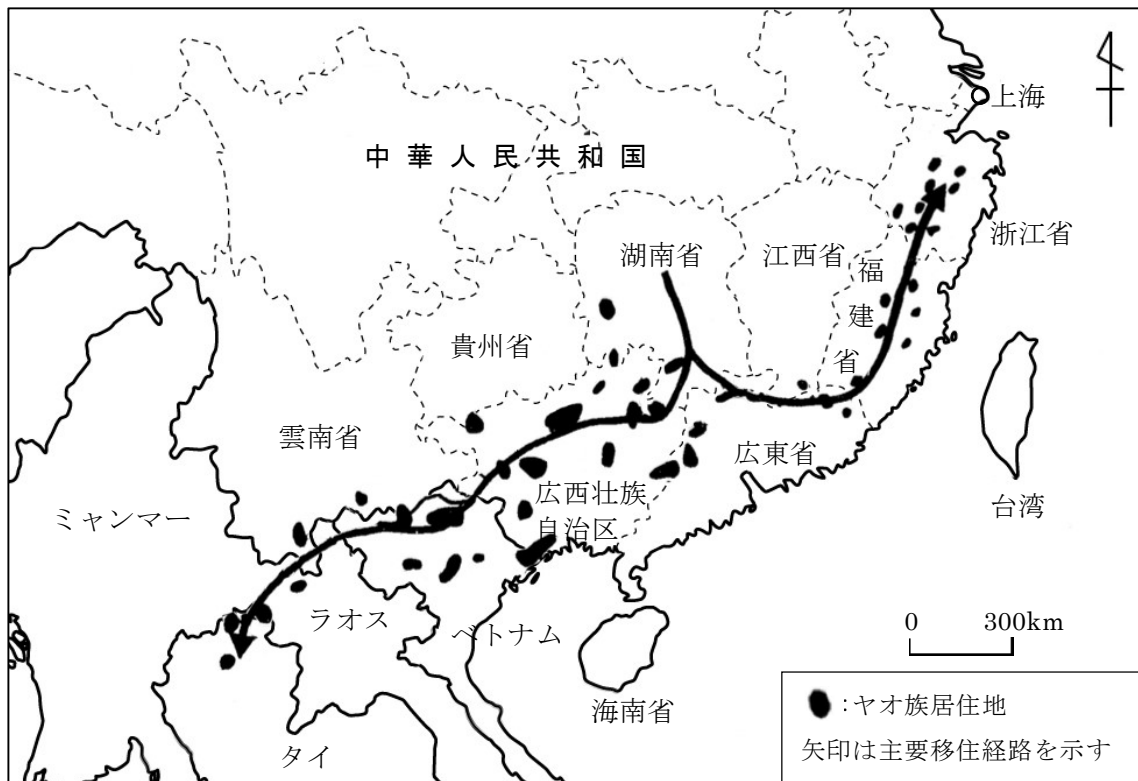


図 I-1-1 ヤオ族の移住経路と分布地域

資料：田畑久夫・金丸良子（1993）「ヤオ族の生業形態の研究：フィールドサーヴェイを中心として」『比較民族研究』7、104 頁の地図に筆者加筆

また、『瑶族簡史』にはヤオ族の移住の状況について次のように記載されている。すなわち、秦漢時代（紀元前 3 世紀初期から～2 世紀）には、ヤオ族の先祖の主な居住地域は、湖南の湘江・資江・沅江流域の中・下流および洞庭湖一帯の地域であった。そして南北朝時代（5 世紀～6 世紀）に、沅江流域の一部の少数民族が北へ移住したが、その後に封建統治階級の圧迫により再び南へ引き返し、その中にはヤオ族の先祖も含まれていた。隋唐時代（6 世紀～10 世紀初期）には、ヤオ族の居住地域は、主に長沙・武陵・零陵・巴陵・桂陽・衡山・澧陽・熙平等の郡、すなわち湖南の大部分と広西東北部・広東北部等の地域であった。五代（10 世紀）には、湖南の資江の中・下流および湘（今の湖南）・黔（今の貴州）の間の五溪地域にヤオ族が比較的多く居住していた。宋代（11 世紀～13 世紀）になると、湖南西南部の辰・沅・靖諸州等の地域にヤオ族が居住していた。また湖南南部、広西東北部と広東北部の韶州・連州・賀州・桂陽・郴州等の地域がヤオ族の主要な分布地域となった。さらに、広西の静江府(桂林)に所属する各県と融州（今の融安・融水）等の地域もまたヤオ族の生活範囲であった。元明時代（13 世紀～17 世紀）には、ヤオ族は政治的圧迫により大規模に南方に移住し、広西・広東の奥地にまで深入した。そして明代には、特に広西・広東がヤオ族の主要な分布地域となった。歴史資料によると、当時の広西のヤオ族の人口はすでに全省人口の 10 分の 3 を占めており、ある地域では 10 分の 7 を占めた。また、広東では 11 府 54 州県にはヤオ族が居住していた。明末清初（17 世紀）に

入ると、一部のヤオ族は、広東・広西から貴州や雲南南部の山岳地帯に移住した(表 I-1-5)。この時期には、中国南部 6 省に居住するヤオ族は、すでに基本的には今日のヤオ族の分布地とほぼ同じで、広範囲に分散し、局地的に集中して居住していた。このように、ヤオ族の移動の歴史をみると、定住する期間は短く、何度かにわたって移住しているが、それは歴代の統治階級による民族圧迫の結果であると『瑤族簡史』は述べている。

以上のような研究成果に基づき、2000 年代になると、ヤオ族の起源問題についてあらためて議論が巻き起こった。例えば、玉(2005)の『瑤族文化変遷』は、ヤオ族の起源問題について検討し、ヤオ族の起源は、中国古代の蚩尤時期まで遡ることができるとした⁴⁶。蚩尤は約 6000 年前の中国の伝説上の英雄的人物であり、華夏民族の炎、黄の二帝と同時代であると言われている。そのころ、蚩尤の居住地域は、主に黄河下流・長江中下流域の済水・淮水流域一帯で、強大な権勢をもつ集落連盟であった。ヤオ族研究の学界では、多くの研究者により歴史上の蚩尤部落は苗・瑤族と同じ祖先であったと考えられた。また、玉は黄(2001)の『瑤族族源新探』と何(1988)の『南蛮源流史』におけるヤオ族起源に関わる内容を分析した。すなわち、黄(2001)は苗瑤族という名称は蚩尤と尤が連盟した呼称であると考えられ、蚩尤は苗族の先住民を指し、尤はヤオ族の先住民であると考えられると主張した。また、何(1988)は蚩尤部落が蚩尤と尤の二つの部落を融合した民族集団であるとも考えられ、その後、蚩尤部落が拡張して、最終的には九黎部落の首領になったと述べている。その証拠は、『戦国策』秦策に「蚩尤、九黎民之君子也」という記載が見られることにある。また、『史記』五帝本紀には「九黎君号蚩尤是也」という記述もある。当時、陝西黄土高原の炎帝神農氏部落と黄帝軒轅氏部落が黄河に沿って西から東に拡張する際に、蚩尤部落との間に紛争が発生した。最初に、蚩尤部落と炎帝神農氏部落が今の河北・山東一帯で戦い、結果として炎帝は敗北した。その後、蚩尤部落と黄帝軒轅氏部落とが接触し、蚩尤部落は一度黄帝に臣服したが、その後紛争が生じて、涿鹿一帯で激戦を繰り広げた。その結果、炎、黄二帝が協同作戦を実施し、蚩尤部落は敗北した。その証拠は、『史記』五帝本紀の「於是黄帝乃征諸侯、与蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤」という記述である。蚩尤が敗北した後、一部の人々は炎、黄二帝に臣服したが、大部分の人々は南に亡命して三苗を形成し、主要な江漢・江淮流域、長江中・下流域および洞庭の彭蠡の間の地域に居住するようになった。その証拠は、『国語』楚語の「三苗、九黎之後也」という記述であり、また、『戦国策』魏策にも「三苗之居、左有彭蠡之波、右在洞庭之水、文山在其南、而衡山在其北」とある。さらに、『史記』五帝本紀には「三苗在江淮、荊州数為乱、放鯀於崇山、以变南蛮、遷三苗於三危」との記述も見られる。三苗部落は何度となく堯、舜、禹を代表とする部落集団と激戦を行ったが、最後には舜、禹が三苗を打ち破った。三苗の一部の人々は臣服し、大部分は洞庭、彭蠡一帯に生活し、荊蛮部落を形成した。これが歴史上、「東夷西戎、南蛮北狄」と称される「蛮」であり、それは古代中国中原華夏集団が南方民族・部落を呼ぶ名称である。「荊蛮」は、荊州地域内に分布する「蛮族」を指す。この地域は、歴史上まさに三苗が頻繁に動き回った地域であり、荊蛮はヤオ族と密接な関係があると考え

⁴⁶玉時階(2005):『瑤族文化変遷』民族出版社、4-5 頁。

られる。顧炎武の『天下郡国利病書』には「広東徭、僮両種、徭乃荆蛮、僮則旧越人也」とある記事がその根拠とされている。先秦時代には、荆蛮地域内の楚人は急速に発展して国を築き、一部の荆蛮は楚人と融合したが、他のほとんどは南・西に移住した後、長沙武陵蛮、零陵蛮、桂陽蛮を形成した。そのうち、長沙・武陵蛮はヤオ族と密接な関係を有している。長沙武陵蛮は、秦漢時代には湘江、資江、沅江流域と洞庭湖流域一帯に居住している少数民族を指した。このように玉は、文献資料に基づく考察を加えた上で、ヤオ族の起源について述べており先に引用した『瑤族簡史』もそれと同様の内容となっている。

また、奉（2007）の『瑤族通史』では、ヤオ族の起源については、次のように記述している。すなわち、ヤオ族の起源については歴史文献資料に基づき、明末清初期からすでに多くの学者によって議論されてきたが、現在では歴史学、人類学および民族学などの研究結果に基づき、さまざまな見解が出されている。1960年代後半には、多くの研究が行われた結果、数多くの学者によってヤオ族の起源は秦漢時代の長沙・武陵蛮の一族であり、居住地域は湖南省の湘江、資江、沅江流域と洞庭湖流域一帯であることが認められた。しかし、「蛮」の起源がどこかという点については定説がない。ヤオ族の起源を把握するために、2000年11月に『瑤族通史』編集委員会が国内外のヤオ族研究者と専門家を招き、恭城瑤族自治县において学術討論会を開催した。それと同時に、広西瑤族学会と上海復旦大学現代人類学研究センターがヤオ族の由来を明らかにするために協同研究を行い、ヤオ族居住地域のヤオ族人のDNAのサンプルを採集し、遺伝子分析することによって、苗族のDNAと比較し、ヤオ族と苗族は分布地域が異なるものの同じ民族起源であったことが確認された。また、編集委員会は多方面の資料を分析するとともに、総合的な研究の後に、ヤオ族は黄河・長江中下流域の一部落であり、その由来は主に古代の九黎部落と三苗部落の支族から構成されることも確認した。しかし、この研究によって、ヤオ族の主な起源を指すとされたのは、ヤオ族は主に盤ヤオ族と布努ヤオ族から構成されている。それ以外には、他の民族と頻繁に接触することにより生じた二つの起源がある。すなわち、一つの起源は一部の漢民族とヤオ族が長期に接触した後に同化され、ヤオ族になっている場合である。もう一つの起源は一部の壮侗語族の人々がヤオ族と同化し、ヤオ族になっている場合である。

以上のような内容からみると、ヤオ族の起源は比較的複雑で、異なる支族から構成された共同体であると思われる。全体的にみると、ヤオ族の主な構成は盤ヤオ族、布努ヤオ族、茶山ヤオ族から成っている。

さらに、李（2015）はさまざまな古籍の記載によりヤオ族の起源を取り上げ、その結果、ヤオ族の起源が多元的であることを明らかにした⁴⁷。彼は、ヤオ族の起源に関する多く学者の見解を認め、ヤオ族の起源は秦漢時代の長沙・武陵蛮あるいは五溪蛮で、分布地域は長沙と武陵の両郡（今湖南省の湖南の湘江・資江・沅江流域と洞庭湖沿岸地域）であったとする。しかしその一方、李は古籍資料によりヤオ族の起源が多元的であったことを自らの意見として主張した。ここで、ヤオ族起源の多元性に関する李の議論を紹介する。

すなわち、『後漢書・南蛮西南夷列伝第七十六』には「瑤族先民、周時謂之蛮荆」という

⁴⁷李默（2015）：『瑤族歴史探究』社会科学文献出版社、63-66頁。

記載がみられるが、ここで言う「蛮荆」または「荆蛮」とは古代長江中・下流域の先住民の総称であり、「蛮荆」はそれ以外にまた湖北、四川、貴州、江西、安徽、河南、陝西などの地区も含む。また、『漢書・卷二十八下・地理誌第八下』には「荆蛮之呉子寿夢盛大為王」とより、荆蛮は古代には呉越⁴⁸地区も指していたことがわかる。

また、『後漢書・南蛮西南夷列伝第七十六』には「及呉起相悼王、南并蛮越、遂有洞庭、蒼梧。秦昭王使白起伐楚、略取蛮夷、始置黔中郡。漢興、改為武陵、歲令大人輸布一匹、小口二丈、是謂賁布」とあるが、ここでの蛮は黔（現貴州）中と四川の巴人を含むだけでなく、また湖南と湖北の蛮夷および洞庭と蒼梧の蛮越も包括する。さらに、「長沙、武陵蛮是也」によりヤオ族の起源は長沙・武陵蛮であることがわかる。

晋代の幹宝による『晋紀』と『搜神記』には、「盤瓠蛮夷、梁、漢、巴、蜀、武陵、長沙、廬江郡夷是也」とあり、盤瓠蛮が四川、安徽および長江中・下流域に分布していたことの根拠となっている。

ヤオ族の書籍『過山榜』には、ヤオ族は会稽山（浙江省紹興）と南京十宝殿から移住したと記されている。また、『祀神書』によると、ヤオ族は祖先祭祀を行う時に、盤王を招くだけではなく、また揚州廟の宗族も誘っていた。こうしたことから、古代のヤオ族の分布地は呉越地区（中国・五代十国時代に現在の杭州を中心に浙江省と江蘇省の一部）であったことがわかる。

そして『魏書・蛮僚伝』には「蛮之種類、蓋盤瓠之後、其在江淮間、依托險阻、部落滋蔓、布於数州...陸渾以南滿於山谷」と記されている。つまり、江淮地区の蛮夷は、荆襄地区から移転した沔中蛮（巴人）であり、また豫州蛮もふくまれることの証拠となっている。また、『宋書・列伝第五十七・夷蛮』には、「豫州蛮...種落熾盛、歷世為盜賊。北接淮・汝、南極江・漢、地方数千裏」とある。その中では、漢代の元封初年⁴⁹に江淮地区に移住した人々は豫州蛮だけではなく、東甌人と閩越人もいたとされている。唐代の『通典』には「其在五溪、長沙間則是盤瓠之後、其在峽中・巴・蜀・梁間則為廩君之後、其後種類繁盛、侵擾州郡、或轉徙交雜、不可詳別焉」とあり、沔中蛮と豫州蛮は廩君の後裔として、今日に至るまで盤瓠蛮と融合してきた。

また、『宋書・列伝第五十七・夷蛮』によると、分荆蛮と雍州蛮は盤瓠の後裔で、豫州蛮は廩君の後裔とされている。そして、江淮の蛮夷は盤瓠の後裔で、その当時のヤオ族の祖先は盤瓠蛮夷である。そこには廩君の後裔と閩越族が含まれており、すべては盤瓠の後裔と呼称される。

さらに、『隋書・誌第二十六・地理下』には「南郡、夷陵、竟陵、沔陽、沔陵、清江、襄陽、春陵、漢東、安陸、永安、義陽、九江、江夏諸郡、多雜蛮左、其与夏人雜居者、則與諸華不別。其僻處山谷者、則言語不通、嗜好居處全異、頗与巴、渝同俗。諸蛮本其所出、承盤瓠之後、故服章多以班布為飾」、「其死喪之紀、雖無被髮袒跽、亦知号叫哭泣。斂畢、送到山中、以十三年為限。先择吉日、改入小棺、謂之拾骨。...其左人則又不同、無衰服、不復魄。...乃衣衾棺斂、送往山林、別為廬舍、安置棺柩。亦有於村側瘞之、待二三十喪、

⁴⁸中国・五代十国時代に現在の杭州を中心に浙江省と江蘇省の一部を支配した国。

⁴⁹紀元前 110 年。

総葬石窟」、および「長沙郡又雜有夷蜒、名曰莫徭、自雲其先祖有功、常免徭役、故以為名。其男子但著白布襌衫、更無巾褲。其女子青布衫、班布裙、通無鞋屨。婚嫁用鉄鉏莽為聘財。武陵、巴陵、零陵、桂陽、澧陽、衡山、熙平皆同焉。其喪葬之節、頗同於諸左雲」と記されている。この記述からは、ヤオ族の祖先には蛮左人（盤瓠の後裔）がいるが、また夷蜒（莫徭）もあることがわかる。

『隋書・列伝第四十七・南蛮』には「南蛮雜類、与華人錯居、曰蜒、曰狼、曰俚、曰獠、曰顔、俱無君長、随山洞而居、古先所謂百越是也」と記載されている。また、『魏略・西戎伝』には「一称盤瓠之後、或号青氏、或号白氏、或号蚡氏、此蓋蟲類、而处中国、人即其服色而名之也」とある。つまり、南蛮の人々は華人と一緒に暮らして、蜒、狼、俚、獠および顔という名で呼ばれ、洞窟に居住して、「百越」と言われた。

『全唐文』第413巻の「授魏少遊洪吉等州団練使制」には「可使持節都督洪州諸軍事守捉、洪州刺史、兼御史大夫江南西道洪、吉、虔、撫、信、袁、江、饒等州団練觀察及莫瑤軍使」を記されている。また、『宋史・兵誌』には「今既遣官隱刮義勇、又別遣官団練保甲」を記載されており、つまり唐の肅宗の乾元元年（758年）に団練使⁵⁰を設置し、団練使は自衛の為に軍隊を訓練し、その兵士は地方から募集されていた。兵士の中には、ヤオ族の人もいと記され、また、宋代の義兵の中にもヤオ族の人が参加していた。そして、瑤族の由来は南方の土著蛮僚にまで及んでいた。

唐代の団練は土人（現地人）を兵としており、宋代の団練も土人が半分を構成していた。嶺南の俚官吏は田を営みながら辺境を守り、瑤人と同化していた。『天下郡国利病書』には『連州誌』雲俚有二種、一曰瑤、二曰僮」と記されている。また、『天下郡国利病書・廣東』には「（徭）有真贗主客之分、大率盤姓為真徭、他姓為贗徭」とあり、「贗徭」は土著人がヤオ族と同化して、徭人となった人々を指している。さらに、『曲江県誌』には「徭人盤姓、古盤瓠之裔、別種有趙、馮、唐、鄧等姓系以土著隸於徭者、俱居県西北、幽溪、列溪、草場坪、柳坑、水源宮、薯良坑、大坪坑諸峒」と記載されている。そして、以上のことから、ヤオ族の起源は多元的であったことを李は指摘している。

以上、ヤオ族の起源に関する学者の研究成果の概要を紹介してきたが、それをまとめると、ヤオ族の起源は以下の通りと考えられる。

1960年代から80年代の間に、中国ではすでにヤオ族の起源の議論が活発となった。日本の研究者である岡田の研究によるとヤオ族の起源は、『後漢書』と『搜神記』の記載に依拠するならば、春秋戦国時代のはるか前にはすでに洞庭湖一帯に居住していたことになる。また、『瑤族簡史』（1983）によると、ヤオ族の祖先は「長沙・武陵蛮」あるいは「五溪蛮」であり、その居住地は長沙・武陵両郡すなわち湖南の湘江・資江・沅江地域と洞庭湖沿岸地域である。さらに、南北朝時代になると、沅江流域の一部のヤオ族の先住民が次第に北と南へ移住していった。隋唐時期におけるヤオ族の居住地域の分布範囲は、湖南の大部分と広西東北部・広東北部等の地域である。五代には、湖南の資江の中・下流および五溪地域（今の湖南・貴州の一部）にヤオ族が比較的多く居住していたが、宋代になると、湖南

⁵⁰全名は団練守捉使であり、唐代の官制の一つ、ある地方の自衛目的の軍事官職である。

西南部、湖南南部、広西東北部と広東北部の韶州・連州・賀州・桂陽・郴州等の地域までに分布していった。元明時代になると、ヤオ族は統治階級の圧迫により大量に南方に移住し、広西・広東の奥地にまで深入したが、明末清初に入ると、一部のヤオ族は、広東・広西から貴州や雲南南部の山岳地帯に移住した。この時期から 20 世紀の間にかけては、ヤオ族にほとんど変化はみられなかった。

2000 年代に入ると、ヤオ族の起源問題についてはあらためて議論が巻き起こった。特に、玉は『瑤族簡史』の中に示された論点を認めた上で、ヤオ族の起源は中国古代の蚩尤の時代までに遡ることができると指摘した。すなわち、ヤオ族の起源は歴史的にはに蚩尤部落と同じ祖先であったと考えられ、その主要な居住地域は黄河下流・長江中下流域の済水・淮河流域一帯であったと、玉は主張するのである。

また、2007 年に刊行された『瑤族通史』では、数多くの学者がヤオ族の起源は秦漢時代の長沙・武陵蛮の一族であることを認める一方、「蛮」の起源について検討した。そして遺伝子分析により、ヤオ族と苗族は分布地域に違いはあるが同じ起源であったことを確認し、また多方面の資料に基づいてヤオ族が黄河・長江中下流域の一部落であり、その由来は主に古代の九黎部落と三苗部落の支族から構成されることも確認した。さらに、2015 年には李がさまざまな古籍の記載にもとづいて、ヤオ族の起源は多元的であることを明らかにした。

4. ヤオ族の居住環境と分布地

中国は幅広い国土を有する国家で自然環境も多様である。また中国は多民族の国として各地区の伝統的な習俗の間には大きな差異が存在しており、自然環境と冠婚葬祭などの民族習俗の間には深い関係があると思われる。そのため、ヤオ族の風俗習慣を把握する上では、彼らの生活の舞台である自然環境の中でも地形・気候・植生について検討する必要があると思われる。ここでは本論文の研究対象であるヤオ族の主要な居住地域である西南中国の自然環境について検討する。

西南中国は、高原、盆地、丘陵などのさまざまな地形を有しており、少数民族の人々は主にその中でも特に高原地帯に暮らしている。雲貴高原は、西南中国で最大の高原であり、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区、四川省、湖南省などの地区にまでに及び、海拔は 1,000～2,000m である。全体として西部から東南および北東にかけて緩やかに傾斜し、標高を次第に下げている。また、高原を流れる諸河川の多くは、岷江のように、北東部に源を発し、東流して長江に注ぐ水系に所属するものと、紅水河に代表されるように、東南に流れて西江に注ぐ珠江水系に属するものとに大別される(田畑久夫・金丸良子 1995: 106)。さらに、この高原にはカルスト地形が広がり、特に雲南省の路南や弥勒の石林と広西チワン族自治区の桂林はカルスト地形を中心とする観光の名所となっている。

田畑ほか(1993)の研究によると、雲貴高原で海拔高度の高い地区から低い地区にかけて、ヤオ族、ミャオ族、トン族という順で住み分けられており、生活空間の一部は重複している(図 I-1-2)。また、ヤオ族の居住地域の気候はモンスーン気候であり、照葉樹林帯が幅広く分布している。

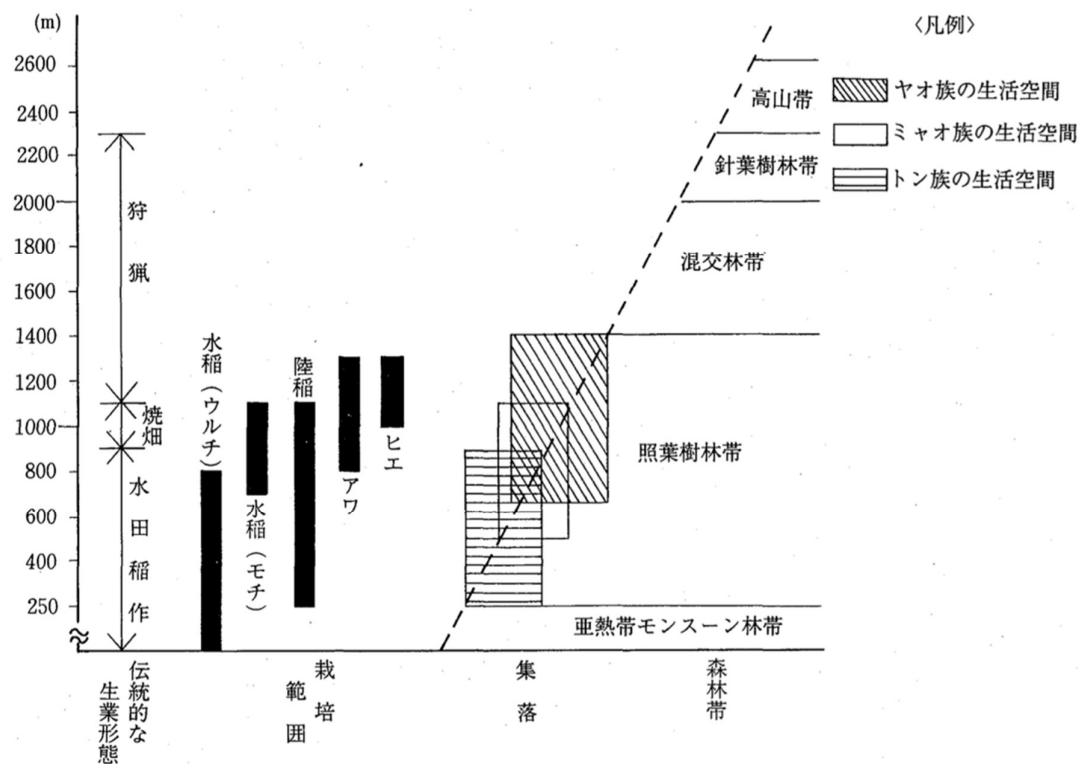


図 I-1-2 雲貴高原海拔高度による少数民族住み分けモデル

資料：田畑久夫・金丸良子（1993）「ヤオ族の生業形態の研究：フィールド

サーヴェイを中心として」『比較民族研究』7、102 頁の図 2 を引用

表 I-1-6 少数民族の生業と集落規模

民族名		集落海拔 (m)	地形	伝統的な生業形態	集落規模
トン族	河辺トン族	250	河川沿い	水田稲作 河川漁業	数百戸
	高山トン族	～800	壩子 山腹斜面	棚田・水田稲作 焼畑	
ミャオ族	平地ミャオ族	500	壩子	水田稲作	50～100 戸
	高坂ミャオ族	～1000	山頂付近 山腹斜面	棚田・水田稲作と畑作 焼畑	
ヤオ族		700～ 1400	山頂付近 山腹斜面	焼畑 狩猟	10～50 戸

資料：田畑久夫・金丸良子（1995）『中国少数民族誌：雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房、115 頁の表を引用

注：壩子は山間の小盆地を指し、広西チワン族自治区のヤオ族の居住地では「弄」と称する。

表 I-1-6 に示すように、ヤオ族は海拔約 700~1,000m の山頂付近や山腹斜面に居住しており、伝統的な生業形態としては焼畑農業を主体に狩猟にも従事しており、集落規模は 10~50 戸である。また、『瑤族通史』(2007) によれば、中国のヤオ族は「山地の民族」であり、ヤオ族は大部分が海拔 1,000m の山間部に居住しているが、一部のヤオ族の居住環境は非常に劣悪である。現地調査によると、本論文の研究対象であるヤオ族は、雲貴高原東南部の標高 500~1,200m の地区において山頂付近、山腹斜面、河岸、弄（山間の小盆地）などに居住しており、集落規模は 20~100 戸である。伝統的な生業は、棚田・水田稲作、河川漁業、焼畑農業などであり、主な農産物は米、トウモロコシ、果物などである。

中国の他地域の自然環境とは異なっていることも一因となって、ヤオ族の社会経済の発展は遅れている。人口の大部分は農業にたずさわっているが、林業などの副業にも従事し、自給自足を主としている。しかし現在、国の大きな支援を受けて、ヤオ族地区の経済と文化事業は著しい発展を遂げている。

第 4 節 布努ヤオ族の歴史と文化

1. 布努ヤオ族の族源と居住環境

布努ヤオ族の族源は、第 3 節の中で述べたように、ヤオ族と団体であり、中国の黄河・長江中下流域から発展し、祖先は古代の九黎部落と言われている。韋 (2010) によると、唐代の初期に布努ヤオ族の人々はすでに河池市に移転したが、明代に都安県内にヤオ族が現れ、自称「努努」または「布努」であり、他の民族から布努ヤオ族とよばれている⁵¹。

布努ヤオ族の居住環境については、『瑤族通史』(2007) によれば、布努ヤオ族は「山地の民族」であり、大部分が海拔 1,000m 以上の山森に居住している。一部分の布努ヤオ族の居住環境は劣悪であり、大部分の布努ヤオ族はカルスト地形に住んでいる。

図 I-1-3 によれば、布努ヤオ族居住分布地は大体紅水河流域の中段で、樂業から天峨、南丹、東蘭、巴馬、大化、都安、馬山、忻城を経て、来賓に至るまで伸びている。この流域には、四つの山脈が分布し、中部が都陽山脈であり、西部は東北に走る岑王老山脈を境界とし、北部は鳳凰山脈を境界とし、東北部は九万大山脈を境界としている。この地域には、海拔 500~1,000m までの石灰岩から成る峰が 1,000 余あり、都安ヤオ族自治県と大化ヤオ族自治県域内に海拔 800m 以上の峰が 87 ある。その中で、最高峰の弄耳山は海拔 1,112 m である。こうしたカルスト地形で暮らしている住民の 90% は少数民族で、固有の文化を持っている。

また、紅水河地域は、北回帰線が通り、夏が長く冬は短いので、霜が降らない。一年間の日照時間は、1,400~1,800 時間であり、年平均気温は摂氏 18℃ である。降水量は 1,551mm で、全国平均 629mm の 2 倍である。

⁵¹ 韋標亮 (2010) : 『布努瑤族社会歴史』 広西民族出版社。

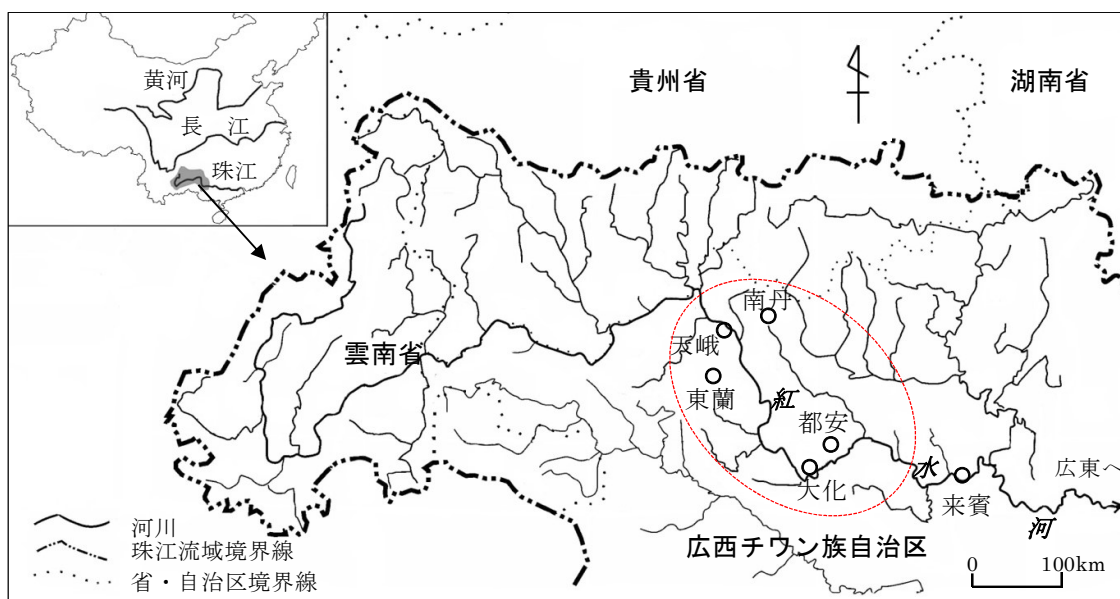


図 I-1-3 布努やオ族居住地域

資料：『南盤江-紅水河（中段）的河流地貌特征与地殼変形』の地図をもとに筆者作成

注：赤色の円は布努やオ族が多く居住する地域である。



写真 I-1-1 急峻な山間地の耕地

(2013 年 3 月 24 日 筆者撮影)

紅水河流域における主な農業産地は、上中流域の山間地と下流域の平原・丘陵の2つである。その両方の産地において焼畑農業が行われているだけでなく、水稻が植えられている。また、上中流域の山間地は、さらに3種類の地形からなっている。

第一は、低い山間地（低丘陵区）である。この地区の海拔は300～800mであり、主に山の縁の平地と紅水河の支流沿岸の谷や盆地からなっている。水や土壌の条件がよく、日照時間も長いので耕地に適しており、水稻を植えることができるのである。

第二は、中山間地（高丘陵区）である。この地区は、急峻な斜面で、日照時間も短いので農地は少なく、主にトウモロコシが植えられている。

第三は、カルスト地形である。これらの地区は、峰々が林立して、窪地が大きく、河川もないため、多くが乾燥しており、人や家畜の飲水の入手も困難で、農業は困難である。

布努ヤオ族居住地は第一、第二の地区にあたるが、この地区には四季を通じて多くの雨が降るため、頻繁に洪水が起こり、かならずしも住みやすい環境とはいえない。さらに、周辺にカルスト地形が広がり、耕作に適する土地が少ないため、この地域は農業の発展が遅れているのである。写真Ⅰ-1-1のように急峻な山地の地形は、農業の発展が遅れているというより農業に不向きである。しかし、全体として布努ヤオ族居住地は、伝統的に自給自足の生業が長い間続いていた地域なのである。

2. 布努ヤオ族の社会経済

布努ヤオ族を社会経済史的にみれば、生産力の低い自然環境、民族の圧迫や偏見により、1949年に中華人民共和国が成立するまで、布努ヤオ族の地域経済は中国沿海地域より遅れていた。

しかし、中国の改革・開放の二十余年以来、中国の各民族、特に少数民族は伝統文化と現代社会文明を融合させ、経済発展に取り組んでいる。

布努ヤオ族居住地域は、気候が温暖湿潤であり、以下に示す地域資源を有している

- ① 森林資源：布努ヤオ族居住地域は、豊かな森林資源を持っている。例えば、大化ヤオ族自治県の森林は61万haであり、そのうち32万ha（5割）が天然林、残りが人工林、竹林、経済果園林などである（写真Ⅰ-1-2）。県土面積に占める森林面積は64%で、約200種以上の珍しい植物を擁している。
- ② 水資源：広西チワン族自治区水利局の紅水河総合開発・利用計画には、紅水河流域（上流および下流の一部が含まれる）の総延長は1,200km、流域面積は19万km²である。年間降雨量は1,200～1,800mmで、長江中・上流、黄河上流に次ぐ3番目の豊富な水資源である。
- ③ 鉱物資源：布努ヤオ族居住地域は、鉱物資源、特に非鉄金属とマンガン鉱の埋蔵量が豊富であり、錫は全国第1位、アンチモンは第2位、銀は第3位、ボーキサイト第4位、タングステン第6位、亜鉛とチタン第7位、鉛と水銀第8位を占めている。特にマンガン鉱の埋蔵量は1億3,500万tで、全国第1位である。
- ④ 観光資源：布努ヤオ族居住地域のカルスト地形は2012年11月29日に広西大化ヤオ族自治県七百弄国家地質公園に指定されている（写真Ⅰ-1-3）。特色あるカルス

トの景観は、探険を目的とする観光客を引きつけた。また、紅水河は急峻な山間部を流れ、流域には多くの民族が暮らし、言語、服飾、建築物、生活習慣、風俗、祭り、民間芸術、特産物、調理法などには、民族の個性が表われている。



写真 I-1-2 紅水河沿岸域の竹林と果樹園

(2013 年 6 月 25 日 筆者撮影)



写真 I-1-3 広西大化七百弄国家地質公園

(2013 年 3 月 23 日 筆者撮影)

3. 布努ヤオ族の伝統文化

(1) 布努ヤオ族の服飾文化

布努ヤオ族の伝統服飾は、きらびやかで美しい。しかし、歴史資料によれば、清朝末期の布努ヤオ族は原始社会の末期段階のようであった。食べ物はトウモロコシ、サツマイモと山菜で、服装は、トウモロコシと山地の産物などを他の民族と交換し手に入れていた。そうして手に入れた服装も大部分は古着であった。さらに、『都安県志稿』の記述では、中華民国時代（1916年）の布努ヤオ族人たちは、布を裁つことができなくて、服を縫うこともできない。いわゆる中華民国時代の布努ヤオ族の服飾は簡素と老朽を特徴としている。そして、布努ヤオ族の色彩豊かな伝統服飾は、中華民国中後期から現れている。

広西チワン族自治区河池市各県の布努ヤオ族の服飾の様式は大抵同様で、その一方で地域と環境を異なるによって服飾も差異がある。つぎに、大化ヤオ族自治県の布努ヤオ族を中心として検討する。

大化ヤオ族自治県の布努ヤオ族の伝統服飾は、次のような特色がある。布努ヤオ族の服装デザインは多様で、開襟（左側あるいは中間を分けて布ボタンでとめる）、対襟（前ボタン式で襟が前で合わさる）、交襟（前で襟を重ね合わせる）、大襟（重ね合わせた襟を右側に並んだ布ボタンでとめる）など四つの種類がある。現地調査によれば、布努ヤオ族男性の服装は女性の服装より簡素なのが特徴である。男性の服装の様式は、上着が唐装のように、開襟で、裾が割れて、襟がなく、布ボタンでとめている。この開襟の分かれた場所には、「万」字の型が現れるようになっている（写真Ⅰ-1-4）。

布ボタンとボタン孔の長さは約 3.3cm である。服装の下はズボンで、垂直ですそが大きく、色は黒である。この服装は、布努ヤオ族人たちによって「母扣衣」あるいは「裳家母」と名付けられている。しかし、こういう女性の名前を付ける服装は、女性の着物ではなく、男性の着物である。こういう命名は布努ヤオ族伝説上の世界を創造した女神「密洛陀」と微妙な関係があると言われている。

布努ヤオ族女性の服装は男性の服装より色彩豊かで、精巧で美しい。色は黒色、ブルー、白色である（写真Ⅰ-1-6）。白色は下着物に限定される。様式は、交襟で、裾が割れ、襟がなく、ボタンを布で結ぶ。老齢女性の服装のボタンは、大部分が銅ボタンである。ズボンは大体男性のズボンと同じである。しかし、女性服装の上着とズボンは、裾を特別な図案で刺繍している。

布努ヤオ族は、頭にターバンを巻く習慣がある。男性のターバンの巻き方の様式には、圏で巻く方法（頭を巻く）、額結び目式、背後交疊式、額交疊式、長帯纏頭式（長いターバンで頭を巻き付ける）など五つの巻き方がある。現地調査によれば、前の4種類は日常生活時の使い方という。一方「長帯纏頭式」は、荘重で美しく、親戚を訪問する時に使用している。こういう巻き方では、長いターバンの色は通常、黒色と青色である。頭に巻きつける時には、必ず他人から手伝ってもらい、時間が一時間以上かかると、布努ヤオ族の人から言われている。



写真 I-1-4 布努ヤオ族男性の服装の前方
(2013 年 6 月 25 日 筆者撮影)



写真 I-1-5 布努ヤオ族男性の服装の後方
(2013 年 6 月 25 日 筆者撮影)



写真 I-1-6 布努ヤオ族女性の服装

(2013 年 6 月 25 日 筆者撮影)

女性のターバンの巻き方は、主に後右結び目式、背後結び目式、額結び目式、銀包頭式（頭を銀製の飾りを付ける）、長帯纏頭式など五つの巻き方がある。少数民族は銀を飾っていることがよく見られる。銀の装身具で有名なのは、中国雲南省のミャオ族である。しかし、布努ヤオ族は、銀の装身具にも特徴的な美の一面が見られ、それは民族の重要な符号としての役割をもつ。布努ヤオ族の銀の装身具には頭飾り、耳飾り、首飾り、胸飾り、指輪やブレスレットからペンダントなどまで、およそ飾らないところはないほどである。布努ヤオ族の銀の装身具は作りが精巧で、色鮮やかな服装によく合い美しい。

「項圈」と呼ばれる首飾りは、結婚式の時に花嫁が身に付ける大事なアクセサリで、大小 5 つの輪からなり、その重さは 1.5 キロにもなる。造形は四隅に突起があるもの、月形のもの（渦巻状）、楕円形のものなどさまざまで、表面には各種の花柄が彫刻されている。現地調査によれば、写真 I-1-7 のように、布努ヤオ族の婦人は月形の「項圈」を付ける。布努ヤオ族は、月神を信奉して、女性の胸前には三日月の形の銀アクセサリを掛けている。彼らは月を世間万物の母親として、世界を創造した女神「洛河陀」神の化身と考えている。

布努ヤオ族の胸の前の「項圈」と呼ばれる首飾りには、特別な意味がある。女の子、未婚の女子と既婚の女性の「項圈」数はそれぞれに異なる。子供は一般的に、三つの銀「項圈」を掛ける。家族は両親と自分の三人であるということを意味する。未婚の青年女子は四つの銀「項圈」を掛けて、円満な婚姻に憧れていることを表わしている。結婚した女性は、五つの銀「項圈」を掛ける。結婚して「子孫満堂」となることを示している。



写真 I-1-7 「項圈」を掛ける布努ヤ才族婦人

(2013 年 6 月 25 日 筆者撮影)



写真 I-1-8 布努ヤ才族の腰の煙管と真珠のアクセサリー

(2013 年 6 月 25 日 筆者撮影)

布努ヤオ族銀の装身具は美の象徴であり、また豊かさと高貴な身分をも象徴している。髪に挿す銀の櫛は長さが普通 16cm ほどで、表面には花と動物などの図案が彫刻されている。また、この櫛にはさまざまな形の飾りが吊り下げられていて、動くたびに触れ合って涼やかな音を奏でる。

布努ヤオ族の衣装には色とりどりの絹糸で刺繍が施されている。女性の頭の飾りは最も重視されていて、中には、刺繍された十数 m の長い布を頭の上でぐるぐる巻く場合もある。男女の上着の図案は多彩で、花鳥、幾何模様などのモチーフがある。彼らの祖先特有の図案やマークを衣服に刺繍し、神の加護と幸運を願う。現地調査によれば、布努ヤオ族の服装の刺繍には、幾何模様のモチーフがよく見られる。

また、布努ヤオ族の銀煙管も非常に特色がある。布努ヤオ族女性の煙管は、腰の右側の所に掛けて、煙管内にタバコの葉が入っている。さらに、真珠アクセサリーの装身具も布努ヤオ族として重要な首飾りである。布努ヤオ族女子の胸の前、腰の間、耳などは、全て 7 色真珠と混って掛けられており、純白の銀のアクセサリーと互いに補完して、美しい(写真 I-1-8)。

『都安ヤオ族自治県誌』によれば、布努ヤオ族の靴は、新中国の成立後に、生活水準の改善によって、男性は大体布靴をはき、女性は龍頭靴のような布靴などを履いて、靴下はあまりはかなかった。20 世紀の 60 年代から、青年はゴム靴、プラスチック靴、革靴などをはくようになり、裸足の現象は少なくなった。市場から購入した靴下をはく現象が次第に多くなった。現地調査によれば、布努ヤオ族人たちは、男性も女性も布靴を履く現象は少なくなった。ゴム靴、プラスチック靴、革靴などを履いている姿がよく見られる。

(2) 布努ヤオ族の建築様式

広西チワン族自治区は、高温湿潤で、布努ヤオ族の建物はチワン族の建物と同様に、主に「干欄式」建築スタイルである。前述したように、「干欄」の意味は、「干」は上、「欄」は家、合わせて上の家というである。チワン族の建物と同じように、布努ヤオ族の建物は 2 階建てで、上に人が住み下に家畜を飼い、その様式も様々である(写真 I-1-9)。

『都安ヤオ族自治県誌』によれば、昔の布努ヤオ族の家は洞窟であった。風雨を避け、寒さをしのぎ暖をとり、火種を絶やさないようにして野獣の侵入を防ぎ、自らの繁栄と発展を確保するのに必要な場所であった。しかし、洞窟住居は多湿な地面と虫・蛇の被害には対応できなかった。

現地調査によれば、布努ヤオ族の「干欄式」建物は、上層、下層と屋根裏の三つの部分を構成し、上層には人が居住し、下層では家畜を飼い、雑物を堆積して、屋根裏は主に食料を蓄えておくために使われた。建物の周辺は、茨の垣根で囲んでいた。垣根と建物の間の空き地は、庭として活用し、一般的に、野菜、パパイヤ、柚子、芭蕉、柑橘、竹などの植物を植えている。



写真 I-1-9 布努ヤオ族の干欄式家屋

(2013 年 3 月 26 日 筆者撮影)

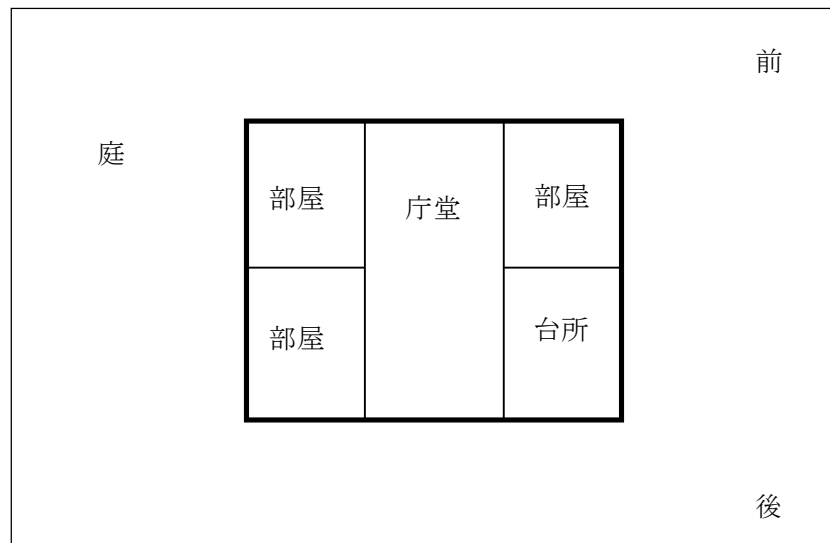


図 I-1-3 布努ヤオ族の家屋の間取り

(現地調査の資料により筆者作成)

少数民族の家屋の間取りは、一般的には、その中央に「庁堂」が設けられ、祖先を祀ったり、活動・休息する場所とされる。堂の後ろまたは右側に老人の住まう部屋を設けた上で、その左右・前後の部屋が嫁・むすこ・むすめに与えられて、庁堂を取り囲み・付き添う形を成す。これは伝統的な考え方を表わし、一家の主を中心とし、祖先を奉るということを意味している。また、同時に、これらの家屋の間取りには、婦女を男性と同等の地位には置かないという、女性蔑視の要素が含まれている。たとえば女性が住む位置は男子よりも高くてはいけないという風習などがそれである。

布努ヤオ族の建物は、大体四つの部分に割れている。建物の前半部分の両側は部屋として、後半部分の右側は台所として、左側は雑物農具などを収納する部屋となっている。中間の前半部分は庁堂として、後半部が部屋となる場合もある。男性の部屋は、一般的に建物の前半部分両側の部屋あるいは庁堂中である。女性の部屋は、一般的に後半部の部屋あるいは後半部両側の部屋である（図 I-1-3）。

（3）布努ヤオ族の祭り文化

布努ヤオ族の祭りは比較的多い。民族の伝統的な祭りなどは現在もしっかりと受け継がれている。祭りを通じて、布努ヤオ族の特色をよく理解することができる。豊かで深みのある布努ヤオ族文化は、彼らの生活の重要な一部分である。布努ヤオ族は、独自の伝統的祭りを持つ。漢民族とチワン族と同じ祝日もある。布努ヤオ族独自の伝統的な祝日は、以下の通りである。

- ① 牛節：毎年旧暦の 4 月 8 日は、布努ヤオ族の牛の誕生日である。この日に、布努ヤオ族の人たちは、山に登って何種類もの木の葉を採り、お湯で煮出した汁で、紫あるいは赤いもちご飯を作り、牛にやる。農耕の牛は、この日は全て労役を免除され、朝から牛は緑の草地あるいは牧場に放たれ、のんびりと 1 日を過ごす。老人たちは、むちで牛を打ってはいけないと子供を戒める。牛が自由自在に誕生日を過ごす。
- ② 禁地節：毎年旧暦の 7 月 13 日は、布努ヤオ族の禁地節である。ヤオ族語では、「忌撈」という。布努ヤオ族の人たちは、その日は畑に関する活動を全て禁じて、ただ家で休むのである。男性は、家で雑談し、酒を飲み、竹で農具を織る。女性は布を織る。しかし、畑を耕してはいけない。耕さなければならない場合は、畑に入る時に三つの泥をつかんで撒いて、破戒することを示さなければならない。
- ③ 達努節：達努節は世界を創造した女神「密洛陀」を記念して作られた祝日で、毎年旧暦の 5 月 25 日から 5 月 29 日に、豚や羊をつぶし、歌や踊りを楽しむ。

これらの中でも重要なのは、達努節である。達努節の祝日には、布努ヤオ族村は豚、羊、鶏を殺し、卵を染め、酒を飲み、歌台を建て、肉、酒を持ち寄る。人びとは立派な服を着、銅鼓をたたき、地元の歌を歌い、チャルメラを吹奏し、競馬や矢の競技を催す。特に若い女の子は頭に刺繍図案のついた黒頭巾をかぶり、耳を精緻な銀ネックレスで飾り、手にブレスレットを付け、胸にネックレスをかける。

達努節で最も重要な活動は銅鼓や太鼓を打ち、踊ることである。太鼓は、メス太鼓とオ

ス太鼓の 2 種類に分けられている。出演は 5 人で、2 人は銅鼓を打ち、1 人は銅鑼をたたいて、2 人は竹帽をかぶって踊る。銅鼓の伝統的な演奏技法は 12 セットあり、異なる角度、異なる方法を使い、自然界の狩り、耕作を表現し、最優秀ダンス者は「鼓王」の名誉を獲得する。

「弓矢競技」は、若者が恋人を選ぶ方法でもある。弓矢は木と竹で製造し、布努弓は楓木で作り、弓縄が麻糸シュロ糸であり、矢は古い楠竹で作っている。ターゲットは 50m の所に立つ。見物人の中の女の子の注意力は最も高く、どの若者の矢が良かったか見定める。人気のある品物は鳥の目と鶏の目の刺繍図案頭巾である。

布努ヤオ族と漢民族やチワン族の間で同じ祝日は、以下の通りである。

- ① 春節：春節は、毎年旧暦の 1 月 1 日である。中国で最も重要で最大の年中行事といえる。布努ヤオ族の春節は、1 年の中で達努節について第 2 の大きな祝日で、ヤオ族語では「能新」と呼ぶ。しかし、布努ヤオ族の春節は、独自性を持っている。
- ② 清明節：清明節は毎年、4 月 5 日前後である。中国における清明節は祖先の墓に参り、草むしりをして墓を掃除する日であり、「掃墓節」とも呼ばれる。布努ヤオ族の清明節は、ヤオ族語で「能新明」あるいは「過新明」と呼ぶ。歴史資料によれば、布努ヤオ族の清明節は存在しなくて、中華民国時代から始まったという。漢民族と同様に、この日は、人々が墓に参って先祖を祭り、野山に出かけて春の遊びをする民間の祭日である。
- ③ 鬼節：チワン族の祭りで、毎年旧暦 7 月 14 日で、俗称「七月十四」である。布努ヤオ族は「能責西」という。チワン族の人々は 2、3 日間農作業を休み、祖先を祭祀している。しかし、布努ヤオ族では、この祭りの期間は 1 日だけである。

第5節 まとめ

本章では、中国少数民族の人口推移とその分布地域を検討するとともに、本論文の研究対象であるチワン族とヤオ族に関する先行研究を主として、年中行事や建築文化などの面から取り上げた。

まず、世界で最も多い約13億の人口を有する中国は56の民族を持つ多民族国家であるが、漢族以外の55の民族は人口が相対的に少ないため、習慣上、「少数民族」と呼ばれ、主に中国の西北部、西南部、東北部などに分布していることを把握した。

その上で、本論文の研究対象の一つである少数民族チワン族に関する先行研究を、年中行事や歴史文化の問題を中心に分析した。

さらに、本論文の研究対象のもう一つの少数民族ヤオ族に関する先行研究を、名称の由来と起源問題、居住環境と分布地さらには歴史文化の問題を中心に把握した。

最後に、ヤオ族の分支の一つであり、本研究の対象でもある布努ヤオ族の居住環境、社会経済、伝統文化を明らかにし、歴史文化を把握した。

広西チワン族自治区には、さまざまな少数民族が居住しており、豊かな民族文化観光資源が存在する。しかし、近年では、数多くの人々が貧困に困窮しているため、政府が少数民族の生活を改善することを目的として、その地区の唯一の特色のある民族文化を観光資源として開発しており、エスニック・ツーリズムが発展している。

第2章 西部大開発におけるエスニック・ツーリズムの進展

第1節 西部大開発の構想

中国では、西部地区は地理的な範囲として捉えられているだけではなく、また政治、経済、民族などの要因によっても区分されている。1986年に、中国国務院は「国民経済と社会発展の第7次5カ年計画」を出したが、その中では中国各地域の位置と環境、経済・政治・文化の発展状況に基づいて中国を三つの地区に分けている。すなわち、表I-2-1を示しているように、東部地区、中部地区、西部地区である。

表 I-2-1 中国の地域区分

区分	西部地区	中部地区	東部地区
省 自治区 直轄市	重慶市、四川省、貴州省、 雲南省、陝西省、甘肅省、 青海省、チベット自治区、 寧夏回族自治区、 新疆ウイグル自治区	山西省、吉林省、遼寧省、 安徽省、江西省、河南省、 湖北省、湖南省、黒龍江省、 内モンゴル自治区、 広西チワン族自治区	北京市、天津市、 上海市、河北省、 山東省、江蘇省、 浙江省、福建省、 広東省、海南省

資料：1986年「国民経済と社会発展の第7次五カ年計画提案」により筆者作成



図 I-2-1 中国の地域区分

(筆者作成)



図 I -2-2 西部大開発の範囲

(筆者作成)

表 I -2-2 中国の地区別人口と GDP (2001 年)

地区	面積 (%)	人口数 (万人)	GDP (億元)	一人当たり GDP (元)	都市化率 (%)
西部地区	71.4	36,447	18,735	5,140	28.8
中部地区	17.6	42,414	28,483	6,715	33.5
東部地区	11.0	47,922	63,052	13,157	46.1
全 国	100	126,783	110,270	8,698	36.2

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」により筆者作成

図 I -2-1 に示したように、中国の西部地区は、行政的には重慶市、四川省、貴州省、雲南省、チベット自治区、陝西省、甘肅省、青海省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区などの 10 の省・自治区・直轄市を指す。しかし、2001 年 1 月 1 日の「国務院關於實施西部大開發若干政策措施的通通知」により、もともと中部地区に属する広西チワン族自治区、内モンゴル自治区、湖南省の湘南自治州、湖北省の恩施自治州、吉林省の延边自治州が経済的未発達であるという理由で、西部大開発の対象となった。

中国の西部大開発地区は、重慶市、四川省、貴州省、雲南省、チベット自治区、陝西省、

甘肅省、青海省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区、広西チワン族自治区などの 12 ヶ所の省・自治区・直轄市を含み、また湖南省の湘南自治州、湖北省の恩施自治州、吉林省の延边自治州を加え、面積は 685 万 km²、国土の 71.4%を占める(図 I-2-2)。2001 年 12 月末の中国人口統計によると、西部の人口は 3.6 億人で、全国の 28.7%を占め、そのうちの少数民族はおよそ全国の少数民族の 80%以上を占める(表 I-2-2)。また、その地区はロシア、モンゴル、カザフスタン、パキスタン、ネパール、インド、ミャンマー、ラオス、ベトナムなどの国々と境界を接しており、約 1.8 万 km の境界線を持ち、その戦略的位置は重要である。さらに、西部地区には豊富な自然資源と文化資源があり、市場経済における潜在力は大きいため、経済的戦略上の位置も重要であるが、他方で地理的、歴史的、社会的な原因によって、経済成長が遅れている。表 I-2-2 をみると、2001 年の一人当たりの GDP は、全国平均水準の 3 分の 2、沿海部経済発達地区の平均水準の 5 分の 2 であった。また、東部地区や全国平均の都市化率と比較すると、西部地区の都市化率は低い状態にあり、28.8%となっている。

中国政府の西部地区に対する経済開発政策は中国成立後にすぐに動きはじめた。「中華人民共和国西部地区中等都市発展戦略設定調査」⁵²(2005)によると、1949 年から 2000 年代までの西部地区に対する経済開発には三つの段階がある。

第 1 の段階は、1949 年から 1963 年にかけての西部地区を工業地域として強化しようとする発展期である。この時期は、中国が「第一次 5 年経済発展計画(1953~1957 年)」を実施した期間にあたり、主に沿海部と内陸部の生産力の格差問題を是正し、西部地区の陝西省、四川省、甘肅省などの重工業地域の発展を重視して、西北部の重工業地域を発展させることにより、東部地区との経済格差を縮小させることを目指した。そして、西部地区の各都市では、以前の工業化が低い状態から大規模な工業開発が進むにつれて総合的な工業区都市が築かれた。

第 2 の段階は、1964 年から 1972 年にかけてのいわゆる経済未発達であった都市を建設しようとする時期である。この時期は、国家防衛の理由から西部地区がさらに重点開発の対象とされており、沿海地域に既に存在していた重工業が内陸地区に移転された。特に四川省の攀枝花、甘肅省酒泉、重慶市を中心とする製鉄基地が建設された。またこの時期には、成昆(四川省成都-雲南省昆明)鉄道などの鉄道建設が急速に進展した。

1970 年代になると、全国が 10 の経済協力区に区分されて、「経済協力区戦略」が西部地区でも実施され、西部各地区が冶金、国防、機械、燃料動力、化学などの工業の部品地区になった。西南経済協力区には鉄鋼の年間生産量 600 万 t 以上を達成することが要求され、西部地区の重工業はさらに発展した。

第 3 の段階は、1973 年から 1999 年にかけての西部地区と沿海部との協調発展を中心とする時期である。この時期には、1971 年 10 月に中国が国連に加盟して、1972 年は中米が国交を回復したことにより、戦争の状態から抜け出し、内陸地区の建設を加速することが緩和されて、経済開発の中心が東部沿海地域に移転した。そして、1970 年代後期からは

⁵²国家発展改革委員会(2005):「中華人民共和国西部地区中等都市発展戦略設定調査」第 1 編西部地区中等都市発展戦略、5-6 頁。

改革開放政策の実施に伴って沿海都市の産業、インフラ整備が急速に進展した。しかし、1990年代になると、東部地区と西部地区との間の経済格差が拡大したため、中国政府は「第7次5カ年経済計画（1986～1990年）」の中で、東西両地区における経済成長の格差を認め、「東部沿海と中西部その経済格差を縮小する」という目標を提起した。

以上のような背景の下に、西部地区の開発と発展を促進し、地域経済発展のバランスをとるために、鄧小平時代に「二つの大局」にもとづく戦略を構想した。一つは、1980年代において、2億人が居住している沿海地域が経済対外開放を契機として先に発展し、これによって中国本土経済発展の牽引となるだけではなく、西部地区の経済をも発展させようとするものである。それに対して、もう一つの大局は、発展の数年後に、高度に経済発展を遂げた沿海部地域が、あるレベルに達した時には西部に多くの資金を投資し、「共同富裕」を実現しようとするものである。こうして、改革開放路線への転換以降、外資投入や国際貿易の振興により経済発展が沿海東部地域を中心に成し遂げられ、それに伴って市場経済の進展と現代化は沿海部から次第に全国へ拡大している。一方で、沿岸部と内陸部あるいは東部と中西部との間の経済格差が急激に拡大していくことにより、大きな社会問題が引き起こされた。また西部地区では、少数民族地区での経済的格差により、漢民族と少数民族との対立という問題が深刻になっていった。

そして、このような地域間の経済格差を縮小するために1996年から始まった「第9次5カ年経済計画（1996～2000年）」の中では、西部の経済振興が重要な課題として注目された。1997年9月に開催された中国共産党第15次全国代表大会では、江澤民が「地域経済発展を協調的に促進する」とした上で、「中西部地域では、経済改革開放と開発を加速させ、自然資源の優位性を発揮し、地域産業を発展させる。国家は、中西部地域の発展に対して強力に支援するとともに、インフラの整備と自然資源の開発を最優先にする。また、国内外の投資を促進するために、投資奨励制度を実行する。さらに、東部と中西部地域とか連合して協同発展することを促進する。積極的に少数民族地区の経済発展を支援し、徐々に経済格差を縮小させる」ことを報告した。また、1998年5月に、江澤民は「現在から次世紀の半ばまでの50年の間に、中国は基本的に現代化を実現していくが、現在は西部地区開発のタイミングである」ことを強調した。さらに、1999年6月に西安で行なわれた北西5省の国有企業改革と発展に関する座談会で、西部大開発戦略を西部地区経済発展の大きな戦略の一つとして明確に提起すると同時に、西部大開発の実施に関わる問題も論じた。1999年6月17日に、江は黄河流域の生態環境を視察するために、黄河の中流域から下流域の河口まで現地調査を実施したが、それに基づいて西北地区における水土流失の問題は極めて深刻であることを認識し、西部地区開発では生態環境の改善も解決させなければならないと述べた。また、「数十年後あるいは次世紀末までの間に努力して、1つの美しい北西を建設する」ことを提案した。さらに、西部大開発戦略を実施するために、1999年8月5日から10月30日まで、中国国家国務院元総理朱鎔基は、専門の学者や研究者を招き、西部大開発に関連する部門の役人たちを率いて、西部の陝西、雲南、四川、甘粛、青海、寧夏などの6省・自治区で現地調査を行い、西部の生態環境、民族社会状況を考察すると共に、開発戦略の実施にとって貴重なデータを提供した。1999年9月の中国共産党第15期中央委員会第四次中全体会議で採択された「中国共産党中央委員会国有企業改

革若干重大な問題の決定」によって、西部大開発プロジェクトの実施が策定された。その後、2000 年 1 月中旬に、国家計画発展委員会が設計した西部大開発戦略の実施に関する「初歩構想」の法案は、数回にわたって修正及び補充され正式に完成された。また、2000 年 10 月に北京で開催された中国共産党第 15 期中央委員会第 5 回全体会議では、「国民経済と社会発展の第 10 次 5 カ年計画法案」により、「新世紀初頭の 5～10 年の間に我が国の経済と社会発展、経済構造の戦略的調整、社会主義市場経済体制の拡大および対外開放の重要な時期」であるとして、それと同時に西部大開発が地域間経済的格差を協調する重要な政策とする実施の青写真を示した。具体的には以下に示す通りである。

第 1 に、西部大開発の戦略を実施し、中西部地域の発展を加速させることは、経済の成長、民族の団結、社会の安定などに関わるのみならず、地区協調の発展と「共同富裕」の実現にも関わり、中国の現代化建設における第三段階の戦略目標を実現するために重大な措置である。西部大開発が重要な政策とするその実施は困難であり、5～10 年の間に、西部地域のインフラ整備と生態環境の保護に大きな改善をもたらさなければならない。

第 2 に、西部地域のインフラを整備するために、交通、水利、電気通信、電力ネットワーク、都市インフラなどの重大な工事を積極的に促進し、「西気東輸（西部のガスを東部に輸送）」や「西電東送（西部の電力を東部に送出）」など、エネルギー資源を再配置する計画を実施する。生態回復と環境保護を強化しながら、段階的に「退耕還林（条件の悪い農地等に植林を実施する）」を行うことにより西部地域の生産条件と生態環境を改善する。

第 3 に、積極的に産業構造を調整し、農業を強化するとともに、特色ある産業を発展させる。豊富な資源を合理的に開発・加工し、観光産業の育成も加速させる。科学技術の教育を推進し、人材の育成、ハイテクなどの先進的技術を遂行する。アジア・ヨーロッパ国際運輸ネットワーク、長江水道運輸ネットワーク、西南海路運輸ネットワークなどの交通ネットワークを再整備し、都市の発展を促進する。国家財政の支援を強化するとともに、少数民族地区に投資を増やし、対内外経済開放改革により経済の拡大を加速させる。

第 4 に、中部地区は東部経済の恩恵を受けながら、経済成長を加速させるとともに、工業化と都市化を高める。水陸交通幹線を中心とする新しい経済成長点の形成を育成する。農業の産業化経営を発展させて、地域化、専門化、大規模化した農産物商品の生産・加工基地を建設する。ハイテク技術と先進的な技術を適度に導入して伝統的産業を改造することにより、特色ある産業として競争力を高める。

第 5 に、東部沿海地域は全国経済の牽引力を発揮し続けており、地理的優位性がある地区は基本的に早く現代化を実現する。産業構造の改善を加速させ、ハイテク産業の育成や対外型経済の発展により、国際競争力を向上させる。また、積極的に国内市場を開拓し、さまざまな経済技術により地域間の提携を図り、相互の優勢な点を利用するとともに、中西部地の発展を支援する。

2001 年 1 月 1 日に、「国務院關於実施西部大開発若干政策措施的通知」が頒布され、その中では西部大開発の範囲を規定しているが、それはすなわち北西部の陝西省、甘肅省、青海省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区、西南部の四川省、重慶市、雲南省、貴州

省、チベット自治区で、広西チワン族自治区と内モンゴル自治区も含まれている。

2001年3月5日の第9回全国人民代表大会第4次会议において、中国国务院は「国民经济和社会发展の第10次5カ年計画綱要の報告」について審議したが、報告では西部大開発戦略は国民经济和社会发展および中国現代化を実現する重要な政策としてその実施が明確に示されている。

以上述べてきたように、西部大開発は1980年代から構想されていたが、1990年代に中国国内における経済格差の問題によって明確に提起され、2000年代に入ってから実施されたことが分かった。次に、西部大開発の具体的規定について把握しておく。

第2節 西部大開発の実施と経済効果

先に述べたように、2001年1月1日に「国务院關於实施西部大开发若干政策措施的通知」が頒布されたことにより西部大開発が本格的に実施されるようになったが、その通知の中では西部大開発の範囲を規定した上で、具体的な実施政策も制定された。

第1は、政策原則と支持重点の制定である。西部大開発は21世紀最大の区域経済協調プロジェクトとして、その実施は困難なものであるが、経済改革開放の決意の下に、科学教育立国と持続可能な発展戦略を貫徹し、市場経済体制の役割を発揮させようとするものである。また、重要な任務と戦略目標を明確にする。具体的には、インフラ整備の加速化、生態環境保護の強化、農業の基礎的地位の強化、工業構造の調整、特色ある観光産業の発展、科学技術教育と文化衛生事業の発展を中心とする西部大開発を展開する。さらに、西部大開発政策の適用範囲を区分し、重慶市、四川省、貴州省、雲南省、チベット自治区、陝西省、甘肅省、寧夏回族自治区、青海省、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区、広西チワン族自治区を含む。西部大開発の実施は、アジア・ヨーロッパ国際運輸ネットワーク、長江水道運輸ネットワーク、西南部海路運輸ネットワークなどの交通幹線に依存し、中心都市の役割を発揮させることで推進させるものである。

第2は、資金投入の増加である。中央財政からの建設資金の西部地区への投入比率をさらに高める。国有銀行ローン、国際金融機関と外国政府優遇貸付などの財政優遇を可能なかぎり西部地区に手配し、西部地区の重大な建設プロジェクトに対する企業資金の投入を奨励する。また、水利、交通、エネルギーなどのインフラの整備、豊富な資源開発と利用、特色あるハイテク技術などのプロジェクトを優先的に西部地区に配置する。さらに、国家財政支援の力点を東部から西部に転移させる。具体的には、農業、社会保障、教育、科学技術、衛生、文化、環境保護などの特定項目の資金を西部地区に傾斜配分する。特に、中央財政からの貧困扶助資金を、重点的に西部の貧困地区に注入して支援する。

第3は、投資環境の改善である。まず、投資のソフト環境を改善し、西部地区国有企業の改革を行い、現代企業制度を築くことを加速化し、国有企業資産を再編する。また、税金優遇政策を実行する。西部地区に資金を投入する国内外企業に対して国家からの支援を行い、一定の期限内に限って法人税の徴収を猶与する。さらに、土地と鉱物資源に関する優遇政策も実行する。

第4は、国内外開放政策の拡大である。まず、外界企業の投資領域をさらに拡大し、西部地区の農業、水利、生態、交通、エネルギー、市政、環境保護、鉱物、観光産業などのインフラ整備と資源開発などの投資により促進する。また、外資の投入を積極的に惹き付け、最大限度に利用して西部の経済を発展させる。さらに、対外経済貿易を発展させる。西部地区を旅行する海外旅行者のリピーターに対して入国ビザの緩和を実行する。

第5は、人材育成と科学技術教育の普及である。まず、東部の人材を西部地区に引きつけるよう奨励する。中央関連部門と沿海経済先進地域を連携させることにより、少数民族の幹部を育成し、公務員、専門技術者、企業管理人員を訓練する。また、科学技術の主導的役割を発揮させる。科学技術の成果の転化と普及、応用を加速させ、外国の先進的な技術を積極的に導入する。さらに、教育を優先的に発展させる。積極的な措置をとって国内外からの人材を投入し、異なったタイプの各種の人材を全力を尽くして育成する。

その後、中国国務院は、「關於進一步做好退耕還林還草試點工作的若干意見」、「關於進一步完善退耕還林政策措施的若干意見」、「西部地区人材開発十年計画」「国務院關於實施西部大開發若干政策措施的意見」などの政策を相次いで発表し、そのことによって西部大開発は西部各地に展開して、国内外からの投資が増加するとともに、大きな経済効果をもたらした。

国家から西部に対する基本建設投資をみると、第1次5カ年経済計画（1953～1957年）から西部大開発政策の実施までの間にも、投資資金は増加の傾向にあったが、それから第9次5カ年経済計画（1996～2000年）までの間に投資資金は7,133億元に達した（表I-2-3）。その一方、第9次5カ年経済計画の間の投資資金の比率は最も低く、12.7%に過ぎない。第1次5カ年経済計画（1953～1957年）から第4次5カ年経済計画（1966～1970年）までの投資資金の比率は成長し続けて、第4次5カ年経済計画の時期にピークの34.9%に達した。その原因は、前述したように、国家防衛の理由からで1964年から1972年にかけて政府が西部地区をさらなる重点開発の対象とし、沿海地域の既存の重工業を内陸地区に移転させ、国家からの投資を増加したからである。また、第4次5カ年経済計画（1966～1970年）における投資ピークから第9次5カ年経済計画（1996～2000年）までの間は投資資金の比率は次第に減少したが、それはまさに1978年からの経済改革開放によって経済開発の中心が東部沿海地域に移り、国家投資の中心も東部地区に傾斜したからである。

しかし、西部大開発政策の実施が始まってから西部地区はさらに経済開発の中心となっており、国家の投資は大幅に増加し、投資比率も上昇した（表I-2-4）。中国国家統計局「中国統計年鑑」のデータによって西部大開発後の西部地区の社会固定資産投資の推移を見ると、第10次5カ年経済計画（2001～2005年）の5兆7703億元であったものが、第12次5カ年経済計画（2011～2015年）期間には53兆9981億元という規模になった。そして、このような大規模の投資の下で、西部地区の発展は著しく進展している。

表 I-2-3 中国 5 カ年計画における基本建設投資の推移

(単位：億元)

5 カ年計画	年	全国	西部	比率 (%)
第 1 次 5 カ年	1953～1957	588	106	18.0
第 2 次 5 カ年	1958～1962	1,206	266	22.0
調整時期	1963～1965	422	108	25.6
第 3 次 5 カ年	1966～1970	976	341	34.9
第 4 次 5 カ年	1971～1975	1,764	432	24.5
第 5 次 5 カ年	1976～1980	2,342	466	19.9
第 6 次 5 カ年	1981～1985	3,410	588	17.2
第 7 次 5 カ年	1986～1990	7,349	1,090	14.8
第 8 次 5 カ年	1991～1995	2 兆 3584	3,426	14.5
第 9 次 5 カ年	1996～2000	5 兆 6287	7,133	12.7

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」により筆者作成

表 I-2-4 中国 5 カ年計画における西部地区の社会固定資産投資の推移

(単位：億元)

5 カ年計画	年	全国	西部	比率 (%)
第 10 次 5 カ年	2001～2005	29 兆 5362	5 兆 7703	19.5
第 11 次 5 カ年	2006～2010	92 兆 2889	19 兆 7758	21.4
第 12 次 5 カ年	2011～2015	220 兆 6494	53 兆 9981	24.5

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」により筆者作成

注：社会固定資産投資は、基本建設投資、更新改造投資、不動産開発投資と他の固定資産投資を含む。

表 I-2-5 は、中国第 10 次 5 カ年経済計画（2001～2005 年）の実施における西部地区の発展状況である。経済面をみると、西部地区の GDP は 2000 年の 1 兆 6655 億元から 2005 年までに 3 兆 3493 億元に達し、約 2 倍に成長した。一人当たりの GDP も 2000 年の 4,624 元から 2005 年までに 9,180 元に増え、約 2 倍に成長した。国際貿易収入は 2.6 倍の成長で、2005 年までに 451 億ドルという規模になった。平均収入をみると、都市部の人の平均年収は、2000 年の 5,490 元から 2005 年までに約 1.6 倍の成長をみせて 8,783 元に達した。農村部の人の平均年収は、2000 年から 2005 年までに 1.4 倍で伸び、2,379 元に達した。また、インフラの整備をみると、鉄道、自動車道路、高速道路の総延長は、西部大開発から 15 年の間に、著しく発展した。2000 年から 2005 年までの間に鉄道は 22,109km から 27,594km に増え、自動車道路は 780,339km に増加し、高速道路は 10,530km に達した。空港の数は、2000 年の 58 カ所から 2005 年までには 66 カ所に増加した。固定電話世帯数は、2000 年の 2,623 万世帯から 2005 年までに 7,030 万世帯に急増した。携帯電話の契約数は、2000 年の 1,382 万人から急激に増加して 8,012 万人が契約し、約 5.8 倍の成

長となった。さらに、教育と医療の発展状況をみると、中学校（日本の中学・高校に相当）在生徒数は、2000年の1,834万人から2005年までの間に2,354万人に増え、医療機関のベッド数は5年の間に5.7万個にまで増加し、累計5.7%の成長を見せた。

さらに、2007年3月に、中国国家発展改革委員会と国務院西部地区開発チームは、「中華人民共和国国民経済と社会発展の第11次5カ年計画要綱」に基づいて、西部大開発の推進、地域経済発展のバランスをさらに促進するために、「西部大開発第11次5カ年計画（2006～2010年）」を発表し、西部地区の発展をさらに推進した。その経済効果は以下の通りである。

表 I-2-5 第10次5カ年経済計画（2001～2005年）における西部地区の発展状況

項 目	2000 年		2005 年		年平均増加率 (%)	
	西部	全国	西部	全国	西部	全国
人口（億人）	3.6	12.7	3.6	13.1	[-0.6]	[3.1]
GDP(億元)	16,655	97,209	33,493	197,789	11.3	11.9
一人当たり GD（元）	4,624	7,766	9,180	15,386	14.7	14.7
国際貿易収入（億ドル）	172	4,743	451	14,219	21.3	24.6
都市部の平均年収（元）	5,490	6,280	8,783	10,493	9.9	10.8
農村部の平均年収（元）	1,690	2,250	2,379	3,255	7.1	7.7
鉄道（km）	22,109	58,656	27,594	75,438	[24.8]	[28.6]
自動車道路（km）	553,874	1,402,698	780,339	1,930,543	[40.9]	[37.6]
高速道路（km）	3,677	16,314	10,530	41,005	23.4	20.2
空港（カ所）	58	121	66	142	[13.8]	[17.4]
固定電話世帯数（万）	2,623	14,483	7,030	35,045	21.8	19.3
携帯電話契約数（万）	1,382	8,453	8,012	39,341	42.1	36.0
中学校学生在学数（万人）	1,834	7,369	2,354	8,581	5.1	3.1
医療機関ベッド数（万）	83	318	89	335	[5.7]	[5.5]

資料：国家発展改革委員会と国務院西部地区開発チームの「西部大開発第11次5カ年計画」（2007年）、7

頁の表により筆者作成

注：[] 内の数値は2001年から2005年の累計である。

表 I-2-6 第 11 次 5 カ年計画の実施における西部地区の発展状況

項 目	2005 年		2010 年		年平均増加率 (%)	
	西部	全国	西部	全国	西部	全国
人口 (億人)	3.6	13.1	3.6	13.4	0.1	0.5
GDP (億元)	33,493	197,789	81,409	401,202	13.6	11.2
一人当たり GDP (元)	9,180	15,386	22,570	29,920	29.0	18.9
国際貿易収入 (億ドル)	451	14,219	1,284	29,740	23.3	15.9
都市部の平均年収 (元)	8,783	10,493	15,806	19,109	12.5	12.7
農村部の平均年収 (元)	2,379	3,255	4,418	5,919	13.2	12.7
鉄道 (万 km)	2.7	7.5	3.5	9.1	5.3	3.9
自動車道路 (万 km)	120.3	334.5	156.8	400.8	5.4	3.7
高速道路 (万 km)	1.1	4.1	2.1	7.4	15.1	12.6
「两基」被覆率 (%)	91.5	95.0	100	100	[8.5]	[5]
森林被覆率 (%)	14.4	18.2	17.1	20.4	[2.6]	[2.2]
二酸化硫黄排出量 (万 t)	897	2,549	817	2,185	[-9]	[-14]
医療機関従業員 (万人)	133	543	207	820	9.2	8.6

資料：国家発展改革委員会の「西部大開発第 12 次 5 カ年計画」（2012 年）、3 頁の表により筆者作成

注：1) [] 内の数値は 2006 年から 2010 年の累計である。

2) 两基は、「9 年の基本義務教育」と「基本的に文盲をなくす」の略称である。

西部地区には、第 12 次 5 カ年計画（2011～2015 年）における西部大開発の実施によって多大な経済効果がもたらされ、同時に環境保護も積極的に推進された。表 I-2-6 をみると、2010 年の GDP は 8 兆 1409 億元で、2005 年の 3 兆 3493 億元よりも約 2.4 倍に成長し、年平均増加率は 13.6%である。国際貿易収入は大幅に増え、2010 年までに 1,284 億ドルに達した。これは、2001 に中国が世界貿易機関（WTO）に加盟したことによる経済波及効果の結果であると思われる。また、都市部と農村部の平均年収はさらに増加し、2010 年までに都市部が 15,806 元、農村部では 4,418 元に達した。基本的なインフラ建設はさらに整備され、教育に対する発展資金の増加により「两基」被覆率は 100%を実現した。また、西部地区は生態環境が乏しい地区であるため、環境保護は重要な政策一環として重視され、政府は森林被覆率の向上と工業廃気の削減に努めた。そして、2010 年と 2005 年の森林被覆率を比較すると、森林被覆率は 2.6%の比率で向上した。工業廃気である二酸化硫黄排出量は 2005 年より 8.9 万 t に減少した。さらに、医療機関の従業員は、5 年間で 74 万人が増加した。

また、2013 年 10 月に中国国務院が公開した「国務院關於深入实施西部大開發战略狀況的報告」によると、2000 年から 2012 年にかけての中央政府から西部地域の省級政府への財政移転支払は合計 8 兆 5000 億元で、中央からの投資は合計 1 兆元を超え、全国投資総額の 40%を占める。この間に、西部地区は青蔵鉄道、西気東輸、西電東送などの 187 項

目の重大な事業を完成させ、総投資額は約 3 兆 7000 億元であった。民用航空局は、民用航空の発展に 301 億元の資金を投入し、全予算の 44%を占める。水利部は合計 2,835 億元を水利投資に配分し、全体の 35%を占める。農業部は、合計 2,060 億元の資金で西部の農業を発展させた。国土資源部は、西部地区の地質の実地調査研究に対して全国の 60%に当たる合計 1,400 億元の経費を投入し、2,245 ヲ所の鉱床を発見した。住宅建設部は 2,000 億元余の補助資金を都市住宅保障プロジェクトに投入し、西部地区に約 1,150 万セットの住宅を建設した。衛生委員会は、合計 2,703 億元の資金に西部地区を配分し、全国の 46%を占める。民政部は、合計 1,872 億元の資金補助を西部地区の都市住民最低生活保障に投入し、全国の 44%を占める。中央貧困扶助資金は、合計 1,414 億元を西部地区に投入し、全国の 65%を占める。また、中国人民銀行、銀行業監督管理委員会、証券監督管理委員会、保険監督管理委員会などの部門が西部地区を優遇した金融政策を実施し、貸付政策と監督管理の面で積極的に支援し、西部地区の金融サービスに対して力を入れた。2012 年 12 月末に、西部地区の外貨貸与残高は 12 兆 5000 億元に達した。発展改革委員会と財政部によると、国際金融機関からは合計 218 億ドルの貸付が西部地区に対して行われ、全国の 58%を占める。

表 I-2-7 西部大開発における 15 年間の西部地区の発展状況

項 目	2000 年		2005 年		2010 年		2015 年	
	西部	全国	西部	全国	西部	全国	西部	全国
GDP (億元)	16,655	97,209	33,493	197,789	81,409	401,202	145,421	676,708
人口 (億人)	3.6	12.7	3.6	13.1	3.6	13.4	3.7	13.8
一人当たり GDP (元)	4,624	7,766	9,180	15,386	22,551	29,918	38,984	49,215
都市部平均 年収 (元)	5,490	6,280	8,783	10,493	15,806	19,109	26,473	31,790
農村部平均 年収 (元)	1,690	2,250	2,379	3,255	4,418	5,919	9,093	10,772
鉄道 (万 km)	2.2	5.9	2.8	7.5	3.5	9.1	4.8	12.1
自動車道路 (万 km)	55.4	140.3	78.0	193.1	156.8	400.8	172.1	457.7
高速道路 (万 km)	0.4	1.6	1.1	4.1	2.1	7.4	4.4	12.4
空港 (カ所)	58	121	66	142	85	175	106	201

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑 2000～2016 年」により筆者作成

また、表 I-2-7 は西部大開発政策が実施された 15 年間における西部の発展状況であるが、西部地区の GDP は 2000 年の 1 兆 6655 億元から 2015 年までに 8.7 倍で成長し、14 兆 5421 億元に達した。また、一人当たり GDP は 2000 年の 4,624 元から 2015 年までに 8.4 倍で成長し、38,984 元に増えた。収入をみると、都市部の人の平均年収は、2000 年から 2015 年までに 4.8 倍で成長して 26,473 元に達した。農村部の人の平均年収は、都市部の人の平均年収と比べると低い、その一方で 2000 年からは 5.4 倍の伸びを見せ、2015 年までに 9,093 元に達した。

さらに、インフラの整備は空前の規模で行われ、鉄道、自動車道路、高速道路などの基本の施設は西部大開発から 15 年の間に著しく発展した。鉄道は 2000 年の 2.2 万 km から 2015 年までに 4.8 万 km に増え、自動車道路は 172.1 万 km に延伸し、高速道路は 4.4 万 km に達した。特に、西部地区の空港の数は、2000 年の 58 ヲ所から 2015 年までには 106 ヲ所に増加し、全国の空港の半数以上を占めるようになった。

2017 年 1 月に中国国務院は、中国の全体が「小康社会」に入るためには、西部地区が「小康社会」を実現することが重要な構成要件であるとして、西部地区がさらに重視された。それと同時に、西部大開発戦略の再実施、西部地区の産業再構造、地域発展の再協調を推進するために、「中国共産党中央委員会国務院西部大開発戦略的若干意見実施」と「中華人民共和国国民経済和社会発展第 13 次 5 カ年計画」に基づいて、「西部大開発第 13 次 5 カ年計画（2016～2020 年）」が編制された。その発展の目標は以下の通りである。

第一は、経済が持続可能な発展をすることである。地域の優位性を十分に発揮し、経済の構造を最適化することによって、経済の増加率は全国の平均水準よりも高くなる。2020 年までの地区の GDP および都市部・農村部の平均収入は 2010 年と比較する倍増し、経済発展の総量は全国のレベルとの格差を縮小させて、都市化率 54%以上を実現する。

第二は、社会の創造力を高め、技術開発力を全面的に上昇させることで、社会発展の新しい駆動力になることを強化することである。国民教養と社会文明を高め、自主開発力を全面的に上昇する。科学技術の進歩により経済成長に貢献し、知的財産権制度を革新する。

第三は、社会産業の再構造化を実現することである。経済実体の成長を重視し、産業レベルを上げる。第一次産業について生産能力を増強させて、農業の現代化を積極的に推進する。第二次産業については競争力を増強させた上で、工業化と情報化とを深く結びつけ、先端製造業と新興産業の発展を加速化する。第三次産業の発展を強化し、サービス業の占有率をさらに上昇させる。

第四は、インフラを再向上させることである。現代化された都市交通ネットワークと都市・農村部交通ネットワークを建設する。民間航空、水道運輸、通信などの施設の建設を促進する。水利施設に対する投資を増加させ、生活用水の問題を緩和する。

第五は、生態環境をさらに改善することである。生態系の維持と持続可能な発展の理念とを人々に普及させる。生態系保護計画を策定し、生態補償制度を設定した上で、重要な生態地区を総合的に管理することで、水土流失の面積を大幅に減少させる。生物の多様性を回復して長江上流などに重点地区生態保護区を建設する。自然資源と水力資源を実効的に支配することで、工業廃気の排出量を下げ、汚染物排出量を大幅に減少させて、生態環境を着実に改善する。

第六は、公共の施設・サービス能力を増強することである。教育、文化、社会保障、公共安全、医療衛生、住宅などの公共サービス体系を一層健全化し、基本的な公共サービスにおける全国との格差を縮小する。労働人口の教育年齢は 10.5 年を超えるものとし、人の平均寿命を 1 歳以上に延ばす。貧困層人口の貧困からの脱出を実現し、貧困県をなくし、貧困の問題を解決する。

また、中国政府が第 13 次 5 カ年計画（2016～2020 年）において西部大開発目標を設定したのは、西部地区と東部地区の経済格差を縮小するためであり、表 I-2-8 に示すように、経済発展、資源環境、社会発展、開発能力などの面における西部発展の目標を設定した。

表 I-2-8 第 13 次 5 カ年計画における西部大開発の目標

項 目		2015 年	2020 年
経済発展	一人当たり GDP（元）	38,984	54,000
	GDP（億元）	14 兆 5421	20 兆
	サービス業占有増加率（%）	42.5	>45
	都市化率（%）	48.7	54.0
資源環境	農地保有量（万ムー）	75,642	67,900
	草原植物被覆率（%）	50.6	53.6
	森林被覆率（%）	18.5	19.1
	湿地保有量（万ムー）	44,850	44,850
社会発展	平均年収（元）	16,868	26,000
	平均寿命（歳）	74.5	75.5
	労働人口教育平均年齢（年）	9.7	10.5
	貧困率（%）	10	<3
開発能力	研究資金投入率（%）	1.2	>2
	万人当たり知的財産占有量（件）	2.7	>5.5
	科学技術への貢献率（%）	47.7	55

資料：国家発展改革委員会の「第 13 次 5 カ年計画西部大開発」（2017 年）、7～8 頁の表により筆者作成

注：1 ムーは 6.667 アールである。

そして、表 I-2-9 に示すように、西部の GDP と東部の GDP の差異をみると、その差は拡大しているが、一方で年間 GDP は毎年成長している。全国の GDP は、2000 年の 9 兆 9776 億元から 2015 年までに 67 兆 6708 億元に達した。そうしたなかで、西部地区の年間 GDP の全国 GDP に対する比率をみると、2000 年の 16.7% から 2015 年には 21.5% までに成長し、比率は約 5.2% 上がったことがわかる。これに対して東部地区の GDP は、2000 年の 5 兆 5171 億元から 2015 年までに 37 兆 1778 億元に達し、約 6.7 倍の成長となっている。さらに、東部地区の年間 GDP の全国 GDP に対する比率は、2000 年の 55.3% から 2015 年までに 54.9% に減少している。このように、西部地区の経済発展は著しいものとなっていることがわかる。

このように、西部大開発の実施は、大きな経済効果をもたらし、西部地区は経済成長に恵まれてインフラ整備を進め、収入も成長したため、観光業の発展も見られるようになっている。そこで次に、西部大開発における観光業の発展を特にエスニック・ツーリズムの進展という現象について検討する。

表 I-2-9 西部地区の GDP の推移

年	全国 GDP (億元)	西部地区		東部地区		東部地区と の GDP 差額 (億元)
		GDP (億元)	全国比率 (%)	GDP (億元)	全国比率 (%)	
2000	99,776	16,655	16.7	55,171	55.3	38,516
2001	110,270	18,735	17.0	63,052	57.2	44,317
2002	121,002	20,718	17.1	70,555	58.3	49,836
2003	136,565	23,696	17.4	82,274	60.3	58,578
2004	160,714	28,603	17.8	98,696	61.4	70,092
2005	185,896	33,493	18.0	117,039	63.0	83,546
2006	217,657	40,346	18.5	137,457	63.2	97,111
2007	268,019	49,182	18.4	163,940	61.2	114,757
2008	316,752	60,448	19.1	192,582	60.8	132,134
2009	345,629	66,973	19.4	210,233	60.8	143,259
2010	401,202	81,408	20.3	248,423	61.9	167,015
2011	484,124	95,291	19.7	269,259	55.6	173,968
2012	534,123	114,093	21.4	295,665	55.4	181,573
2013	588,019	126,214	21.5	322,259	54.8	196,045
2014	635,910	138,074	21.7	349,053	54.9	210,979
2015	676,708	145,421	21.5	371,778	54.9	226,356

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑 2000～2016 年」により筆者作成

第3節 西部大開発におけるエスニック・ツーリズムの進展

広大で多様な土地に恵まれた中国の西部地区は、全国で最も自然観光資源と人文観光資源が豊富な地区である。高山、河川、高原、盆地などの多種多様な自然景観の中で、さまざまな民族が独自の文化を育てている。同時に、こうした多民族が居住していることがさまざまな人文観光資源を生み出してきた。しかし、西部大開発の実施前には、これらの西部地区の観光資源はほとんど利用されてなかった。南⁵³（2007）は、中国西部地区は世界級の観光資源を有しており、「観光資源の大区」あるいは「観光資源の富区」と称しても言いすぎではないと述べている。その一方、西部地区の観光資源の利用については、彼は「観光開発の小区」あるいは「観光経済の弱区」と呼んでいる。そして、西部地区と東部地区の経済格差を縮小するためには、豊かな観光資源を活用することが有効な手段であることを指摘している。

ここではまず、西部地区の観光資源の特徴を検討してみたい。南（2007）は中国西部の観光資源をそれらの特徴によって3つの観光地域に分けている。すなわち、①西北部砂漠の黄河シルクロード観光地域、②西南部のエスニック・ツーリズムとエコツーリズム地域、③青藏高原のエコツーリズムと文化観光地域である。各観光地区の特徴は以下の通りである。

第一の西北部砂漠黄河シルクロード観光地域は、陝西省、甘肅省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区の五つの行政区を含み、幅広い土地の上に残された周、秦、漢、唐などの時代の歴史文化は魅力がある。また、広大なゴビ砂漠の遊牧文化、モンゴル高原の農業文化やモンゴル族文化、および寧夏の回教徒文化などの観光資源がこの地域の特色である。特に回族、モンゴル族、チベット族、ウイグル族など18の少数民族が居住して多元的な民族文化を形成し、重要な観光資源となっている。またこの地域は、中華民族文化の重要な発祥地とされ、中華民族の祖先が古代から黄河・涇渭流域に暮らし、今日まで、黄河文化、長城文化、西夏文化、シルクロード文化、建築文化、洞窟文化の遺物が残され、数多くの観光客を魅了している。さらに、2007年までに西北部は国家級自然保護区22カ所、国家級森林公園30カ所を有しており、珍しい動植物観光資源も持っている。近年では、西北部の辺境観光も盛んになっている。

第二の西南部エスニック・ツーリズムとエコツーリズム地域は、重慶市、四川省、貴州省、雲南省、広西チワン族自治区を含み、雲貴高原と四川盆地が主要な地域となっている。複雑な地理環境と多様な気候でさまざまな自然観光資源が生まれた。例えば、東部のカルスト地形、西部の三江並流、中部の盆地谷間、北部の雪山氷河、南部の熱帯雨林などが含まれ、自然観光資源が豊かな地域である。特に、桂林の山水カルスト地形、北海銀灘の南アジア熱帯海辺風景、シーサンパンナ（西双版纳）の熱帯雨林風景、三峡の長江風景、四川の九寨溝、貴州の黄果树瀑布などの自然景観が代表であり、それらは世界的にも有名である。その中でも、九寨溝は世界自然遺産リストに登録されている。さらに、多民族が集中する西南部は、特色のある民族風情文化を育成し、特に壮（チワン）族、苗（ミャオ）

⁵³南宇（2007）：『中国西部旅遊資源』清華大学出版社、4頁。

族、侗（トン）族、傣（タイ）族などの少数民族風情が代表的なもので、西南部特有の少数民族文化景観を形成している。また、西南部には文化財と史跡が多く、歴史文化観光資源となっているが、その中でも重要な遺跡は三星堆古代遺跡、三国蜀漢遺跡、紅軍長征遺跡、大寧河古代懸棺、豊都鬼城、大足石刻、程陽風雨橋、太平天国金田蜂起城跡、昆明金殿などである。さらに、西南部は動植物資源の天然宝庫と言われ、全国でも植物の種類が最も多い地区である。雲南省、四川省、広西チワン族自治区の植物種の数順位は全国で第3位に位置する。中国全土には約3万種の植物があるが、雲南省にはその内の約1.7万種が存在し、全国の63%を占め、「植物王国」と称されている。それと同時に、西南部は野生動物資源の最も豊かな地区であり、「動物王国」とも称されている。

第三の青藏高原のエコツーリズムと文化観光地域は、チベット自治区と青海省の二つの行政区を含み、雪山、河川、宗教文化、少数民族文化などの観光資源が豊富である。特に、この地区では仏教文化が有名である。また、蔵（チベット）族、門巴（メンパ）族、珞巴（ロッパ）族、納西（ナシ）族、回族、モンゴル族、怒（ヌー）族などの少数民族が暮らしており、それらの民族の服飾、祭り、風俗習慣は貴重な観光資源となっている。さらに、西部大開発政策の恩恵を受けた湖南省の湘南自治州、湖北省の恩施自治州、吉林省の延辺自治州では、土家族、苗族と朝鮮族などの少数民族文化が独特な観光資源となっている。

このように西部地区は豊富な観光資源を有しており、西部大開発の実施によって中国西部の経済が発展すると、その経済成長に伴って観光業の発展も空前のものとなった。

前述したように、1978年から経済改革・開放路線以降、中国は経済的な成長を遂げてきたが、同時に對外開放にも踏み切った。西部地区は、地理的な原因によって對外開放が2000年代までほとんどなされなかった。しかし、2000年以降、西部大開発の実施に伴い西部地区の對外開放は拡大し、国際観光の発展も促された。また、2001年11月10日に、カタールの首都ドーハで開催されていた世界貿易機関（WTO）の第4回代表会議で、正式に中国のWTO加盟が承認され、中国は同機関の143番目のメンバーになった。その後中国社会にもたらされた影響については数多くの研究者が指摘しているが、特に第三次産業の牽引車と位置づけられている国際観光業においては、いちだんと對外開放が進められることとなった。

また、第11次5カ年計画（2006～2010年）における西部大開発では、對外開放について規定されているが、西部地区は周辺14カ国と国境を接しているため、この有利な条件を充分に利用すべきことが指摘されている。また、西部地区の人的資源、広大な土地資源、豊富な鉱物資源の優位性を発揮し、対内・對外開放を統一して計画するとともに、対内・對外開放を積極的に推進することによって西部地区の発展に貢献すべきとなされている。さらに、西部大開発実施を契機に、中国の「互利共贏（互恵両得）」の経済開放戦略を推進し、西部地区の国内外の市場競争力を増強する。特に、對外開放後に積極的に国内外の各種資金を導入し、金融業、観光業、商業貿易などの現代のサービス業に投入すべきであると述べられている⁵⁴。

⁵⁴国家發展改革委員会（2007）：「西部大開發第十一次五年計画」、38-39頁。

表 I-2-10 西部各地区の外国人観光客数の推移

(単位：万人)

地 区	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年	2015 年
全 国	880.6	1,468.0	3,009.9	5,411.1	5,249.0
西部地区	212.9	311.8	541.2	941.9	1,398.8
内モンゴル自治区	29.5	38.7	99.6	140.0	153.4
広西チワン族自治区	30.7	50.8	88.7	141.4	239.2
重慶市	—	19.3	41.8	104.0	99.0
四川省	24.5	20.0	68.3	75.0	193.4
貴州省	7.8	7.1	9.3	18.6	29.9
雲南省	47.4	66.6	99.7	231.2	420.0
チベット自治区	6.5	13.6	11.1	21.4	14.3
陝西省	39.7	58.5	74.6	155.2	194.2
甘肅省	7.1	14.3	17.2	5.0	3.2
青海省	0.9	1.5	1.5	3.4	4.5
寧夏回族自治区	0.3	0.6	0.7	1.3	1.8
新疆ウイグル自治区	18.6	20.8	29.0	45.4	45.9

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑 2016 年」により筆者作成

注：重慶市は 1997 年 6 月 18 日に直轄市に指定され、四川省の統計数値から分離。

さらに、第 12 次 5 カ年計画（2011～2015 年）における西部大開発では、中国とアセアン、上海協力機構（SCO）などの地域協力プラットフォームを充分に利用して、メコン川経済区や南アジア、中アジアなどの地域との経済連携を進め、全面的に对外开放を構築するとされている。そして、西北部の新疆ウイグル自治区では新疆喀什、霍爾果斯経済開発区を建設し、広西チワン族自治区の東興市、雲南省の瑞麗、内モンゴル自治区の滿洲里などを開発開放試験区とすることを決定した。また、広西チワン族自治区の龍州と靖西、雲南省の勐臘、河口、チベット自治区の吉隆、新疆ウイグル自治区の阿拉山口、塔城、内モンゴル自治区の策克、甘其毛都は重要な辺境開放都市とされた⁵⁵。西部地はこのような対内・对外开放政策の恩恵を受け、外国人観光客数と国際観光収入は大幅に増加した。

表 I-2-10 は、1995 年から 2015 年にかけての期間の 5 年ごとの西部各地区の外国人観光客数を示しており、表 I-2-11 は同じく国際観光収入の統計データである。西部地区全体の統計でみると、1995 年の外国人観光客数は 213 万人であるが、2000 年までの 5 年間に渡って、99 万人が増加して 312 万人に達した。西部大開発政策の実施後に、西部地区の外国人観光客数は急増し、2005 年には 541 万人、2010 年には 942 万人、2015 年には

⁵⁵国家発展改革委員会（2012）：「西部大開発第十二次五年計画」、60-61 頁。

1,399 に万人なった。国際観光収入は、1995 年には 7.8 億ドルであったが、2000 年までの 5 年間に渡って、16 億ドルに達した。西部大開発政策の実施後に、西部地区の国際観光収入はますます増加し、2015 年までに 144 億ドルに成長した。その中で、2015 年の外国人観光客数と国際観光収入をみると、雲南省、広西チワン族自治区、陝西省の外国人観光客数は西部地区で第 3 位となっている。

表 I-2-11 西部各地区の国際観光収入の推移

(単位：万ドル)

地 区	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年	2015 年
全 国	824,990	1,432,600	2,554,070	5,197,490	6,501,990
西部地区	78,030	158,530	258,360	526,480	1,144,220
内モンゴル自治区	9,050	12,650	35,210	60,190	96,250
広西チワン族自治区	12,110	30,660	35,890	80,620	191,690
重慶市	—	13,840	26,440	70,320	146,860
四川省	12,530	12,190	31,600	35,410	118,090
貴州省	2,900	6,090	10,140	12,960	23,130
雲南省	16,500	33,900	52,800	132,370	287,550
チベット自治区	1,130	5,230	4,440	10,360	17,670
陝西省	13,940	28,030	44,630	101,600	200,020
甘肅省	2,080	5,460	5,880	1,480	1,420
青海省	240	720	1,100	2,050	3,880
寧夏回族自治区	110	270	230	600	2,080
新疆ウイグル自治区	7,440	9,490	10,010	18,540	55,590

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑 2016 年」により筆者作成

注：重慶市は 1997 年 6 月 18 日に直轄市に指定され、四川省の統計数値から分離。

表 I-2-12 西部各地区の国内観光客数の推移

(単位：万人)

地 区	2000 年	2005 年	2010 年	2015 年
内モンゴル自治区	735	2,062	4,478	8,352
広西チワン族自治区	3,951	6,493	14,074	33,661
重慶市	3,070	5,965	16,000	38,179
四川省	[6,335]	13,164	27,100	59,000

表 I-2-12 西部各地区の国内観光客数の推移（つづき）

地 区	2000 年	2005 年	2010 年	2015 年
貴州省	[1,910]	3,099	11,550	37,500
雲南省	3,841	6,861	13,800	32,300
チベット自治区	46	169	661	2,003
陝西省	[3,364]	5,988	14,354	38,300
甘肅省	733	1,208	4,284	15,633
青海省	318	633	1,222	2,309
寧夏回族自治区	243	500	1,019	1,836
新疆ウイグル自治区	758	5,541	3,038	5,929
合 計	25,303	51,682	111,579	275,002

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」と各省・市・自治区の「国民経済と社会発展統計公報」により筆者作成

注：[] 内の数値は 2001 年。

表 I-2-13 西部各地区の国内観光収入の推移

（単位：億元）

地 区	2000 年	2005 年	2010 年	2015 年
内モンゴル自治区	32	180	693	2,194
広西チワン族自治区	147	278	898	3,136
重慶市	137	279	868	2,094
四川省	[300]	696	1,862	6,138
貴州省	[44]	251	923	3,351
雲南省	183	386	917	3,104
チベット自治区	3	16	66	269
陝西省	[142]	316	916	2,904
甘肅省	19	58	236	975
青海省	11	25	71	246
寧夏回族自治区	9	18	68	160
新疆ウイグル自治区	63	484	281	1,022
合 計	1,079	2,986	7,800	25,592

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」と各省・直轄市・自治区の「国民経済と社会発展統計公報」により筆者作成

注：[] 内の数値は 2001 年。

表 I-2-12 は、2000 年から 2015 年にかけての期間の 5 年ごとの西部各地区の国内観光客数を示し、表 I-2-13 は観光収入の統計データである。西部大開発とともに国内観光客の数も増加し続け、2015 年は、西部地区国内観光客数が 27 億 5002 万人となり、2000 年の 2 億 5303 万人を大きく上回った。各省・直轄市・自治区ごとの国内観光客数をみると、3 億人以上の地区は 6 ヶ所である。特に、四川省の 5.9 億人という観光客数は各地区の中で最多である。国内観光収入は爆発的に増加し、2015 年の西部地区の国内観光収入は 2 兆 5593 億元となって、2000 年の 1,079 億元の約 23 倍にまで成長した。その中では、特に西南部のエスニック・ツーリズムとエコツーリズム地域の観光収入の成長が顕著である。

王（2001）によると、中国の西部地区は観光資源の豊富な地域で、世界的に有名な景勝地が数多くある一方、これまでこれらの観光資源が経済効果に結びつくことはあまりなかった⁵⁶。また、王は「西部の省・自治区・直轄市では観光業を経済発展の柱にしよう」と努力しているが、資金と人材の不足が問題となっていた。そのため政府は、国債発行による資金投入で西部観光業の発展に大きく弾みをつけたいと期待している」ことを指摘した。前述したように、中国政府は観光業を発展させるために、2000 年からの西部大開発の実施を契機に、西部地区のインフラ施設、教育方面に多くの資金を投入したため、インフラ施設も発展した。

また、2006 年 12 月 8 日に、「中国国家発展と改革委員会」や「国務院西部地区開発チーム」は、西部大開発の推進、地域経済発展の協調をさらに促進するために、「中華人民共和国国民経済と社会発展の第 11 次 5 カ年計画要綱」に基づいて、翌年の 3 月に「西部大開発第 11 次 5 カ年計画（2006～2010 年）」を出し、その中で、西部の観光業を発展させるために、特色のある地域の観光産業を育て、積極的に促進することを計画した。具体的には、以下の通りである。

西部の特色があり国内外でも有名な観光景勝地と観光ルートを育成・開発し、インフラ整備と観光情報の充実を加速させる。国内外の観光市場を拡大し、地域の観光資源を統合するとともに、地域観光区を開発する。革命聖地観光をさらに発展させ、文化観光産業の発展を強力に推進して、特色のある文化土産商品を積極的に開発する。また、レジャー観光、生態観光、探検観光、辺境観光、科学観光、農業・工業見学観光などの観光の発展を奨励する。さらに、文化と自然の保護を強化し、合理的に自然観光資源の文化遺産を利用し、国家的な重要な観光スポットの持続可能な発展を推進する。

さらに、観光業を発展させるために、中国政府は西部地区で重点的に観光開発を進める「十大地帯」を指定した。表 I-2-14 に示しているように、歴史的な文化観光と自然観光だけではなく、少数民族の特色のある伝統文化を中心とするエスニック・ツーリズムも含まれている。特に西北部の新疆ウイグル自治区と西南部の雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の少数民族文化観光が注目された。このように、中国政府は、西南部のエスニック・

⁵⁶王文亮（2001）：『中国観光業詳説』日本僑報社、91 頁。

ツーリズムとエコツーリズム地域の建設をさらに強化している。

表 I-2-14 西部地区重点観光開発の十大地域

No.	観光地域	観光資源
1	「シルクロード」観光地域 (陝西、新疆)	西安古城、秦始皇陵、宝鶏法門寺、天水麦積山、武威雷台公園、張掖臥佛寺、敦煌莫高窟、吐魯番古文化遺跡、喀什民族風情観光
2	香格里拉生態観光地域 (雲南)	茶馬古道、康定跑馬山、稻城亞丁、海螺溝冰川、麗江玉龍雪山、麗江古城、迪慶香格里拉峽谷、徳欽梅里雪山、西藏塩井、八宿然烏湖
3	長江三峽高峽平湖観光地域 (重慶、四川)	三峽庫区、大足石刻、巫山小三峽、豊都名山、奉節白帝城、雲陽張飛廟
4	青藏高原特色観光地域 (青海、チベット)	布達拉宮、林芝大峽谷、雅礱河谷、三江源、青海湖、塔爾寺
5	川黔渝観光地域 (四川、貴州、重慶)	三星堆、樂山大佛、峨眉山、自貢恐龍博物館、宜賓蜀南竹海、瀘州佛宝、重慶武隆天生三橋、黄果樹瀑布、九寨溝、黄龍寺、都江堰、梵淨山
6	珠三角-桂東-桂北黄金 観光地域 (広西)	桂林漓江、陽朔遇龍河・興坪生態田園風光、桂平太平天国金田蜂起遺跡、昭平黄姚古鎮歴史文化観光
7	滇桂民族風情熱帯風光辺境 観光地域 (雲南、広西)	大理蒼山洱海、西双版纳熱帯雨林、滄源阿佤山佤文化、建水・石屏歴史文化、樂業大石囲天坑群、防城港江山半島・東興金灘
8	西北砂漠草原観光地域 (内モンゴル)	錫林郭勒草原、鄂爾多斯成吉思汗陵、阿拉善賀蘭山宗教文化与原始次生林、西夏王陵、沙坡頭、喀納斯、天山天池
9	黔东南-湘鄂西民族風情と生態 観光地域 (貴州、湖南)	貴陽・凱裏・榕江・從江・黎平苗侗少数民族風情、湘西・恩施土家族・苗族民族風情、湘西鳳凰古城
10	重点紅色観光地域 (広西、貴州、雲南、甘肅、青海、寧夏、重慶、陝西、四川省、チベット)	左右江、黔北黔西、滇北、川西雪山草地、陝甘寧、川陝渝、延安、遵義、広安

資料：国家發展と改革委員会と國務院西部地区開発チーム「西部大開発第十一次五カ年計画」（2007年）、

22～23 頁の表により筆者作成

注：下線部はエスニック・ツーリズムに関するものである。

また、第 11 次 5 カ年計画（2006～2010 年）における西部大開発では、3 つの重点経済圏が指定された。すなわち、第 1 の経済圏は、成（成都市）渝（重慶市）経済区であり、成都市と重慶市を中心として、2 つの都市の経済発展を連携させ、重大な設備の製造、科学技術、水力発電、特色のある農産物の生産と加工、天然ガス工業、特色のある観光産業などの産業の建設を加速させる。第 2 の経済圏は、関中-天水経済区であり、西安市、咸陽市、宝鶏市、天水市などの主要都市を中心に、ハイテク、重工業、航空産業、現代化農業と特色のある観光産業を発展させ、周辺の中小都市や、ニュータウンなどの衛星都市も含まれる経済一体化模範区の建設を加速させる。第 3 の経済圏は、環北部湾（広西）経済圏であり、南寧市、北海市、欽州市、防城港市などの都市を中心に、隣接する広東省および海南省などの地区を連携して港型産業、大型製油業などの産業を発展させ、北部湾地域の経済協力体制を築く。

さらに、第 12 次 5 カ年計画（2011～2015 年）における西部大開発では、政府が観光業の発展をさらに支援し、積極的に工業化と都市化を推進して協調的に発展させるとともに、観光などのサービス産業の発展を強化する。特に、西部の豊富な観光資源を中心とする資源の統合を強化しながら、積極的に文化観光、レジャー観光、エスニック・ツーリズム、エコツーリズムなどの観光産業を発展させる。観光産業のサービス水準を高めさせ、西部独自の特色のある観光商品システムを作る。同時に、観光インフラを整備し、観光公共サービスの多元化を奨励し、公共サービスの建設と観光の市場運営化を促進する。また、重点的に地域旅行ルートを開発し、国内外で著名な観光名勝を建設する。さらに、地域の特色ある民族的な文化創出、映画・テレビ、芸術、博覧会などの少数民族に関する文化産業を発展させる。

2013 年に「国務院貧困扶助与開発チーム」が公表した「国家貧困扶助開発重要県名簿」によると、中国全土の貧困県数は 592 県であるが、そのうち西部地区が 420 県で、全国の 71.0%を占める（表 I-2-15）。貧困県の数が多いの雲南省で、73 県に達し、全国の貧困県の 12.3%を占める。陝西省と貴州省は同数の 50 県で 2 位に並び、貧困県の数が多い寧夏回族自治区では 8 県である。また、全国の貧困人口は 8,249 万人で、中国総人口の 6.1%を占め、そのうち西部地区の貧困人口は 4,209 万人、全国の貧困人口の 51.0%を占める。また、西南部のエスニック・ツーリズムとエコツーリズム開発地域（重慶市、四川省、貴州省、雲南省、広西チワン族自治区）では、貧困人口は 2,781 万人で、全国の貧困人口の 33.7%を占め、西部地区の貧困人口の半分以上となる 66.1%に達した。

このように、西部地区は、中国建国の当初から今日に至るまで貧困に悩んでおり、政府は西部地区の貧困を取り除くために、さまざまな政策を実施してきた。例えば、貧困県を設定し、特別な優遇経済政策を実施する中で、中央から専門の貧困補助金を支援する。具体的には、産業発展援助、転職援助、居住地移転援助、教育援助、環境保護参与援助などの貧困脱出援助政策である。2016 年になると、2020 年までに西部地区の貧困人口を根本的になくすという目標を実現するために、少数文化観光が貧困を脱出する有効な手段としてさらに重視され、「観光脱貧」という貧困脱出政策が生み出された。

表 I-2-15 西部地区の貧困人口と貧困県数（2013 年）

地 区	貧困人口		総人口		貧困県数	
	人口 (万人)	全国比率 (%)	人口 (万人)	貧困人口 比率 (%)	県数	全国比率 (%)
全 国	8,249	100	136,072	6.1	592	100
西部地区	4,209	51.0	36,637	11.5	[420]	71.0
内モンゴル自治区	114	1.4	2,498	4.6	30	5.1
広西チワン族自治区	634	7.7	4,719	13.4	28	4.7
重慶市	139	1.7	2,970	4.7	14	2.4
四川省	602	7.3	8,107	7.4	36	6.1
貴州省	745	9.0	3,502	21.3	50	8.5
雲南省	661	8.0	4,687	14.1	73	12.3
チベット自治区	72	0.9	312	23.1	27	4.6
陝西省	410	5.0	3,764	10.9	50	8.5
甘肅省	496	6.0	2,582	19.2	43	7.3
青海省	63	0.8	578	10.9	15	2.5
寧夏回族自治区	51	0.6	654	7.8	8	1.4
新疆ウイグル自治区	222	2.7	2,264	9.8	27	4.6

資料：国務院貧困扶助と開発チームの 2013 年「国家貧困扶助開発重要県名簿」と 2014 年「扶貧開発建档立卡工作方案」及び「中国統計年鑑 2013 年」により筆者作成

注：[] の数値は西部 12 の省・直轄市・自治区の貧困県数及び湖南省の湘西自治州 7 県、湖北省の恩施自治州 8 県、吉林省の延边自治州 4 県である。

そして、第 13 次 5 年計画（2016～2020 年）における西部大開発では、中国政府は、西部地区の人々を貧困から脱出させるために、「精準扶貧⁵⁷」と貧困地区とを結びつけ、現地の特色のある資源に基づいた確実な産業援助を行っている。また、異なる貧困村では、「一村一品」の産業援助政策を実施し、特色のある養殖産物と農産物を発展させている。さらに、積極的に農民協同チームを育成し、企業と貧困農家の連携によって、貧困農家の収入を確保する。特に、農村では、グリーン・ツーリズムを推進し、貧困農家とその経済波及効果に恵まれ、貧困から抜け出し、生活を改善することができるようにする。例えば、雲南省旅遊発展委員会（2016）「雲南省旅遊扶貧計画（2016～2020 年）」によると、2015 年に全省の観光業の急速成長に伴って「鄉村グリーン・ツーリズム」が発足した。全省のグリーン・ツーリズムの観光客は 7,850 万人で、2014 年と比較した増加率は 19.8%である。観光収入は 386 億元に達し、2014 年と比べると、27.7%の伸びである。グリーン・

⁵⁷ 貧困地区では、地域環境と貧困農家の状況の異なるによって、合理的・有効な方法で貧困扶助対象に対する正確に識別・補助・管理する貧困脱出の政策の 1 つである。一般的に、貧困の農民に対して誰か貧困誰に支えることである。

ツーリズムに従事する人は 28 万人、グリーン・ツーリズムに関連する産業に就職する人は 65 万人であった。そのうち、約 37 万人の貧困人口が貧困から脱け出した。このように、「観光脱貧」の実施によって、観光は貧困から脱出する有効な手段として、貧困地区での経済社会の発展に多くの効果をもたらしている。

第 4 節 まとめ

本章は、西部大開発の構想と実施及びその経済効果を取り上げ、その実施がエスニック・ツーリズムに与えた影響について分析した。具体的には、以下の通りである。

第一に、西部大開発の範囲および基本概況を把握した。西部大開発地区は、重慶市、四川省、貴州省、雲南省、チベット自治区、陝西省、甘肅省、青海省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区、広西チワン族自治区など、12 ヲ所の省・自治区・直轄市を含み、また湖南省の湘南自治州、湖北省の恩施自治州、吉林省の延辺自治州も加えて、面積は約 685 万 km²、中国全土の 71% を占めている。人口は 3.6 億人で、全国の 29% を占め、そのうちの少数民族は全国の少数民族の約 80% 以上を占めるが、経済は東部地区と比較すると遅れている。

第二に、西部大開発政策の構想と策定について把握した。鄧小平時代の「二つの大局」の戦略において西部大開発は初期の構想であり、1996 年の第 9 次 5 カ年計画の中では、西部の経済振興が重要な課題として注目された。1999 年の「中国共産党中央委員会国有企業改革若干重大な問題の決定」の中で、西部大開発プロジェクトの実施が策定された。その後、2001 年に中国国務院は「国民経済と社会発展の第 10 次 5 カ年計画綱要の報告」を審議したが、この報告では西部大開発戦略が国民経済と社会発展および中国現代化を実現する重要な政策として、その実施を明確に提示されている。

第三に、中国の第 10 次、11 次、12 次の 5 カ年経済計画の実施における西部大開発の経済効果について分析した。西部大開発の実施によって国家から西部地区への投資が大規模に増え、それに伴い経済の発展は著しいものとなっていることがわかった。

第四に、西部大開発におけるエスニック・ツーリズムの進展について取り上げ、西部地区の観光資源を把握するとともに、1995 年から 2015 年にかけての期間における 5 年ごとの西部各地区の観光動向を分析し、国家の観光政策の実施がエスニック・ツーリズムに与えた影響について検討した。そして、特に 2016 年から実施された「観光脱貧」という貧困脱出政策が、農村地区に多大な影響を与えていることが明らかとなった。

第3章 西南中国におけるエスニック・ツーリズムの展開

西南中国には、さまざまな少数民族が居住しており、豊富な民族文化観光資源が存在する。2010年、中国国家统计局「第六次全国人口調査」によると（表 I-3-1）、中国全土の人口は13億7054万人であり、そのうち、少数民族の人口は1億1379万人、全国人口の8.3%を占めている。



図 I-3-1 雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の位置

（筆者作成）

表 I-3-1 西南中国雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の少数民族（2010年）

地 区	総人口		少数民族人口		少数 民族 の数
	人口 (万人)	比率 (%)	人口 (万人)	比率 (%)	
全 国	137,054	100.0	11,379	100.0	55
3 地区	12,674	9.3	4,746	41.7	—
雲南省	4,597	3.4	1,534	13.5	25
貴州省	3,475	2.5	1,255	11.0	19
広西チワン族自治区	4,603	3.4	1,958	17.2	12

資料：中国国家统计局（2010年）「第六次全国人口統計調査」により筆者作成

表 I -3-2 少数民族の特色ある民族村の数（2014 年）

順位	行政区	民族村		順位	行政区	民族村	
		数	全国比率 (%)			数	全国比率 (%)
1	貴州省	62	18.2	16	河南省	5	1.5
2	広西チワン族自治区	59	17.4	17	陝西省	5	1.5
3	雲南省	41	12.1	18	四川省	5	1.5
4	湖南省	27	7.9	19	重慶市	5	1.5
5	湖北省	21	6.2	20	黒竜江省	4	1.2
6	寧夏回族自治区	12	3.5	21	遼寧省	4	1.2
7	福建省	10	2.9	22	北京市	4	1.2
8	チベット自治区	10	2.9	23	海南省	3	0.9
9	河北省	9	2.7	24	江西省	3	0.9
10	吉林省	9	2.7	25	内モンゴル自治区	3	0.9
11	青海省	9	2.7	26	安徽省	2	0.6
12	新疆ウイグル自治区	8	2.4	27	江蘇省	1	0.3
13	広東省	7	2.1	28	天津市	1	0.3
14	浙江省	6	1.8	合 計		340	100.0
15	甘肅省	5	1.5				

資料：中国国家民族事務委員会の統計により筆者作成

西南中国に位置する雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の三つの地区の人口は 1 億 2674 万人、全国人口の 9.3%を占め、そのうち、少数民族の人口は 4,746 万人で、全国の少数民族人口の 41.7%を占めている。それら三つの地区を比較すると、広西チワン族自治区の少数民族の人口が最も多く 1,958 万人であり、全国の少数民族の人口の 17.2%を占めている。雲南省には、25 の少数民族が居住しており、人口は 1,534 万人である。貴州省には 19 の少数民族があり、人口は 1,259 万人となっている。

前述したように、中国政府は西部地区の経済を發展させるために、2000 年から西部大開發政策を行ったが、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の三つの地区には数多くの少数民族が居住しているため、少数民族文化を中心とするエスニック・ツーリズムを提唱している。また、中国国家民族事務委員会によると、2009 年から国家民族事務委員会と財政部の支援の下に、少数民族地区では特色のある村の保護と發展運動を展開したが、2014 年までの約 5 年の期間にわたってさまざまな特色のある村において産業の育成、民族風情の観光展開、村人の生活改善、収入の増加などの目標を実現してきた。そして、少数民族村をさらに保護・發展させるために、国家民族事務委員会は「国家民委關於印發開展中国少数民族特色村寨命名掛牌工作意見的通知」を出し、各地の民族事務委員会から推薦され、専門家の評価および審査を受けた 340 の村が第 1 回の「中国少数民族特色村」に決定した。特色のある民族村のランキングをみると、第 1 位は貴州省の 62 カ所、第 2 位広西チワン

族自治区 59 カ所、第 3 位の雲南省は 41 カ所であり、三地区合わせて 162 カ所を有しており、全国での比率は 47.7%である（表 I-3-2）。このように、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の三つの地区は、中国においてエスニック・ツーリズムの発展の代表的な地区であることができると思われる。したがって、本章ではそれら三つ地区のエスニック・ツーリズムの進展を検討するとともに、西南中国におけるエスニック・ツーリズムの状況を把握したい。

第 1 節 雲南省におけるエスニック・ツーリズムの展開

1. 雲南省の少数民族

雲南省は、中国で最も複雑で、民族的な観光文化が多様な地域である。そうした文化の多様性は、横断山脈の地形によるものと考えられ、南北に連なる高黎貢、怒江(サルウィン川)、雲嶺、碧羅雪山、無量山、哀牢山、そして瀾滄江（メコン川）などの山水が、東西の交通を切断したことにより、民族のコミュニケーションと文化的交流も切断され、横断山脈の中では多数の独特な少数民族文化が形成された⁵⁸。

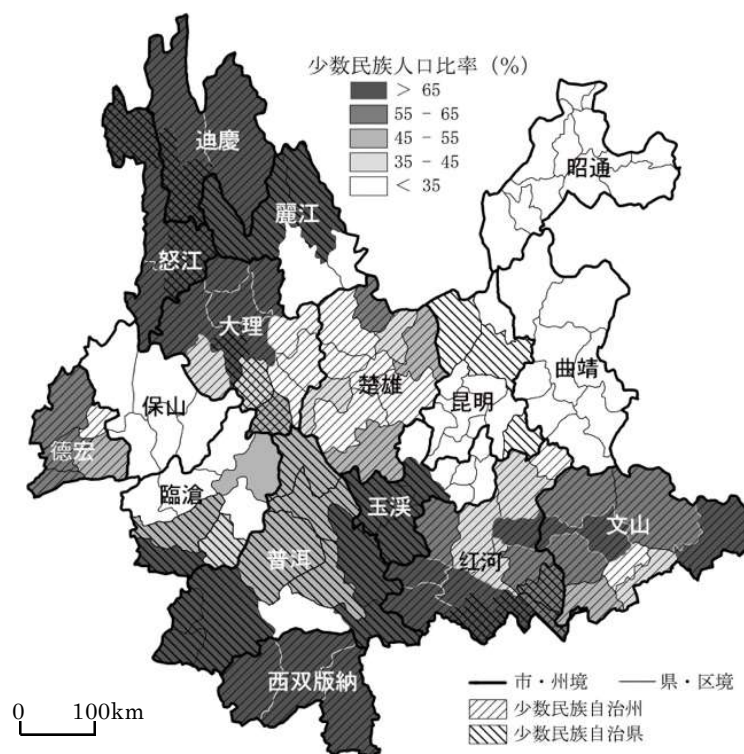


図 I-3-2 雲南省の行政区画と県別少数民族割合の分布（2007）

資料：杜国慶（2012）「中国雲南省における少数民族の分布について」

『立教大学観光学部紀要』第 14 号、81 頁の図 7 に筆者加筆

⁵⁸杜国慶（2012）：「中国雲南省における少数民族の分布について」『立教大学観光学部紀要』第 14 号、75 頁。

表 I-3-3 雲南省の少数民族自治県および設置年

No.	自治県	民族	設置年	所在市・州
1	峨山	イ	1951	玉溪市
2	瀾滄	ラフ	1953	普洱市
3	江城	ハニ、イ	1954	
4	孟連	タイ、ラフ、ワ		
5	耿馬	タイ、ワ	1955	臨滄市
6	寧浪	イ	1956	麗江市
7	貢山	トーロン、ヌー		怒江リス族自治州(1954)
8	巍山	イ、回		大理ペー族自治州(1956)
9	石林	イ		昆明市
10	尋甸	回、イ		
11	屏辺	ミャオ	1958	紅河ハニ族イ族自治州(1957)
12	河口	ヤオ		臨滄市
13	滄源	ワ		
14	麗江	ナシ	1961	麗江市
15	南澗	イ	1963	大理ペー族自治州(1956)
16	西盟	ワ		普洱市
17	墨江	ハニ	1979	
18	新平	イ、タイ		玉溪市
19	元江	ハニ、イタイ		
20	漾濞	イ	1985	大理ペー族自治州(1956)
21	維西	リス		迪慶チベット族自治州(1957)
22	金平	ミャオ、ヤオ、タイ		紅河ハニ族イ族自治州(1957)
23	禄勸	イ、ミャオ		昆明市
24	寧	ハニ、イ		普洱市
25	景東	イ		
26	景谷	タイ、イ		
27	双江	ラフ、ワ、ブラン、タイ		
28	蘭坪	ペー、プミ	1987	怒江リス族自治州(1954)
29	鎮沅	イ、ハニ、ラフ	1990	普市

資料：杜国慶（2012）「中国雲南省における少数民族の分布について」『立教大学観光学部紀要』第14号、
80頁の表2を引用する

注：括弧中の数字は民族自治州設置年を示す

表 I-3-3 に示したように、雲南省には 29 の少数民族自治県があり、中国 56 民族のうち 25 の少数民族が居住し、世界の四大宗教がすべて信仰されるなど、多種多様な民族文化に溢れている。特に、雲南省にのみ居住する少数民族は、タイ（傣）族、ペー（白）族、ハニ（哈尼）族、ラフ（拉祜）族、ワ（佤）族、トールン（独龍）族、ヌー（怒）族、ナシ（納西）族、アチャン（阿昌）族、チンポー（景頗）族、プミ（普米）族、ジノー（基諾）族、プーラン（布朗）族、ドアン（徳昂）族、リス（傈僳）族などの 15 の民族であり、それぞれの少数民族の悠久な歴史文化や宗教文化、鮮やかな服飾、祭り、音楽、舞踊、建築物などの独自の民族文化を持ち、数多くの観光客を魅了している。また、雲南省はラオス、ミャンマー、ベトナムの国境と接しているため、10 数種の少数民族が国境を挟んで分布しており、民間の交流がよく見られ、独特な辺境民族文化観光資源を形成している。

2. 2000 年代までの雲南省のエスニック・ツーリズム

雲南省のエスニック・ツーリズムの展開についてはさまざまな研究が行われており、本論文の序論で述べたように、前田（2003）は『西双版纳傣族自治州の民族観光における文化表象の交錯：民族であるための方法について』の中で、雲南省では 1980 年代から本格的に観光開発が胎動し、現在までも「濃厚な民族文化」を核とする観光地の開発が続けられていると指摘している。前田は 1980 年代から 1999 年までの雲南省西双版纳における観光開発の流れを分析し、その観光開発を皮切りにして、中国西南部のエスニック・ツーリズムブームが始まったことを指摘した。実際は、雲南省における最初のエスニック・ツーリズムの展開は、1961 年に周恩来が西双版纳の景洪市を訪れ、タイ族の水かけ祭りに参加したことにあると思われる。その後、タイ族の水かけ祭りの知名度は全国に広がり、多くの人々が少数民族の文化体験と周恩来の足跡を追い求めて、雲南省を訪問するようになった。その時のことは「難忘的澆水節」という文章になって小学校の教科書にも載っているほど中国人には有名なエピソードであり、今日に至るまで有名である。しかし、その当時は、西双版纳の交通施設はほとんど発展していなかった上に、中国社会には多くの時代的限定があったため、最終的にはそれほど大きな観光経済効果を形成しなかった。

また、長谷川（2006）は、雲南省全体のエスニック・ツーリズム展開の流れを取り上げ、雲南省のエスニック・ツーリズムには改革開放政策が始まった 1978 年から 1996 年にかけて三つの段階の発展期があったことを指摘した⁵⁹。すなわち、第一段階は、1978 年の改革開放政策の実施から 1985 年までの間である。この時期は、少数民族地域を訪問してその衣食住の実際に触れ、市場やバザールで工芸品などを購入することが、観光客にとって魅力的であり、刺激的でもあった。しかし、この段階のエスニック・ツーリズムは、「観光客（ゲスト）と少数民族（ホスト）とで交わされる不作為的なコミュニケーション活動の延長上にあり、国家や政府による過剰な演出や商業主義が強く前面に出たものではなかった。観光客は少数民族のあるがままの家庭を訪問し、飲食のもてなしを受けることもあったが、それがかえって魅力でもあった」ことを長谷川は指摘している。

⁵⁹長谷川清（2006）：「エスニック観光と「風俗習慣」の商品化」：西双版纳タイ族自治州の事例』『国立民族学博物館調査報告 63』、175-176 頁。

表 I-3-4 中国における各年の観光プロモーションの推移

年	テーマ	目 的
1992	中国友好観光年	観光を通じて国際友好交流を促進する（遊中国、交朋友）
1993	中国山水風光遊	自然観光を促進する（錦繡河山遍中華、名山聖水任君遊）
1994	中国文物古跡遊	歴史文化観光を促進する（五千年の風采、伴你中国之旅）
1995	中国民族風情遊	エスニック・ツーリズムを促進する（众多的民族、各異的風情）
1996	中国度假休閒遊	休暇観光を促進する（96 中国：嶄新的度假天地）
1997	中国旅遊年	国内観光を促進する（12 億人喜迎 97 旅遊年）
1998	中国華夏城郷遊	グリーン・ツーリズムを促進する（現代城郷、多彩生活）
1999	中国生態環境遊	エコツーリズムと自然観光を促進する（返璞帰真、怡然自得）
2000	中国神州世紀遊	歴史文化観光を促進する（文明古国、世紀風采）
2001	中国体育健身遊	スポーツ観光を促進する（跨入嶄新世紀、暢遊神州大地）
2002	中国民間芸術遊	民間芸術の保護と観光を促進する（民間芸術、華夏瑰宝）
2003	中国烹飪王国遊	食文化観光を促進する（遊歴中華勝境、品嘗天堂美食）
2004	中国百姓生活遊	マスツーリズムを促進する （遊覧名勝古跡、体験百姓生活・民風民俗）
2005	中国紅色旅遊年	革命聖地観光を促進する（紅色旅遊年）
2006	中国郷村遊	グリーン・ツーリズムを再促進する （新農村、新旅遊、新体験、新風尚）
2007	中国和諧城郷遊	グリーン・ツーリズムを促進する （魅力郷村、活力城市、和諧中国）
2008	中国奧運旅遊年	オリンピックを契機に観光を促進する（北京奧運、相約中国）
2009	中国生態旅遊年	エコツーリズムを再促進する（走進綠色旅遊、感受生態文明）
2010	中国世博旅遊年	万国博覧会を契機に中国の観光を促進する （相約世博、精彩中国）
2011	中華文化遊	中国の文化観光を促進する（中華文化、魅力之旅）
2012	中国歡樂健康遊	スポーツ観光を促進する（愛旅遊、愛生活）
2013	中国海洋旅遊年	レジャー観光を促進する（美丽中国、海洋之旅）
2014	美 麗 中 国 之 旅 2014 智慧旅遊年	「科学技術と観光」を促進する（知恵旅遊、讓生活更精彩）
2015	美麗中国 2015 絲 綢之路旅遊年	シルクロード地域の観光を促進する（遊絲綢之路、品美麗中国）
2016	絲綢之路旅遊年	シルクロード地域の観光を再促進する （神奇絲綢路、美麗中国夢）
2017	美 麗 中 国 -2017 絲綢之路旅遊年	中国全域の観光を再促進する（古老絲綢路、美麗中国行）

資料：中国国家旅遊局のホームページで掲載された情報をもとに筆者作成

注：目的の（ ）はスローガン。

第二段階は、中国第7次5カ年経済計画の時期（1986～1990年）である。この時期に、雲南省政府は観光産業の育成を政策課題として重視するようになり、少数民族の伝統文化や風俗習慣を観光資源として活用するようになった。特に、西双版纳がこの時期代表するエスニック・ツーリズム発展の目玉観光地となっている。

そして第三段階は、第8次5カ年経済計画の時期（1991～1995年）である。この時期は、雲南省政府が少数民族地域の観光化の路線を打ち出しことを受けて、少数民族は雲南省の観光産業の中での自らの位置を確立したが、少数民族の歌舞や風俗習慣の演出は商品化の方向をたどることとなった。

松村（2001）によると、中国で最初の大規模な国家レベルの観光プロモーションは、1992年に「1992 中国友好観光年」というテーマの観光年であり、雲南観光は「西南少数民族風情遊」と銘打って推奨されていた（表 I-3-4）。同時に、「西南少数民族風情遊」の開催とあわせて、「第三次中国芸術節」が1992年2月に昆明で大規模に開催され、昆明市内では雲南省特有の少数民族の伝統文化や風俗習慣を展示し、雲南各地の少数民族たちがそれぞれの民族衣装でパレードも行った⁶⁰。その後、省内各地でさまざまな観光イベントが行われ、数多くの国内外観光客を誘致した。

さらに、1995年に中国政府が主催した観光年である「中国民族風情遊」は、「多民族の中国、異なった民族風情」というスローガンの下に中国の少数民族の文化を広く宣伝し、多民族の多様な民族文化を有している雲南省ではその観光年を契機にさまざまな観光客が少数民族文化に魅了されるようになった。

第9次5カ年計画の時期（1996～2000年）になると、1996年に観光が雲南省の基幹産業の一つに指定され、自然景観と民族文化を中心とした観光産業の発展戦略が設定された。1999年には昆明世界園芸博覧会の開催により、世界からの観光客が大幅に伸び、エスニック・ツーリズムがさらに発展してきた。

表 I-3-5 をみると、1978年改革開放の翌年には、前年に雲南省の国際観光客は13,444人あったものが、935%の成長を示したが、それは対外開放政策の実施により外国人が中国を訪れることができるようになって、人数が増えたからである。また、1980年から1988年にかけて、国際観光客の人数は増加し続け、1986年からは10万人台に達し、1988年には121,312人となった。しかし、1989年に天安門事件が起こったため、国際観光客の人数は約4割で減少して、74,431人となり、そのうち香港・マカオ・台湾を除く外国人客は約5割弱まで激減した。その一方、1990年になると、国際観光客の人数は回復し、99%の増加率を示して過去最高の148,166人となった。それは雲南省を訪問する香港・マカオ・台湾からの観光客が203%と大幅に成長した結果である。さらに、1990年代の雲南省の国際観光客総数は1980年代よりも大幅に伸び、1997年は814,063人、1999年には100万人以上に達するまでに急増した。それは、前述したように、1990年代になると雲南省ではさまざまな観光イベントの開催を契機に、特色ある少数民族文化の魅力が世界に広がり、エスニック・ツーリズムが促進されたからである。

⁶⁰松村嘉久（2001）「中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略」『東アジア研究』第32号、大阪経済法科大学、39頁。

表 I -3-5 雲南省の国際観光客別人数の推移

年	国際観光客総数		総数中の外国人客		総数中の香港・マカオ・台湾からの客		総数中の華僑客	
	人数 (人)	増加率 (%)	人数 (人)	増加率 (%)	人数 (人)	増加率 (%)	人数 (人)	増加率 (%)
1978	1,299	-	759	-	540	-	-	-
1979	13,444	935.0	7,901	941.0	5,543	926.5	-	-
1980	20,500	52.5	7,900	-0.01	12,600	127.3	-	-
1981	23,600	15.1	9,100	15.2	14,500	15.1	-	-
1982	40,468	71.5	24,333	167.4	16,135	11.3	-	-
1983	41,513	2.6	26,606	9.3	14,907	-7.6	-	-
1984	65,124	56.9	43,319	62.8	17,321	16.2	4,484	-
1985	80,101	23.0	57,248	32.2	15,913	-8.13	6,940	54.8
1986	105,432	31.6	66,918	16.9	27,010	69.7	11,504	65.8
1987	113,609	7.8	74,795	11.8	28,764	6.5	10,050	-12.6
1988	121,312	6.8	76,658	2.5	42,168	46.6	2,486	-75.3
1989	74,431	-38.6	40,127	-47.7	32,193	-23.7	2,111	-15.1
1990	148,166	99.1	49,787	24.1	97,458	202.7	921	-56.4
1991	210,538	42.1	87,921	76.6	119,780	22.9	2,837	208.0
1992	313,462	48.9	160,059	82.1	150,771	25.9	2,632	-7.2
1993	405,209	29.3	268,573	67.8	132,837	-11.9	3,799	44.3
1994	522,059	28.8	402,332	49.8	117,795	-11.3	1,932	-49.1
1995	596,942	14.3	473,769	17.8	122,398	3.9	775	-59.9
1996	742,527	24.4	571,948	20.7	165,216	35.0	5,363	592.0
1997	814,063	9.6	588,908	3.0	217,930	31.9	7,225	34.7
1998	760,909	-6.5	548,890	-6.8	209,110	-4.1	2,909	-59.7
1999	1,040,000	36.7	724,964	32.1	310,397	48.4	4,639	59.5

資料：雲南省旅遊局の統計により筆者作成

3. 西部大開発における雲南省のエスニック・ツーリズム

2000 年になると、西部大開発の実施によって、西部地区の観光業の発展は加速化していった。雲南省政府は、第 10 次 5 年計画の時期（2001～2005 年）に、西部大開発の下で民族文化観光の発展を促進し続けるとともに、第一次昆明国際旅行祭の開催を契機に、雲南省の少数民族の風俗習慣と伝統文化の魅力を世界にさらに宣伝した。また、少数民族の風俗習慣と伝統文化を基盤とする民族村を建設し、民族博物館の発展を促進して、少数民族における民族文化観光ルートを作り出した。その後、西部大開発実施の恩恵を受けることにより雲南省のエスニック・ツーリズムは発展していった。ここでは、西部大開発の実施後における雲南省の観光業の経済効果を分析する。

表 I-3-6 雲南省の国内外観光客数と収入の推移

年	国際観光客		国際観光収入		国内観光客		国内観光収入	
	人数 (万人)	増加率 (%)	収入 (億ドル)	増加率 (%)	人数 (万人)	増加率 (%)	収入 (億元)	増加率 (%)
2000	100	-	3.4	-	3,841	-	183	-
2001	110	65.2	3.7	9.1	4,570	19.0	226	23.4
2002	130	18.5	4.2	13.2	5,110	11.8	255	12.8
2003	100	-23.3	3.4	-18.9	5,169	1.2	278	9.1
2004	110	10.1	4.2	24.1	6,011	16.3	334	20.1
2005	150	36.5	5.3	25.1	6,861	14.1	386	15.6
2006	394	162.5	6.6	24.6	7,721	12.5	477	23.6
2007	458	16.2	8.6	30.7	8,986	16.4	498	4.3
2008	511	11.4	10.1	17.2	10,250	14.1	595	19.5
2009	578	13.1	11.7	16.3	12,000	17.1	731	22.9
2010	663	14.7	13.2	13.0	13,837	15.3	917	25.5
2011	764	15.2	14.0	5.8	16,332	18.0	1,196	30.4
2012	886	16.1	19.5	39.0	19,630	20.2	1,579	32.1
2013	1,043	17.7	24.2	24.2	23,972	22.1	1,962	24.2
2014	998	-4.4	24.2	0.1	28,100	17.2	2,517	28.3
2015	1,075	7.8	28.8	18.8	32,300	15.0	3,104	23.3

資料：雲南省旅遊局の統計により筆者作成

2000 年になると、西部大開発政策の実施によって、雲南省の観光業はさらに発展した。表 I-3-6 に示すように、西部大開発政策の実施後、雲南省の国際観光客は、2000 年の 67 万人から 2015 年までに 1,075 万人となり、約 16 倍の成長をみせた。その間、ビザの大幅緩和等により、2006 年に雲南省へ訪れた国際観光客数は大幅に成長し、2005 年と比較して 162%で増加となり、最高の増加率を記録した。その一方、2003 年 3 月中旬から伝染病の SARS が発生し、香港、中国などアジアを中心に拡大したことによって、中国の第 3 次産業は大きな影響を受け、国際観光客数は 2002 年より 30 万人が減少し、増加率はマイナス 23.3%となった。同時に、国際観光収入は、2002 年の 4.2 億ドルから 3.4 億ドルに減って、増加率はマイナス 19%であった。また、2014 年には、テロによって国際観光客数が 998 万人となって、前年より 4.4%減少したにもかかわらず、国際観光収入は 24.2 億ドルとなって、前年より金額は微増傾向にある。一方、国内観光客の人数をみると、西部経済の発展につれて成長し続けたが、2003 年の SARS の影響によって、人数は 2002 年の観光客数と比べて微増傾向にとどまり、59 万人が増えて、増加率はわずか 1.2%であった。また、2014 年はテロが発生したにもかかわらず、国内観光客の人数は 2013 年よりも 17%伸び、2 億 8100 万人に達した。以上のように、西部大開発政策の実施後、雲南省の観光業は発展を遂げてきたと思われる。

表 I-3-7 は、2013 年雲南省自治州・市別の観光経済効果の統計データであり、全省の観光総収入は 2,112 億元、国内観光客は 2 億 3970 万人、国際観光客は 533 万人である。そのうち、8 つの少数民族自治州の観光総収入は 930 億元、全省の 44%を占め、国内観光客は 9,851 万人、全省の 41%を占め、国際観光客は 283 万人、全省の半数以上を超え、53%を占めている。また、少数民族自治州以外の 8 つの市の観光総収入は 1,182 億元、国内観光客は 1 億 4119 万人、国際観光客は 250 万人であるが、観光総収入と国内観光客のいずれも 8 つの少数民族自治州より多いが、その一方で国際観光客の人数は 8 つの少数民族自治州よりも低くなっている。さらに、民族観光村は、全省で 150 カ所、8 つの少数民族自治州で 79 カ所、8 つの市では 71 カ所である。以上のように、少数民族自治州を訪れた国際観光客の人数が大幅に増加することによって、エスニック・ツーリズムの発展を促進していると思われる。

表 I-3-7 雲南省の自治州・市別観光経済効果（2013 年）

順位	自治州(市)	観光総収入		国内観光客		国際観光客		民族観光村数
		収入 (億元)	増加率 (%)	人数 (万人)	増加率 (%)	人数 (人)	増加率 (%)	
1	昆明市	516	19.4	5,479	17.8	1,231,265	8.3	8
2	麗江市	279	31.9	1,980	30.7	996,716	17.7	8
3	大理州	249	27.4	2,170	21.2	706,849	25.7	12
4	西双版纳州	172	22.7	1,384	19.4	416,589	11.3	9
5	迪慶州	127	25.4	1,123	18.9	1233,086	22.1	7
6	紅河州	127	22.3	1,736	18.2	200,429	17.3	13
7	徳宏州	103	27.0	776	20.8	176,023	16.0	11
8	玉溪市	86	21.3	1,756	20.2	4,363	9.5	13
9	曲靖市	76	18.8	1,025	17.7	20,303	6.8	8
10	普洱市	71	39.7	1,128	37.8	53,058	18.3	10
11	文山州	68	22.4	780	28.5	46,453	44.4	8
12	楚雄州	66	33.1	1,659	23.5	32,469	16.1	11
13	保山市	66	28.2	938	18.3	133,757	10.0	10
14	昭通市	58	42.0	1,376	35.6	1,879	87.9	7
15	臨滄市	31	31.3	437	28.0	61,039	10.1	7
16	怒江州	17	46.2	222	18.4	20,686	8.1	8
州合計		930	[44.0]	9,851	[41.1]	2,832,584	[53.1]	79
市合計		1,182	[56.0]	14,119	[58.9]	2,502,380	[46.9]	71
全省		2,112	—	23,970	—	5,334,964	—	150

資料：雲南省旅遊局「雲南旅遊産業發展年度報告（2013～2014 年）」、10 頁の表により筆者作成

注：1) 民族観光村は、第十二次五カ年經濟發展期（2011～2015 年）の統計。

2) [] の数値は全省の割合。

第2節 貴州省におけるエスニック・ツーリズムの進展

1. 貴州省の少数民族

貴州省は、畢節市、遵義市、銅仁市、六盤水市、安順市、貴陽市などの6つの市、黔西南ブイ族ミャオ族自治州、黔南ブイ族ミャオ族自治州、黔东南ミャオ族トン族自治州などの3つの自治州を有しており、面積は17万7359km²、2010年末の総人口は3,475万人である（表I-3-8）。貴州省には、11の少数民族自治県があり、中国56民族のうち19の少数民族が居住しており、その人口は1,255万である（表I-3-1）。貴州省統計局「2016年貴州省統計年鑑」によると、最大の少数民族はミャオ族で、人口は397万人、第2位のブイ（布依）族は251万人、トン（侗）族は143万人、トゥチャ（土家）族は144万人、イ（彝）族は83万人、コーラオ（仡佬）族は50万人、スイ（水）族は35万人の順位となっている。全国でも少数民族が比較的多い地区であり、省面積の41.3%が少数民族自治区域となっている。貴州省の気候は、一年中雲が低く垂れ込め、日照時間が短いため、農業の発展に厳しい状況となっている。カルスト地形が省全体の73%を覆い、交通が不便である。また、年収入と教育レベルが低く、貧困問題が極めて深刻である。

表 I-3-8 貴州省の行政区の面積と人口（2010年）

自治州・市	面積 (km ²)	構成比 (%)	人口 (万人)	構成比 (%)
畢節市	26,844	15.1	654	18.8
遵義市	30,781	17.4	613	17.6
銅仁市	18,006	10.2	309	8.9
六盤水市	9,965	5.6	285	8.2
安順市	9,253	5.2	230	6.6
貴陽市	9,253	5.2	432	12.5
黔西南ブイ族ミャオ族自治州	16,786	9.5	281	8.1
黔南ブイ族ミャオ族自治州	26,192	14.8	323	9.3
黔东南ミャオ族トン族自治州	30,278	17.1	348	10.0
全 省	177,359	100.0	3,475	100.0

資料：貴州省統計局「2016年貴州省統計年鑑」により筆者作成

2. 貴州省のエスニック・ツーリズムの展開

貴州省の観光開発についてはさまざまな研究が行われているが、曾（2010）によると貴州省の観光は、1980年代の環境観光、1990年代の民族観光、21世紀に入ってから生態観光（エコツーリズム）という形で重点を変えてきている⁶¹。具体的には、1982年に「貴州省旅遊局」が設立され、省都である貴陽市を中心に西部ルートと東部ルートに分けて、

⁶¹曾士才・小林英俊・緒川弘孝（2010）「曾士才教授インタビュー」『CATS 叢書』第3巻、北海道大学観光学高等研究センター、日本交通公社、203頁。

同年には西部ルートに位置する西側の地域が開放された。1980 年代初頭の貴州省には国際空港がなく、国外からの観光客は雲南省の昆明から入って来ていたために、西側の黄果树瀑布に代表されるような環境観光が中心となっていた。また、当時の貴州省への国際観光客の 7～8 割は香港とマカオからの来訪者であり、その関心の対象は名所・旧跡、歴史・文物、自然などの環境観光であったことを、曾は指摘している。

東部ルートの観光開発は西部ルートよりも遅れ、1985 年ごろから始まっている。1986 年には、東部ルートの中心である黔东南ミャオ族トン族自治州の観光開発が行われ、ミャオ族の村である郎徳上寨が最も早く観光客に開放された。その後、1990 年代になると、ミャオ族の民族舞踊や音楽、工芸品、伝統建築物などといった様々な有形・無形の文化が観光の対象となり、国内外の多くの観光客を誘致することによって、貴州省のエスニック・ツーリズムの展開が始まった。

前述したように、貴州省の面積の 73%はカルスト地形であり、2000 年代になると西部大開発の実施に伴って、カルスト地形が新たな観光資源として認識され、少数民族文化とカルスト地形の両方が共に観光活用されることによって、貴州省の生態観光（エコツーリズム）の開発が進められるようになった。次に、貴州省の観光客と観光収入の推移について分析する。

表 I-3-9 は、第 7 次 5 カ年経済計画（1986～1990 年）から西部大開発政策が実施された 2015 年までの観光客総人数を示しており、表 I-3-10 は同期間の観光総収入の統計データである。観光客総人数と観光総収入は増加傾向にあり、特に第 8 次 5 カ年経済計画（1991～1996 年）の間には観光客総人数の年平均増加率は過去最高の 34.4%であり、観光総収入の年平均増加率は 102.7%であった。この時期は、貴州省のエスニック・ツーリズム開発の高度成長期であり、観光客総人数は第 7 次 5 カ年経済計画の期間における総人数よりも 5,590 万人増加した。そのうち、外国人観光客の年平均増加率は 41.4%で、47 万人に達した。国際観光収入の年平均増加率は 74.2%、5 年間の累計収入は 7,050 万ドルである。それは、東部ルートの開発において各少数民族自治州の政府側が民族観光による地域を目指し、外貨を獲得するためにインバウンド観光に力を入れたからである。鈴木(2012)によれば、東部ルートに位置する黔东南ミャオ族トン族自治州が本格的に観光振興に乗り出してから、来客観光客数は大幅に成長し、1985 年のスタート時点では海外観光客数は 206 人で観光収入は 4 万 7600 ドルしかなかったが、10 年後の 1995 年になると海外観光客数は 1 万 3200 人、観光収入は 315 万 8000 ドルに増加した。また鈴木は、1998 年に黔东南ミャオ族トン族自治州の国際観光客数は 1 万 7200 人、観光収入は 433 万 1300 ドルに増加し、スタート時の 1985 年に比べ 1998 年には海外観光客数が 83 倍、観光収入も約 100 倍近くまで増えていることを指摘している⁶²。さらに、国際観光客が大幅に伸びただけではなく、国内からの観光客も大幅に増加した。そして、1990 年代の貴州省では、エスニック・ツーリズムの進展が観光業に多大な影響を与え、その経済総量は大幅に増加した。

2000 年代に入ると、西部大開発政策の実施により国際空港の数が増え、観光施設と交通

⁶²鈴木晶（2012）：「中国貴州省少数民族地域におけるインバウンド観光の考察：黔东南苗族侗族自治州を中心に」『別府大学短期大学部紀要（31）』別府大学短期大学部、72 頁。

インフラの整備によって、貴州省は国内外の観光客をさらに魅了し続けている。表 I-3-9 と表 I-3-10 をさらにみると、第 10 次 5 カ年経済計画（2001～2005 年）の期間における観光総収入は、723 億元で、第 9 次 5 カ年の 196 億元と比較すると大幅に伸びており、年平均増加率は 31.9%である。それは主に、国内観光収入に恵まれた結果である。また、国内外観光客は西部大開発政策が実施された 15 年の間に、大幅に増加し、第 11 次 5 カ年経済計画（2006～2010 年）までに 4 億 2349 万人、第 12 次 5 カ年経済計画（2010～2015 年）では 5 億 4065 万人に達した。

表 I-3-9 5 カ年経済計画別貴州省の観光客数と年平均増加率

5 カ年経済計画	観光客総数		国際観光客		国内観光客	
	人数 (万人)	年平均増加 率 (%)	人数 (万人)	年平均増加 率 (%)	人数 (万人)	年平均増加 率 (%)
第 7 次 (1986～1990)	1,612	10.3	9	16.4	1,602	10.3
第 8 次 (1991～1995)	7,202	34.4	47	41.4	7,154	34.4
第 9 次 (1996～2000)	9,498	2.5	78	6.1	9,420	2.5
第 10 次 (2001～2005)	11,817	9.4	102	8.5	11,715	9.4
第 11 次 (2006～2010)	42,554	32.8	205	12.6	42,349	32.9
第 12 次 (2010～2015)	54,371	23.9	386	13.5	54,065	23.9

資料：貴州省統計局の統計により筆者作成

表 I-3-10 5 カ年経済計画別貴州省の観光収入と年平均増加率

5 カ年経済計画	観光総収入		国際観光収入		国内観光収入	
	収入 (億元)	年平均増加 率 (%)	収入 (万ドル)	年平均増加 率 (%)	収入 (億元)	年平均増加 率 (%)
第 7 次 (1986～1990)	1.0	25.5	717.6	23.9	0.7	22.1
第 8 次 (1991～1995)	24.2	102.7	7,050.3	74.2	18.6	106.8
第 9 次 (1996～2000)	195.8	45.7	24,666.0	16.0	176.2	51.8
第 10 次 (2001～2005)	723.4	31.9	35,879.4	10.7	693.9	33.2
第 11 次 (2006～2010)	3,418.9	33.4	60,132.9	5.0	3,376.0	34.1
第 12 次 (2010～2015)	12,069.1	27.0	92,327.4	9.2	12,011.5	27.2

資料：貴州省統計局の統計により筆者作成

3. 貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州の観光動向

前述したように、黔東南ミャオ族トン族自治州は、1986年の東部ルート of 観光開発の中でも、重要な位置付けをなされていた。また、黔東南ミャオ族トン族自治州のミャオ族の村である郎徳上寨は最も早く観光客に開放され、大いに観光客を誘致した。そして、黔東南ミャオ族トン族自治州は、貴州省の3つの少数民族自治州の中でも、最も代表的なエスニック・ツーリズム開発の州であると思われる。したがってここでは、西部大開発の実施前後における黔東南ミャオ族トン族自治州を訪れた観光客を比較することによって、西部大開発におけるエスニック・ツーリズムの発展を把握する。図 I-3-3 は 1985 年から 1998 年までに黔東南ミャオ族トン族自治州を訪れた外国人観光客の推移であり、1985 年にはわずかに 164 人であったものが、1998 年になると 14,300 人に達した。また、図 I-3-4 をみると、西部大開発の実施後には黔東南ミャオ族トン族自治州を訪れる外国人観光客は増加傾向を示し、2014 年までに 17 万人に達した。

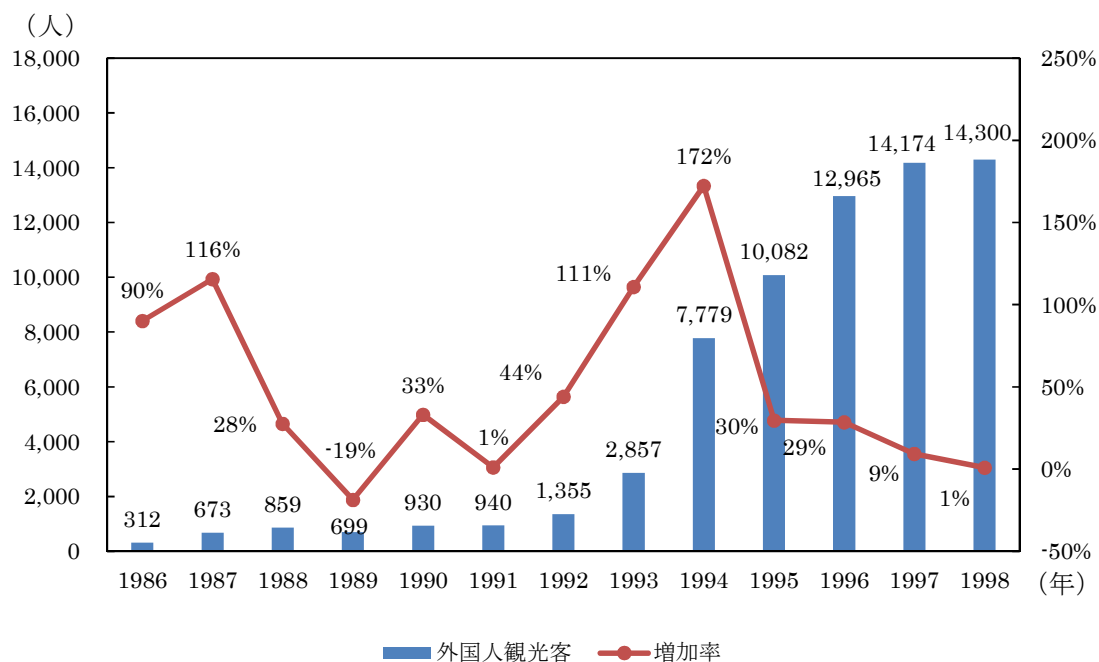


図 I-3-3 黔東南ミャオ族トン族自治州の外国人観光客の推移（1986～1998 年）

資料：黔東南ミャオ族トン族自治州旅游局の統計により筆者作成

(万人)

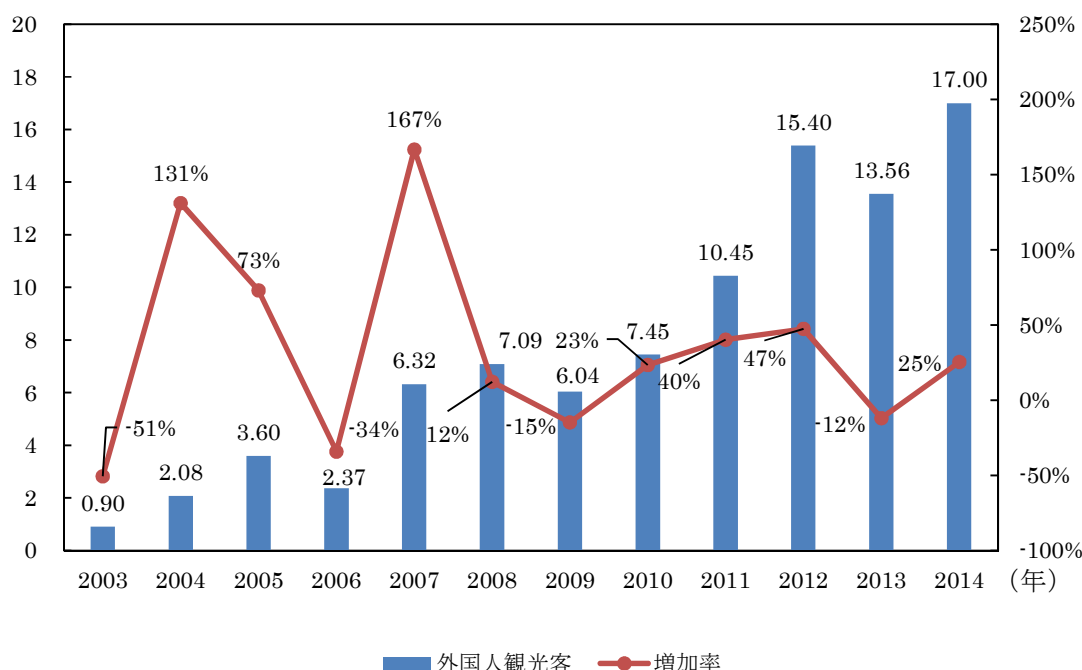


図 I-3-4 黔東南ミャオ族トン族自治州の外国人観光客の推移（2003～2014 年）

資料：黔東南ミャオ族トン族自治州旅游局の統計により筆者作成

第3節 広西チワン族自治区におけるエスニック・ツーリズムの進展

1. 広西チワン族自治区の少数民族

広西チワン族自治区は、中国の五つの少数民族自治区の一つであり、南は北部湾に臨み、西南はベトナムに接し、東は香港、マカオに隣接している。また、広東省、湖南省、貴州省、雲南省などと省境を接する。広西チワン族自治区は華南から西南までの交通の要路で、中国とアセアン各国とを結び陸路および海路の交通の要衝である。

広西チワン族自治区の大陸海岸線の長さは 1,177km、東部と広東省の境界線の長さは 931km、東北部と湖南省の境界線の長さは 970km、西北部と貴州省の境界線の長さは 1,177km、西部と雲南省の境界線の長さは 632km である。697 の島をもつが、最も大きな島は面積が約 28km² の涠洲島で、島々の海岸線の長さは全長約 600km、島嶼群の総面積は約 84km² である。また、北部湾海域の面積は、約 13 万 km² である。

広西チワン族自治区はモンスーン気候に属している。地区別の年平均気温は 16.5℃～23℃、最高気温は 42.5℃、最低気温は -8.4℃で、気温は北から南に行くにつれて次第に上がっていく。年降水量は 1,070mm で、多くの地区で 1,500～2,000mm になる。4 月から 9 月にかけては雨季で、この時期は年降水量の 70～85%を占め、10 月から翌年の 3 月までは乾季で、降水量は年降水量の 15～30%になる。四季ははっきりしておらず、冬が短く夏が長い。気候は全体としておだやかで、雨量と熱量が豊富なため農耕に適している。

表 I-3-11 広西チワン族自治区少数民族の人口（2010 年）

民 族	人口 (万人)	構成比 (%)	居住地
チワン（壮）族	1,658.7	84.73	南寧市、柳州市、崇左市、来賓市、百色市、河池市
ヤオ（瑤）族	149.4	7.63	柳州市、桂林市、賀州市、百色市、河池市、来賓市
ミャオ（苗）族	47.6	2.43	融水県、隆林県、三江県、西林県、龍勝県、南丹県
トン（侗）族	30.7	1.56	三江県、融水県、龍勝県
ムーラオ（仫佬）族	17.0	0.87	河池市
マオナン（毛南）族	8.0	0.41	河池市
フエイ（回）族	3.1	0.16	南寧市、柳州市、桂林市
ジン（京）族	2.2	0.11	東興市江平鎮
スイ（水）族	1.4	0.07	融水県、宜州市、環江県、南丹県
コーラォ（仡佬）族	0.7	0.04	隆林県
その他	39.0	1.99	－
合 計	1,957.6	100	－

資料：広西チワン族自治区統計局の統計により筆者作成

注：統計は広西チワン族自治区の戸籍を有する人口。

表 I-3-12 広西チワン族自治区 14 市における少数民族の人口構成比（2010 年）

行政区	総人口	少数民族		漢民族	
		人口(万人)	比率 (%)	人口(万人)	比率 (%)
崇左市	199	176	88.1	24	11.9
百色市	347	295	85.0	52	15.0
河池市	337	283	83.9	54	16.1
来賓市	210	161	76.8	49	23.2
南寧市	666	354	53.1	313	46.9
柳州市	376	192	51.1	184	48.9
防城港市	87	38	44.0	49	56.0
賀州市	195	32	16.5	163	83.5
桂林市	475	73	15.5	401	84.5
貴港市	412	61	14.8	351	85.2
欽州市	308	33	10.6	275	89.4
梧州市	288	6	2.2	282	97.8
北海市	154	3	1.9	151	98.1
玉林市	549	4	0.8	545	99.2
合 計	4,603	1,711	37.2	2,892	62.8

資料：広西チワン族自治区統計局の統計により筆者作成

注：統計は常住人口。

広西チワン族自治区統計局によると、広西チワン族自治区の人口は、2010 年末までに 5,159 万人であり、チワン（壮）族、ヤオ（瑤）族、ミャオ（苗）族、トン（侗）族、ムーラオ（仫佬）族、マオナン（毛南）族、フェイ（回）族、キン（京）族、イ（彝）族、スイ（水）族などの 25 の少数民族が居住している。そのうち、漢民族の人口は、2,892 万人であり、総人口の 62.8%を占めている。少数民族の人口は、約 1,958 万人であるが、その中でチワン族の人口は約 1,659 万人であり、少数民族総人口の 85%を占めている。「緑城（緑の町）」と称される南寧市は、広西チワン族自治区の首府であり、行政区画としては全区が 21 の市、38 の区、56 の県、12 の民族自治県に分けられている。

広西チワン族自治区 14 市における少数民族の人口と構成比をみると、少数民族人口比率が市総人口の 50%以上を占める都市は、崇左市、百色市、河池市、来賓市、南寧市、柳州市などの 6 つの市であり、全て内陸部に位置している（表 I-3-12）。そのうち、崇左市、百色市、河池市の少数民族人口比率は 80%であり、最高の崇左市は 88%である。近年、それぞれの地域では、少数民族の人々が集住しているため、エスニック・ツーリズムが盛んになっている。また、沿海部と東部地区に位置する都市の少数民族人口の比率は漢民族人口の比率の半分以下であり、最も低いのは玉林市で少数民族人口の比率は 0.8%に過ぎない。

2. 西部大開発における広西チワン族自治区の観光動向

西部大開発における広西チワン族自治区の観光業の発展は著しくなっている。表 I-3-13 をみると、広西チワン族自治区の国際観光客の人数は、2000 年の 124 万人から 2015 年の 450 万人に達し、約 3.6 倍に増加した。しかし、その間、2003 年には SARS の影響により、国際観光客数は 2002 年と比べると増加率はマイナス 50%で激減して、65 万人とおり、国際観光収入も下落して増加率はマイナス 50%、1.3 億ドルであった。それに伴って、同年の国内観光客の人数もマイナス 7%で減少し、4,540 万になった。また、2008 年の四川大地震は中国全土の観光業に影響を与えたが、それは広西チワン族自治区にも波及し、国際観光客の人数の増加率はマイナス 2%で微減した。その一方、地震があつたにもかかわらず、国内観光客の人数は 2007 年より 8%伸びて、9,216 万人に達し、国内観光収入は 492 億元となった。その後、2009 年に国内観光客の人数は初めて 1 億人以上となり、2015 年には 3 億 3661 万に達した。さらに、第 2 章で述べたように、2006 年に広西チワン族自治区の南部に位置する南寧市、玉林市、欽州市、北海市、防城港市などの五つの都市は環北部湾経済圏の中心都市として開発され、それに伴って北部湾海国際旅行、浜海レジャー観光、東南半島民族風情などの観光ルートが人気となっている。

表 I-3-13 広西チワン族自治区の国内外観光客数と収入の推移

年	国際観光客		国際観光収入		国内観光客		国内観光収入	
	人数 (万人)	増加率 (%)	収入 (億ドル)	増加率 (%)	人数 (万人)	増加率 (%)	収入 (億元)	増加率 (%)
2000	124	—	2.6	—	3,951	—	146.8	—
2001	125	0.4	2.5	-5.3	4,403	11.4	179.2	22.1
2002	130	4.6	2.6	6.50	4,887	11.0	201.1	12.3
2003	65	-50.5	1.3	-50.4	4,540	-7.1	193.4	-3.9
2004	113	74.3	2.4	81.7	5,518	21.5	221.7	14.7
2005	146	29.9	3.2	34.5	6,493	17.7	277.8	25.3
2006	168	14.7	4.0	26.3	7,400	14.0	334.0	20.2
2007	205	22.4	5.5	35.2	8,518	15.1	392.6	17.6
2008	201	-2.0	6.0	10.3	9,216	8.2	491.9	25.3
2009	210	4.4	6.4	6.8	11,800	28.0	657.0	33.6
2010	250	19.2	8.1	25.5	14,074	19.3	898.1	36.7
2011	303	21.0	10.5	30.4	17,257	22.6	1,209.5	34.7
2012	350	15.7	12.8	21.6	20,778	20.4	1,578.9	30.5
2013	392	11.8	15.5	21.0	24,264	16.8	1,961.3	24.2
2014	421	7.6	17.3	11.7	28,565	17.7	2,495.0	27.2
2015	450	6.9	19.2	10.9	33,661	17.8	3,136.4	25.7

資料：広西チワン族自治区統計局「広西統計年鑑 2000-2015」により筆者作成

また、北部湾経済圏は、東南アジア諸国の国境に接しているため、中国・アセアン博覧会（CAEXPO）が 2004 年から毎年定期的に行われ、東南アジアからの人々の訪問が増加して、国際観光を促進している（表 I-3-14）。中国人民日報（2005）によると、第 1 回の中国・アセアン博覧会の開催を契機に、観光業における発展プロジェクトの商談金額は 3.6 億ドルとなり、そのうち海外資金は 1.1 億ドルであるが、観光商品の貿易額は 150 万元である。そのため、広西チワン族自治区の観光産業は新しく爆発的な成長期を迎え、国内外から訪れる観光客数は 100 万人以上に達した。さらに、観光は中国とアセアン諸国との重点提携領域の一つであり、観光産業を促進するために、2015 年から毎年、国際観光地である中国桂林でアセアン博覧会・旅游展が開催されている。この旅游展は、中国国家旅游局と広西チワン族自治区人民政府が共催し、アセアン 10 カ国を招いて開催されており、年によって展示テーマ国が交替する。広西チワン族自治区人民政府によると、2015 年第 1 回のアセアン博覧会・旅游展は合計 50 の国と地区、29 カ所の中国国内の省・地方（市）組織が参加し、展示企業は 600 社に達した。2016 年の第 2 回のアセアン博覧会・旅游展は「21 世紀の海上シルクロードを共に建設し、中国とアセアンとの観光共同体を築く」というテーマで開催され、広西チワン族自治区の観光業をさらに推進させた。

表 I-3-14 中国・アセアン博覧会（CAEXP0）の開催とテーマ

年	博覧会	テーマ国	テーマ	
			中国語	日本語
2004	第 1 回	-	共註合作之水、 啓動時代之鐘	共に提携して新しい時代を創 作
2005	第 2 回	-	盛会、機会、互惠	盛会、機会、互惠
2006	第 3 回	-	共同的需要 共同的未来	共同の需要 共同の未来
2007	第 4 回	ブルネイ	港口合作	貿易の提携
2008	第 5 回	カンボジア	信息通信合作	情報と通信の提携
2009	第 6 回	ラオス	海関與商界合作	税関と業界の提携
2010	第 7 回	インドネシア	自貿区與新機遇	自由貿易区の建設と発展
2011	第 8 回	マレーシア	環保合作	環境保護の提携
2012	第 9 回	ミャンマー	科技合作	科学技術の提携
2013	第 10 回	フィリピン	区域合作發展-新機遇、 新動力、新階段	地域提携發展-新しいチャン ス、新しい動力、新しい段階
2014	第 11 回	シンガポール	共建 21 世紀海上絲綢之路	21 世紀の海上シルクロードを 共に建設
2015	第 12 回	タイ	承載絲路願景、 相聚東博盛会	シルクロードの願望を伝承し、 博覧会に集う
2016	第 13 回	ベトナム	共建海上新絲路、 共享精彩東博会	海上シルクロードを共に建設 し、素晴らしい博覧会を共有

資料：中国アセアン博覧会ホームページにより筆者作成

注：テーマ国は、第 4 回博覧会から始まり、アセアンの国名のアルファベット順で担当。

3. 広西チワン族自治区のエスニック・ツーリズム

人々が広西チワン族自治区に対して抱いているイメージとしては「歌の海」、すなわち人々の歌であふれている大海のような地域というものである。1958 年に中国共産党第 8 次人民代表大会第 2 次会议が開かれ、その会議上で毛沢東は「全面的に収集、重点的に整理、強力的に普及、研究の強化」というスローガンの下に民間歌謡の収集を提唱し、全国で新しい民間歌謡運動が始められた。このような背景の下に、チワン族に関わる歌集である『劉三姐』が収集・整理された。1958 年の冬に、広西チワン族自治区柳州市政府は、劉三姐を独特な民族的色合いの強いローカルな題材として中国建国 10 周年の祝い物に定めた。その後、劉三姐に関わる歌劇が公演されて好評を博し、高い人気を得た。塚田（2014）によると、その後 1960 年代初期に長春電影（映画）製片廠が制作したカラー映画『劉三姐』は、桂林の山水を背景として劉三姐の美しい歌に合わせた作品として、中国各地のみ

ならず、東南アジアでもて上映され、大きな話題となっていた⁶³。劉三姐は、チワン族に伝えられる伝説上の娘で、歌の巧みな歌い手であり、映画中の「美しい桂林山水、美しい劉三姐、美しい山歌」というイメージは急速に全国に広がり、桂林の山水を見学し、劉三姐の山歌を訪ねるが人々の意欲をかきたて、数多くの人々が桂林市を訪れた。このように、1960年代に映画『劉三姐』上映の影響によって、自然鑑賞と主体する民族風情に触れる大衆的な民族観光が初めて広西チワン族自治区に誕生した。しかしその後、文化大革命の時期に劉三姐とその関連文化が批判の対象となり、チワン族の文化を訪ねとする熱意も衰退していった。

1980年代になると、チワン族の文化を回復しようとする動きが起こり、劉三姐会社、劉三姐タバコ、劉三姐景観園等々の劉三姐に関連した企業、製品、プロジェクトがよく現われるようになった。1990年代になると、序論で述べたように、中国政府は1992年に「友好観光年」を開催し、そこには中国西南部の少数民族を扱う「民族風情直面」が含まれたが、それは地域の特性を活かして主題化されたエスニック・ツーリズムであった。そして、1993年に広西チワン族自治区政府は、チワン族の民謡を本格的に観光資源として活用し、南寧市で「広西国際民歌節」を開催した。その後、1999年になると、「広西国際民歌節」の名称は「南寧国際民歌節」に変更され、「99（南寧）民族服飾博覧会」、「広西民族風情展演」などの民族文化に関する観光イベントを盛り込みながら、国の内外から多くの観光客を誘致し、多大な経済的効果をもたらした。さらに、2000年代に入ると、桂林の自然風景と少数民族文化を結び合わせた観光開発が再認識されるようになった。翌年に、桂林広維文華旅遊文化産業会社の投資により「印象・劉三姐」という桂林の山水を舞台にした大型の実景演出ショーの建設が始められた。3年の期間を経て2004年になると、世界で最も大きな規模の山水を舞台にした実景演出ショーが登場した。桂林広維文華旅遊文化産業会社によると、全世界で唯一の山水実景演出ショーである「印象・劉三姐」は、伝統的なステージの限られた空間と違い、そのままの自然を舞台として劉三姐の定番歌、広西少数民族風情、漓江の漁り火の風景などの内容を上演するのである。「印象・劉三姐」公演場所は桂林陽朔の漓江の近くで、座席総数は2,200席、そのうち普通席は2,000席、VIP席は180席、プレジデント席は20席である。パフォーマーは、600人以上の特殊訓練を受けたチワン族、ヤオ族とミャオ族などの役者から構成され、鮮やかな民族衣装で約1時間のショーが上演された。伝統的なショーでは人工的な舞台装置が作られるが、「印象・劉三姐」は本物の山水を舞台としたショーであり、「人と自然の調和」と「神と協力する傑作」などの言葉で桂林広維文華旅遊文化産業会社のホームページで宣伝された。

広維文華旅遊文化産業会社の統計データによると、2004年から2013年にかけての10年の間に、「印象・劉三姐」のショーは4,500回の公演が行われ、約1,000万人の観光客を迎えたが、そのうち約200万人が国際観光客であった。また、桂林市統計データによると、陽朔県の観光人数は2003年の282万人から2013年には1,170万人に増え、宿泊人数は23万人から430万人に増加した。ホテルの部屋数は6,100室から42,000室に急増し、

⁶³塚田誠之（2014）：「広西チワン族の文化資源：その形成と地域性」『中国の民族文化資源：南部地域の分析から』風響社。

観光総収入は2億元から61億元となって、多大な経済効果をもたらした。また、「西部大開発」政策の実施によって、中国西北部および西南部の県レベルの少数民族居住地域で「民俗風情游」がよく見られるようになり、観光客を誘致するために、桂林市の「印象・劉三姐」を真似した光のショーも登場した。その一例が、河池市巴馬ヤオ族自治県の「夢・巴馬」であり、ヤオ族の伝統文化を中心とする光のショーが毎週上演されている(写真I-3-2)。



写真 I-3-1 「印象・劉三姐」山水を舞台にした实景演出ショーの様子
(桂林広維文華旅遊文化産業会社のホームページの写真 2017年3月3日取得)



写真 I-3-2 「夢・巴馬」山水を舞台にした实景演出ショーの様子
(2016年8月18日 筆者撮影)

第4節 考察

以上述べてきたように、少数民族観光の2つの省（雲南省、貴州省）および1つの観光区（広西チワン族自治区）におけるエスニック・ツーリズムの概況を捉えたが、中国のエスニック・ツーリズムは、さまざまな面でこの3つの地域で最も代表的なエスニック・ツーリズムの発展地区であると思われる。

雲南省では1960年代に、エスニック・ツーリズムの動きが芽生え、1980年代に、西双版纳の観光開発を皮切り、中国西南部のエスニック・ツーリズムブームが始まった。そして1990年代に国家レベルの観光プロモーションの開催を契機に、エスニック・ツーリズムが発展し始め、2000年代からは西部大開発の経済成長に恵まれてエスニック・ツーリズムが盛んになった。

貴州省では1980年代から西部観光ルートの開発を契機に、西部観光ルートで有名な黄果树瀑布を中心とする観光開発が行われ、雲南省を訪れる一部の観光客を惹きつけた。そして1986年に、東部観光ルートの開発も注目されて、黔东南ミャオ族トン族自治州に暮らしているミャオ族やトン族も観光開発の対象となり、貴州省のエスニック・ツーリズムの展開が始まった。1990年代になると、さまざまな少数民族の伝統文化が観光開発され、多くの国内外の観光客を誘致した。2000年代に入ると、少数民族文化とカルスト地形とを共に観光開発するエコツーリズムが注目され、エスニック・ツーリズムも発展した。

広西チワン族自治区は、中国で少数民族の人口が最も多く、そこにはチワン族も含まれており、チワン族の文化を中心とする観光開発が最初に起こった。1960年代初期に長春電影（映画）製片廠が製作した『劉三姐』の上映によって、桂林を訪れることに人々は夢中になり、自然鑑賞を主体する民族風情に触れた大衆的な民族観光が初めて広西チワン族自治区に誕生した。1980年代になると、チワン族の伝統文化がさらに観光開発されて、エスニック・ツーリズムが進展したが、1990年代にチワン族の民謡が本格的に観光資源として開発されることによって、エスニック・ツーリズムはさらに発展した。2000年代に入ると、西部大開発政策の実施によって、チワン族の文化観光は隆盛となり、中国西北部および西南部の県レベルの少数民族居住地域で「民俗風情游」がよく見られるようになって、多くの観光客を誘致し、エスニック・ツーリズムがさらに発展を遂げるようになった。

西南中国のエスニック・ツーリズムの発展においては、中国の成立から今日に至るまで、国家による政策と資金の支援が不可欠であったと思われる。換言すれば、1978年の改革開放によってエスニック・ツーリズムの幕が本格的に開かれ、1980年代に西南中国のエスニック・ツーリズムが登場した。そして1990年代には国家から観光産業が支えられて、各地で旅遊局の成立と観光法規の整備などによりエスニック・ツーリズムは発展のピークを迎えたが、2000年代の西部大開発戦略の実施によって国家からさらに優遇政策と大量資金の投入がなされ、観光施設が大規模に整備されて、エスニック・ツーリズムの発展には拍車がかかるようになった。そこで次に、中国におけるエスニック・ツーリズムの開発類型を検討する。

中国の観光研究の分野ではさまざまな研究者が、中国の観光業の発展を2つの時期に分けている。すなわち、政府主導の観光の時期と経済主導の観光の時期である。政府主導の

観光は、国営の旅行会社が設立され、国有のホテルも開かれるが、計画経済の下で高度な集権体制にあるため、首長の決断がそのまま用いられ、市場経済のルールが考えられていない。章（1998）によれば、政府主導の観光の結果は、極端な行政干渉、開発地域の制限、市場経済ルールへの違反、一部のリーダーの専横的判断などのデメリットがあったため、観光業の発展にとってマイナスであった⁶⁴。それに対して経済主導の観光は、経済を中心とする開発を展開し、経済を優先して考慮するため、市場経済の資源配置が受けられ、観光業の発展が促進される。しかし、経済利益を追求するために、観光資源の過度の開発という状況がしばしば現れるようになった。

表 I-3-15 をみると、西南中国におけるエスニック・ツーリズムの発展状況は、3つの段階に分けることができると思われる。第1の段階は、1958年から1978年までの政府主導の観光によるものの発展期である。この時期には、改革開放前の中国で経済発展が主に政府主導の計画経済であったため、西南中国の観光業だけではなく、全国の観光業はすべて政府によって開発されたものである。第2の段階は、1979年から1999年までの間の政府と経済が半ば主導し合う観光開発である。この時期には、改革開放政策の実施によって、東部地区の大都市の経済が急速に発展を遂げたため、経済的に豊かになった都市住民たちが観光のニーズを生み出し、国内観光も徐々に発展していった。しかし、西部地区では、さまざまな原因で改革開放が東部地区ほどには進められなかったため、市場経済の発展は不十分であり、不健全な市場メカニズムによるエスニック・ツーリズムの開発が生じたため、政府主導も必要とされた。李ほか（2002）によると、市場経済の条件下においても、社会経済のある領域では政府主導の戦略が採用されなければならない、そして特に今日までの西部地区における観光産業の大成功は政府主導の開発戦略を発揮した結果であった⁶⁵。第3の段階は、2000年から現在までの経済主導の開発期である。この時期において、2000年代になると、西部大開発政策の実施によって、西部地区の経済は急速に進展し、市場経済の発展も加速した。また、多くの企業が西部地区に投資し、経済利益を追求するために、エスニック・ツーリズムの開発に参入している。旅行会社は、都市で運営するだけではなく、郷村に至るまでその活動範囲を広げていった。特に、近年では「観光脱貧」の政策が行われ、政府はその成果を挙げるために、積極的に企業を導入している。しかし、観光企業が容易に観光資源を入手し、過度な観光開発を推進する恐れもある。

表 I-3-15 西南中国エスニック・ツーリズムの発展3つの時期

段階	観光開発類型	市場経済の役割
第一段階（1958～1978年）	政府主導	五カ年経済計画期
第二段階（1979～1999年）	政府と経済が半ば主導し合う	市場経済の模索期
第三段階（2000～現在）	経済主導	市場経済主導期

資料：西南中国のエスニック・ツーリズムの発展状況により筆者作成

⁶⁴章尚正（1998）：「〈政府主導型〉旅游発展戦略的反思」『旅游学刊』第6期、21-22頁。

⁶⁵李樹民・陳実（2002）：「論西部旅游業実施政府主導型戦略的宏観分析」『人文雑誌』、66-68頁。

第5節 まとめ

本章では、西南中国におけるエスニック・ツーリズムの展開を理解するために、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の三つの地区のエスニック・ツーリズムの発展動向を把握した。この地域は、中国全土の少数民族の人口のうち42%を占めているが、多くの人々が貧困に苦しんでいるため、政府は東部地区の経済発展との格差を縮小するために、その地区の唯一の特色である民族文化を観光資源として開発することになり、エスニック・ツーリズムの発展を推進した。

雲南省と広西チワン族自治区では、すでに1960年代にはエスニック・ツーリズムの動きが芽生えていた。そして、雲南省では、1980年代に西双版纳の観光開発を皮切りに、中国西南部のエスニック・ツーリズムブームが引き起こされた。同時に、雲南省および広西チワン族自治区と隣接する貴州省は、1980年代から西部観光ルートの開発を契機に、観光業が発展し始め、1980年代後半に、東部観光ルートの開発によりエスニック・ツーリズムの展開が始まった。1990年代になると、雲南省は国家観光政策の恩恵を受け、さまざまな民族の伝統文化を観光資源とすることによって、大きな経済効果を生み出した。また1990年代における広西チワン族自治区のエスニック・ツーリズムは、主にチワン族の文化を中心として開発され、多くの観光客を誘致した。この時期の貴州省では、東部観光ルートの開発が続けられ、多大な経済効果を得てエスニック・ツーリズムが発足した。そして2000年代になると、西部大開発政策の実施によって、観光インフラが急速に進展したことから、3つの地区のエスニック・ツーリズムは急速な発展を遂げた。

以上の状況を考察することで、西南中国エスニック・ツーリズムの発展は3つの時期に分けることができ、1958年から1978年までは政府主導による観光の発展期で、1979年から1999年までは政府と経済が半ば主導し合う観光開発の時期で、2000年から現在までは経済主導の観光開発期であったことを指摘した。

第4章 エスニック・ツーリズムにおける少数民族文化の観光活用

第1節 観光資源の定義と分類

1. 日本における観光資源の定義と分類

日本で「観光資源」という言葉は、足羽（1997）によれば、日本の鉄道省国際観光局が1920年代から昭和初年まで慣用していた「resource for tourists」を「観光資源」に訳したものが、今日に至るまで用いられている⁶⁶。こうした経緯を踏まえて足羽は、「日常生活圏を離れた、どこか遠いところに行ってみたいという観光行動の動機をもたらす何らかの魅力ある存在」を観光資源として定義した。また、須田（2003）は観光資源について「観光の対象、観光行動の目的となるあらゆるもの」と規定した。さらに、高橋（2014）は第二次世界大戦前から2014年までに観光対象、観光資源および観光施設の定義と分類について日本における様々な研究者の考え方を整理・検討したが、観光対象および観光資源の定義は共通していることを指摘した⁶⁷。すなわち、観光対象とは「観光客の欲求を喚起したり、充足させる目的物」であり、観光資源は観光対象の素材であるということを指摘した。

観光資源の分類について足羽（1997）は、津田昇（1969）による観光資源の分類に基づいて、自然的資源、文化的（人文的）資源、社会的資源、産業的資源の4つの種類に分けている（表I-4-1）。

表 I-4-1 観光資源の分類

名 称	内 容
自然的資源	(1)天然資源 ①風景 ②温泉 ③動植物・野生生物 (2)天然現象 ①気候・風土 ②気象 ③自然現象 ④天体観測
文化的（人文的）資源	(1)有形文化財 (2)無形文化財 (3)民俗文化財 (4)史跡 (5)名勝 (6)天然記念物 (7)伝統的建造物群 (8)歴史的風土 (9)風土記の丘 (10)歴史的港湾環境
社会的資源	(1)有形社会資源 ①都市 ②都市公園 ③教育・社会・文化施設 ④テーマパーク等 (2)無形社会資源 ①人情・風俗・民話・行事など ②国民性・民族性 ③衣食住・生活 ④芸術・芸道・芸能・スポーツ
産業的資源	(1)工場施設 (2)観光農林業 (3)観光牧場 (4)観光漁業 (5)展示施設

資料：足羽洋保（1997）『観光資源論』中央経済社、7頁

⁶⁶足羽洋保（1997）：『観光資源論』中央経済社、5頁。

⁶⁷高橋光幸（2014）：「観光資源の定義と分類に関する考察」『富山国際大学現代社会学部紀要』第6巻、109-125頁。

表 I-4-2 観光資源の体系

名称	有形観光資源	無形観光資源	総合観光資源
自然 観光 資源	(1)温泉 (2)海（岸）、河川（湖沼） 山岳（高原） (3)動植物（植物、動物） (4)天体（星）	(1)自然現象（不知火、し んきろう、オーロラ） (2)気象（雪、雨、四季） (3)音	(1)自然公園（国立公園、国 定公園、府県立自然公 園） (2)動物園、植物園、水族館 (3)風光
歴史 文化 観光 資源	(1)建造物 (2)史跡（史跡、城郭） (3)美術工芸（絵画） (4)有形民俗文化財	(1)無形文化財（音楽、技 術、民話、能楽、演劇） (2)無形民俗文化財	(1)神社寺院（庭園） (2)美術館、博物館（記念館） (3)テーマパーク
複合観 光資源	—	—	(1)都市、農村（景観） (2)リゾート
テーマ 別観光 資源	(1)産業文化財（産業遺 産） (2)生産工場 (3)エネルギー (4)交通通信 (5)観光牧場、観光震場	(1)産業体験（農業、鉱業、 工業） (2)専門技術（わざ、熟練）	(1)産業博物館、資料館 (2)インダストリアルパー ク（総合産業公園） (3)産業観光地域（産業テー マパーク）

資料：須田寛（2003）『実務から見た新・観光資源論』49頁の表3-1をもとに筆者作成

表 I-4-3 観光資源と文化財・記念物の対応

ランク	自然資源	人文資源
特 A 級	●国立公園に属するもの ●特別名勝 ●特別天然記念物	●国宝 ●特別史跡
A 級	●国定公園に属するもの ●名勝 ●天然記念物	●国宝 ●重要文化財 ●史跡
B 級	●都道府県立自然公園に属するもの ●都道府県指定の名勝 ●都道府県指定の天然記念物	●都道府県の文化財
C 級		●市町村指定の文化財

資料：足羽洋保(1997)『観光資源論』中央経済社、123頁の表5-3引用

また、須田（2003）は観光資源の分類について、自然観光資源、歴史文化観光資源、複合観光資源の3つがあると考え、さらにテーマ別観光資源を産業観光資源と街道観光資源に分けている（表 I-4-2）。さらに、高橋（2014）は日本における研究者の観光資源に対する分類としては、自然観光資源、人文観光資源、複合型観光資源の3つに分類する考え

方と自然観光資源、人文観光資源の2つに分類する考え方が多いことを指摘した。日本での観光資源の評価については、足羽が（財）日本交通公社の開発手法をもとに、観光資源を「特A級」「A級」「B級」および「C級」の4ランクに格付けている（表I-4-3）。

2. 中国における観光資源の定義と分類

中国では、観光資源という言葉に代って「旅游资源」という言葉を用いている。しかしここでは、議論の統一を図るため、あえて観光資源という言葉を用いる。その定義は様々であり、王ほか（2006）は『中国旅游资源教程』の中で、観光資源の基本的な構成因子を考察した⁶⁸。すなわち、第一の因子は、旅行者を魅了し、人々の旅行行動に対する動機をかきたてることである。第二因子は、利用可能性と開発価値性を持ち、現段階の観光産業に利用されると同時に、旅行者の趣味と習慣の変化に適応して転換することができることである。第三因子は、その資源の開発が、経済効果、社会効果、環境保護の上で役立っていることである。以上の因子に基づいて、『中国旅游资源教程』の中では、主たる中国人研究者による観光資源についての定義の仕方を整理・把握し、観光資源の定義を総括している。すなわち、観光資源とは「人々を魅了する、開発価値がある、人間に利用される」という3つの要素を含み、観光資源（Tourism Resources）またはアトラクション（Tourist Attraction）と呼ばれ、旅行者の旅行行動の動機をかきたて、観光産業に利用されることができ、同時にその開発が経済効果、社会効果などの利益を生じさせるような自然のおよび社会的な事物・現象の総括であるものを指す。また、李ほか（2006）は『旅游学概論』の中で、さまざまな研究者の観光資源に関する定義を把握した上で、観光資源を定義している⁶⁹。すなわち、自然界あるいは人間社会の中にあつて、旅行者の旅行動機をかきたてることができ、旅行者によって消費され、また経済収益、社会収益、環境収益などの利益を生じさせる各種の事物と要素のすべてを観光資源と呼ぶことができる。

また、王文亮（2001）は観光資源の分類について、中国では従来、自然観光資源と人文観光資源に分類されてきたと指摘している。王莉霞ほか（2006）によれば、表I-4-4に示しているように観賞性、地域特有性、多様性、統一性、移植不可能性、時代性、民族性、文化性および持続可能な開発性などの属性により、観光資源は自然観光資源と人文観光資源の2つに分類している。しかし、王文亮（2001）は中国での従来の分類をもとに、観光資源を自然観光資源、歴史文化名城観光資源、社会観光資源の3つに分類している（表I-4-5）。さらに、高山（2007）はスミスによる観光形態の分類（民族観光、文化観光、歴史観光、環境観光、レクリエーション観光）をもとにし、また中国では共産党ゆかりの場所を訪ねる政治的巡礼の旅が「紅色旅游」と呼ばれたり、革命観光（日本語訳）と称されたりしている状況を考慮して、中国の観光形態を改めて分類した⁷⁰。すなわち具体的には、表I-4-6のように、中国観光の分類としては、歴史文化観光、民族観光、エコツーリズム、レクリエーション観光、革命（遺跡）観光の5つの種類があると主張している。

⁶⁸王莉霞・張蕾（2006）：『中国旅游资源教程』陝西人民出版社、3-7頁。

⁶⁹李肇栄・曹華盛編（2006）：『旅游学概論』清華大学出版社、127頁。

⁷⁰高山陽子（2007）：『民族の幻影－中国民族観光の行方』東北大学出版社、19-20頁。

表 I-4-4 観光資源の分類

名称	種 類	内 容
自然 観光 資源	地文資源	典型の地質構造、生物化石、自然災害遺跡、岳景観、谷間景観、火山、カルスト地形、砂漠地形など
	水体資源	河川、湖、滝、海洋、現代の氷川など
	気候、生物資源	森林景観、草原景観、動植物自然保護区、気象気候、天象奇観、宇宙景観など
人文 観光 資源	歴史文化 遺産資源	古人遺跡、軍事遺跡、古代建築物石窟、石碑、古人工事、陵墓、名人遺跡、宗教建築物、宗教活動、宗教芸術、古城と古城遺跡など
	現代人文資源	近代建築と大型工事、科学教育、文化施設、現代の都市特色景観、スポーツフィットネス施設、娯楽はレジャーする施設、都市田舎景観など
	抽象人文資源	山水文学作品、民間物語、書道、絵、映画テレビ、戯曲、音楽、ダンス、宗教文化、民間文芸、少数民族文化、特色民俗など

資料：王莉霞・張蕾（2006）『中国旅游资源教程』陝西人民出版社、3-7 頁の内容をもとに筆者作成

表 I-4-5 観光資源の分類

名 称	種 類
自然観光資源	a. 地質観光資源 b. 地形観光資源 c. 気象・気候観光資源 d. 水系観光資源 e. 生物観光資源 f. 宇宙観光資源
人文観光資源	a. 歴史文化名城観光資源 b. 旧跡観光資源 c. 宗教文化観光資源 d. 交通観光資源 e. 建築物・庭園観光資源 f. 文学芸術観光資源
社会観光資源	a. 風俗習慣観光資源 b. 購物観光資源 c. 都市景観観光資源 d. 会議観光資源 e. ビジネス観光資源 f. スポーツ・保健観光資源 g. 娯楽観光資源

資料：王文亮（2001）『中国観光業詳説』日本僑報社、274 頁の内容をもとに筆者作成

表 I-4-6 中国観光の分類

名 称	中国語	対 象
歴史文化観光	人文旅游・歴史文化游	歴史文化遺産（歴史遺物、古鎮）
民族観光	民族旅游・民族風情游	少数民族の風俗習慣
エコツーリズム	自然旅游・生態旅游	自然環境
リクリエーション観光	度假游（農家楽）	リゾート地・レジャー施設 （テーマパーク、グリーンツーリズム）
革命（遺跡）観光	紅色旅游	愛国主義教育基地

資料：高山陽子（2007）『民族の幻影-中国民族観光の行方』東北大学出版社、20 頁の内容をもとに筆者作成

前述したように、面積 685 万 km²で、全国土の 71%を占める中国の西部地区は、広大な土地の上に豊かな自然資源と文化資源を有しており、またさまざまな観光資源を形成している。以下では、さまざまな観光資源の分類方法を考慮しながら、主に須田寛の主張にもとづいて、本論文の研究対象である西南中国の観光資源を分類する（表 I-4-7）。

中国では観光交通、観賞性、観光安全、観光衛生、郵便サービス、買い物の便利さ、経営管理の完備、資源と環境の保護、観光資源の吸引力、市場経済の潜在力、年間国内観光客の数、観光客に対するアンケートの満足度などの方面から観光資源を AAAAA 級、AAAA 級、AAA 級、AA 級、A 級の 5 つのランキングによって評価している。

表 I-4-7 西南中国の観光資源の分類

名称	有形観光資源	無形観光資源	総合観光資源
自然 観光 資源	(1) 海（北部湾）、河川（紅水河）、湖、滝 (2) カルスト地形、高原（雲貴高原）、盆地、洞窟 (3) 動植物（植物、動物）	(1) 自然現象 (2) 気象（雨、四季）	(1) 自然公園（国立公園） (2) 動物園、植物園、水族館 (3) 風光
歴史 文化 観光 資源	(1) 伝統的建造物群 (2) 史跡、革命遺跡、古城 (3) 美術工芸（絵画） (4) 有形民俗文化財	(1) 無形文化財（音楽、技術、民話、演劇） (2) 無形民俗文化財（祭り儀礼、服飾文化など）	(1) 美術館、民族博物館（記念館） (2) テーマパーク
複合 観光 資源	—	—	(1) 都市（辺境都市） 農村（民族村） (2) リゾート (3) エコミュージアム (4) 民族テーマパーク

資料：須田寛（2003）『実務から見た新・観光資源論』をもとに筆者作成

第 2 節 河池市の少数民族の観光資源

1. 河池市の概況

河池市は、広西チワン族自治区の北部に位置し、南寧市、百色市、柳州市、来賓市、貴州省に接する（図 I-4-1）。東西の長さは 228km、南北 260km、全市の土地面積は 3 万 3488km²である。市域内の地形は複雑多様な構造で、峰々に連なるカルスト地形が広く分布し、広西チワン族自治区でも最も代表的なカルスト自然景観である。河池市統計資料によると、河池市区域内の 11 の区・市・県でカルスト地形の面積は 2.2 万 km²、全市の面積の 66%を占め、広西チワン族自治区カルスト地形の総面積の 24%を占める。その中でもカルスト地域の面積最大の都市として、「カルスト王国」と呼ばれている。こうしたカルスト地区で生活している住民の 90%は少数民族で、独自の豊かな文化を持っている。

河池市は、モンスーンの気候に属し、夏が長いのに対して冬は短く、霜も降らない。年間の日照時間はおよそ 1,400～1,800 時間であり、気温は 7～22℃である。降雨量は非常に多く、年間降雨量は 1,551mm で、全国の年平均降雨量 629mm や世界の年平均降雨量 730mm と比べると 2 倍あまり高い。しかし、カルスト地形が広がり、四季を通じて多くの雨が降るため、頻繁に自然災害が起こり、かならずしも住みやすい環境とはいえない。市域内の最大の河川は紅水河で、布努ヤオ族の居住分布地はほぼ紅水河の中流域に位置し、樂業から天峨、南丹、東蘭、巴馬、大化、都安、馬山、忻城を経て、来賓に至るまで延びている。

表 I-4-8 に示しているように、河池市の戸籍人口は 419 万人であり、常住人口は 337 万人で、戸籍人口は常住人口に比べて約 50 万人多いが、それは近年東部沿海部に出稼ぎをする人々の人口が増加しているからである。

河池市には、チワン（壮）族、ヤオ（瑤）族、ムーラオ（仫佬）族、マオナン（毛南）族、ミャオ（苗）族、プイ（布依）族、スイ（水）族、トン（侗）族、回族などの少数民族が暮らしている。表 I-4-9 をみると、河池市の少数民族の人口は 282 万人で、民族ごとの人口比率では 85%を占めている。そのうち、チワン族の人口は 224 万人と最も多く、第 2 位のヤオ族人口は 36 万人、第 3 位のムーラオ族の人口は 13 万人である。また、広西チワン族自治区統計局のデータによると、河池市の人口における少数民族の構成比は、広西チワン族自治区 14 市のうち第 3 位であり、少数民族の人口比率が高い。

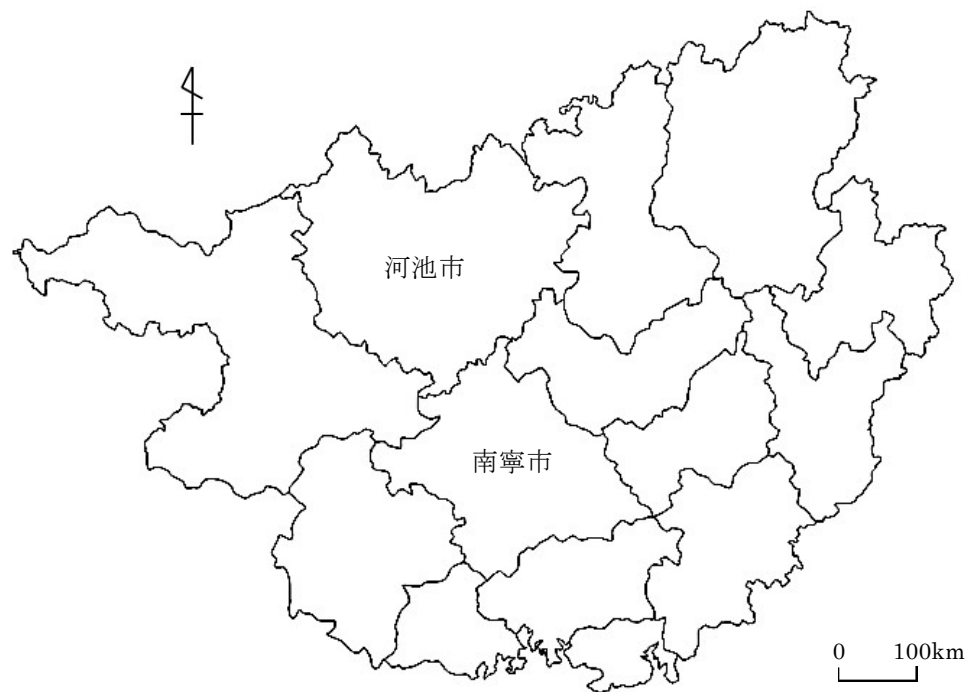


図 I-4-1 広西チワン族自治区河池市の位置
(筆者作成)

表 I-4-8 河池市の行政別面積と人口（2010 年）

行政区	面積 (km ²)	常住人口 (万人)	戸籍人口 (万人)
金城江区	2,346	33	34
宜州市	3,860	56	66
南丹県	3,899	28	31
天峨県	3,195	16	17
鳳山県	1,743	16	21
東蘭県	2,434	21	30
羅城ムーラオ族自治県	2,640	30	38
環江マオナン族自治県	4,560	27	38
巴馬ヤオ族自治県	1,965	22	28
都安ヤオ族自治県	4,092	52	70
大化ヤオ族自治県	2,753	36	46
合 計	33,488	337	419

資料：中国国家统计局「中国 2010 年人口調査県別統計資料」により筆者作成

表 I-4-9 河池市の民族構成（2010 年）

民族	人口 (人)	比率 (%)
チワン（壮）族	2,237,546	66.90
漢族	518,413	15.50
ヤオ（瑤）族	357,084	10.68
ムーラオ（仫佬）族	125,786	3.76
マオナン（毛南）族	58,484	1.75
ミャオ（苗）族	23,655	0.71
プイ（布依）族	8,781	0.26
スイ（水）族	6,414	0.19
トン（侗）族	4,779	0.14
回族	1,054	0.03
その他	2,860	0.09

資料：広西チワン族自治区統計局の統計により筆者作成

図 I-4-2 は、河池市における三大産業別 GDP の割合の推移であり、年間 GDP は 1990 年の 28 億元から 2015 年までの間に 618 億元に成長した。産業別にみると、1990 年代の河池市では第一次産業の割合が最も高かった。すなわち、1990 年代の河池市は農業を中心とする地区であり、観光産業を含む第三次産業の割合は最も低かったのである。しかし、2000 年代になると、西部大開発の実施によって GDP の成長が著しくなり、重工業などの第二次産業が大きく発展して、三大産業の中で第二次産業の割合が最高となり、56 億元に達した。とは言え、第一次産業と第三次産業の GDP の割合はほぼ同様であり、三大産業の間の差は小さい。2010 年になると、観光産業などの第三次産業の GDP の成長は 2005 年の GDP と比較して、大幅に成長した。また、2015 年になると、第三次産業の GDP は大幅に成長し、三大産業の中で GDP が最高となったが、それは観光産業の発展が著しくなっているからであると思われる。

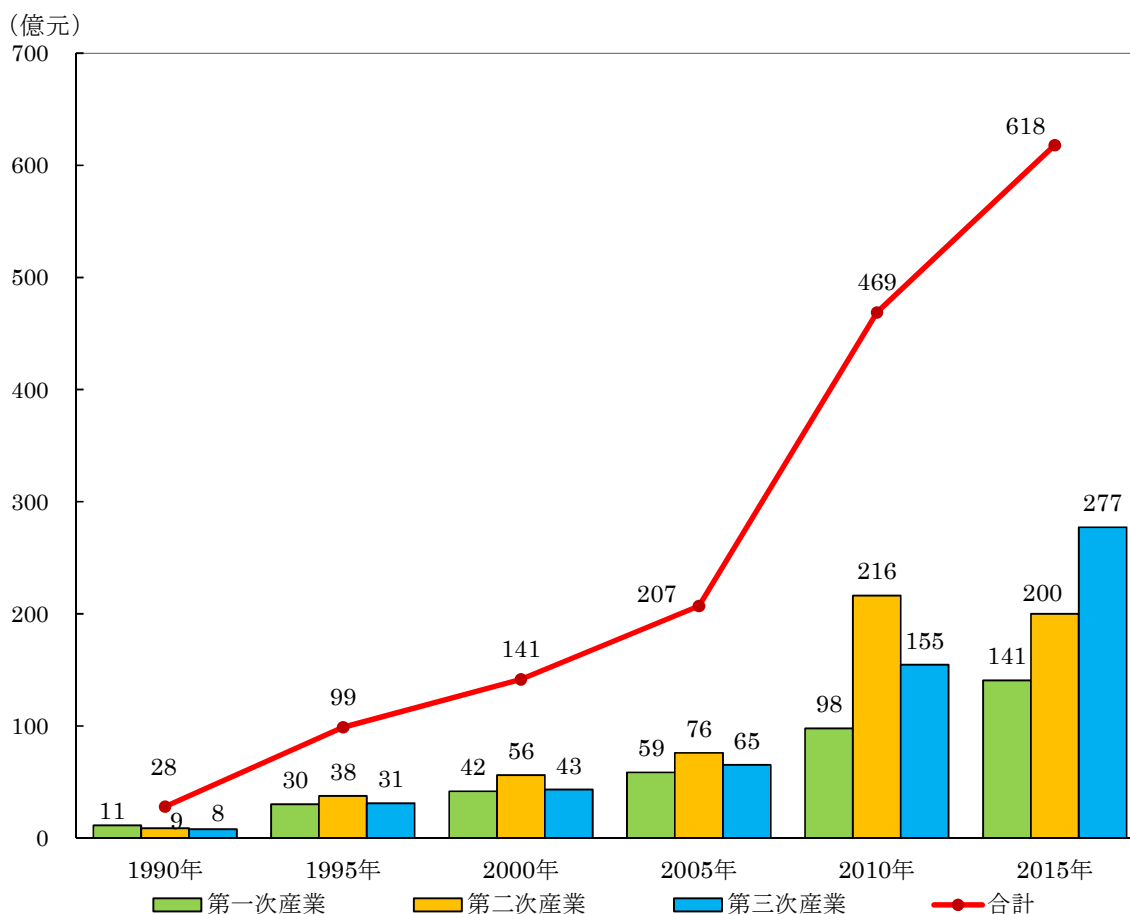


図 I-4-2 河池市の産業別 GDP の推移

資料：広西統計局「広西統計年鑑 2015」の統計により筆者作成

2. 河池市の観光資源

河池市は、30カ所の国家級の観光景勝地を有しており、そのうち4A級の観光景勝地は9カ所、3A級の観光景勝地は15カ所、2A級の観光景勝地は6カ所である（表 I-4-10）。また、観光資源のうちでも近年人気のある革命聖地観光は、河池市東蘭紅色観光（革命聖地）区と巴馬ヤオ族自治県西山紅色旅遊（革命聖地）区の2つである。須田による観光資源の分類を当てはめると、河池市の観光景勝地は自然観光資源と人文観光資源を有しているだけではなく、複合的な観光資源もみられる。しかし、30カ所の国家級の観光景勝地を観光資源種類によって分類することは難しいと思われる。その理由は、河池市の少数民族の分布地は幅広いため、それぞれの観光景勝地はその土地の少数民族の文化観光の要素にも含まれており、複合しているからである。例えば、巴馬ヤオ族自治県の盤陽河景勝地では、盤陽河のさまざまな自然の観光スポットを有しているだけではなく、盤陽河沿岸で代々で暮らしてきたヤオ族の人々がおり、その伝統文化に多くの観光客が魅了されている。典型的な少数民族の伝統文化を中心に観光開発が行われている観光景勝地は、河池市宜州劉三姐故郷観光区と南丹県歌姫思谷・中国白褲瑤生態民俗風情園景勝地である。

表 I-4-10 河池市国家級の観光景勝地（2015 年）

等級	総数	観光景勝地
AAAAA	0	—
AAAA	9	巴馬盤陽河景勝地
		巴馬水晶宮景勝地
		広西鳳山国家地質公園景勝地
		河池市東蘭紅色観光（革命聖地）区
		河池市宜州劉三姐故郷観光区
		河池天峨県龍灘大峽谷景勝地
		宜州市会仙山景勝地
		南丹県歌娅思谷・中国白褲瑤生態民俗風情園景勝地
		広西大化七百弄国家地質公園景勝地
AAA	15	南丹温泉公園
		河池市天峨県龍灘水力発電所景勝地
		南丹白褲瑤生態博物館（エコミュージアム）
		金城江小三峽旅遊景勝地
		河池市金城江公園
		南丹県銅江公園景勝地
		河池市環江県牛角寨瀑布（滝）群景勝地
		河池市巴馬長寿島景勝地
		河池市巴馬仁寿源景勝地
		河池宜州市古龍河漂流（ラフティング）景勝地
		宜州市拉浪林場景勝地
		宜州市西竺寺景勝地
		羅城県成龍湖公園景勝地
		天峨県大山原始森林景勝地
		巴馬県西山紅色旅遊（革命聖地）区
		羅城県武陽江景勝地
AA	6	宜州壮古佬景勝地
		羅城清明山莊園景勝地
		河池市都安県石頭開花景勝地
		河池市羅城県剣江景勝地
		都安県八仙樂園景勝地
		—
A	0	—

資料：広西統計局「広西統計年鑑 2015」により筆者作成

3. 河池市における少数民族の文化観光資源

河池市では国家級の観光景勝地をはじめとして、少数民族の文化観光開発においてはほとんどが伝統行事を核とする開発が行われている。ここでは、河池市の少数民族の特色ある伝統的な祭りについて概観する。表 I-4-11 は河池市の 6 つの少数民族の代表的な 13 の祭りを示している。そのなかでも有名なものとしては、チワン族の蚂拐（カエル）節、三月三節、劉三姐歌謡節、銅鼓節であり、またヤオ族の年街節、祝著節、瑤年節、盤王節がある。羅城ムーラオ族自治県で特色のある祭りは走坡節と依飯節である。環江マオナン族自治県で有名な少数民族の伝統行事は分龍節であり、また同じ地域の苗族における牯藏節と布依族の六月六も近年は有名になってきた。

表 I-4-11 河池市少数民族の伝統行事

民族	行事	開催期間（旧暦）	開催地域
壮族	蚂拐（カエル）節	1月1日～2月2日	東蘭県、天峨県、南丹県
	三月三節	3月3日	河池市全域
	劉三姐歌謡節	3月3日	宜州市
	銅鼓節	年によって異なる	河池市 11 県（市・区）
瑤族	年街節	1月13日	南丹県
	祝著節	5月25日～29日	大化県、巴馬県、都安県
	瑤年節	6月30日	南丹県
	盤王節	10月16日	巴馬県
仫佬族	走坡節	8月15日	羅城県
	依飯節	「立冬」後にある吉日	羅城県
毛南族	分龍節	「夏至」後の第一の辰日（龍日）	環江県
苗族	牯藏節	10月16日	環江県
布依族	六月六節	6月6日	環江県

資料：河池市人民政府ホームページ掲載情報により筆者作成

注：1) 銅鼓節は河池市 11 県（市・区）で順番に主催する。

2) 夏至は毎年の新暦 6 月 21～22 日である。

3) 立冬は毎年の新暦 11 月 6～8 日である。

4) トン（侗）族と回族の伝統行事は入っていない。

表 I-4-12 は、2016 年までに河池市における少数民族に関わる伝統的な文化のうち国家・自治区の無形文化遺産として認定された 26 件を示したものであるが、このうち国家無形文化遺産は 9 件、広西チワン族自治区無形文化遺産は 17 件である。また、認定された文化遺産のうちでチワン族に関わるものは 11 件、ヤオ族は 7 件、マオナン族は 3 件、ムーラオ族 2 件、ミャオ族 1 件であり、それ以外の 2 件は特に民族による区別がないものである。国家と自治区から認定された少数民族に関わるこれらの伝統的な文化遺産は、貴重な観光資源として河池市の各地の政府によって注目されるようになった。

そして、少数民族の生活の改善に資することを目標に、河池市の各地の政府の主導下で、東蘭県、天峨県、南丹県チワン族の蚂拐（カエル）節、宜州市の劉三姐歌謡節、大化ヤオ族県、巴馬ヤオ族県、都安ヤオ族県の布努ヤオ族祝著節、環江マオナン族自治県の分龍節、河池市銅鼓山歌芸術節などの、伝統的な祭りを核とする観光イベントが相次いで開催されていった。そうしたイベントを開催するなかで、観光に関わるインフラが整備されなければならないと考えられるようになったのである。そこで次に、河池市における観光施設の発展状況について検討する。

表 I-4-12 河池市の少数民族における無形文化遺産名簿（2016 年）

等級	無形文化遺産名称		所属地	民族	登録年次
	中国語	日本語解釈			
国家レベル	壮族銅鼓習俗	壮族の銅鼓習俗	河池市	壮族	2006
	壮族蚂拐節	壮族の蚂拐（カエル）節	東蘭、天峨、南丹	壮族	2006
	瑤族服飾	瑤族服装の製作技術	南丹	瑤族	2006
	仫佬族依飯節	仫佬族の依飯節	羅城	仫佬族	2006
	毛南族肥套	毛南族の儺面具文化	環江	毛南族	2006
	劉三姐歌謠	劉三姐の歌謠祭	宜州市	壮族	2006
	竹編（花竹帽編織技術）	花竹帽子の製造技術	環江	毛南族	2011
	密洛陀	瑤族の古歌謠	都安、巴馬、大化	瑤族	2011
	銅鼓舞（南丹勤澤格拉）	白褲瑤族語：勤澤格拉	南丹	瑤族	2014
自治区レベル	壮族春榔舞	壮族の春榔（木の棒）舞	東蘭	壮族	2007
	瑤族祝著節	瑤族の祝著節	大化、巴馬、都安	瑤族	2007
	貢川紗紙制作工芸	紙やすり制作工芸技術	大化	無限定	2007
	壮族打扁担	壮族天秤棒を打つ習俗	南丹、都安、東蘭	壮族	2008
	瑤族猴鼓舞	瑤族のサル鼓舞	南丹	瑤族	2008
	南丹瑤族葬礼習俗	瑤族の葬礼習俗	南丹	瑤族	2016
	苗族服飾制作技術	苗族服装の製作技術	南丹	苗族	2016
	仫佬族古歌	仫佬族の歌謠祭	羅城	仫佬族	2016
	毛南族分龍節	毛南族の分龍節	環江	毛南族	2016
	壮族板鞋舞	板鞋：三人で履く長い靴	南丹	壮族	2016
	天峨壯族八仙	チャルメラ演奏技術	天峨	壮族	2016
	壮族補糧習俗	壮族伝統習俗	巴馬	壮族	2016
	壮族「国調毡」	壮族の蜂鼓（楽器）舞	金城江区	壮族	2016
	破網上刀山	剣の山に登る	金城江区	壮族	2016
	南丹壯族服飾	壮族服装の製作技術	南丹	壮族	2016
	丹泉酒釀造技術	酒の釀造技術	南丹	無限定	2016
	白褲瑤打陀螺	独楽文化	南丹	瑤族	2016

資料：広西チワン族自治区無形文化遺産保護センターホームページにより筆者作成

4. 観光インフラの整備

(1) 交通の整備

河池市区域内の 11 の区・市・県ではカルスト地形の面積が全面積の 66%を占めるため、主な交通経路は自動車道である。河池市の自動車道の整備延長の推移を見ると、主に高速車道、2 級自動車道、4 級自動車道が整備されている（表 I-4-13）。高速車道は 2011 年の 52km から 2015 年までに約 6 倍の伸びで、総延長 323km に達した。また、2 級自動車道は 2011 年の 891km から 2015 年には 1,232km となっている。さらに、4 級自動車道は、2011 年から成長し続け、2015 年までに 9,577km になっている。

さらに、河池市政府は、経済と観光を促進するために、2008 年に 8 億 5011 万元の資金を投入し、6 年後の 2014 年に河池空港が開港された。この空港の開港は、河池を訪れることをさらに便利にただけではなく、河池市にとって自動車道、鉄道、航空路線という立体的な交通ネットワークを形成し、観光業の発展を推進するものとなっている。

表 I-4-13 河池市の自動車道整備の推移

(単位：km)

道路種	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年
高速車道	52	231	233	323	323
1 級自動車道	67	67	67	67	67
2 級自動車道	891	942	1,132	1,178	1,232
3 級自動車道	995	1,016	1,036	1,029	1,018
4 級自動車道	7,712	8,066	8,484	8,920	9,577
合計	11,611	12,005	12,331	12,645	12,914

資料：河池市統計情報網の統計により筆者作成

注：1) 1 級自動車道は重要な政治・経済都市に接続する国道、日平均交通量：10,000～25,000 台。

2) 2 級自動車道は政治・経済都市に接続する国道、日平均交通量：2,000～10,000 台。

3) 3 級自動車道は県以上の都市に接続する国道、日平均交通量：200～2,000 台。

4) 4 級自動車道は県・鎮・郷に接続する道路、日平均交通量：200 台以下。

(2) 観光事業所の整備

2000 年代になると、西部大開発の実施によって、西部地区に対する国家からの投資が増え、河池市はその恩恵によって、観光業に関わる宿泊施設と観光管理所の整備を進めた。表 I-4-14 に示すように、2000 年には河池市の観光管理所は 12 カ所、旅行会社はわずかに 1 社、星ホテルは 5 軒であった。西部大開発の 3 年後には、旅行会社と星ホテルの数は増加し続け、どちらも 10 カ所以上になった。2005 年になると、星ホテルの数は 14 軒になったが、それには四つ星ホテル 1 軒が含まれている。また、それから 2015 年までの間には、河池市における観光事業所数は著しく成長し、観光管理所は 29 カ所、旅行会社は 36 社、星ホテルは 50 軒に達した。

表 I-4-14 河池市における観光事業所数の推移

年	管理所 (カ所)	旅行会社 (社)	ホテル (軒)					
			五つ星	四つ星	三つ星	二つ星	一つ星	合計
2000	12	1	0	0	2	3	0	5
2001	12	5	0	0	2	7	0	9
2002	12	11	0	0	3	7	0	10
2003	11	11	0	0	4	7	0	11
2004	4	11	0	0	5	7	0	12
2005	12	13	0	1	7	6	0	14
2006	12	15	0	1	9	12	1	23
2007	12	16	0	2	12	9	1	24
2008	12	18	0	2	18	10	1	31
2009	12	22	0	2	21	10	1	34
2010	12	25	0	4	28	10	1	43
2011	19	31	0	4	30	12	1	47
2012	19	36	0	5	29	11	1	46
2013	22	38	0	6	28	12	1	47
2014	29	36	0	6	27	16	1	50
2015	29	36	0	7	28	14	1	50

資料：広西統計局「広西統計年鑑 2001～2016 年」の統計により筆者作成

注：星はホテルのランキングを示す。

第 3 節 河池市における少数民族の伝統文化の観光活用

1. チワン族における伝統文化の観光活用

前述したように、中国で人口が最も多い少数民族であるチワン族はさまざまな伝統文化を観光資源として有しており、広西チワン族自治区ではチワン族の伝統文化を資源とする観光開発はすでに 1980 年代からその動きが始まっていた。チワン族の伝統文化の観光活用が活発になされている都市としては特に桂林市が代表的である。その次に活発であるのは河池市であり、ここでは河池市におけるチワン族伝統文化の観光活用について検討する。

(1) 宜州市における劉三姐の観光開発

塚田（2014）によると、劉三姐にまつわる伝承は華南中国各地にあり、広西チワン族自

治区はその伝承がみられる地域の1つに過ぎない⁷¹。前章で述べたように、劉三姐の上演は1950年代後半から1960年にかけて広西チワン族自治区の全域ですでにブームとなり始め、1980年代には劉三姐に関わる観光開発がすでに動きはじめた。河池市に所属する宜州市の劉三姐はその伝承がみられる地域の中の1つとして1993年に観光開発が始められ、1996年には市場化に乗り出したが、宜州市の下枧河に位置する池市宜州劉三姐故郷観光区はそうした開発の先頭を行くものであった。塚田の研究「広西チワン族の文化資源：その形成と地域性」では、2006年までの劉三姐に関わる観光開発の動向についてすでに解釈が試みられており、次にその内容を紹介する。

表I-4-15に示すように、2005年に宜州市は広西チワン族自治区政府から「劉三姐歌謡文化保護区」として認定された。また、2006年に劉三姐歌謡が国家無形文化遺産リストに登録されただけでなく、河池市宜州劉三姐故郷観光区が国家4A級景勝地として認定された。さらに、2010年から2016年までの間に、宜州市政府の主導の下に、宜州市で全7回の劉三姐文化旅游祭が大規模に行われ、多くの観光客を惹きつけた。

表 I-4-15 宜州市劉三姐の観光開発の推移

年 次	内 容
1993～1996 年	3 年の準備期間
1996 年	市場化開始：「劉三姐の故郷」という観光プロジェクトの推進
	人気：広西電視台のテレビ連続劇「劉三姐」のロケ撮影
1997 年	中央電視台のテレビ連続劇「劉三姐」のロケ撮影
1998 年	広西彩調 ⁷² 芸術祭の開催
2000 年	第二回銅鼓山歌芸術祭の開催（テーマ：三姐故郷情）
	劉三姐ブランドの開催検討会の開催
2001 年	高さ13mの劉三姐の石像の製作を契機に、「劉三姐噴水広場」の建設
	「劉三姐杯山歌コンクール」と「劉三姐杯・龍舟競技」の開催
	「劉三姐文化ブランド研究」課題班の成立と学術討論会の開催
2005 年	宜州市下枧河・大型遊覧船の運行
	[宜州市は「劉三姐歌謡文化保護区」として自治区により認定]
2006 年	劉三姐歌謡が国家無形文化遺産名簿に登録
	[河池市宜州劉三姐故郷観光区の国家4A級景勝地として認定]
2010～2016 年	[宜州第1～7回劉三姐文化旅游祭の開催]

資料：塚田誠之（2014）：「広西チワン族の文化資源：その形成と地域性」『中国の民族文化資源：南部地域の分析から』風響社、282-286頁の内容をもとに筆者作成

注：[] は筆者加筆。

⁷¹塚田誠之（2014）：「広西チワン族の文化資源：その形成と地域性」『中国の民族文化資源：南部地域の分析から』風響社、278頁。

⁷²広西チワン族自治区における地方劇の一つの種類であり、広西チワン族自治区の桂林市、柳州市、河池市、百色市などの地区で人気が高い。

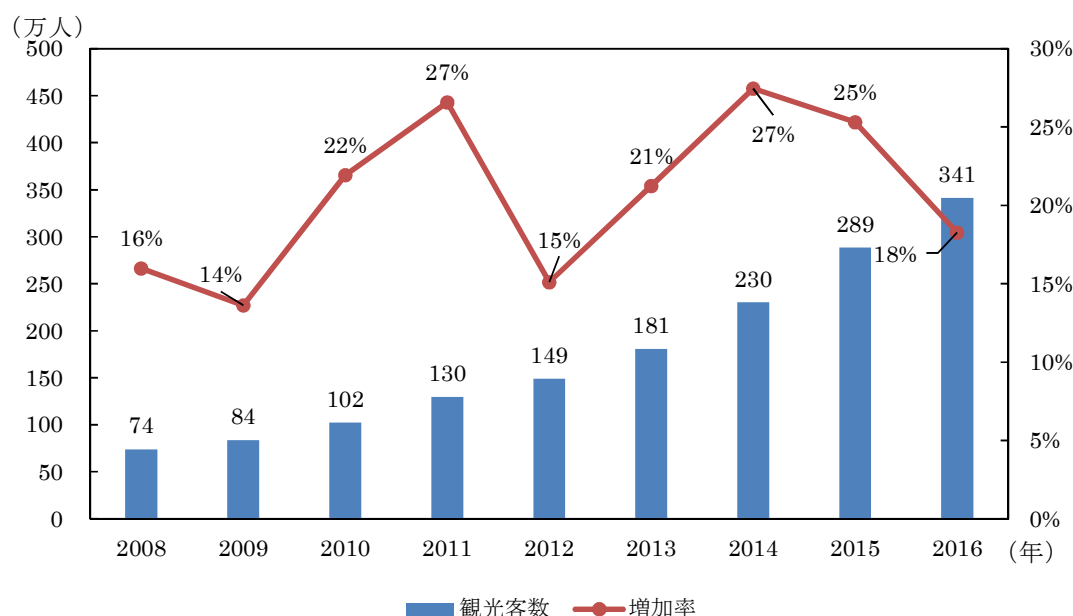


図 I-4-3 宜州市の観光客数の推移（2008～2016 年）

資料：河池市情報網「宜州市 2008～2016 国民経済和社会発展広報」の統計により筆者作成

図 I-4-3 を見ると、宜州市を訪れた観光客は 2008 年から 2016 までの間に成長し続け、特に 2010 年から 2016 年までの間には劉三姐文化旅游祭の開催を契機として、観光客の増加率は年平均 20% に伸びた。このように、劉三姐に関わるものを観光資源として観光開発をおこなうことによりチワン族の文化観光は盛んになっていった。

(2) 三月三

第一章において、チワン族の伝統行事である「三月三」を紹介したが、旧暦の「三月三」は漢族の清明節のような墓参りの祝日というだけではなく、歌の祝日とも言える。広西チワン族自治区のチワン族の人々は毎年旧暦 3 月 3 日には、周辺に住む多くの若い男女が祭り用の立派な服を着て集まり、デュエットで歌を歌い合う。この歌垣には多くの人々が集まり、時には何万人もの人々が集まることもある。

2014 年広西チワン族自治区人民政府は、伝統の民族文化を高揚させるために、「広西チワン族自治区少数民族習慣節日放假方法」を実施した。その中では「壮（チワン）族の「三月三」は広西チワン族自治区の少数民族の伝統的な祭りであり、この祭りの 2 日間は自治区内の全市民の法定休日とする」ことが規定された。このような法律上の規定によって、市民の休暇時間が増え、観光業を促進することができると思われる。

また、近年ではチワン族の歌垣の人气が高まり、広西チワン族自治区の各地では「三月三」の歌垣を核として旅游祭と結びつけ、さまざまな観光イベントが行われている。例えば、広西チワン族自治区武鳴県では 2014 年から「武鳴「壮族三月三」歌垣および駱越文化旅游祭」が行われている。また、2016 年に河池市宜州劉三姐故郷観光区では、「劉三姐で故郷へ最も美しい歌垣を追求しよう」というテーマの下に、「劉三姐歌の王コンテスト」「劉三姐の大型実演（映画『劉三姐』の人気の部分を上演）」などのイベントが開催された。

さらに、旧暦 3 月 3 日には宜州市で劉三姐歌謡節も大規模に開催されている。

(3) 螞拐（カエル）節

河池市の壮族の螞拐節は、毎年旧暦 1 月 1 日から 2 月 2 日までの間に東蘭県紅水河兩岸の金谷、巴英、長江、隘洞、東蘭鎮、長樂、大同、および東蘭県に隣接する天峨県六排鎮納洞村、雲榜村巴暮郷板麼村および南丹県吾隘鎮那地村などの地域で行われている。具体的な行事や儀礼は第 1 章「チワン族の歴史文化」の中ですでに紹介した。この祭日は、2006 年にすでに国家級文化遺産リストに登録されている。螞拐節を活用した観光開発としては、2010 年 8 月に天峨県で開催された「天峨紅水河龍文化旅游祭」で螞拐文化が旅游祭の出し物としてすでに観光客に展示された。その後、天峨県六排鎮納洞村納魯屯でも毎年螞拐文化節が行われている。また、東蘭県のチワン族の村々では螞拐節も行われており、特に東蘭県巴英村の螞拐節が有名であって、2016 年に巴英村では螞拐博物館が開館された。

前に述べたように、中国政府は 2016 年から少数民族が居住している貧困地区で「観光脱貧」の政策を実施しているが、河池市各地の県政府は、貧困地区のチワン族の生活を改善するために、螞拐節と銅鼓文化を核とした観光イベントを次第に催すようになった。例えば、2017 年 2 月 7 日から 8 日にかけては、天峨県紅水河壮族螞拐民俗文化節が天峨県六排鎮納洞村納魯屯で盛大に開催された。また、2017 年 2 月 27 日には東蘭県の巴英村で、「伝承民族文化遺産、助推旅游脱貧致富（民俗文化遺産を伝承し続け、観光を通じて貧困から脱け出す）」というスローガンの下に巴英螞拐節文化祭が大規模に開催された。



写真 I-4-1 天峨県紅水河壮族螞拐民俗文化節の様子

(2017 年 2 月 8 日 覃建生撮影)

2. ヤオ族における伝統文化の観光活用

河池市に居住しているヤオ族は、多種多様な伝統文化を有しており、表 I-4-12 に示しているように、布努ヤオ族の古歌謡「密洛陀」、祝著節、白褲ヤオ族の服飾文化、銅鼓舞、猴鼓舞、葬礼習俗、陀螺を打つ習慣などの伝統文化が国家・自治区の文化遺産リストに登録されている。

近年、大化ヤオ族自治県、巴馬ヤオ族自治県、都安ヤオ族自治県に居住している布努ヤオ族の伝統文化が地域の特色ある観光資源として取り上げられ、それらを核とした観光開発が進行しつつある。大化ヤオ族自治県では、2015 年に大化七百弄国家地質公園（2011 年は国家 3A 級）を国家 4A 級景勝地に昇格させるために、9,650 万元の資金が投入され、地質公園の入り口、駐車場、観光客サービスセンター、ショッピングセンター、トイレ、バリアフリー施設、登山歩道などの観光施設が整備され、同年の 11 月に地質公園は国家 4A 級景勝地として認定された。面積 323km² の地質公園はカルスト地形の自然風景だけではなく、公園内の村々に暮らしている布努ヤオ族の伝統文化が観光の見世物として多くの観光客を魅了するようになっている。

祝著節は「達努節」、「祖娘節」、「二九節」あるいは「瑤年」とも呼ばれ、布努ヤオ族が世界を創造した女神「密洛陀」に感謝し、豊作を祈願する祭りである。大化ヤオ族自治県、巴馬ヤオ族自治県、都安ヤオ族自治県に居住している布努ヤオ族は、毎年祝著節を行っている。近年、3 つの自治県の政府は、少数民族の生活を改善するために、祝著節を特色のある地域の祭りとして観光開発を実施してきた。また、祝著節に関わるものを観光商品として観光客に売ることよく見られるようになった。例えば、「密洛陀」という名称を冠した密洛陀ワイン、密洛陀トウモロコシ、密洛陀カボチャなどの商品が相次いで売り出されている。

また、南丹県に居住して白褲ヤオ族でも、近年伝統文化を観光資源とする観光開発が盛んになっている。表 I-4-12 に示すとおり、国家と自治区から認定された白褲ヤオ族に関わる伝統的な文化遺産としては、服装製作技術、銅鼓舞、猴鼓舞、葬礼習俗、独楽を打つ習俗などがあるが、近年南丹県各地の観光スポットで白褲ヤオ族の服装製作技術、銅鼓舞、猴鼓舞などの伝統文化がよく上演されるようになった。さらに、南丹県の観光ガイドブックでも、白褲ヤオ族の伝統的な祭りである年街節と小年節などが観光資源として紹介されるようになった。それらについて具体的には、本論文の第Ⅱ部で紹介する。

3. マオナン族における伝統文化の観光活用

環江マオナン族自治県は、全国で唯一のマオナン族自治県であり、そこで暮らしているマオナン族にとって最も古く、重要な祝日は分龍節である。龍はさまざまな民族のトーテムとされているが、マオナン族の同様に龍を崇拝している。謝⁷³ほか（2009）によれば、分龍節は中国における「歳時節令⁷⁴」の中の 1 つである民族伝統の習俗で、それはマオナ

⁷³謝銘・覃自昆（2009）「毛南族「分龍節」的淵源、現状及保護」『广西社会科学』第 7 期、广西社会科学雑誌編集部、13-17 頁。

⁷⁴季節により人々の社会生活の中で形成した集団的な習俗活動である。

ン族でも古代からの宗教儀式として伝えられてきた祭礼である。また、分龍節はマオナン族の歌、舞踊、音楽、劇、スポーツなどを融合させたもので、自然万物と民族の英雄を崇拜する盛大な祝日となっている。

環江マオナン族自治県政府によると、「広西環江・毛南族分龍節」は広西民族文化祭の十大ブランドの一つとして2009年から2016年までの間にすでに7回開催されてきた。また、2013年に分龍節は「中国で最も特色のある民族祭」の一つとして評価された。さらに、2014年6月に環江マオナン族自治県のカルスト地形は「中国南方のカルスト」の一部として「世界自然遺産」リストに登録された。それを契機に、翌2015年には民族祝祭とカルスト地形をめぐる自然観光を結びつけ、「広西環江・毛南族分龍節暨世界自然遺産文化旅游祭」という新たな観光ブランドが作り出され、「暢遊世界自然遺産地、探尋毛南族神秘文化源（世界自然遺産地へ観光し、神秘的な毛南族文化を尋ねる）」というテーマで観光イベントが開催された。

2016年6月18日から26日までの間に、前年と同様のテーマで「広西環江・毛南族分龍節暨第2回世界自然遺産文化旅游祭」が大規模に開催された。環江マオナン族自治県政府によれば、2016年の文化旅游祭は、「政府主導＋専門機関計画＋企業投資」という新たな開発パターンで企画されたものであり、その結果は「大成功」で、国内外から多くの観光客を誘致した。筆者の現地調査によると、このような観光開発パターンは近年河池市の各地で流行するようになった。また、河池市統計局のデータによると、2016年に環江マオナン族自治県を訪れた観光客は83万人であり、2015年と比較した増加率は15%となった。そして観光総収入は8.5億元で、2015年と比較した増加率は27%である。

4. ムーラオ族における伝統文化の観光活用

羅城ムーラオ族自治県に暮らしているムーラオ族は、走坡節と依飯節の2つの伝統的な祭りを有しており、近年政府の主導下で、この2つの祭りは他の民族の祭りと同様に観光開発の対象となっている。

走坡節は、ムーラオ族の青年たちの一問一答形式の歌垣であり、毎年旧暦8月15日に行われ、歌で男女が付き合う伝統的な祝日である。元来は祭りの時に、ムーラオ族の青年男女たちは村外の山の斜面上や樹林内、あるいは川の辺では一問一答形式で歌を歌い合い、恋人を求める。しかし、近年政府は、広場に舞台を建てて、各地から歌手を招いて歌のコンクールを開催するだけでなく、祝日の期間に竜舞い、獅子舞い、文芸公演、闘鶏、花火などの出し物も催している。

また、ムーラオ族の依飯節は、3年から5年ごとに一度行われ、祖先に恩返しして五穀豊穡を祈願する最も重要な伝統の祭りであり、すでに2006年には国家無形文化遺産リストに登録された。そして、依飯節は重要な文化観光資源として注目され、2009年11月に、羅城ムーラオ族自治県政府の主導下で「中国・羅城第1回仫佬族依飯文化節」が大規模に開催された。また、羅城ムーラオ族自治県政府によれば、2013年の「中国・羅城第2回仫佬族依飯文化節」は、約15万人の人々が参加し、多大な経済効果をもたらした。

5. 河池市における文化観光の経済効果

以上述べてきたように、河池市の各地で少数民族の伝統文化を中心とするさまざまな観光イベントを計画・開催することによって、河池市の観光業は大いに促進されている。

表 I-4-16 に示すように、河池市の国内外の観光収入は毎年増え続け、国際観光客は 2005 年にわずか 4,400 人であったものが、2015 年には 10 万人以上となった。また国内観光客は 2005 年に 254 万人であったが、2015 年には 1,842 万人に達した。国内観光収入は、2005 年の 12 億元から 2015 年までに 10 倍に成長し、180 億元となった。同時に、国際観光収入は国際観光客の増加に伴い大幅に成長し、2015 年までに 4,156 万ドルに達した。このように、少数民族の文化を活用することで、河池市の観光は著しく発展した。

表 I-4-16 河池市の観光客数と収入の推移

年	国際観光客		国際観光収入		国内観光客		国内観光収入	
	人数 (万人)	増加率 (%)	収入 (万ドル)	増加率 (%)	人数 (万人)	増加率 (%)	収入 (億元)	増加率 (%)
2005	0.4	18.9	142	17.4	254	10.0	12	2.8
2006	0.6	36.4	214	50.7	278	9.5	14	18.6
2007	0.8	30.0	275	28.4	323	16.5	17	30.0
2008	1.4	81.0	525	90.8	438	35.5	24	43.4
2009	2.1	47.6	763	45.3	574	30.9	32	33.8
2010	3.0	43.3	1,139	49.3	728	27.0	43	34.0
2011	4.1	37.5	1,558	36.8	849	16.6	58	34.8
2012	5.4	29.2	2,002	28.5	1,063	25.2	89	52.3
2013	7.0	30.8	2,570	28.4	1,282	20.6	112	25.7
2014	9.2	31.0	3,555	38.3	1,530	19.4	144	29.1
2015	10.1	9.7	4,156	16.9	1,842	20.4	180	24.4

資料：河池市統計局の統計により筆者作成

第4節 まとめ

以上、河池市のさまざまな自然観光資源と少数民族の文化観光資源を取り上げ、西部大開発によって河池市の観光業が推進されていく中で、少数民族の伝統文化が活用されてきたことを検討した結果、以下のようなことが明らかとなった。

まず、西部大開発によって河池市のインフラの建設が促進されるとともに、観光業も発展するようになった。また、少数民族の伝統文化が観光活用されることによって、その成果が地域社会に活かされ、少数民族の人々の生活改善に貢献した。さらに、観光開発における市場経済の浸透とともに、少数民族の伝統的な文化を核とする観光開発パターンがよく見られるようになっていった。

しかし、少数民族文化を活用した観光による経済発展はその背後にある伝統の喪失や環境の破壊などといった問題を生じさせている。すなわち、少数民族の祭りを核とする観光開発は、先住民たちに収入増加をもたらす反面、先住民たちは伝統文化やアイデンティティを失うという憂き目にあいつつある。

市場経済の発展と文明社会の進展により、貴重かつ多様な民族の文化が画一化しつつあるが、それを防ぎ、文化の多様性を保持するうえでは、観光振興は有効な手段であると思われる。伝統文化を守るために、世界各地の少数民族居住地域では政府が様々な対策と施設を設けて文化を保護しようとしている。例えば、先住民地域に生活形態展示館、文化陳列館、工芸館などの博物館を設立することもなされており、日本では北海道のアイヌ文化を展示している「白老アイヌ博物館」という代表例がある。また、2010年に開館した中国雲南省の西双版纳民族博物館は、タイ（傣）族、ハニ（哈尼）族、ジノー（基諾）族などの13少数民族の伝統文化と民間芸術品を展示している。さらに、南丹県では白褲ヤオ族の伝統文化を保護するために、白褲ヤオ族が暮らしている村々を核とするエコミュージアムを建設した。博物館や美術館などの民族文化保護施設を建設することは、確かに民族伝統文化の保存と伝承にとって有効な手段となっているように思われる。

また、観光客が先住民居住地域を訪問する目的は、祭り、食べ物、工芸、踊りなど、それぞれの民族が何世代にもわたって培ってきた文化に触れたいという知的欲求を充足させることである。つまり、観光客の旅行の目的の一つは本物の文化に接触したいということなのである。観光客は民族博物館を訪問するとき、少数民族の伝統文化に直接触れることができる。しかし、先住民の伝統文化を見世物として博物館の中に陳列したままにすることは、少数民族の文化が真正な生きた文化ではなくなってしまうことにもつながる。これは、重要な問題であるが、観光客を惹きつけることを目的として民族文化博物館や民族文化村などの観光スポットで建設し、それぞれの観光スポットで伝統文化の上演活動などをすればするほど、伝統文化の商品化によって文化の真正性や民族的アイデンティティが失われていくことになる。

河池市の各地では、観光を通じた地域振興に対する期待が高まっている。観光開発のための資金計画としては、国家からの専用資金援助や地方政府からの財政援助、あるいは社会資金の募集などが基軸とされている。この中で社会資金の募集は、主に企業からの資金提供である。石森（2008）は、持続可能な観光の創出につながる観光開発のあり方として

「外発的観光開発 (exogenous tourism development)」と「内発的観光開発 (endogenous tourism development)」という新しい概念を提示した。外発的観光開発とは、地域社会の意向が軽視あるいは無視されることによって、各地の貴重な地域資源の破壊や悪用や誤用などが発生し、さまざまな負のインパクトが生み出されがちとなっていくことである。河池市の各地の観光開発は、石森の言う外発的観光開発を主なあり方としていたため、民族文化観光資源の悪用や誤用、さらには破壊という問題が発生している。例えば、布努やオ族の伝統的祭りの祝著節（達努節）を行う場所は、ただ観光客を惹きつけるという目的のみのために変化してきた。さらに、観光客のニーズに応じて、伝統文化を観光客の目の前に再現しようとして、演出が過度なものになることが多いがこうした傾向がつづけば、伝統文化の商品化をもたらし、民族文化のアイデンティティは喪失させられてしまうことになる。

このような問題については、本論文の第Ⅱ部で検討する。

第Ⅱ部 エスニック・ツーリズムと文化変容

第1章 エスニック・ツーリズムにおける祭りの「擬似イベント化」

第1節 祝著節

1. 祝著節に関する研究

中国少数民族の伝統文化の観光活用に関する研究には、多くの優れた先行研究がある。例えば、農品冠（1987）は、紅水河流域沿岸に居住する布努ヤオ族の祝著節を検討しており、民間に伝承されている創世史詩『密洛陀』に依拠して密洛陀の物語を説明し、布努ヤオ族の民族的起源を示した。張有雋（1992）は、1949年以前の祝著節のあり方を記述しており、今日まで研究者にとって重要な研究資料とされてきている。謝銘（2001）は、広西チワン族自治区河池市の少数民族の観光資源を分析した上で、西部大開発政策の下で、民族的文化を活用することが観光開発のチャンスとなり得ることを指摘した。覃乃昌（2004）は、ヤオ族の盤王節と祝著節の物語を記述し、祝著節を行う期間の習俗を明らかにした。藍巧燕（2007）は、広西チワン族自治区都安ヤオ族自治県の隆福郷崇山村の布努ヤオ族の第5回祝著節を事例として、その祭りの内的要因を把握した。羅光勤（2008）は、広西チワン族自治区河池市巴馬ヤオ族自治県の地理環境、歴史文化、民族構成、産業構成および経済発展などの領域について詳細に論じている。葉建芳（2014）は、宗教学の視点から広西チワン族自治区河池市都安ヤオ族自治県の布努ヤオ族の祝著節を事例として取り上げ、開催期間に家族の誰かが亡くなった場合には、その家族の人たちと子孫がそれ以降は祭りを行うことが禁止されることを記述した上で、さらにそのタブーの背後にある民族的信仰と秩序を明らかにした。祝著節と銅鼓習俗に関わる研究では、陸遙（2014）が広西チワン族自治区河池市東蘭県の銅鼓文化を検討し、それが祝著節とどのような関係を有するかについて明らかにした。

以上のような先行研究がある一方で、観光開発が祝著節に与えた影響という視点から論じた研究はほとんど見られない。わずかに梁晶晶ほか（2011）が、広西チワン族自治区少数民族の祭日の特徴を明らかにする一方で、祝著節に関わる内容について簡単に触れているに過ぎない（梁ほか 2011：86-91）。また、張金萍（2015）は、広西チワン族自治区河池市大化ヤオ族自治県の布努ヤオ族の銅鼓文化を取り上げ、それが観光開発の中で活用されることで生じる問題を指摘したが、観光開発が祝著節に与えた影響を全面的に取り上げて論じてはいない（張 2015：52-61）。

2. 祝著節の概要

祝著節は「達努節」、「祖娘節」、「二九節」あるいは「瑤年」とも呼ばれ、布努ヤオ族が世界を創造した女神「密洛陀」に感謝し、豊作を祈願する祭りである。人類学者である張（1992）の指摘によれば、中華人民共和国が成立する前には、都安、巴馬などの地域に居住している布努ヤオ族は五穀豊穡の年には、「魔公」と呼ばれるシャーマンを招き、祖先を祀る儀式を行うことがあった。十数頭の牛、山羊および数十羽の鶏と鴨、また粽を供物とし、「密洛陀」及びその9人の息子と自分の一族の祖先を祀る。一般的には、貧しい家では儀式を行うことができず、富裕な家でさえ毎年行うことはなく、3年毎、5年毎あるい

は7年毎や12年毎に一度行うだけであった。1950年代まで、この祭りは「達努節」など地域によって呼称の違いはあるものの各村で続けられていたが、大躍進の時期や文化大革命のなかで伝統文化や風俗習慣を中断するという政策がとられたため、衰退していった。

ところが、この祭りの重要性が布努ヤオ族に再認識されるようになった。1980年に、巴馬ヤオ族自治県弄業の教師であった蒙霊という研究者が自民族の文化に興味を持ち、「達努節」という名称を「祝著節」に変更することを主張したことが契機である。蒙霊がそのように主張したのは、「廿（二十）九」の布努ヤオ族語の発音は「ZhuZhu（ジュジュ）」で、「達努（タヌ）」の発音と似ていないからである。

蒙霊は、弄山の布努ヤオ族の老人蘭老三から物語を採集する時に、老人から東山村の布努ヤオ族の「五月廿（二十）九節」の由来を教えられた。古代には、布努ヤオ族の生活は非常に貧しく困窮し、近隣に居住しているチワン族のように毎月少なくとも一つ祭りを祝うことができなかった。そして、創世女神「密洛陀」は昇天する前に、生活を節約するために、毎半年の最後の日に祭りを行うことを言い付けた。旧暦の5月は29日があったので、「五月廿（二十）九節」の名を付けた。また、五穀豊穡の時期には、一年の中で最も大きな祭りとして大規模に行われていた。そして、「廿九」という語の発音が「ZhuZhu」で、これが布努ヤオ族の祭りの名になったのである。

蒙霊は、「ZhuZhu」という発音を「初出」また「初竺」などと翻訳したが、さらにアフリカ原住民の祭りに関する研究から着想を得て、「祝著」という言葉を思いついた。「祝著」は、布努ヤオ族語の「廿九」の発音と同じである。すなわち、「祝著（ZhuZhu）」の「祝」は祝いの意味で、「著」は土着してアフリカ原住民のような焼き畑や狩猟を営む生活様式を連想させるものであった。

こうした蒙霊の主張は布努ヤオ族の人たちに広く受け入れられ、布努ヤオ族の人たちは、自民族の特徴を現わすために、それまで「達努節」などと呼ばれていた祭りの名称を「祝著節」に変更することを希望した。そして、1986年広西チワン族自治区民族事務委員会は、それまでさまざまに呼ばれていた祭りを「祝著節」に統一・変更することを承認し、それ以後毎年旧暦の5月25日から5月29日の間に各村で定期的に行われるようになった。こうして布努ヤオ族にとって、祝著節は民族的アイデンティティを確認する新たな契機の一つとして、重要な意味をもつようになった。

そもそも伝統的な祝著節では、布努ヤオ族の村々は牛、山羊、ブタ、鶏、鴨、さらには赤く染めた卵と粽を供物とし、歌台を建て、肉、酒を持ち寄って皆で飲食を共にする。人びとは伝統的な民族衣装を着用して、銅鼓を叩き、地元の民謡を歌い、チャルメラを吹奏し、競馬や弓矢競技を開催するが、なかでも最も重要な活動は銅鼓を叩き、踊ることである。こうした活動を通して、自民族の歴史と伝統文化を忘れないようにするだけでなく、また自民族の凝集力を増強させることができると言われている。

3. 祝著節のあり方

祝著節は、大化ヤオ族自治県、都安ヤオ族自治県、巴馬ヤオ族自治県などの地域に居住している布努ヤオ族の大きな祭りであり、毎年旧暦の5月25日から29日までに行われている。現地調査によると、祝著節は地域により差異があるが、その一方で、布努ヤオ族の

人々から儀礼のほとんどは同様であると語った。祝著節の儀礼については、藍巧燕(2007)が広西チワン族自治区都安ヤオ族自治県の隆福郷崇山村の布努ヤオ族の第5回祝著節を事例として取り上げ、その中で詳細に記述している。そこで以下において、藍が記述した祝著節の儀礼について内容を紹介する。

祝著節の期間は5月25～29日であり、25日から28日までの間がタブーの段階であり、29日は慶祝日である。タブーの段階の間において、「喧嘩禁止」、「夫婦共寝禁止」、「煮酒賞新禁止（新醸造した酒を賞味することが禁止）」などのタブーがあり、またさまざまな祖先を祀る儀礼も行われている。次に祝著節のあり方を検討する。

(1) 居住環境を清める。環境衛生、個人衛生、言語マナーなどを整える。環境衛生の面では、屋内と屋外を分けて、5月22日から24日の3日間に家屋（屋内）と村（屋外）を掃除しなければならない。村の道路を整理し、家の周囲の雑草を抜いてしまう。布努ヤオ族によると、環境衛生を維持していないことに気づいたら、祖先たちは見守ってくれることがなくなり、人は病気になると言われている。個人衛生の面では、祭日の前日に髪を整え、体を清め、身なりを整え、綺麗にして祖先を迎える。また、病気の老人や子供は、一般的には他人を訪れることができない。伝説によると、祖先の御機嫌を取るために、病気の人が必ず避けられるのである。さらに、言語マナーにも注意しなければならない。

(2) 甘酒を醸造する。祝著節の間に祖先を祀る時には、新しく醸造した甘酒が供物として不可欠である。伝説によると、甘酒の醸造方法は世界を創造した女神「密洛陀」が発明したものであり、甘酒は家族の最年長の人から醸造しなければならない。醸酒する前に体を清め、新しい衣を着用し、もち米の皮をむく。そして、ご飯を蒸し上げ、冷却後に砂糖と共に酒器に入れ、2日あるいは3日の間に発酵させる。その後、再び体を清め、手を洗った後に甘酒を酒器で封をして保存する。29日に至るまでは誰にも賞味することができず、祖先に供えた後で共に飲む。

(3) 茶を煮る。25日の明け方に、家族の中で母あるいは娘は3束のチガヤを釜で煮て、赤い色を出した後に3つの茶碗について供物として祖先の祭壇上に供え、碗内に何枚かの茶葉を入れる。それと同時に、祭壇のテーブルに1本のパイプを置き、両側にタバコの葉を用意する。また、最後の日（5月29日）までに毎日3回12本の線香を祭壇に供える。以上のことは、神々を招き、歓迎する際に、食事に先立って、喫煙や飲茶をすることを表現したものである。

(4) 祖先を祀る。祭祀の場所は屋内と屋外の2ヵ所に分けられている。屋外の祭祀は「儀願」と呼ばれ、富裕な家庭は豚と羊を屠り、貧しい家庭は市場で買った豚肉を祖先に奉る。豚を屠った後に、飯を炊き、自家の門前にある広い場所に豚の頭肉、9杯（あるいは12杯）の甘酒、9碗（あるいは12碗）のご飯を供え、一つの碗に12本ずつ線香を挿し、富裕な家庭では碗の中に9角（1元は10角）あるいは1元2角を入れるが、また線香の代わりに麻糸あるいはステッチの線を用いることができる。数字の「9」は布努ヤオ族が崇拝している九大の星を指し、それは9人の祖先を指している。「12」は自然の中の方角であり、すなわち十二支を指している。「儀願」を始める時には、村の1人の老人が祭祀用の家畜と他の物品の名称や数を祖先に報告し、それによって子孫が孝道を尽くそうという気持ちを示す。その後、線香を焚き、読経して神々を村に招き、地上で紙やすり、糸、

神が着用する 12 セットの紙衣あるいは白紙などの供物を焚く。供物を焚いた後に、供えた甘酒を焚き物の上にかける。

屋内での祭祀は、母屋と客屋の 2 ヶ所に分けられている。母屋の祭壇は主に自家族の祖先を祭り、豚肉と 5 碗あるいは 7 碗の米を供えるが、それは祖先が働いて疲れたため、おいしいものを用意するという意味である。「5」は五行天地の金、木、水、火、土を指し、「7」は日、月、金、木、水、火、土を指す。客屋には別の祭壇を築き、祭壇上に 1 碗の甘酒を供え、何枚かの茶葉を入れて、特別に女神密洛陀を祀る。

さらに、29 日が祝著節のピークであり、この日は最も賑やかな 1 日である。前述したように、この日には、布努ヤオ族の村々では牛、山羊、ブタ、鶏、鴨、さらには赤く染めた卵と粽を供物とし、酒を醸造し、歌台を建て、肉、酒を持ち寄って皆で飲食を共にする。人びとは伝統的な民族衣装を着用して、山間の平地で銅鼓を叩き、地元の民謡を歌い、チャルメラを吹奏し、競馬や弓矢競技を開催するが、なかでも最も重要な活動は銅鼓を叩き、踊ることである。夜になると、村人たちは各家に戻り、歌を歌い続け、テーブルを囲んで徹夜で酒を飲む。

4. 研究対象地域の概況

本章で取り上げる対象地域である河池市巴馬ヤオ族自治県が属する広西チワン族自治区は、中国南部に位置し、東に広東省、西に雲南省、南にベトナム、北に湖南省および貴州省と隣接する。

巴馬ヤオ族自治県が属する河池市は、広西チワン族自治区の北部に位置し、南寧市、百色市、柳州市、来賓市、貴州省に接する。東西の長さは 228km、南北 260km、全市の土地面積は 3.35 万 km² である。『巴馬ヤオ族自治県の概況』によると、巴馬ヤオ族自治県は、東西の長さは 70km、南北 42km、全県の土地面積は 1,965km² である。広西チワン族自治区は、中国では水資源が豊かな自治区であり、年間の平均水資源総量は 1,880 億 m³ で、全国水資源総量の 7% を占め、全国の 5 位である。しかし、巴馬ヤオ族自治県域内の地形は複雑多様な構造で、カルスト地形が 30% を占め、丘陵地形は 69% に及ぶが、水面は 1% を占めるに過ぎない。

気候は、モンスーンの気候に属し、夏が長いのに対して冬は短く、霜も降らない。年間の日照時間はおよそ 1,557~1,823 時間であり、気温は 11~27℃ である。年降雨量は 1,560mm で、全国の年平均降雨量 629mm や世界の年平均降雨量 730mm と比べると 2 倍あまり高い。しかし、丘陵地形が広がり、四季を通じて多くの雨が降るため、頻繁に自然災害が起こり、この地域に暮らしている人々にとっては非常に厳しい生活環境と思われる。県域内に流れる最大の河川は紅水河で、布努ヤオ族の居住分布地はほぼ紅水河の中流域に位置している。

巴馬ヤオ族自治県には、布努ヤオ族、チワン族、ムーラオ族、苗族、毛南族、水族、漢民族などの民族が暮らしている。広西チワン族自治区統計局のデータ（2010）によると、巴馬ヤオ族自治県の人口は約 27 万人超であるが、そのうち少数民族の人口は 24 万人で、人口比率では 87% を占めている。チワン族の人口は 19 万人と最も多く、第 2 位のヤオ族の人口は 4.7 万人、第 3 位の漢民族の人口は 3.6 万人である。

多くの少数民族が暮らしている巴馬ヤオ族自治県では、昔から民間に豊かな民族文化が残存している。特に、チワン族と布努ヤオ族は、今日に至るまで様々な伝統的祭りを行っている。しかし、この地域は経済的発展が東部沿海地域より非常に遅れている。海岸線を持つため、比較的経済の発達した東部沿海地域に属するが、実際には、広西チワン族自治区の経済は決して発達しているわけではない。中国統計年鑑によると、2000 年の 1 人当りの GDP は 4,319 元で、広東省の 12,885 元に対して約 3 分の 1 にとどまっている。また、これは全国平均の 7,078 元を大きく下回り、全国的には貴州省、甘肅省に次ぐ貧しい地域である。

そして、1990 年代末から始まった「西部大開発」プロジェクトにおいて、広西チワン族自治区はその戦略地域に指定された。広西チワン族自治区は四川省、重慶市、貴州省、雲南省、チベット自治区の西南地域に対して、対外貿易の拠点としての役割を持つことが期待されている。それと同時に、多民族が暮らしている広西チワン族自治区ではエスニック・ツーリズムの振興も盛んでいる。巴馬ヤオ族自治県は農村部主体の地域が多く貧しいため、農業を基幹産業としながら、観光振興によって地域を活かすことが期待されている。

第 2 節 エスニック・ツーリズムにおける祝著節の変質

2000 年代に入り先述の「西部大開発政策」が広西チワン族自治区にも波及してくる中で、布努ヤオ族の歌舞と祭りは、地域の特徴を有する文化観光資源として認識され、観光開発の対象として注目されるようになった。そして、各村の伝統的な祭りというあり方から、一つの民族的で大規模なイベントへと変質していった。祝著節は政府からバックアップされた祭りとなったのである。

ここでは最も代表的な開催地である巴馬ヤオ族自治県東山郷の祝著節を考察する。巴馬ヤオ族自治県では人民政府の主導により、2015 年 7 月 14 日（旧暦の 5 月 29 日）に、祝著節が観光を目的とし、「楽しい祝著節、幸福な瑤山」をテーマとして東山郷の巴優大舞台で大規模に開催された。

筆者が現地調査時に問い合わせたところによると、このイベントを実施するために、各村を代表する演者が選抜して集められたという。そして政府関係者、マスメディア関係者が多数訪れたほか、数千人の観光客が布努ヤオ族の伝統的民族文化を体験するために、巴優大舞台の広場に集まった。

当日の出し物は、表Ⅱ-1-1 のプログラムにあるように、非常に多種多様である。まず午前 10 時頃に、県長の開会宣言の後、上演が開始される。最初に置かれた祖先を祭る再現儀式からオリジナル歌曲まで、順番に上演されるが、上演プログラムの中には、地元の民謡だけではなく、漢民族の言葉で作られた歌曲も入っている。そして客席では、数千人の観光客が舞台前の場所に座って、写真を撮ったりしながら、非常に高揚した雰囲気となる。また、広場近くの場所には観光客の好みに合わせて、民族風の矢を射る体験の場などが設置されている。

次に、このような政府からバックアップされた祭りは、布努ヤオ族の伝統文化にどのような影響を与えたのかを考察したい。この祭りは元々各村の中で行われてきた祭りが宗教

的・文化的コンテクストから切り離され、祖先を祀るための外部者から「見られない」儀式から、観光客の目にさらされ「見られる」イベントに変質したものである。すなわち、伝統的な民族文化が商品化されると同時に、その本来の意味は希薄になってきているのである。そして、祖先を祀るために行われる儀式が、観光客向けのショーとして上演されることにより、その儀式的あり方は「真実らしさ」へと変化していった。

表Ⅱ-1-1 民族演出のプログラム

No.	内 容	担い手
1	祭祖「密洛陀」	作者と監督：盧秋蘭、楊媛 出演者：弄山村、長洞村、江団村、卡橋村の民衆
2	生態歌曲「布努情歌」	出演者：康凡、蕭蘭
3	背帯歌	作者と監督：盧麗芳 出演者：羅美連、蘭仁祥、蘭金文
4	生態民謡「読芬」	作者と監督：王璇 出演者：羅美連、蘭仁祥
5	オリジナル歌曲「飛歌満」	作者と監督：盧麗芳 出演者：康凡、蕭蘭 舞人：蒙金、蘭敏権、蒙丁義、蘭美新
6	生態歌曲「瑤錦」	出演者：蕭蘭
7	童謡「陀番」	作者と監督：潘仙梅、黄淑嫻 出演者：東山郷瑤族文化伝承班
8	瑤族競技上演「上刀山下火海」	出演者：李斌
9	ヤオ族服飾展示	作者と監督：覃麗娟 出演者：東山郷瑤族文化伝承班、弄山村 長洞村、江団村の民衆
10	民族大団結	作者と監督：蘭金剛、覃燕霖、韋超時 出演者：巴馬鎮文化放送センター 所略郷文化放送センター 燕洞文化放送センター 那社文化放送センター 東山郷文化放送センター 東山郷瑤族文化伝承班 山村、長洞村、江団村、卡橋村の民衆

資料：祝著節のパンフレット「活動通知」により筆者作成

注：康凡と蕭蘭は漢民族の歌手である。



写真Ⅱ-1-1 観光客を迎える行列

(2015年7月14日 筆者撮影)



写真Ⅱ-1-2 観光バスが到着している様子

(2015年7月14日 筆者撮影)



写真Ⅱ-1-3 上演の場：巴優大舞台

(2015年7月14日 筆者撮影)



写真Ⅱ-1-4 祖先を祀る再現情景

(2015年7月14日 筆者撮影)



写真Ⅱ-1-5 銅鼓型の図案

(2015年7月14日 筆者撮影)

伝統的な祝著節では、最も重要な活動は前述したように銅鼓を叩き、踊ることである。しかし、上演のプログラムをみると、肝心の銅鼓演奏は入っておらず、ただ最初の祖先を祀る儀式の際に、舞台の後方に一列に並べられた銅鼓が叩かれただけである。祭りの上演の場である巴優大舞台の後方の壁には、銅鼓型の図案が装飾されている。このように、祖先と交流する時に叩かれる神聖な祭具である銅鼓は、祖先祭祀とはまったく無関係なイベントのための図案として装飾化されることにより、その神聖な意味を取り去られてしまったのである。さらに、舞台の後方に新旧の銅鼓が無秩序に並べられ、銅鼓の宗教的意味は喪失されている。

このように、本来の宗教的文脈（コンテキスト）から切り離された祝著節は、もはや宗教的な意味を喪失しており、「真正性」が問題とされることのないイベントになっていると考えられる。D.ブーアスティン（1964）が提起した「擬似イベント論」によれば、近代以後の観光はそれ以前の旅行とは異なり、軽薄で本物とはいえない活動であり、観光客の態度は受け身的であるにとどまって、現実というよりも単にマスメディアによって創られ、再生産される擬似的対象を経験しているだけである（ブーアスティン 1964：19-20）。現在のイベント化された祝著節は、観光客にとってこのような擬似イベントとしての意味しかもたないとも考えられる。2015年7月14日に巴優大舞台で開催された祝著節は、経済利益を獲得するために政府のバックアップを受けて計画され、マスメディアを通して外部に宣伝されることで、多くの観光客を誘致した。また、各村ごとに元々開催されてきた伝統的な祝著節はそのままのかたちで維持されており、それとはまったく別個に、単純に観光客向けのショーとして演者を選んで巴優大舞台上演されたのである。このようなあり方は、まさにブーアスティンの「擬似イベント論」によって説明可能だと考えられる。

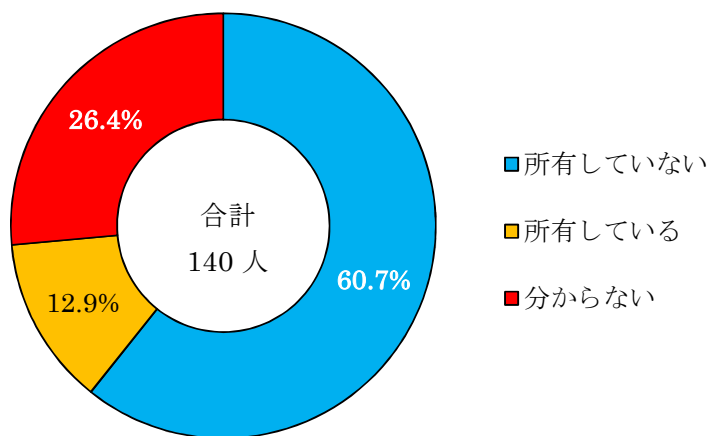
しかし、このような擬似イベントとしての祝著節は、一方でまた D.マッカネル（1973）

が提起した「演出された真正性」という概念によっても説明される。すなわち、マッカネルが指摘するように、観光客は布努ヤオ族の真正な祭りとしての祝著節を体験することを望んでいるのに対して、祭りを実施し、見せる立場としてのホスト側の民族コミュニティが擬似イベントとして演出された祭りを提供しているとも考えられるのである。マッカネルによれば、ホストとゲストとの社会的関係の中で、ホスト側の真正な「舞台裏」が演出された「表舞台」へ反転するのである（マッカネル 1973：589-603）。そして、逆に演出をほどこされた「表舞台」が真正な「舞台裏」を暗示しているように、イベント化された祝著節は、元々各村の中で行われてきた旧来の祭りである祝著節が巴優大舞台へと移植・上演されることによって、演出された真正性を内容とするイベントとなっていると考えられる。

第3節 銅鼓文化に対するツーリズムの影響の認識度の分析

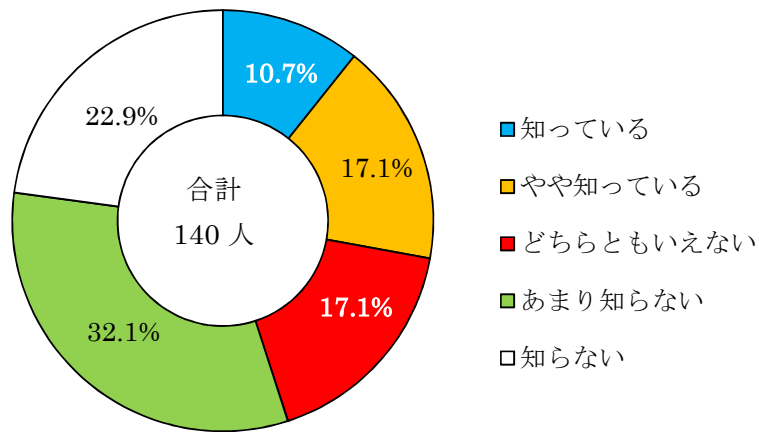
以上のことに関連して、銅鼓文化に対するツーリズムの影響の認識度を把握するために、イベントに参加している布努ヤオ族の人々を対象として2015年7月14日アンケート調査を実施し、140人から回答を得た。そのうち、男性が73人で、女性が67人である。アンケート調査の分析結果は、以下の通りである。

まず、「銅鼓を所有しているか」という質問については、60.7%が銅鼓を所有しておらず、わずか12.9%が所有しているに過ぎない（図Ⅱ-1-2）。また、「銅鼓の歴史文化や物語を知っているか」については、「あまり知らない」が32.1%、「知らない」が22.9%を占め、わずかに10.7%の人が知っていると答えた（図Ⅱ-1-3）。しかし、「銅鼓文化は重要だと思うか」という質問に対しては、45.7%の人が銅鼓文化は重要だと思っており、「やや思う」が17.1%、「どちらともいえない」が20.7%、「あまり思わない」が6.4%、「思わない」が10.0%に過ぎない（図Ⅱ-1-4）。このように、布努ヤオ族の人たちは、家に銅鼓を所有しておらず銅鼓文化そのものの知識もほとんどないにも関わらず、半数近くの人々が銅鼓をヤオ族にとって重要な文化財として認識していることが分かった。



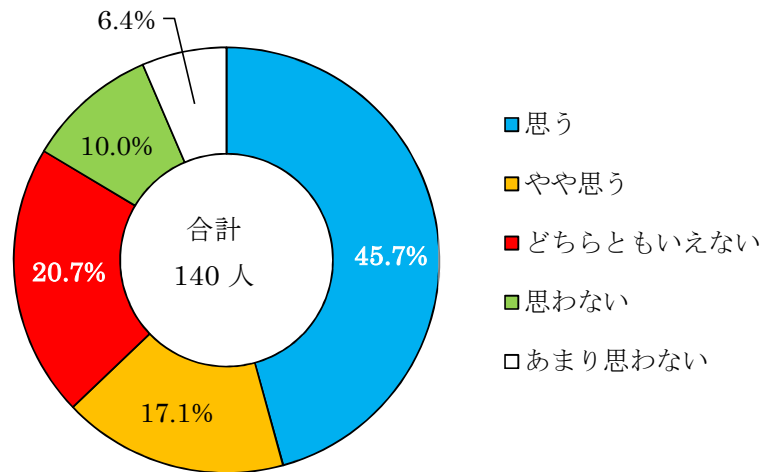
図Ⅱ-1-2 銅鼓を所有しているか

資料：アンケート調査結果により筆者作成



図Ⅱ-1-3 銅鼓の歴史文化や物語を知っているか

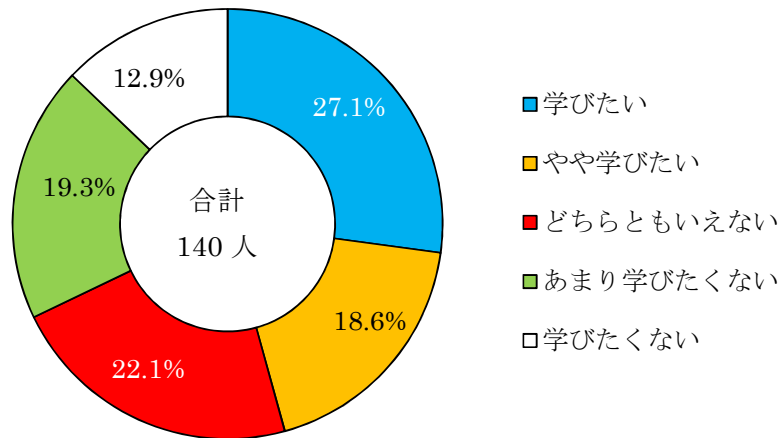
資料：アンケート調査結果により筆者作成



図Ⅱ-1-4 銅鼓文化は重要だと思うか

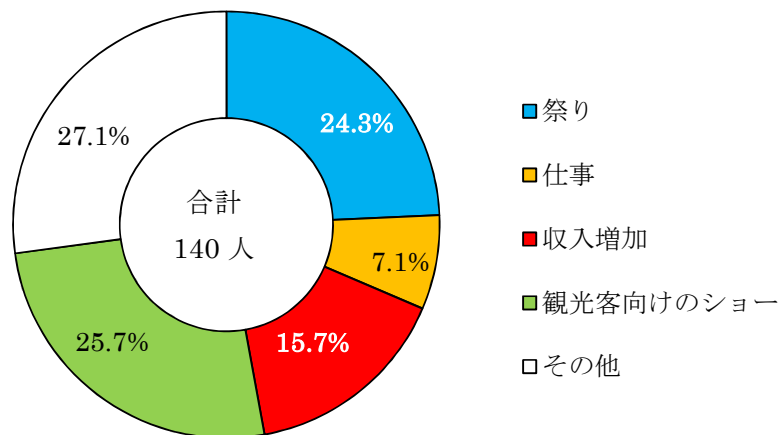
資料：アンケート調査結果により筆者作成

さらに、「銅鼓文化を学びたいか」という質問に対しては、「学びたい」と「できれば学びたい」を合わせて 45.7%を占め、「どちらともいえない」が 22.1%、「あまり学びたくない」が 19.3%、「学びたくない」が 12.9%であった（図Ⅱ-1-5）。ところが「銅鼓の叩き方を学ぶ理由」については、24.3%の人が伝統的な「祭り」のために叩き方を学びたいと答えたのに対して、25.7%の人が「観光客向けのショー」のために学びたいと答えた（図Ⅱ-1-6）。このように、「祭り」のためという割合と「観光客向けのショー」の割合がほぼ同じであることから、布努ヤオ族の人たちの意識が観光開発によって変化しつつあることが分かった。本来は、祭りにおける宗教的な意味によって銅鼓の叩き方を学んでいたのが、現在では、観光客を惹きつけることが主要な目的となりつつあるのである。



図Ⅱ-1-5 銅鼓文化を学びたいか

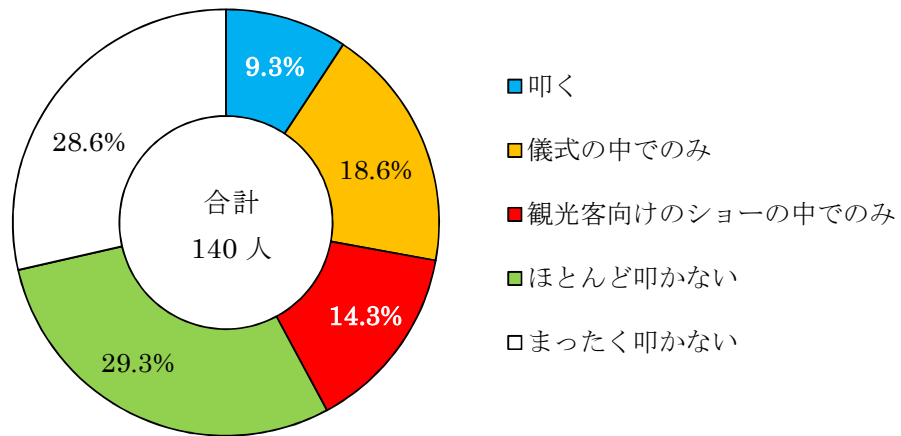
資料：アンケート調査結果により筆者作成



図Ⅱ-1-6 銅鼓の叩き方を学ぶ理由

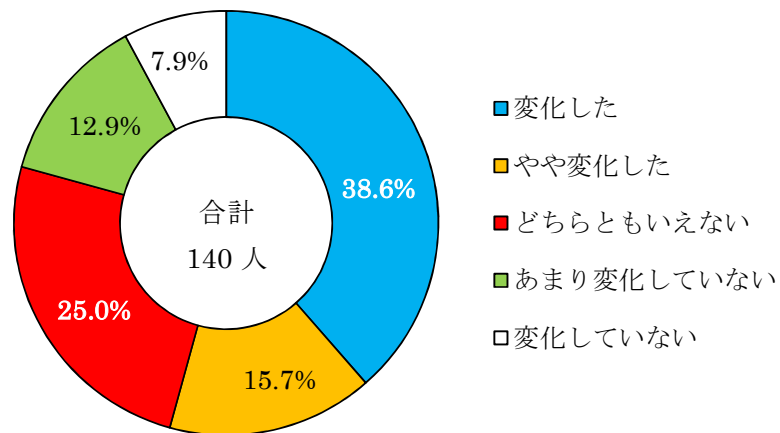
資料：アンケート調査結果により筆者作成

また、「日常生活の中で銅鼓を叩くか」という質問に対しては、「ほとんど叩かない」と「まったく叩かない」を合わせた割合が 57.9%を占めている。叩くと答えた人の中でも「観光客向けのショーの中でのみ」という理由が 14.3%を占めた（図Ⅱ-1-7）。そして、「観光化によって銅鼓を叩く習慣は変化したか」との質問については、「変化した」が 38.6%、「やや変化した」が 15.7%、「どちらともいえない」が 25.0%、「あまり変化していない」が 12.9%、「変化していない」が 7.9%であった（図Ⅱ-1-8）。このように、布努ヤオ族の人々は近代化の影響によって、今日もはや日常生活の中で銅鼓を叩く習慣を喪失しつつある。本来日常生活の中で銅鼓を叩くという習慣があったが、観光開発によって観光客向けのショーが主流になったことで、そこに大きな変化が見られるようになったことが分かった。



図Ⅱ-1-7 日常生活の中で銅鼓を叩くか

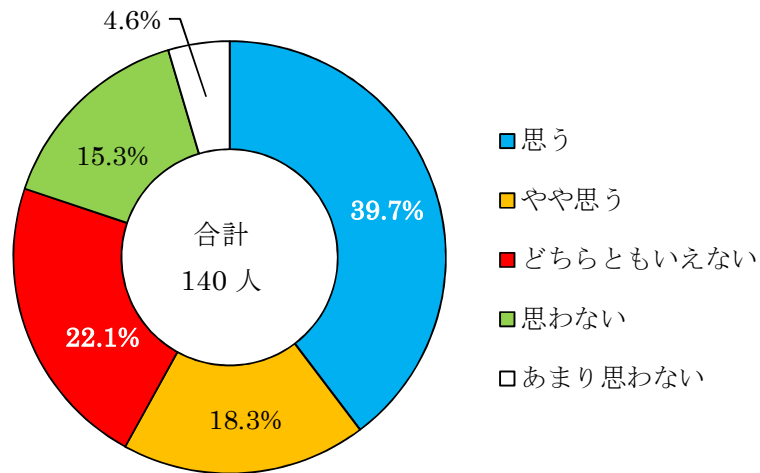
資料：アンケート調査結果により筆者作成



図Ⅱ-1-8 観光化によって銅鼓を叩く習慣は変化したか

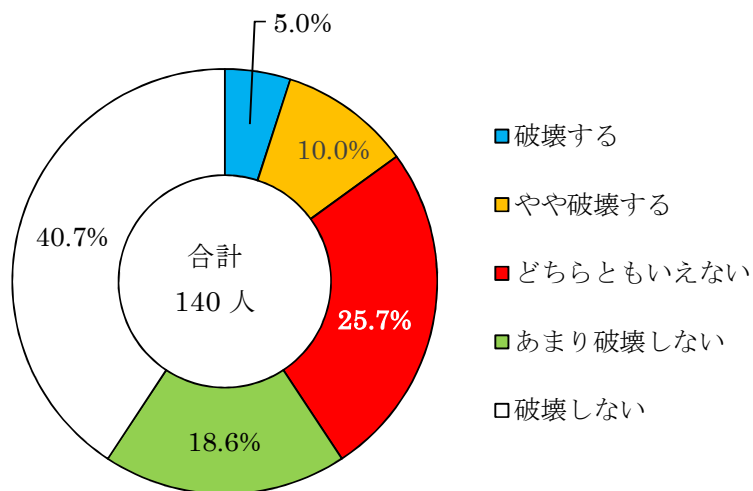
資料：アンケート調査結果により筆者作成

「観光の発展は銅鼓文化の保存にとって有益だと思うか」という質問については、「思う」が 39.7%、「やや思う」が 18.3%、「どちらともいえない」が 22.1%、「あまり思わない」が 15.3%、「思わない」が 4.6%であった（図Ⅱ-1-9）。さらに、「観光の発展は銅鼓文化を破壊すると思うか」という質問に対しては、「破壊する」が 5.0%、「やや破壊する」が 10.0%、「どちらともいえない」が 25.8%、「あまり破壊しない」が 18.6%、「破壊しない」40.7%であった（図Ⅱ-1-10）。



図Ⅱ-1-9 観光の発展は銅鼓文化の保存にとって有益だと思うか

資料：アンケート調査結果により筆者作成



図Ⅱ-1-10 観光の発展は銅鼓文化を破壊すると思うか

資料：アンケート調査結果により筆者作成

このように、観光開発の推進が経済効果をもたらすだけでなく、銅鼓文化の保存にとってもある程度積極的な効果を果たしており、銅鼓文化保存の有益な方法だと考えている人が多いことが分かった。また、「観光の発展は銅鼓文化を破壊すると思うか」という質問に対しては、わずか 5.0% の人が「破壊する」と考えているのみであり、ほとんどの人々は、少なくとも現在までのところは観光開発が銅鼓文化の保存にとっても有益だと考えていることが分かった。すなわち、観光振興は経済効果をもたらすだけではなく、伝統文化を保存する上でも積極的な効果を有すると考えられていることが分かった。

しかしその一方で、観光振興は布努ヤオ族の人々にとって有効な貧困脱出の手段となっている。石森（2008）が、「観光と貧困からの脱出を結び付けることは大切である」と述

べているように、布努ヤオ族が居住する地域にとって観光振興は有効な貧困脱出の手段なのである（石森 2008：16-17）。しかも、イベント化された祝著節は生活が現代的になった布努ヤオ族にとっては、銅鼓文化を保存する上で有益な方法と認識されている。

第4節 宗教の文脈からみる伝統祭りの「混乱」

以上、西南中国広西チワン族自治区河池市の布努ヤオ族の伝統的祭りである祝著節を取り上げ、それが観光資源として演出されたイベントとなることにより、本来の宗教的文脈からみると「混乱」をきたしていることを考察してみたい。

祝著節は布努ヤオ族が世界を創造した女神「密洛陀（ミロト）」に感謝し、豊作を祈願する祭りであるが、観光資源として活用されることにより、祭り本来の場所や旧来の習俗の意味を考慮することなく、他の民族文化と同じ舞台上で演じられるということが増加している。つまり、元来は共同体の行事として村の内部で行なわれていた祭りが、観光客の好みに合わせ、他の場所に新たに設置された舞台の上で演じられるようになったのである。神々の祀りという本来の宗教的文脈から切り離され、無関係な他の少数民族の祭りや漢民族の歌・踊りとも組み合わされて演出・上演されている。この場合、祭りは宗教的文脈や場所から切り離されているだけではなく、本来の秩序および意味の混乱をきたしていると言わざるを得ない。

次に、時間の混乱という視点から見ると、祝著節の開催期間は毎年旧暦の5月25日から29日の間である。ヤオ族文化の代表的な研究者である蒙霊によると、旧暦5月25日から28日までは、もともとヤオ族の英雄的祖先である九黎が魔物を退治するために出征した期間であり、その間に新しく収穫した五穀を供物として、線香を焚き、九黎が無事に凱旋してくることを祈る。そして5月28日に九黎が凱旋して来たので、29日に盛大な慶祝の儀式を行ったとされている。そのため、祝著節は5月25日から29日までの間が本来の開催期間なのである。しかし、観光客のニーズと観光振興のために、2015年には巴優大舞台で29日だけ開催された。つまり、儀式の内容を簡略化した上で、期間も5日間から1日だけに短縮したのであり、祭りの意味も希薄化するようになった。

また、空間の混乱という視点から見ると、祝著節が行われる巴優大舞台の所在地である巴優村の人々は祝著節を行う習慣を持っていなかった。それにもかかわらず、政府がエスニック・ツーリズムを発展させる目的で、巴優村の広場に新しくヤオ族の民族村を建設し、祝著節を催すようになったのである。無関係な巴優村に新しい民族村と演出舞台を建設した結果、祭りそのものもまさに観光客のニーズに応じて新たに「演出」されたイベントになっているのである。現地調査によると、何百年も前から本来祝著節が開催されてきた場所は、巴優大舞台から23km離れた龍山村番嶺山の古歌台である（写真Ⅱ-1-6と写真Ⅱ-1-7）。また、ヤオ族文化の代表的な研究者である蒙霊によると、祝著節は1977年に回復され、1980年代に盛んになり、1990年代から今日に至るまでも開催され続けている。しかし、筆者が2017年5月に地元の住民を対象として実施した聞き取り調査の結果からは、巴優大舞台で祝著節が行われるようになって以後に、古歌台に集まる人々の数は減少し、もともとの祝著節の規模は縮小されていることが分かった。さらに、祝著節を開催す

る代表的な村の一つである巴根瑤寨では、2015 年から巴優大舞台が新たな祝著節の開催地とされ、もともと祭りが行われていた巴根瑤寨の銅鼓楼ではまったく実施されていないことが村人への聞き取り調査から明らかとなった（写真Ⅱ-1-8）。

さらに、名称の混乱という視点から見ると、例えば「密洛陀」といった名称を冠した密洛陀ワイン、密洛陀トウモロコシ、密洛陀カボチャなどの商品が観光センターの中に氾濫するようになった。布努ヤオ族の祝著節は女神「密洛陀」の祭りであるが、こうした商品は「密洛陀」と無関係であり、密洛陀の本来的な意味は見失われ、観光客も「密洛陀」の意味を理解していない場合が多い。

最後に、人的な混乱という視点から見ると、無関係な他の少数民族の人々や漢民族の人々が同舞台で演出・上演することにより、祭りの主体性が見失われ、本来布努ヤオ族の人々が求めてきた意味と正統性が喪失されているとの声も大きくなりつつある。

このように祭りの観光資源化は、祭り本来の宗教的文脈からみると意味の喪失あるいは混乱という大きな問題を含んでいる。しかしその一方、現代化の進展の中で中国西部の経済的に遅れている地域では、若者たちが都市部へ出稼ぎに行って戻らないという現象が顕著になっており、伝統文化の伝承が断絶する危機が極めて深刻になっている。このような状況のもとでは、伝統文化の保存という視点から見ると、それを舞台で演出・上演される精緻化された芸能として保存することは有益だと考えられる。



写真Ⅱ-1-6 巴優大舞台から 23km 離れた龍山村番嶺山古歌台

（2017 年 5 月 17 日 筆者撮影）



写真Ⅱ-1-7 古歌台で歌が歌われる石段

(2017年5月17日 筆者撮影)



写真Ⅱ-1-8 巴優大舞台から5km離れた巴根瑤寨銅鼓樓

(2017年5月17日 筆者撮影)

第5節 まとめ

本章では、河池市布努ヤオ族の祝著節を事例として取り上げ、エスニック・ツーリズムの影響下でその祭りがイベントへ変質しつつあることを考察した。その結果、以下の通りである。

まず、政府からバックアップされた祝著節として観光資源化されることによって、大規模なイベントへと変質すると同時に、多くの観光客を誘致した。伝統的な民族文化が商品化されることによって、その本来の意味は希薄になってきているのである。さらに、銅鼓の装飾化や、舞台の後方に新旧の銅鼓が無秩序に並べられている現状は、銅鼓の宗教的意味が喪失されていることを象徴的に示している。

次に、布努ヤオ族は今日に至るまで伝統的な銅鼓文化を伝えてきたが、少数民族居住地域の開発に伴う観光振興の中で、それが魅力的な観光資源として多くの観光客を惹きつけるようになった。そこで本章では、布努ヤオ族の銅鼓文化が観光政策の目玉として扱われることにより大きく変容していくことが、民族的アイデンティティとどのように関わっているかを、イベント参加者に対するアンケート調査の分析結果により考察した。その結果、布努ヤオ族の人たちはもはやほとんど銅鼓を所有しておらず、日常生活の中で銅鼓を叩く習慣がないにも関わらず、なおも銅鼓を伝統的で重要な文化財として認識していることが分かった。さらに、観光客向けのショーのために伝統的な民族文化が商品化されることによって、この習慣と意識に変化が生じており、銅鼓の本来の意味は希薄になってきていることも明らかにした。

また、費孝通（1989）が「ある共通コミュニティ内で生活する人々には、外界との接触がない限り、アイデンティティの自覚は生まれてこない」ことを指摘したが、元々ヤオ族の意図とは無関係に達努節、二九節などと呼ばれていた祭りを、ヤオ族の研究者の提言を契機として、ヤオ族自身が祭りの意義を自民族にとって重要な宗教的意味として再認識し、祝著節と呼ぶようになった事態が、そうした民族的アイデンティティの確立を示している。しかし、そのように再認識され、祝著節と呼ばれるようになった祭りが今や、銅鼓文化の観光化によって他の民族と頻繁に接触することで、本来の意味を喪失し、民族的アイデンティティにも変化が見られるようになったのである。

さらに、イベント化された祝著節は、生活が現代的になって、銅鼓を叩く習慣が急速に失われつつある布努ヤオ族の人々にとっては、銅鼓文化を保存するための有益な方法として認識されている。しかし、このようにイベント化され、宗教的コンテクストから切り離された銅鼓文化は、祭りというよりも、むしろ伝統芸能として保存されているに過ぎないとも考えられる。また、この地域にとって観光振興は貧困からの有効な脱出手段であり、イベント化された祝著節はその点で大きな役割を果たしている。しかしその一方、伝統的祭りの意味の希薄化による民族的アイデンティティの変化、観光客の流入による文化の破壊、さらには居住地における生活環境の破壊などという代償も覚悟しなければならないことを指摘した。

第2章 エスニック・ツーリズムにおける銅鼓文化の変容

第1節 少数民族の銅鼓文化

1. 銅鼓文化に関する研究

中国少数民族の祭りに関する研究には、多くの優れた先行研究がある。特に少数民族の優れた民芸品であり、祭りで使用される宗教的祭具でもある銅鼓については、学術領域で早くから銅鼓の分類、年代判定、紋様、効能、使用民族などの視点から多角的研究が行われてきた。例えば、姚（1986）は、1980年代の布努ヤオ族の銅鼓文化を取り上げ、その銅鼓の歴史的起源、民間における銅鼓收藏数などを論じた。侯（1993）は、銅鼓が革鼓から転化したものという従来の学説を批判し、銅釜から転化したものであることを論じた。また彼は、銅鼓の種類の違いと文化の相関関係を追究することによって、同じ種類の銅鼓であってもそれが分布する地域や民族の差異により多種多様な銅鼓文化が展開されていることを論証した。銅鼓の紋様に関する研究では、李（1993）が銅鼓の紋様が萌芽期、成熟期と転化期という三つの時期を経て変化することを指摘し、その時期ごとの紋様の違いを比較検討した上で、変化段階によってその象徴する意味も異なることを明らかにした。銅鼓の彫塑に関する研究では、玉（1993）が銅鼓の表面に彫刻されたカエルの模様を事例として、そのトーテムが象徴する意味を探究し、カエルの模様の彫塑が高い芸術的価値を有するのみならず宗教的な意義をも有していることを指摘した。さらに、何（1993）は銅鼓に関して民間に伝承された神話と銅鼓の紋様に強い関連性があることを指摘し、銅鼓の宗教的な意義を明らかにした。

銅鼓に関する日本の研究者である今村（1973）は先史時代に遡るⅠ式銅鼓などを中心に、ヘーガー（Heger）Ⅰ式銅鼓とそれに先行する銅鼓の時代区分について論じた。また、今村は別の論考（1989）において銅鼓資料のめざましい発見、発表によって、Ⅰ型式の内にも系統差が存在することを明確にし、ヘーガー（Heger）Ⅰ式をとりあげて、その中に2つの系統があり各系統内でも大型と小型が作り分けられていることを論じた。鈴木（1995）は中国・広西チワン族自治区の白褲瑤を事例として、その銅鼓儀礼を研究し、そこに表現された銅鼓儀礼文化の世界観を考察した。川島（2011）は、考古学と民俗学の視点を通して、中国南部から東南アジア地域におけるヘーガーⅢ式銅鼓を中心に、その分布地域に該当するメコン・サルウィン水系中流域の特徴や周辺地域との関係性を明らかにし、当該地域の青銅製銅鼓文化について論じた。

しかし、観光開発が銅鼓文化に与えた影響という視点から論じた研究はほとんど見られなかった。わずかに廖（2009）が、中国華南珠江流域の少数民族の銅鼓文化の動態を検討し、社会発展が銅鼓文化に与えた影響を考察するとともに、その文化の継承と保存のあり方を提示した。また高（2010）は、中国西南チワン族の銅鼓文化を事例として、社会の発展と文化生態の急激な変化の下で、銅鼓文化が衰退しつつあることを指摘し、その文化の保存方法と開発のあり方を検討した。

このように、これまで歴史文化の視点から銅鼓文化を取り上げた研究事例は多いが、観光学の視点から中国少数民族の銅鼓文化について論じた研究事例は少ない。したがってこ

ここでは、観光開発における布努ヤオ族の銅鼓文化の現状を事例として取り上げ、祭りの観光活用のあり方について考察することには重要な意義があると考えます。

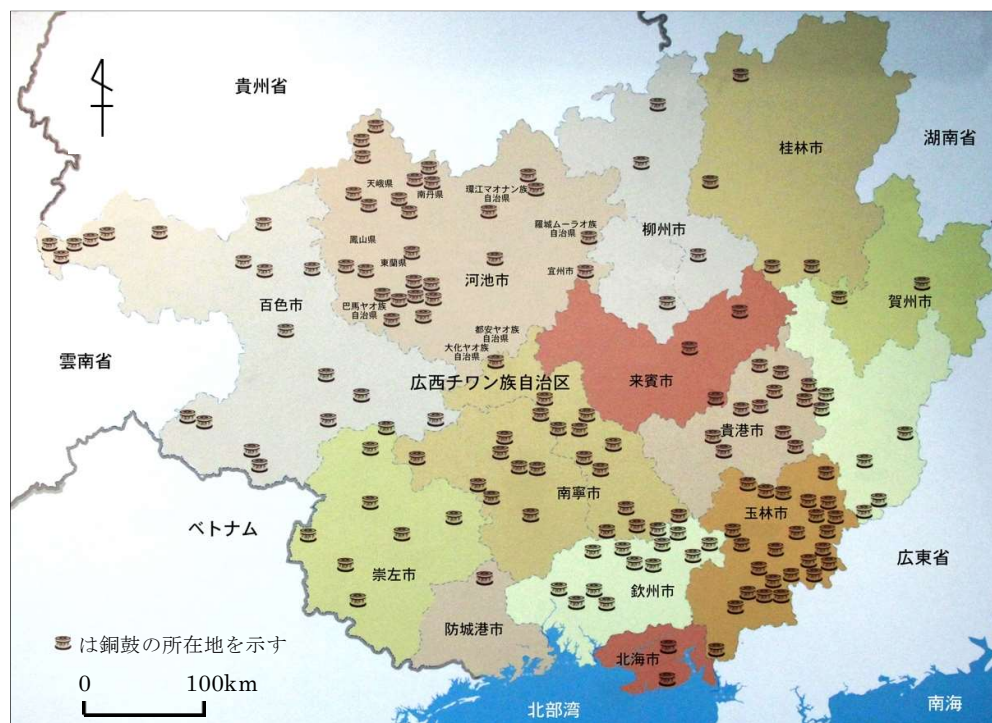
2. 銅鼓の分布地域

中国西南部の雲南省、貴州省や広西チワン族自治区の山間部に暮らしているさまざまな少数民族の間では、今日に至るまで銅鼓を使用する祭祀が行われている。

前述したように、広西チワン族自治区の河池市には、チワン族、ヤオ族、ムーラオ族、苗族、トン族、毛南族などの少数民族が居住している。広西チワン族自治区統計局のデータ（2010）によると、河池市の少数民族の人口は 283 万人で、総人口の 85%を占め、そのうちチワン族の人口は 234 万人と最も多く、第2位のヤオ族人口は 36 万人、第3位のムーラオ族の人口は 13 万人である。

多くの少数民族が暮らしている河池市では、昔から民間に豊かな民族文化が残存している。特に、河池市の紅水河流域のカルスト地区に居住するチワン族と布努ヤオ族は、今日に至るまで古い伝統的な銅鼓文化を伝えている。銅鼓は、記念日や祭祀、結婚・葬送などで演奏され、人々の生活と切り離せないものである。

「世界銅鼓之郷」と称される広西チワン族自治区河池市には、多くの銅鼓が収蔵されている。河池市統計資料によれば、河池市で民間に収蔵されている古来の銅鼓は 1,417 台であり、中国全土の博物館に収蔵されている銅鼓の総数 1,460 台にほぼ等しい。そのうち、東蘭県は 540 台、大化ヤオ族自治県は 250 台、巴馬ヤオ族自治県は 200 台、都安ヤオ族自治県には 150 台が収蔵されている。



図Ⅱ-2-1 広西チワン族自治区における銅鼓の分布地

資料：広西民族博物館の地図に筆者加筆

第2節 銅鼓文化の概要

歴史学で「北鼎南鼓」と言われるように、銅鼓は中国南方の少数民族地区で代表的な古代の遺産であり、現存する最古の銅鼓は紀元前7世紀にまで遡るとされる。

銅鼓は銅釜という古代の調理用具が転化したものであり、青銅で作られた片面の太鼓である。鼓面にはさまざまな紋様が彫塑によって装飾されており、一般的には太陽光の紋様が中心部に凸状に装飾されるのに対して、周辺にはカエル・亀・牛・馬・人物或いはその他の立体的なレリーフが装飾されている。出土した銅鼓と民間に伝承されてきた銅鼓の形によって、靈山式、北流式、西盟式、麻江式、遵義式、冷水冲式、石寨山式と萬家霸式などの八種類に分類されている。時代と共に、銅鼓の用途は変化し、楽器としての単一的な用途から情報伝達、人々の呼集、宗教的象徴、楽器などの多様な用途を有するようになっていった。

東蘭民間銅鼓收藏館の資料によれば、昔は戦争時に、銅鼓を激しく叩いて敵情を伝達しただけではなく、怯える兵士を鼓舞する用途もあったと解説されている。また、村の若者の結婚式を行う際には、銅鼓を演奏することによって新郎と新婦の愛情が永遠不変であることを祝いだとされている。さらに、昔の村落では、住居と住居の間が数百メートルも離れ、他に通信手段が未発達であったために、銅鼓を打って人々を呼集することがなされた。上記の資料によれば、銅鼓の楽器の用途としては、村落内の伝統的な祭りにおいて銅鼓の音に合わせて踊ることがよく見られる、ということである。



写真Ⅱ-2-1 東蘭民間銅鼓收藏館に收藏された銅鼓

(2014年8月27日 筆者撮影)

少数民族の優れた民芸品である銅鼓は、冶金、鑄造、彫塑、音楽、舞踊の要素が集大成された芸術品であるだけでなく、神に対する崇拝の呪物であることが最も重要な用途なのである。広西チワン族自治区南寧博物館の資料によると、中国古代の民族祭礼と軍事権力は主に統治階級によって握られており、その頃から銅鼓は単なる楽器ではなく、宗教的呪物になっていったと考えられる。そして、銅鼓が民間に流布した後、災いを避けるために人間が銅鼓を叩いて神に訴えたという伝説がある。例えば、チワン族の「敲響銅鼓得雨」の伝説によると、天上の雷神が銅鼓によって人間界の旱魃の情報を受け、翌日に雨を降らせたため、その銅鼓を信奉する者が増えたと言われている。また、昔ヤオ族の村で不吉な兆しがあったときには、「太還願」という行事を行い、12日間、昼夜休みなく銅鼓を叩き続けたという。

『瑤族通史』によると、唐宋時代以後、ヤオ族は湖南省から次第に両広（今の広西チワン族自治区と広東省）、雲貴（今の雲南省と貴州省）に移動し、漢民族やチワン族等の少数民族と雑居するようになった。そして、漢民族とチワン族の文化の影響の下に、銅鼓、銅鈴、喇叭等の楽器がヤオ族の生活に浸透していった。明代以降、「改土帰流⁷⁵」政策によって、統治階級（土司）が没落し、権力と富貴を象徴する銅鼓は、日常的な楽器として少数民族の居住地域に広く流布するようになった。

チワン族は中国少数民族のうち人口が最も多く、中国南部の先住民として長い歴史を持っている。ヤオ族の銅鼓文化よりも長い歴史を持つチワン族の銅鼓文化は、古代雲南省中西部に居住していた濮人（古代チワン族の別称）が銅鼓を鑄造し、宗教的な意味を持つ楽器として生活の中で使用するようになったことに起源があるとする学説が有力である。チワン族の銅鼓には精巧な鑄造によって民族の生活の姿が描かれており、古代から代々伝承されている民族芸術品として貴重な文化財であるとともに、今日に至るまで生活の中で不可欠な祭具ともなっている。

多民族が居住している中国では、多くの民族が自民族のトーテムを持っており、精神的なシンボルとして、カエルのトーテムを崇拝することがよくみられる。しかし、多くの民族の中でも、チワン族は最も敬虔にカエルを崇拝するということが、多くの研究者によって指摘されている。現地調査によれば、民間に収蔵されてきた銅鼓の鼓面にはカエルの造形の彫塑がしばしば見られる。チワン族の銅鼓とカエルとの間には密接な関連性があり、重要な宗教的意味が認められる。鈴木（1995）は河池市南丹県のチワン族の銅鼓とカエルの関わりについて考察したが、銅鼓の表面にしばしばカエルの造形があらわれるのは、カエルが雨をもたらし、水の恵みと太陽の光によって、農耕の豊かさをもたらす願いが籠められているためであると述べている。そして、河池市紅水河中流域のチワン族が居住する村の間では、「螞拐（カエル）節」と呼ばれる習俗がある。それは毎年旧暦の正月 2 日に銅鼓を鳴らして村人を集め、カエルを捕えて殺した後に、盛大に葬式をして神の所に送り

⁷⁵中国、明代以後、西南部に住む少数民族に対して行われた政策をいう。改土帰流とは土司、土官を改め、流官（朝廷任命の正式役人）にする意味である。古くは中国文化の及ばない、いわゆる化外の民として放置されたこれら少数民族は、元朝以来その土着民を土司、土官とする間接統治にゆだねられていた。

返し、人間界の報告と同時に祈願の内容を神に伝えてもらおうとする祭祀である。また、チワン族の民間で昔から伝えられている「銅鼓歌」によれば、チワン族の創世男神「布洛陀（プロト）」は、天地、日、月と星を創造しただけではなく、人間の生活に関わる歌と銅鼓なども作ったとされる。このように銅鼓とチワン族の生活には密接な関係があり、祖先を祀る時に不可欠なものである。



写真Ⅱ-2-2 東蘭県チワン族の螞拐（カエル）節

（東蘭紀実撮影典藏（2015）『典藏東蘭』の写真を引用）



写真Ⅱ-2-3 天峨県チワン族の螞拐（カエル）節

（2017年2月8日 覃建生撮影）



写真Ⅱ-2-4 布努ヤオ族の祝著節

(広西大化七百弄国家地質公園画冊編委会 (2012)『山海奇観：七百弄』の写真を引用)

それに対して、布努ヤオ族は銅鼓が神から賜ったものであり、自然が神のように力を持ち、人間の禍福を主宰することを信じている。自然の万物が太陽の光に恵まれて成長することから、布努ヤオ族は太陽を信奉している。東蘭民間銅鼓收藏館に收藏された銅鼓の表面には太陽の紋様が頻繁に装飾されている。また、布努ヤオ族においては世界を創造した女神「密洛陀（ミロト）」を記念するために、「祝著節」と呼ばれる祭りが、毎年旧暦の 5 月 25 日から 5 月 29 日の間に大規模に行われている。祝著節では、布努ヤオ族の村々はブタ、山羊、鶏を殺し、卵を赤く染め供物とし、歌台を建て、肉、酒を持ち寄って皆で飲食を共にする。人びとは立派な伝統服を着、銅鼓をたたき、地元の歌を歌い、チャルメラを吹奏し、競馬や矢の競技を開催するが、祝著節で最も重要な活動は銅鼓を打ち、踊ることである。布努ヤオ族の銅鼓は、雌の銅鼓と雄の銅鼓の 2 種類に分けられている。演者は 5 人 1 組で、2 人は銅鼓を打ち、1 人は銅鑼をたたき、2 人は竹帽をかぶって踊る。銅鼓の伝統的な演奏技法は 12 セットであり、異なる角度、異なる方法を使い、自然界の狩りと耕作を表現している。

第 3 節 近現代における銅鼓文化の概況

20 世紀になると、1930 年代の風俗改良、1950 年代の迷信や旧習の否定、1960 年代の文化大革命などの政策が銅鼓文化に壊滅的打撃を与えた。それらの衝撃にも関わらず、銅鼓文化は少数民族の日常生活に根付いていたため、祭りや儀式の中に生き続け、今日に至るまで代々伝承されている。しかし、経済発展と現代文明の進展は、銅鼓文化にこれまでにない大きな影響を与え、銅鼓の使用頻度が減少し、演奏できる人も少なくなっている。また、多くの若者は出稼ぎに行き、銅鼓を打つ機会がない上に、現代的な娯楽に惹かれ、

銅鼓には無関心となっている。

このような状況下で、広西チワン族自治区政府は国家文化政策に対応するかたちで、銅鼓文化を中心とする少数民族伝統文化の保護と伝承のために、多くの政策を推進した。例えば、1996年に東蘭県の「關於民間転世銅鼓文物保護管理的通告」、1997年に河池地区政府の「關於民間転世銅鼓的通知」、2005年に広西チワン族自治区の区政府の「広西チワン族自治区民間伝統文化保護条例」、2007年に河池市政府の「關於加強民間転世銅鼓保護管理的通告」などの法令が発せられた。また、広西チワン族自治区文化庁は2004年に、銅鼓芸術を中心とする銅鼓文化の保護と伝承を目指し、「広西紅水河流域銅鼓芸術保護工程」を実施した。その後、河池市政府は各地に10ヵ所の銅鼓訓練所を開設し、特に東蘭県と南丹県には各1ヵ所の銅鼓文化生態保護村を建設した。東蘭県の銅鼓文化生態保護村である長江郷蘭陽村は、数年に渡って村の銅鼓文化を伝承していくという雰囲気を高揚させ、村民の過半数の人々が銅鼓をたたくことができるまでになっている。

第4節 銅鼓文化の観光活用のあり方

1990年代末には中国西部における大開発戦略の実施を契機に、河池市政府の主導下で、東蘭チワン族の蚂拐（カエル）節（旧暦正月2日）、宜州劉三姐⁷⁶山歌節（旧暦3月3日）、河池市布努ヤオ族祝著節（旧暦5月29日）、環江マオナン族分龍節（旧暦6月2日、7日）、河池市銅鼓山歌芸術節などの、伝統的な祭りを核とするイベントが相次いで開催された。

河池市銅鼓山歌芸術節、南寧国際民間歌謡芸術節、桂林山水旅行節は「広西三大芸術節」と言われている。銅鼓山歌節は、かつて東蘭県の隘洞、長楽郷一帯に居住しているチワン族の伝統的祭りを核として再編し、毎年旧暦正月の1日、15日と30日に行われている。銅鼓山歌節においては、各村の若者が銅鼓の競技チームを編成し、銅鼓を村近くの山の頂上に運び上げる。そして木の棚に掛けた銅鼓を叩いて祖先を祀った後で、銅鼓の競演が始まる。試合は大小の銅鼓からなる、4つの銅鼓を1組として、3人が交替して中断することなく叩く。打ち出しの声、律動の明快さと叩く時間の長さによって、勝負を判定する。試合はしばしば徹夜で行われ、同時に若い男女たちが、一問一答の形式で歌を歌い合う。そして試合終了後には、人々が集まって家から持って来た食べ物を共に食べる。

そして、1999年、当時の中国共産党河池地区（2002年河池市に昇格）委員会は銅鼓山歌芸術節の開催を決定し、その後、2009年までの間に銅鼓山歌芸術節は、宜州市、大化ヤオ族自治県、南丹県、天峨県、羅城ムーラオ族自治県、都安ヤオ族自治県、巴馬ヤオ族自治県、環江マオナン族自治県、鳳山県、東蘭県の11県（市・区）で順番に主催された（表Ⅱ-2-1）。

⁷⁶広西チワン族自治区の中で知らない人はいないほど有名な人物で、生まれは唐朝時代（618～907年）中宋年代、広西（中国南部）チワン族に生まれた。本名は劉三妹で、広西柳江流域において優秀な実力派の民謡歌手として活躍した。人々はこの民謡歌手をしのび、毎年3月3日に柳江の河辺で歌唱コンテストを開催し『劉三姐』を悼んでいる。歌仙・劉三姐の故郷である広西『歌海』の誉れ、チワン族が持つ美と愛、知恵と才能の化身、それが劉三姐であるといえる。

表Ⅱ-2-1 銅鼓山歌芸術節の11県（市・区）の開催地

年	場所（市・県）	年	場所（市・県）
1999	河池市	2008	鳳山県
2000	宜州市	2009	東蘭県
2001	大化ヤオ族自治県	2010	開催されず（自然災害のため）
2002	南丹県	2011	河池市
2003	天峨県	2012	鳳山県
2004	羅城ムーラオ族自治県	2013	宜州市
2005	都安ヤオ族自治県	2014	羅城ムーラオ族自治県
2006	巴馬ヤオ族自治県	2015	都安ヤオ族自治県
2007	環江マオナン族自治県	2016	巴馬ヤオ族自治県

資料：河池市銅鼓山歌芸術節の資料により筆者作成

銅鼓山歌芸術節は開催地に大きな経済効果をもたらした。例えば、2009年の河池市銅鼓山歌芸術節の開催地東蘭県では、年間の観光客数と観光収入が大幅に増加し、2009年の観光客数は18万人となった。そのうち国内観光客数が17,860人で、2008年と比較すると15%の伸びとなり、外国人観光客数は355人で、2008年より37%の伸びとなって、観光収入も3,844万元まで増加した。

銅鼓山歌芸術節では、河池市の各県から銅鼓の演奏団が編成され、開催地で何回かのリハーサルをした後で、開催日には観光客のリクエストに応じる演奏が行われる。演奏の演目は、銅鼓に関するプログラムに限定されたものだけではなく、開催地の文化の特色も組み合わせる数項目を加え、観光客にアピールされている。例えば、2013年11月30日に宜州市で開催された河池市銅鼓山歌芸術節は、宜州市が劉三姐の故郷であり劉三姐山歌節の唯一の開催地であることに因み、「神韻河池・醉美宜州」をテーマとして銅鼓山歌芸術節と劉三姐山歌節が一緒に行われていた。また、2016年11月18日に巴馬ヤオ族自治県で開催された河池市銅鼓山歌芸術節は、巴馬ヤオ族自治県の観光イメージを世界に広げるために、「神韻河池・世界巴馬」をテーマとして大規模に行われた。

また、布努ヤオ族の歌舞と祭りは、地域的特色を有する文化観光資源として認識され、観光開発の対象として注目されるようになった。特に、大化ヤオ族自治県人民政府の主導下で、祝著節（達努節）という布努ヤオ族の伝統的祭りが観光化され、毎年旧暦の5月25日から5月29日の間に大規模に行われている。大化ヤオ族自治県旅遊局の統計データによると、2013年の1月から9月までの国内観光客数は50万人で、観光収入は4.3億元、国際観光客数は2,600人で、外貨収入は95万ドルであった。



写真Ⅱ-2-5 巴马や才自治県で開催された第17回河池銅鼓山歌芸術節
(2017年3月5日取得 広西河池日報の陸寿欽提供)



写真Ⅱ-2-6 蝓拐（カエル）を祀る様子
(2017年2月8日 覃建生撮影)

さらに、チワン族の伝統的な祭りである螞拐（カエル）節は、2006年に中国の国家級無形文化遺産として、「第一批国家級非物質文化遺産名録（第一次国家級無形文化財リスト）」に登録された。その後、南丹県、天峨県、東蘭県などの各地で、従来は住民が自発的に開催してきた螞拐（カエル）節が県政府の主導下で、観光資源として外部に宣伝されるようになった。天峨県文化局が公表した統計データによると、2013年に天峨県で開催された螞拐（カエル）節には、2日間で4万人余りの観光客が訪問した。また、東蘭県の巴英村は代表的な螞拐（カエル）節の開催地の1つとして、毎年大規模に祭りが行われ、多くの観光客を惹きつけるようになった。

さらに、2017年2月7日・8日の二日間に、天峨県紅水河壮族螞拐民俗文化節が天峨県六排鎮納洞村納魯屯で盛大に開催された。村人たちは、銅鼓を叩き、その音に合わせて螞拐舞を踊って、螞拐を祀る儀式を行い、新年の気候順調と五穀豊穡を祈った。また、訪れた観光客の前に国家級非物質文化遺産リストに登録された螞拐舞を上演すると同時に、伝統的なスポーツ運動競技なども行った。

次に、このようなチワン族とヤオ族の伝統的な祭りが観光イベント化することによって、どのような問題が生じているかを考察したい。門田（2013）は、従来生活世界に埋め込まれていた習俗が、文化政策や市場という外的要因によって規定され変化していることを指摘しているが、ヤオ族の祭りにおいても同様な事態が起こっていると思われる。つまり、中国政府による西部大開発戦略という経済振興策の下で、市場経済が中国西南部の未開地に浸透したことにより少数民族の日常生活世界に代々伝承されてきた伝統文化が商品として観光客に売り込まれるようになったのである。そして、少数民族の独自の文化が市場経済と観光の影響下で変化していかざるを得ないのである。また、バレーン・L・スミス（1977）は、産業革命の恩恵に恵まれていた西欧諸国の人々が第三世界の国々、あるいは未開発の先住民居住地域へ観光しているケースを事例として、観光客を受け入れる側であるホストとその地域を訪れる観光客であるゲストとの関係について検討した。つまり、時間と金銭に余裕を持つ西欧諸国の人たちが、未開地の魅力に惹かれ、異文化を体験するために、先住民居住地域を訪れることで摩擦が生じることを指摘したのである。スミスが指摘したこのような問題が、中国西南部未開地の少数民族のホスト側と経済的地位の優越した漢民族のゲスト側の間でも生じている。つまり、文化的価値の相違、経済的な非対称性などによって、両者のコンタクトゾーンに摩擦が絶えず生じているのである。

さらに、観光客が先住民居住地域を訪問する目的は、祭り、食べ物、工芸、踊りなど、それぞれの民族が何世代にもわたって培ってきた文化に触れたいという知的欲求を充足させることである。つまり、ゲストである観光客は、D.マッカネル（1976）のいう「オーセンティシティ」（真正性）を求めることを目的として、先住民居住地域を訪問するのである。その側面から考えると、国家からの優遇政策によってチワン族と布努ヤオ族の銅鼓文化を観光資源とすることは、それらが日常的生活から切り取られ、エンターテインメント化して、観光客の目の前にさらされることで、銅鼓文化本来の意味が希薄になることを招いている。

ブーアスティン（1964）の擬似イベント論が指摘するように、観光客は計画的に演出されたイベントに参加して喜ぶという傾向がある。すなわち、観光客は、河池市銅鼓山歌芸術節に参加する時に、切り取られて作り出された銅鼓文化に触れることで、楽しさや面白

さを感じているかもしれない。しかし、河池市銅鼓山歌芸術節は先住民が自分たちから自発的に形成したものではなく、政府が計画した銅鼓文化の展示イベントに過ぎないのである。

確かに、少数民族の銅鼓文化は観光資源として活用され、大きな効果をもたらした。河池市銅鼓山歌芸術節と祝著節の開催を成功させることは、河池市の知名度を高め、社会、経済、文化を発展させる上で積極的な推進力を発揮している。また、都市のインフラ整備が促進され、次に、精神的な遺産が保護されるとともに、新しい文化の創造と発展がもたらされた。しかしその一方では、伝統的な祭りが宗教的儀礼の場から、イベント化された表舞台へと移されて、観光客の前で上演されることにより、伝統的な民族文化の商品化が進み、その本来の意味は希薄になってきている。

第5節 まとめ

本章では、広西チワン族自治区河池市の布努ヤオ族の銅鼓文化を取り上げ、チワン族の銅鼓文化と比較検討しながら、祭りの観光活用のあり方について考察した。まず先行研究の検討にもとづいて、チワン族と布努ヤオ族の銅鼓文化と祭りについて考察した上で、布努ヤオ族の文化や祭りの観光活用の問題点を明らかにした。その結果、以下の点が明らかとなった。

まず、研究の対象地域である「世界銅鼓之郷」と称する広西チワン族自治区河池市の概況を記述し、多くの少数民族が暮らしている河池市では、昔から民間に豊かな民族文化が残存していることを述べた。特に、河池市の紅水河流域のカルスト地区に居住するチワン族と布努ヤオ族は、今日に至るまで古い伝統的な銅鼓文化を伝えていることを指摘した。

次に、布努ヤオ族とチワン族の銅鼓文化を比較検討し、優れた民芸品であるとともに、宗教的な呪物でもある銅鼓の特色を概観した。そして経済発展と現代文明の進展が、銅鼓文化にこれまでになく大きな影響を与え、銅鼓の使用頻度が減少し、演奏できる人も少なくなってきたことを指摘した。その上で多くの若者は出稼ぎに行って、銅鼓を打つ機会がない上に、現代的な娯楽に惹かれ、銅鼓には無関心となっていることを述べた。

また、銅鼓文化が観光活用され、多くの観光者を惹きつけて、大きな経済効果をもたらしていることを、河池市銅鼓山歌芸術節、布努ヤオ族祝著節とチワン族蚂拐（カエル）節などの祭りを事例として検討した。それによって少数民族の日常生活世界に埋め込まれてきた銅鼓習俗が、広西チワン族自治区河池市政府の文化政策と市場経済の少数民族居住地域への浸透という外的要因によって規定され、変化しつつあることを明らかにした。

さらに、中国西南部における未開発地の少数民族のホスト側と、経済的に優越した地位にある漢民族のゲスト側とがその文化的価値の相違や経済的な格差などによって、両者のコンタクトゾーンで絶えず摩擦を生じさせていることを指摘した。そして国家の優遇政策によってチワン族と布努ヤオ族の銅鼓文化が観光資源化されることで、日常的生活から切り取られてエンターテインメント化し、観光者の目の前にさらされ、銅鼓文化の本来の意味は希薄になりつつあることを指摘した上で、観光化と同時に祭りの本来的意義を考慮する必要があることを述べた。

第3章 エスニック・ツーリズムにおける演出された民族文化

第1節 中国民族文化の観光資源化の動態

中国民族文化の観光資源化の動態については、さまざまな研究者によって指摘されている。例えば、兼重努（2014）は、中国共産党政権下における民間文芸に関する政策について、1949年から現在に至るまでの流れを把握したうえで、少数民族文化の動態についても検討した。すなわち、第1段階は、1949年から1966年にかけての中国建国から文化大革命前までの時期である。この時期には階級闘争を主線に、市場主義経済は批判の対象となり、文化商品化が抑制された。第2段階は、1966年から1978年にかけての文化大革命から改革開放への転換までの時期である。この時期には、伝統的なものが四旧（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣）として破壊され、少数民族の文化も否定された。第3段階は、1979年以降の改革開放期である。この時期には、階級闘争路線から市場経済化への転換がなされ、市場主義的な利潤を求めて、エスニック・ツーリズムが全国に波及するようになり、その中で破壊された民族文化の復興や少数民族文化の観光資源化が急速に進展していった。

このような観点は数多くの研究で指摘されたが、その一方で西部大開発プロジェクトの実施後、あるいは2000年代に入って少数民族の伝統文化を中心とする観光開発が盛行・拡大していった。そうした状況の下で、特に長年にわたり貧困に苦しんでいた西部の少数民族はこの政策によって伝統文化を日常的な生活から切り離し、観光資源として開発することによって、経済利益を得た。そして、2000年代から中国民族の文化資源は新しい時代に入り、第4段階として位置づけることができると思われる。なぜなら改革開放後に、中国の観光業は急速な成長を遂げ、それに伴って少数民族を中心とする観光開発も著しく発展してきたが、その一方で西部の数多くの省・自治区および地方郷村まで1990年代初めにはエスニック・ツーリズムの動きが芽生え、2000年代にそれが盛んになることによって、地方郷村における少数民族の生活世界にまで大きな影響を与えていると思われるからである。この時期は、いわゆる西部の振興の時期であるが、地方郷村の少数民族文化も観光資源化されていった。

そして、このような4つの段階からみると、中国における少数民族の伝統文化は多かれ少なかれ文化大革命の時期に破壊されたことがあり、改革開放期にエスニック・ツーリズムの発展によって復興された。その一方で白褲（パイクー）ヤオ族は文化大革命の影響をほとんど受けていなかったため、伝統文化の保存状態は非常に良い。他の地域と比較して、白褲ヤオ族の伝統文化の観光資源化にはどのような特徴があるのかを次節で検討する。

第2節 白褲ヤオ族伝統文化の観光資源化

1. 白褲ヤオ族の概況

南丹県は、広西チワン族自治区河池市の西北部に位置し、総面積は3,916km²である。県内の地形は雲貴高原の延伸地帯の一部として複雑多様な構造であり、全体の地勢は東北から南西方向に傾いて、峰々に連なるカルスト地形と丘陵地形が広く分布し、平均海拔は

600mである。南丹県は長い歴史を有しており、宋代に置かれた南丹州が明代に回復された後、清時代には南丹土司州と称した。そして中華民国 7 年（1918 年）には州に代えて県を置き、今日に至るまで「南丹県」の名称が用いられ続けている

2010 年の人口調査によると、南丹県には 23 の民族が居住しており、総人口は約 29 万人である。『壮族通史』（1997）によると、数万年前の旧石器時代から、南丹県の少数民族の中でも有力なチワン族の祖先たちはすでに中国の南方で生活していたとされる。また、『广西瑶族社会歴史調査資料（三）』（2009）の記述によると、南丹県では古代からチワン族が居住し、宋代（960）以後には瑶族、水族、苗族、漢民族などの民族が断続的に湖南、貴州、山東、江西、広東などの省から流入してきた。さらに、『南丹県志』（1994）によると、南丹県の総人口は元代末期（1367）までに 50,235 人で、それ以後に数百年にも及ぶ戦乱によって人口が激減し、中華民国 16 年（1927）には、総人口は 28,992 人となった。その後、人口は回復し、中華民国 33 年（1944）までの人口は 76,024 人に増加した。中華人民共和国成立後の人口は急激に増加し、1951 年の時点までに全県の人口は 103,067 人、1990 年には 265,348 人に達した。その中で、壮族は 138,453 人で、全体の 51%を占め、漢民族は 84,064 人 31%、ヤオ族は 27,158 人 10%を占めている。

白褲ヤオ族は、主に広西チワン族自治区西北部の南丹県と貴州省南部の荔波県に居住しており、総人口は約 3 万人であり、その中で約 2.2 万人は南丹県の「半山半石山」と称されている土地条件の劣悪な山間部に暮らしている。『瑶族通史』（2007）によると、白褲ヤオ族は主な生業形態は古来焼畑、狩猟、植林であり、自称は「不努」であるが、男性たちが白いズボン（白褲）をはいているため、その特徴によって他の民族からは「白褲ヤオ族」と呼ばれている。また、田畑ほか（1995）によると、1970 年代の白褲ヤオ族はトウモロコシを中心に栽培し、焼畑による開墾で山の斜面に陸稲を生産し、林場の管理・伐採による現金を得ることがある。



図Ⅱ-3-1 広西チワン族自治区南丹県の位置

(筆者作成)

2. 白褲ヤオ族の伝統文化と社会変動

白褲ヤオ族の居住地は、地形的制約によって、外来文化の影響を受けることが少なかったため、彼らは古くからユニークな民族文化を代々伝承してきた。特に銅鼓文化、葬送文化、服飾文化、飲食文化および建築文化などの伝統文化が世間に知られている。2001年に UNESCO の世界遺産委員により、白褲ヤオ族は世界の中で「民族文化を最もよく保全している民族の一つ」として世界文化遺産に認定され、「人類文明の生きた化石」とも呼ばれている。

白褲ヤオ族の社会変動については時期の上では 5 つの段階に分けられている。第 1 段階は、1100 年から 1912 年にかけて中華民国前までの時期であるが、この 800 年余りの間に白褲ヤオ族の人々は莫氏土官によって統治され、主な生業は焼畑農業を中心とした。『広西瑤族社会歴史調査資料（三）』（2009）によると、白褲ヤオ族の人々は長年にわたり莫氏土官によって被害を受け、圧迫と搾取に対抗するために、多くの反抗闘争を起こした。第 2 段階は、1912 年から 1949 年にかけて中国建国前までの時期であるが、白褲ヤオ族は、国民党の統治によって、生活貧困、生産力低下、政治地位低下が見られた。第 3 段階は、1949 年から 1978 年にかけて、つまり中国建国から改革開放への転換までの時期である。この時期には、様々な社会変動が生じ、1952 年の農民協会の成立と土地改革運動、1954 年の自治人民政府の成立もあった。また、白褲ヤオ族の生活を向上させるために、経済建設を実施するとともに文化教育改革も推進された。周知のとおり、文化大革命は中国の少数民族の伝統文化に大きな衝撃を与えたが、地理的な閉鎖性が原因で白褲ヤオ族の伝統文化は文化大革命からの影響をほとんど受けなかった。第 4 段階は、1979 年から 1999 年にかけての改革開放時期である。この時期の中国の経済は高度成長期であったが、都市中心部から離れた山奥の白褲ヤオ族の村落は経済発展に恵まれなかったため、商業も十分発達せず、ただ定期市場で手作り工芸品や土産品を売り、漢族から日用雑貨を購入するだけであった。一方で、近代化と市場経済の浸透の影響はしばしば進行していった。第 5 段階は、2000 年代の初頭で政府による「観光脱貧」政策の下で、伝統文化が急激に観光資源化され、白褲ヤオ族の社会と文化に多大な影響を及ぼしている。また、現金を得るために若者たちの多くは中国の東部沿岸経済発達地域への出稼ぎに行くようになった。

5 つの段階をみると、白褲ヤオ族の生業形態は 2000 年代までほとんど変化していない。しかし、現代化と観光開発によって、現在白褲ヤオ族の社会は急激に変化しているのである。

3. 「観光脱貧」と伝統文化の観光資源化

中国政府は観光産業の発展によって貧困地区の人口が貧困から脱出できるようになることを目指し、第 13 次 5 カ年計画の期間（2016～2020 年）に観光産業の発展により貧困人口の 17% を貧困から脱出させる計画を立てて、特に農村観光の発展を通じたプロジェクト

を立てている⁷⁷。南丹県政府は、2000年代から農村地域を振興することを図って観光振興の試みを続けている。近年では少数民族が貧困から脱却するために、伝統文化が中心的な観光資源としてさらに注目され、企業投資の導入により民族文化の資源化を推進して経済利益が追求されている。そして、エスニック・ツーリズムは急速に発展を遂げ、「観光会社＋中心景観＋農家」の観光開発形式が農村地域にまで押し進められ、何らかの職業を提供して農家が現金収入を増やすという現象がよく見られるようになった。

4. 白褲ヤオ族社会の観光の実態

白褲ヤオ族の観光の実態については、南丹県政府と旅遊局が公開した新聞記事によると、2001年8月に「中国白褲瑤国際学術研討会」が南丹県で開催され、国内外から招き集められた専門家と学者たちは、文字と画像などの形で白褲ヤオ族の伝統的な民俗文化を記録することを提案した。また、この国際シンポジウムの中で、初めて白褲ヤオ族の独特な民族文化を観光資源として活用することが提案され、観光産業の発展を通じて白褲ヤオ族の民俗風情が国内外に知られるようにとの期待が寄せられている。こうして民族文化を観光資源として活用するようになり、2002年に広西チワン族自治区東謀観光開発会社の投資によって、初の中国白褲瑤民俗風情園が開園され、その一方では伝統文化を保存するために、2004年に初の「白褲瑤生態博物館」が成立した。その後、2006年6月に、白褲ヤオ族の服飾文化は地域特色を有する非物質文化遺産として国家から認められ、国家級非物質文化遺産名簿に登録された。また、2010年には「白褲瑤民族文化研究会」の開催によって、持続可能な観光開発を達成するために、民族文化の観光資源化およびその保存に関する問題を検討し、観光業の発展を促進している。その後、2013年に中国白褲瑤民俗風情園が全面的に接客施設を改造し、同年に風情園に隣接する白褲瑤新村王尚屯が観光開発を進め、観光産業サービスを向上させるために、「南丹県王尚屯白褲瑤生態旅遊農民專業合作社」が管理会社として成立した。さらに、国内外の観光客を誘致するために、2014年に南丹・丹文化旅游祭が開催された。その後、2016年に南丹里湖白褲瑤生態博物館と白褲瑤民俗文化保護与発展協会の主催により「白褲瑤鄉村影像展」および「白褲瑤民俗文化保護与伝承交流会」が開催され、白褲ヤオ族の民俗文化保護と伝承の問題について検討し、同年の9月に南丹県旅遊協会が成立し、観光業の管理体制が整備された。

このように、白褲ヤオ族の観光動態をみると、2000年代に入って西部大開発政策の下で、政府主導により積極的に観光開発事業が推進され、観光企業の投資を導入すると同時に社会知識人の意見を採用し、民族文化を核とした観光開発が進展することで、いわゆる民族文化が観光資源化されたのである。以下では、このような背景のもと、二つの観光地を中心に扱うことにする。

⁷⁷中国西南部の少数民族地域では、自然資源が乏しく、貧困から脱出するために、観光産業の発展により貧困から脱出させる有効な手段として観光開発計画を立て、特に農村観光の発展を通じたプロジェクトが推進されているが、こうした動向を総合的には「観光脱貧」と称する。

5. 中国白褲瑤民俗風情園の観光事情

中国白褲瑤民俗風情園は、南丹県の里湖ヤオ族郷南部恩村の甘河屯に位置し、郷政府からの距離は 4km である。2002 年に広西チワン族自治区東謀観光開発会社の投資により、白褲瑤民俗風情園が開園され、主に婚礼、葬式、服飾、飲食、銅鼓などの民族文化風情を展示している。全体の面積は約 9.6km² で、2 億元の総投資によって計画された。その後、2013 年からはより多くの観光客を惹きつけるために、風情園は全面的に接客施設を改造し、新たに民族舞踊劇場、飲食サービスエリア、総合的なホテル施設、農耕体験区、民俗工芸品の生産技術展示区、民族スポーツ競技区などの施設を建造した。現地調査によると、21 軒の伝統的家屋を改築した総合的なホテル施設は外観をそのまま残しながら、内部は現代的なホテル装飾に改造された。21 軒のホテルで合計 150 室の客室を持っており、一人一泊当たり 300 元である。

また、風情園では他の観光地と同様に民族伝統文化の展示や民族舞踊も行われているが、その一方で他の観光地と異なるのは、パフォーマンスが白褲ヤオ族に限られていることである。しかし、このような漢民族に運営された企業管理によって、舞台上演される民族舞踊や民族文化展示の内容に至るまで、一連のパフォーマンスのあり方が決定されている。さらに、園内では民族服のレンタル店がよく見られる。

新たな民族舞踊劇場は、「洞天鼓韻」という名がつけられ、「中国白褲瑤民俗文化第一実景演出」舞台として宣伝され、多くの観光客を魅了している。この舞台では、毎週末に白褲ヤオ族の銅鼓文化、伝統歌舞、服飾などの代表的な民族シンボルが観光客の眼前にさらされている。

現地調査によると、民族舞踊のパフォーマンスを担っている人々は多くが出身地は風情園に隣接する王尚屯であり、大部分が青少年と婦人からなる。筆者は、民俗風情園の洞窟内における新たな民族舞踊劇場で 52 歳の男性 L 氏に聞き取り調査を実施し、伝統文化の観光資源化に対する L 氏の態度について考察した。L 氏は里湖ヤオ族郷文化ステーションの役員であり、また演出チームのリーダーも担っている。彼は「観光開発は伝統文化を破壊するか」との質問に対して、「観光開発は、伝統文化を破壊することはない。むしろ、伝統文化の保護にとって有益だと思う。なぜならば、収入があれば、伝統文化を学ぶ動力が生まれるからだ。そして、もっと多くの若者が演出チームに応募し、民族舞踊を習って、伝統文化を伝承するようになるであろう。しかし、もしも勝手な観光開発が進められるならば、きっと民族文化は破壊されていくであろう。」と答えてくれた。また、L 氏は現地の文化流失が極めて深刻化していることを認識しており、出稼ぎの人が多くなると伝統文化の伝承が断絶してしまうことを心配している。さらに、風情園における一回の上演で一人一日 100 元の金を得られるが、民俗風情園内で民族舞踊を上演するだけではなく、時々には他の観光地で上演する場合も多いことがある。L 氏によると、当日上演された舞踊の名前は「猴鼓舞」といい、この舞踊は元来の踊り方をさらに精緻化した舞踊であって、その伝承は困難であるとも述べた。



写真Ⅱ-3-1 伝統的家屋から改築した総合的なホテル施設

(2016年8月12日 筆者撮影)



写真Ⅱ-3-2 洞窟内の民族舞蹈劇場で演じる白褲や才族の子ども達

(2016年8月12日 筆者撮影)

東謀観光開発会社の統計データによると、民俗風情園は2014年10月から2015年10月の間に、約21万人の観光客を誘致し、観光総収入は911万元に達した。また、2016年7月の時点までに約53万人の観光客が来園したと公表されている。さらに、甘河屯153人の村民は職員として就職しているが、その中で貧困の人は87人であって以前より改善され、一人当たりの毎月平均収入は2,000元に達した。また、村の特産品と工芸品を販売

する農家は、毎月平均収入 2,000 元余りを得ている。このような経済効果からみると、政府が推進している「観光脱贫」の政策は一定の効果を挙げていると言える。

6. 企業化された管理の王尚屯

中国白褲瑤民俗風情園に隣接する典型的な白褲ヤオ族村落である王尚屯は、村民たちが古くから農耕によって暮らし、今日に至るまで近代以前の風俗習慣を残している。王尚屯は南丹県の里湖ヤオ族郷南部に位置し、郷政府からの距離は 4km であり、人口は 92 戸 358 人である。住宅地面積は約 4,717m²、総農耕面積は 25ha で、そのうちの水田は 16ha、畑は 9ha で、経済林面積は 260ha である。主な産業はキウイフルーツ、胡桃などの農業と、キジや黒豚などの牧畜業である。

現地調査によると、2010 年に南丹県人民政府の「観光脱贫」の政策により、村人の生活と観光施設を改善するために、「全県村貌改造試点」というプロジェクトの下で、王尚屯内での 72 軒の建物を再建し、それ以外に外貌改造は 14 軒である。同時に屯内での交通網、排水システム、照明システム、文化広場、舞台、バスケット場、駐車場、文化室などの 22 カ所の公共施設が建造された。既存の建物を中心として改造し、観光客に住民の日常生活を展示する上で、小範囲に民族舞踊を上演すると同時に、観光サービス施設を増やして自民族の文化と生活を理解することが期待されている。その後、2013 年に企業の投資を導入し、広西チワン族自治区東謀観光開発会社の主導により、「観光会社＋中心景観＋農家」という開発パターンにおいて、屯内のすべてのものを観光資源として活用するようになった。同時に観光産業サービスを向上させるために、「南丹県王尚屯白褲瑤生態旅遊農民專業合作社」という管理会社が成立し、3 カ所の農家楽（グリーンツーリズム）も開業した。



写真Ⅱ-3-3 王尚屯内の農家楽の農家

(2016 年 8 月 11 日 筆者撮影)

会社の管理規定をみると、会社は地元のキジや黒豚の養殖と伝統の工芸品の生産だけではなく、民族文化の上演と同時にレジャー観光サービスを提供することが規定されている。さらに、管理規定は社員義務、組織管理、資産管理、食品安全、法律規定、上演チーム管理、工芸品の生産などの内容を制度化してきた。そして、王尚屯の人たちは株式投資の代りに地元の伝統建築物と伝統芸能などの風俗習慣を観光資源として投入し、毎年観光開発会社から 4%の配当を得ている。南丹県旅遊局の宣伝によると、現在の王尚屯は、里湖ヤオ族郷の初の観光スポット、民俗風情体験、農家楽およびレジャー観光の特色ある観光産業である。こうして王尚屯は元々農業を中心とする経済的に単一な村から、企業化された管理を行う企業単位になっている。

このような観光開発パターンによって、いわゆる「全村観光」が観光会社にとって容易に観光資源として入手されるようになり、一方で村人の収入も増えている。2015 年南丹県人民政府によって公表されたデータによると、2010 年の王尚屯は一人当たりの純収入が約 1,500 元であり、2014 年 12 月末の時点での一人当たりの純収入は約 4,500 元に達した。しかし、その反面、白褲ヤオ族の伝統文化が急速に観光資源として活用されることで、さまざまな問題が生じている。例えば、王尚屯の 30 歳女性である T 氏は、自家の売店を経営しているが、彼女は、「観光客の来訪で、売店の売り上げは向上したが、一方で観光客が屯内の池にゴミを捨てる場合が多い」と語ってくれた。また、45 歳の農民女性 T 氏は、「農閑期に隣の民俗風情園で上演し、1 日に 100 元もらう。農期には畑で働いている。この建物は、政府から改築させられたものである。建設の費用としては自分で 5,000 元を出し、政府は 7 万元を負担した。伝統の家屋が破壊されたことがいいことなのか、悪いことなのか、私にはわからない。でも、子供たちが雨漏りしない部屋で住むことができるのはいいことなのではないか。」と語ってくれた。このように、地域住民によって民族文化の積極的な観光資源化が進められていることも事実である。

また、白褲ヤオ族の民族工芸品伝承基地では、もともと家庭内における工芸品の生産方式であったものが「観光会社+伝承基地+農家」という開発パターンと組み合わせられ、工芸品が大規模に生産されている。つまり、分散的な生産方式から集約的な工場式生産方式に変わり、白褲ヤオ族の服飾、独楽、鳥かごなどの伝統工芸品の生産が産業として大規模に拡大され、製品は東南アジア各国で販売されるようになったのである。東謀観光開発会社が公表したデータによると、2016 年までに 312 戸の農家が工芸品の生産に参入し、各戸の年収 5,000 元に達した。

7. 白褲瑤生態博物館および他の観光動向

2004 年に南丹県政府は、白褲ヤオ族の伝統文化を保存するために、国際シンポジウムを通じて専門家と学者の提案により里湖郷懷里村に初の「白褲瑤生態博物館（エコミュージアム）」を建設した。このエコミュージアムは、民族文化展示センターと文化保護区から構成され、特に 1,000m²の展示センターは民族文化財の収集・保管・陳列の場として白褲ヤオ族の生活文化を展示している。文化保護区は、懷里村の蛮降、化図、化橋の三つの村落から構成され、180 戸の家、4,000 人余りの住民が含まれている。保護区内の自然風景と、建築物、生活用具、風俗習慣などの有形・無形の文化要素とが、すべてこのエコミュージ

アムの展示内容となっている。

『南丹里湖白褲瑤生態博物館保護措置』によると、エコミュージアムは民族文化の保護において二つの重点を担っている。第1は白褲ヤオ族の文化資料収集と研究センターになることを目指し、民族文化財と資料を展示することである。第2は文化保護区の生態環境と伝統文化（有形と無形の文化遺産を含む）を保護することである。具体的な措置は、まず政府の伝統文化保護政策を宣伝し、白褲ヤオ族の人々の自民族文化に対する誇りを培う。また、「瑤族文化模範家」を選定し、民衆と研究者に民族文化を展示するために、資金を援助して訓練し、民族文化の展示方法を教える。さらに、文化保護区内での建築物を管理し、新しい建築物を規制する。最後に、民族文化記録を推進するために、音と映像などのメディア手段で白褲ヤオ族の日常生活を全面的に記録する。

このエコミュージアムは、白褲ヤオ族の伝統文化の保護にとって重要な役割を果たしている。しかし、現地調査によると、元来の草葺き高床式住居、現地では「干欄（ガンラン）式住居」と呼ばれる家屋に混じって、あちらこちらに瓦屋根にコンクリートの地上家屋、つまり漢族風の家が建てられるようになっている。

白褲瑤生態博物館は、もともと白褲ヤオ族の伝統文化の保存を目的として建設されたが、観光客のニーズの多様化によって、博物館内で暮らす人々にとって日常的な作業であったものが、都市部からの観光客にとっては魅力的な観光資源として受けとめられた。つまり、個人的な好みによって、新奇な文化体験をするために、文化保護区を訪れる観光客が増加しつつある。このような状況下で、政府は伝統文化の保護と共に観光業を推進するために、マスメディアによって博物館を積極的に宣伝している。また、観光ガイドブックでも、白褲ヤオ族の伝統的な祭りである年街節と小年節なども観光資源として紹介されるようになった（表Ⅱ-3-1）。



写真Ⅱ-3-4 新しいコンクリートの漢族風の家屋

（2016年8月11日 筆者撮影）

表Ⅱ-3-1 南丹県民族の観光イベントカレンダー

時 間	名 称	内 容
2 月	年街節	白褲瑤の服飾展示、歌垣、コマコンテストなど
2～3 月	螞拐節敬牛節	壮族の螞拐舞、牛を祀る儀式など
4 月	演武節	壮族の土司 ⁷⁸ 文化展示
3～4 月	花見	花見活動、撮影コンテストなど
5～6 月	郷村観光	グリーン・ツーリズム
7 月	小年節	白褲瑤の服飾展示、宴席体験など
7～8 月	キャンプ	農耕体験、釣りコンテストなど
9～10 月	豊作祝賀	果物狩り祭、銅鼓競技など
11～12 月	グルメ祭	白褲瑤の闘鶏活動、利き酒会など

資料：南丹県観光ガイドブックにより筆者作成

このように地域の伝統文化を観光活用することで経済効果がもたらされ、新たな価値も見出されたが、同時に他の問題も惹き起こされていると思われる。例えば、白褲ヤオ族の葬送儀礼が、「見せもの」として観光客からのまなざしに晒されることは、白褲ヤオ族の人々にとってはつらい光景なのである。

第3節 白褲ヤオ族の伝統文化の観光資源化についての考察

現代の民族観光は、市場経済の浸透によって、民族文化や風俗習慣だけでなく、その中における人間関係までもが消費の対象となっている。2000年代になってから続けられてきた白褲ヤオ族の観光開発の状況は、民族風情園の建設を通じて、観光客がこの場で民族伝統文化や風俗習慣に触れることができ、民族文化が観光商品として消費の対象となるところにまで至っている。その一方で、消費の中で互酬的であった観光客と住民のコンタクトゾーンで新たな問題が生じている。ここでは民族文化の観光資源化によって生じる問題について先行研究で挙げた観光研究の理論によって分析する。

伝統文化の観光資源化は経済効果をもたらし、地域を振興させることによって、地元住民の生活を向上させ、貧困脱出に一定の成果を挙げた。その一方で、観光客が大量に流入することによって少数民族の社会は大きな影響を受けざるを得なくなった。それと同時に、伝統文化の変容と文化の真正性の問題も生じてきたのである。

民俗風情園内で伝統的家屋をホテルへと改築することで、家屋は日常的文脈から切り離され、元来の生活実態を喪失していった。一方で、ホテルへ改築することにより元々の外観は残されることになり、建築保護の上で有益だと考えられる。しかし、村人が暮らして

⁷⁸土司は、元代以降に中国と直接境界を接する諸民族において、ある民族が一国を形成しないまま、分立する各地の支配者が個別に中国王朝と交際する場合に、州・県の知事職や、衛所制にそった軍事指揮官の称号を受けた者たちを指す。

いる家屋が完全に改築されるという現象は、伝統的な家屋の価値を下げることに繋がった。伝統的な家屋がホテルへと改築されたことを文化の問題として考えると、マッカネルが観光客自身はオーセンティシティ（authenticity）つまり真正でリアルな「本物」を求めていると述べたように、観光客は元来の電気も付いていない伝統的な家屋に泊まりたいと願望していることになるかもしれない。しかし、現実に風情園においては外観は本物の伝統的な家屋のままであるが、内部には現代的施設が装備されたホテルになっており、まさにマッカネルの「演出された真正性」に関する議論の中の6つのステージの第3ステージ「舞台裏に見えるように全体的にしつらえられた表舞台」となっていることを示していると思われる。

白褲ヤオ族の人たちは新たな舞踊劇場でパフォーマーとして上演することによって、経済的な利益を得ることができるようになった。それと同時に、白褲ヤオ族の人たちは、民族文化を重要な文化財として認識し、伝統文化を守りたいという意識をもちはじめている。その一方で、消費の問題が生じたため、伝統文化のエンターテインメント化・商品化も進行している。こうした伝統舞踊のエンターテインメント化という傾向によって、マッカネルが言うような観光客における文化の真正性の問題もきたしている。つまり、元来は村の中で上演される伝統舞踊が観光客のニーズに応じて、さらに精緻化された新しい舞台で上演されるようになったのである。このことは、観光客にとって「舞台裏」である村の伝統舞踊を見ることはできず、ただ舞台での精緻化した舞踊を見ることができるだけであることを意味している。これはまさに、マッカネルが挙げた第1ステージの「最初の表舞台」となっていることを示している。

前田（2003）が「日常生活の場である村落を観光地化することで、結果として日常そのものを歴史的な〈民族〉の文脈によって囲い込むことになっている」と指摘したように、村落を観光地化することによって、流入する観光客が増え、伝統的な民族文化が見世物となり、結果として文化が変容しつつあると思われる。そして、王尚屯の「全村観光」の実態は、日常生活の場である村落の全てのものが観光資源化されており、漢民族企業の管理下で、伝統的な建築物が改築され、現代的公共施設が完備されることで、文化変容の問題もより深刻なものとなっている。このように、何百年も続けられてきた日常生活の場である村が舞台裏として整備され、観光のために、つまり観光客が覗いてもよいように改良された舞台裏になったのである。こうした実態は、マッカネルが言うような第5ステージの「観光客がときにちょっと覗いてもよいように整頓され、少し改良された舞台裏」に、村全体がなっていることを示していると思われる。

また、白褲ヤオ族の伝統文化を保存するために、白褲瑤生態博物館が建設され、観光客はこのエコミュージアムで白褲ヤオ族の原始的な村落と村民たちの日常生活に触れることができる。このように、エコミュージアムでの文化保護区は「最後の舞台裏」として、まさにマッカネルの言う第6ステージの「観光客が最後に到達することができる」何の装飾もない「舞台裏」となっていることを示していると思われる。

飲食サービスエリアの改造は、白褲ヤオ族の飲食文化の発信に有益だと思う。また、民族工芸品伝承基地での工芸品が大規模に生産・販売が経済的な利益を得ることができるようになったことは、若者の伝承者が増えることにつながり、工芸品の伝承にとって有益だ

と思われる。さらに、白褲ヤオ族の葬送儀礼が「見せもの」として観光客からのまなざしに晒されることは、観光客のニーズを満足させることはでき、その一方で白褲ヤオ族の人々にとってはつらい光景なのである。観光会社が容易に観光資源を入手することによって、経済利益のために、過度な観光資源化が行われる可能性がある。地元住民の語りからみると、観光開発は、利益を得ることができ、村民たちの志向性が強いと考えられる。

第4節 まとめ

本章では、白褲ヤオ族の伝統文化の観光動態を取り上げ、その中で伝統文化の観光資源化についてどのような問題点があるかを考察した。

白褲ヤオ族の民族文化の観光動態は2000年から始まり、現在まで16年が経過して、さまざまな効果をもたらしているが、観光地としてはまだ発展期にあると考えられる。この時期は、政府によって観光開発が白褲ヤオ族の社会にもたらす経済的利益が強調され、同時に政府自身が観光開発における起業家としての役割を果たす場合が多かった。また、観光企業の導入によって、企業化された管理を行うことが、地域社会を振興するうえで顕著な効果を有するものであることも明らかとなった。その一方で、地域の自然環境や社会文化環境に対するインパクトについての関心は不足していることがわかった。さらに、観光活動が活発化することによって地域住民の社会に大きな影響が及ぼされ、観光開発の直接的な効果として経済利益を得ることができるようになったことで、村民たちの観光化への志向性が強くなっているように思われる。現代化と観光開発によって白褲ヤオ族の生業形態は、2000年代以前の農業中心からサービス産業中心へと転換し、社会経済の構成は急激に変化しつつある。

白褲瑤生態博物館は、元々白褲ヤオ族の伝統文化を保存するために建設されたが、このように現代化と観光開発の進展によって瓦屋根にコンクリートの家屋が建てられるようになった実態は、南丹県だけの特徴ではなく、中国全国の観光地でもよく見られるようになったものである。

この地域では、伝統文化の保存のために積極的な方策が図られると同時に、観光開発において伝統文化の観光資源化が推進されている。そして、市場経済の浸透と「観光脱貧」政策の下で、地元住民には経済意識が芽生え、利益を得るために伝統文化を商品として販売するという事態が生じている。したがって今後は、過度の観光資源化による弊害を防ぐために、観光資源の分類、保護と利用に関して地域社会の主導的なマネジメントが考慮されなければならないのである。

第4章 エスニック・ツーリズムにおける布努ヤオ族の文化変容

第1節 エスニック・ツーリズムにおける大化ヤオ族自治県の観光動向

1. 大化ヤオ族自治県の概況

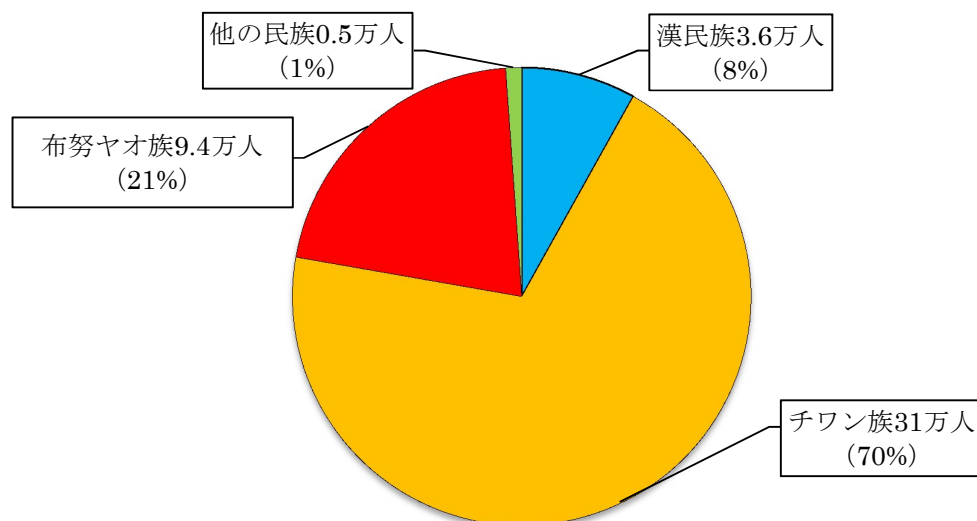
広西チワン族自治区統計情報網のデータによると、大化ヤオ族自治県が属する河池市では、少数民族の人口が283万人で、人口比率では84%を占めている（2010年）。少数民族の構成比は、広西チワン族自治区14市のうち第3位であり、少数民族の人口比率が高い。

大化ヤオ族自治県には、多民族が居住している。広西チワン族自治区統計情報網のデータによると、大化ヤオ族自治県の人口（2012年1月）45万人のうち、少数民族は41万人で、全体の92%を占める（図Ⅱ-4-1）。その中で布努ヤオ族は9.4万人であり、全体に占める割合は21%である。少数民族が多く暮らす大化ヤオ族自治県では、民族的風俗が色濃く残されている。

この地域は、山は青く、水は澄み、鍾乳洞が美しく、少数民族風情が濃いなど多くの観光資源を持っているので、西部大開発の戦略下で、観光を経済の発展要素として重視している。2000年から観光開発ブームが起こり、多くの「民族文化村」が造られた。民族の伝統的な祭日も観光化されている。

近年、大化ヤオ族自治県の観光開発は進んでいる。特に「民族伝統文化」に注目した観光開発が多い。例えば、布努ヤオ族の伝統祭り「達努節」は毎年中国の旧暦5月23日から5月29日まで行われる。この祭りは多くの観光客をひきつけている。

2012年11月29日には、広西大化ヤオ族自治県七百弄国家地質公園が開園された。特色あるカルスト景観は、探険を目的とする多くの観光客をひきつけた。



図Ⅱ-4-1 大化ヤオ族自治県の民族構成（2012年）

資料：広西チワン族自治区統計情報網の統計により筆者作成

2. 大化ヤオ族自治県の布努ヤオ族の人口と分布地

布努ヤオ族人口は 50 万で、世界ヤオ族人口の 16%を占めている。その居住状況の特徴は、全体としては分散しているが、集中して居住しているところもある。「分散」とは、布努ヤオ族居住地域は、主に広西チワン族自治区と雲南省に分布していることを意味する。

「集中居住」とは、35.5 万人の布努ヤオ族は河池市に住んでいることを意味する。「集中居住」のもう一つの意味は、歴史上で布努ヤオ族は他の民族と混合雑居していないということである。同じ姓氏あるいは 2 つの血縁関係の姓氏が 1 ヲ所の村に居住している。しかし、経済の発展と社会の進歩という民族融合の強化につれて、他の民族と混合雑居の状況も現れている。しかし、河池市には布努ヤオ族単独の人口の村がよく見られる。

表 II-4-1 大化ヤオ族自治県布努ヤオ族の分布（2000 年）

郷名	人口（人）			布努ヤオ族の人口が 70% 以上を占める行政村
	総人口	布努ヤオ族	比率（%）	
大化	58,072	4,720	8.1	—
流水	30,624	3,254	10.6	—
都陽	23,702	836	3.5	—
岩灘	29,462	949	3.2	—
共和	21,329	2,661	12.5	—
貢川	25,167	4,567	18.2	龍勒、龍眼、紅柳
百馬	19,211	5,309	27.6	六任
古河	7,452	1,550	20.8	—
古文	9,591	2,042	21.3	—
江南	31,212	12,161	39.0	嘗梅、上和、九懷
羌圩	19,487	919	4.7	—
乙圩	15,516	293	1.9	—
北景	17,987	484	2.7	—
板蘭	6,593	4,209	63.8	弄冠、板蘭、可考
板升	24,312	10,259	42.2	弄雷、弄勇、三洞、八好
七百弄	15,674	7,390	47.2	弄和、弄平、弄呈
鎮西	14,033	9,066	64.6	盤兔、龍齊、弄往
雅龍	15,634	6,600	42.2	—
六也	28,877	7,086	24.5	—
碧城	534	127	23.8	—
城郊	2,059	523	25.4	—
常青	493	259	52.5	—
統計	417,021	85,264	20.5	—

資料：韋標亮（2010）『布努瑤社会歴史』、14 頁の表により作成

広西チワン族自治区人口統計局のデータによれば、都安、大化、巴馬、鳳山、天峨、平果、田東、凌云、上林など9県（自治県を含み）の行政村中に、布努ヤオ族人口が70%以上占める行政村は113カ村である。

3. 大化ヤオ族自治県の観光動向

大化ヤオ族自治県の国内観光客は、2009年の28.4万人から2014年の81.66万人へと増加し、5年間の年平均増加率は24%である（表Ⅱ-4-2）。国内観光収入は、2009年の1.82億元から2014年の7.9億元へ増加しており、5年間の増加率は35%である。外国人観光客数は、2009年の1,201人から2014年の4,600人へ増加しており、5年間の年平均増加率は31%である。外貨収入は、2009年の40.1万ドルから2014年の169.7万ドルへ増加している。5年間の年平均増加率は34%である。以上のデータから、大化ヤオ族自治県の観光業の発展は著しいことが分かる。

表Ⅱ-4-2 大化ヤオ族自治県の観光動向（2009～2014年）

年	国際観光客		国際観光収入		国内観光客		国内観光収入	
	人数 (人)	増加率 (%)	収入 (万ドル)	増加率 (%)	人数 (万人)	増加率 (%)	収入 (億元)	増加率 (%)
2009	1,201	—	40.1	—	28.4	—	1.82	—
2010	1,633	36	58.4	46	40.3	42	2.34	29
2011	2,018	24	78.1	34	44.8	11	3.2	37
2012	2,462	22	85	9	56	25	3.8	19
2013	3,500	42	127.4	50	67.22	20	6.2	63
2014	4,600	31	169.7	33	81.66	21	7.9	27

資料：河池市統計局の統計により筆者作成

表Ⅱ-4-3 大化ヤオ族自治県の観光目標

目標予測		2008年	2010年	2012年	2015年	2020年
観光業総収入（万元）		4,905	10,561	19,053	67,722	119,074
県のGDP（%）		1.6	2.9	4.2	10.4	11.0
国内観光	観光者総人数（万人）	33	51	79	155	202
	観光総収入（万元）	4,875	10,156	15,870	58,118	112,320
国際観光	外国人観光者（人）	178	2,360	8,550	16,000	56,000
	観光総収入（万ドル）	4	59	146	290	1,390

資料：「広西大化七百弄国家地質公園企画専門研究報告」、103頁の表を引用

布努ヤオ族居住地域大化ヤオ族自治県は、多様で豊富な資源を持っている。しかし、大化ヤオ族自治県は貧困県で、国家重点援助の対象として、経済が比較的遅れている。それぞれの観光資源は、十分に開発されていない。2009年の国内総生産は約30億元、財政収入は3.3億元で、経済規模は小さく、1人当たりGDPは低い。それ故、地域振興の手段として、大化ヤオ族自治県における様々な文化遺産を活用した観光開発が注目されている。大化ヤオ族自治県人民政府の第11期5カ年計画要綱は、「合理的に観光資源を開発することを目指し、市街地から観光地をめぐるツアーとして、『七百弄くぼ地観光ツアー』開発、岩灘風景区開発、古河から大化までの「八十里（40km）」風景ギャラリー建設、紅水河七百弄風景名所が国家レベルの景勝地となり、国家レベルの地質公園と国家レベルの4Aの旅行区を目指す」ことを提示した。この目的達成のために、観光産業は全県で重要な基幹産業となることを目指している。

また、自然生態と人文生態と農業を結びつけ、緑色の観光地を目指すことと、大化ヤオ族自治県の観光と地質公園の観光を首府南寧観光圏に溶け込ませ、資源共有を実現し、客源市場も互いに含めて補い合うことを目指した。15年間で、大化ヤオ族自治県建設は特色をもち鮮明さを増し、景観は優美となり、施設は完備し、環境は快適となり、サービスも一流を目指し、新しい生態観光地になるよう努力している。

さらに、観光業を発展させるために、大化ヤオ族自治県人民政府は、新たな目標を制定した。

表Ⅱ-4-3に示すように、新しい目標は以下の通りである。

- ① 2010～2012年：この2年間で、交通施設を完備し、少数民族伝統文化を見直す。特に観光交通網の建設を目指すこととした。2012年の観光客数は、81万人以上に達し、観光業総収入1.9億元以上を目指している。
- ② 2012～2015年：この間に、交通施設を完備し、観光業の「飲食、宿泊、交通、遊覧、買物、娯楽」という6つ要素を均衡的に発展させる。2015年の観光客数の目標値を、150万人以上とし、観光業総収入6億元以上を目指す。
- ③ 2016～2020年：2020年までに、観光産業は全県で重要な基幹産業となり、「緑の楽園、水上遊園地、ヤオ族グルメ」のイメージをもつ観光地になり、観光客が憧れる観光地となる。

第2節 大化ヤオ族自治県の観光資源

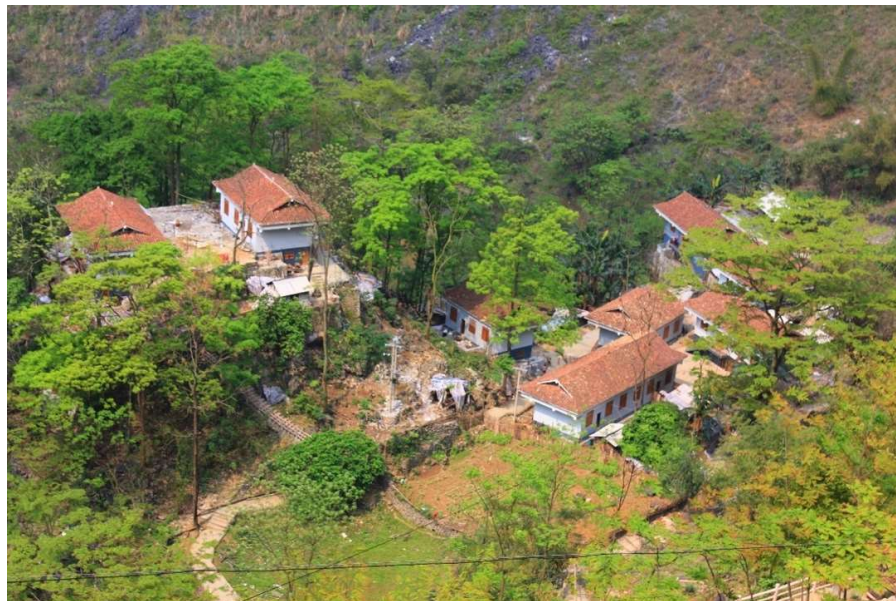
大化ヤオ族自治県の人民政府は、それぞれの目標を設定し、観光資源の評価を行った。表Ⅱ-4-4のように、世界レベルの遺跡景観が2カ所、国家レベルの遺跡景観が8カ所、省レベルの遺跡景観が7カ所、県レベルの遺跡景観が38カ所ある。その中で、甘房弄深窪地は、国家級の観光資源として、「天下第一弄」の名を付けて観光開発した。甘房弄窪地は、深さ530mで、容積1億8840万m³で、世界の最も深い最大の漏斗型の窪地である。甘房弄窪地の谷地の長さは5kmで、両側が珍しい峰をなし、広西チワン族自治区の最も美しいカルストの窪地である（写真Ⅱ-4-1）。窪地の平地には、27世帯のチワン族の人たちが居住している。

また、布努ヤオ族の伝統的風俗習慣を体験することができる観光スポットは、天上人間、天街別荘、百弄郷府の3つである。天上人間（弄哼窪地）は、海拔871mの山の上に3つの世帯の布努ヤオ族が暮らし、観光開発によって、「天上人間」の名を付けられることになった。天街別荘（弄歪深窪地）は、省級の観光資源となり、現在知られた観光スポットとなってきた（写真Ⅱ-4-2）。



写真Ⅱ-4-1 甘房弄（天下第一弄）くぼ地景観

（2013年3月26日 筆者撮影）



写真Ⅱ-4-2 観光化された弄歪深窪地（天街別荘）

（2013年3月25日 筆者撮影）

表Ⅱ-4-4 地質公園主要遺跡景觀綜合價值等級評價表

評 估 基 準		資 源	典型性	綺麗さ	完全性	研究 価値	教育 価値	観光開 発価値	総合 得点	等級
満 点			10	10	10	10	10	10	-	-
1	七百弄高峰叢深窪地区		9.8	9.6	9.4	9.2	9.1	8.6	9.28	世界級
2	甘房弄深窪地		9.6	9.5	9.3	9.0	9.2	8.4	9.17	世界級
3	弄瑤深窪地		9.5	9.3	9.0	8.6	8.4	8.1	8.82	國家級
4	弄朝深窪地		9.4	8.6	8.8	8.1	8.2	7.8	8.48	國家級
5	弄歪深窪地		8.5	8.6	7.6	7.5	6.8	6.2	7.53	省級
6	弄其峒深窪地		7.5	7.6	7.0	7.0	6.8	6.5	7.07	省級
7	弄蚌深窪地		9.2	9.0	8.2	8.3	7.8	6.8	8.22	國家級
8	弄勒深窪地		9.3	9.0	8.1	8.2	7.4	6.5	8.08	國家級
9	弄懷深窪地		9.4	8.6	8.2	7.8	8.1	6.6	8.12	國家級
10	弄記深窪地		9.5	8.2	8.1	7.7	8.0	6.5	8.00	國家級
11	弄滾深窪地		9.1	6.5	6.3	7.0	6.6	6.5	6.70	県級
12	弄手東深窪地		7.0	6.6	6.4	7.0	6.7	6.6	6.72	県級
13	弄交深窪地		6.5	6.7	6.8	6.3	6.6	6.4	6.55	県級
14	弄石深窪地		6.2	6.4	6.3	6.1	6.0	6.0	6.17	県級
15	牛角深窪地		6.3	6.2	6.5	6.2	6.1	6.1	6.20	県級
16	弄母深窪地		6.8	6.7	6.2	6.5	6.0	6.0	6.37	県級
17	弄竈深窪地		7.5	6.3	7.8	6.1	6.2	6.8	6.78	県級
18	弄項深窪地		7.0	7.5	7.1	6.1	6.0	6.2	6.66	県級
19	弄丁深窪地		6.1	6.2	6.1	6.0	5.8	5.8	6.00	県級
20	卡独深窪地		7.1	6.1	6.4	6.0	5.5	5.4	6.08	県級
21	弄沙深窪地		7.0	6.8	6.3	5.8	6.0	6.2	6.35	県級
22	弄光深窪地		6.8	6.4	6.0	5.8	5.7	6.0	6.12	県級
23	弄白深窪地		6.7	6.3	6.5	6.0	6.1	6.5	6.35	県級
24	弄臘深窪地		6.3	6.4	6.1	6.5	6.3	5.2	6.13	県級
25	班花深窪地		6.4	6.2	6.7	6.5	5.8	5.7	6.22	県級
26	弄獎深窪地		6.5	6.3	6.1	6.3	6.1	6.2	6.25	県級
27	牛峒深窪地		6.3	6.0	6.5	6.6	6.1	5.8	6.23	県級
28	弄林深窪地		6.2	6.2	6.1	6.1	6.1	6.3	6.17	県級
29	弄杯深窪地		6.4	6.8	7.0	6.2	6.5	6.0	6.48	県級
30	弄耳山南深窪地		6.1	6.3	6.4	6.0	6.3	5.7	6.13	県級
31	白岩山东深窪地		6.2	6.2	6.3	6.1	6.2	5.8	6.13	県級
32	長生深窪地		6.8	6.4	6.0	5.8	5.7	6.0	6.12	県級
33	双福谷地		6.3	6.4	6.1	6.4	6.0	6.0	6.20	県級
34	弄京谷地		7.0	7.1	6.4	7.3	6.5	6.1	6.88	県級
35	長洞谷地		7.0	6.6	6.4	7.0	6.7	6.6	6.70	県級
36	甘房弄谷地		8.3	8.2	8.4	7.2	7.5	8.1	7.95	省級
37	七百弄谷地		7.5	7.3	7.0	6.8	6.7	6.5	6.95	県級
38	喬圩洞谷地		7.8	6.8	6.4	7.0	7.5	6.4	6.98	県級
39	喬圩洞		8.4	8.2	7.8	7.5	7.0	7.6	7.75	省級
40	七百弄地蘇暗河系		9.5	9.3	8.6	8.7	7.3	6.8	8.37	國家級
41	板升暗河系		6.3	6.4	6.1	6.4	6.0	6.0	6.20	県級
42	板蘭峡谷		9.2	8.7	8.1	7.1	7.2	7.3	7.93	省級
43	双福球形藻化石		7.8	7.6	7.0	6.8	6.5	6.7	7.07	省級
44	甘房弄腕足類化石		6.3	6.1	6.0	6.1	6.0	5.6	6.02	県級
45	邕龍山斷層		6.5	6.3	6.1	6.4	6.0	6.2	6.25	県級
46	喬圩屯次級背斜		6.1	6.3	6.2	6.0	6.0	6.4	6.17	県級
47	七百弄-大化岩溶剖面		9.2	9.0	9.3	8.5	6.8	6.6	8.23	國家級
48	七百弄-同龍地层剖面		6.4	6.8	7.0	6.2	6.5	6.0	6.48	県級
49	南丹組灰岩		6.4	6.3	6.0	6.4	6.1	6.0	6.19	県級
50	融県組灰岩		7.1	7.4	7.1	6.1	6.1	6.1	6.60	県級
51	堯云岭組灰岩		7.1	6.8	6.4	5.8	6.0	6.2	6.34	県級
52	都安組藻紋層灰岩		7.5	6.5	7.6	6.1	6.2	6.8	6.77	県級
53	大埔組白云岩		7.4	6.6	7.5	6.2	6.2	6.7	6.70	県級

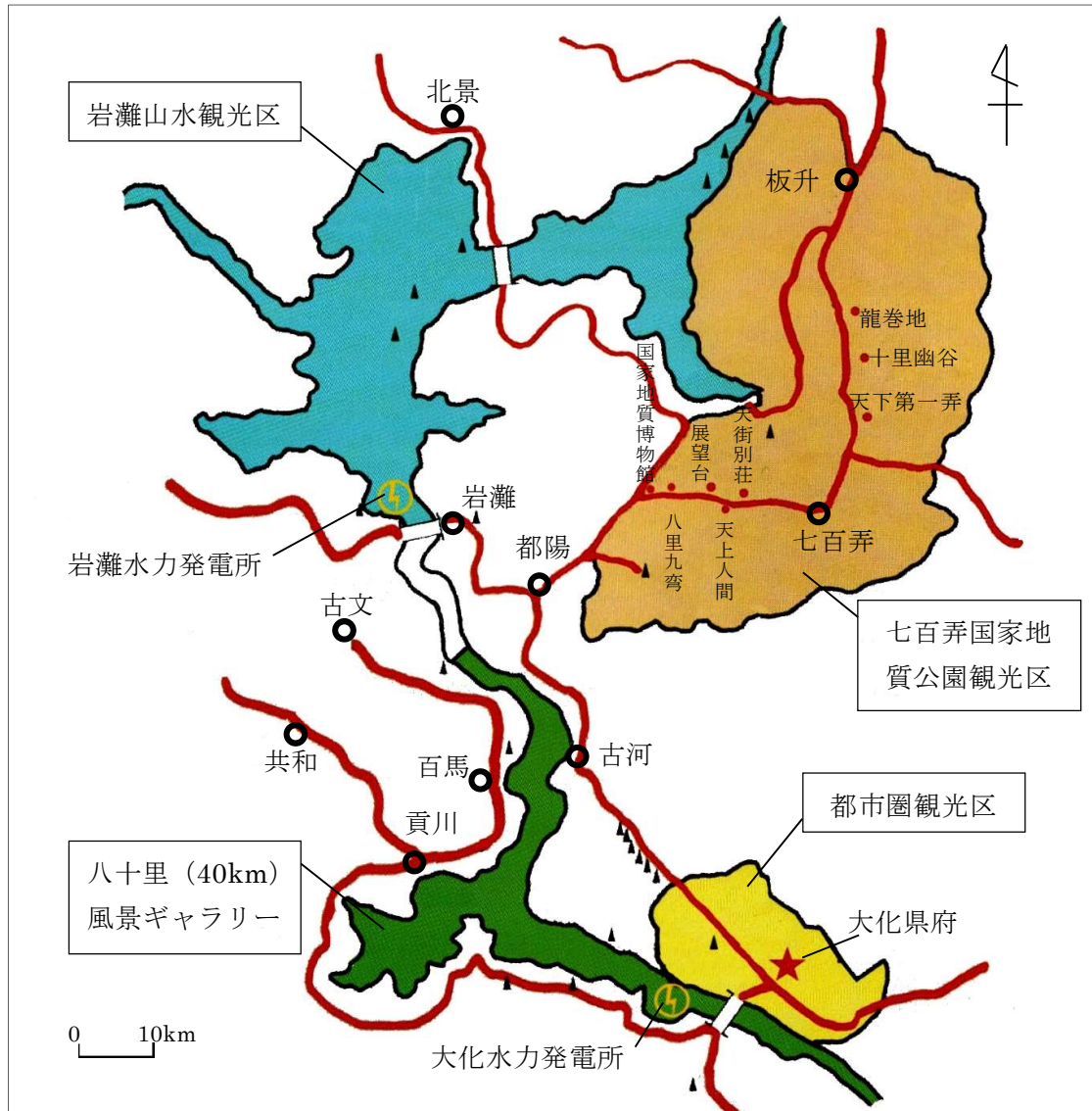
表Ⅱ-4-4 地質公園主要遺跡景観総合価値等級評価表（つづき）

評価基準 資 源		典型性	綺麗さ	完全性	研究 価値	教育 価値	観光開 発価値	総合 得点	等級
満 点		10	10	10	10	10	10	-	-
54	都安組灰岩	6.4	6.2	6.6	6.4	6.0	5.7	6.21	県級
55	白堊紀洞穴沉積物	7.6	7.5	7.0	7.0	6.8	6.5	7.00	省級

資料：「広西大化七百弄国家地質公園企画専門研究報告」、47 頁の表を引用

注：1) 評価の基準：満点 10、9.0 以上は世界級（9 を含む）、8～9 は国家級（8 を含む）、7～8 は省級（7 を含む）、6～7 は県級（6 を含む）。

2) 窪地は周囲よりも低い土地。



図Ⅱ-4-2 大化ヤオ族自治県七百弄郷と周辺の観光スポット

資料：大化县旅遊局の観光地図に筆者加筆

図Ⅱ-4-2のように、大化ヤオ族自治県七百弄郷の観光スポットは、国家地質博物館、八里九弯、千山万弄觀景台、喬圩洞、天上人間、天街別荘、百弄郷府（石国天都）、火神弄、天下第一弄、十里幽谷、龍卷地など 11 カ所があり、それぞれの観光スポットに住んでいる人々のほとんどが布努ヤオ族である。2012 年 11 月 29 日には、多様で豊富な資源を持つ、広西大化ヤオ族自治県七百弄国家地質公園が開園されている。

表Ⅱ-4-5 によれば、大化ヤオ族自治県は、多くの民族観光文化資源を持っている。特に、布努ヤオ族の民族歌舞と祭りは、地域の特徴がある文化観光資源として認識され、観光開発対象として注目されている。近年、大化ヤオ族自治県人民政府の主導下で、祝著節（達努節）という布努ヤオ族の伝統的祭りを観光化するため、毎年旧暦の 5 月 25 日から 5 月 29 日に、人々的に行なわれている。

表Ⅱ-4-5 地質公園及び周辺地の景観資源評価表

資源 評価点		資源要素価値 (85 点)					資源影響力 (15 点)		附加価値	総合得点	評価等級	資源特徴
		観賞価値	歴史文化芸術価値	稀有性	規模	多様性	知名度と影響力	運用期と使用範囲	環境保護と安全性			
満点		30	25	15	10	5	10	5	-20			
1	百馬山水田園	24	15	10	8	3	6	4	0	70	3	自然風景
2	華善田園風光	20	15	8	7	3	6	3	0	62	3	自然風景
3	擎天樹	24	15	12	8	3	7	4	0	73	3	希少樹木
4	古鳥欖	22	15	10	7	3	6	3	0	64	3	古木名樹
5	古木棉	20	14	9	7	3	6	3	0	62	3	古木名樹
6	古黄葛榕	20	14	9	7	3	6	3	0	62	3	古木名樹
7	瑤族飲食	20	15	9	7	3	6	3	0	63	3	民族風味
8	壯族飲食	20	14	9	7	3	6	3	0	62	3	民族風味
9	瑤族服飾	20	14	9	7	3	6	3	0	62	3	民族工芸品
10	瑤族民族歌舞	22	16	9	7	3	6	3	0	66	3	民族芸術
11	瑤族祝祭	21	16	9	7	3	6	3	0	65	3	民族風俗
12	壯族祝祭	21	16	9	7	3	6	3	0	65	3	民族風俗
13	紅七軍 21 師成立慶典遺跡	21	18	9	7	3	6	4	0	68	3	革命遺跡
14	桂西游撃隊指揮部遺跡	21	18	9	7	3	6	3	0	67	3	革命遺跡
15	都陽蘇維埃政府遺跡	21	18	9	7	3	6	3	0	67	3	革命遺跡
16	右江地委革命干校遺跡	21	18	9	7	3	6	3	0	67	3	革命遺跡

表Ⅱ-4-5 地質公園及び周辺地の景観資源評価表（つづき）

資 源		評価点	資 源 要 素 価 値 (85 点)					資 源 影 響 力 (15 点)		附 加 価 値	総 合 得 点	評 価 等 級	資 源 特 徴
			観 賞 価 値	歴 史 文 化 芸 術 価 値	稀 有 性	規 模	多 様 性	知 名 度 と 影 響 力	運 用 と 使 用 範 囲	環 境 保 護 と 安 全 性			
満 点		30	25	15	10	5	10	5	-20				
17	紅七軍21師兵工場遺跡	21	16	9	7	3	6	3	0	67	3	革命遺跡	
18	宋岩葬遺跡	20	16	9	7	3	6	3	0	64	3	考古遺跡	
19	明土司衙門遺跡	20	16	9	7	3	6	3	0	64	3	考古遺跡	
20	清石城遺跡	20	16	9	7	3	6	3	0	64	3	考古遺跡	
21	清人の石碑、石刻	20	16	9	7	3	6	3	0	64	3	考古遺跡	
22	紡織、刺繍工芸品	20	15	9	7	3	6	3	0	63	3	民族工芸品	
23	石彫、根雕工芸品	20	15	9	7	3	6	3	0	63	3	観光商品	
24	貢川紗紙	18	18	9	7	3	6	3	0	66	3	伝統製品	

資料：「広西大化七百弄国家地質公園企画専門研究報告」、53 頁の表を引用

写真Ⅱ-4-3 は、2013 年 7 月 4 日に行われた大化ヤオ族自治県第 8 回布努ヤオ族祝著節開幕式の様子である。2013 年の祝著節は、1 カ所の主会場と 7 カ所の分会場に分かれて、各種の民俗文化演出と大型パーティーを行っている。祝著節を行う会場は、七百弄郷、板升郷、百馬郷、六也郷、雅龍郷、江南郷、北景郷などの 7 カ所である。主会場は、大化ヤオ族自治県の中心街である民族広場であった。大化ヤオ族自治県旅遊局の統計データによると、2013 年の 1 月から 9 月までの国内観光客総数は 50 万人で、観光総収入は 4.3 億元で、国際観光客総人数は 2,600 人で、外貨総収入は 95 万ドルである。その結果、布努ヤオ族の収入も増えた。

布努ヤオ族の工芸品としては、刺繍が知られており、観光地として開放されてからは、それらが土産物として売られるようになっている。さらに、布努ヤオ族の村の食材は、ほとんど農薬を使わない緑色健康食品として、観光客から好評を得ている。そして、多くの食材は観光客向けに加工・販売されている。例えば、「大化臘三珍」という名の土産がある（写真Ⅱ-4-4）。「大化臘三珍」は、土豚を原料とし、伝統的な燻製技術によって、各種のスパイスを配合し、陰干しをして、防腐剤と添加剤は使わない。布努ヤオ族の伝統的で独特の風味の土産物である。



写真Ⅱ-4-3 大化ヤ才族自治县第8回布努ヤ才族祝著節開幕式
(2013年7月4日 大化ヤ才族自治县旅游局から提供)



写真Ⅱ-4-4 大化臘三珍
(2013年7月1日 筆者撮影)

第3節 観光開発が布努ヤオ族の伝統文化に与えた影響

観光開発にともなって近代化が進むなかで、少数民族の伝統文化が変容し、それぞれの問題と直面しなければならなくなった。ここでは、観光開発が布努ヤオ族の伝統文化に与えた影響を研究する。その際、近代化の影響力を無視することはできない。多くの観光客が訪れることによって、経済が活性化する。布努ヤオ族の文明化が促進され、布努ヤオ族伝統文化の崩壊が進んでいるのも事実である。ここでは、観光化のもたらした布努ヤオ族の伝統文化への影響を明らかにする。

1. 観光開発が布努ヤオ族の服飾文化に与えた影響

少数民族の服飾は、民族の伝統文化として、生活の中の重要な構成部分となっている。それは少数民族の歴史と文化伝承過程の産物である。これらの服飾は少数民族の物質遺産と装飾芸術というだけではなく、精神上的の象徴的意義としても重要になる。楊（2011）によれば、服飾文化は3つの因子を含んでいるという⁷⁹。

第一の因子は、服飾文化は、実際の服装と芸術品など物質成果を含み、また服飾儀礼、価値観、信仰などの精神成果も含む。

第二の因子は、服飾文化は人間の社会的労働の産物であり、物質文化を体現し、器物文化の性質を含む。

第三の因子は、服飾文化は人間社会文明を象徴し、人類の生活や社会の中で不可欠の部分であり、同時に服飾文化の誕生と変遷が人間社会の政治、文化、経済、信仰及び生活風俗などと密接に関係する。

布努ヤオ族という少数民族の服飾文化の変容を明らかにしようとするとき、必ず上記の3つの因子を考慮しなければならない。現在、布努ヤオ族居住地では、観光を中心とした開発が、布努ヤオ族の服飾伝統文化に大きな影響を与えている。

(1) デザインと耐久性、生産体制

生産者の視点から布努ヤオ族服装の既製服化の進展と流通についてみると、観光化される以前、布努ヤオ族が居住している村では手作りが主流で、実用性も高かった。筆者の実施した聞きとり調査（2013年6月25日）によれば、布努ヤオ族の村の中で、手作り服装の技術を持っている人が少なくなり、伝統的服装のつくり方を失いつつある（写真Ⅱ-4-5）。観光化されると、観光客が多く訪問し、布努ヤオ族たちの現金収入が増加する。また、祭りのために準備する新しい服装の一部に既製服を取り入れる人が増えてくる。現金収入が増えるため、余暇時間も増えてくる。既製服のデザインは伝統手作り服装のデザインよりもファッション性に優れ、軽くて、価格も安くなっている。さらに、経済発展と沿海発達地域の人的資源の不足も影響し、布努ヤオ族の青年たちは現金と近代的生活を追求し、その結果必然的に、伝統服装手作りの技術が失われてしまうことになる。

⁷⁹楊鵬（1997）：「背景与方法：中国少数民族服飾文化研究導論」『貴州民族学院学報社科版』第4期、36-37頁。



写真Ⅱ-4-5 布努ヤオ族の婦人による手作りの様子

(2013年6月25日 筆者撮影)



写真Ⅱ-4-6 伝統的な服装の制作に使用するミシン

(2013年6月25日 筆者撮影)

筆者の実施した聞きとり調査（2013年6月25日）によれば、多くの布努ヤオ族の家がミシンを購入していた（写真Ⅱ-4-6）。布努ヤオ族の伝統的服装は、観光商品として開発されたが、手作りは速度が遅いため、観光客の需要を満たすことができない。そこで、布努ヤオ族の婦人は、伝統的服装を作る際、長い直線縫いの場合にはミシンを使った。機械を使用するほうが生活に便利である。しかし、伝統的服装図案を刺繍する時には、全て手作

りである。聞き取り調査によると、1 セットの伝統衣装の図案の刺繍仕事には数ヶ月かかるという。

農村の布努ヤオ族の人は、一日中ほとんど休憩することがなく、ずっと田畑で働くため、労働時には、耐久性のある服装が必要である。しかし、現地調査によれば、田畑で働く布努ヤオ族の人は、ほとんどが現代の洋服を着用していた。すなわち、伝統的手作り服の作り方や実用性が消えつつあるといえる。

(2) 伝統服飾の着用方式の有無と季節性

布努ヤオ族の服装の着用方式からみると、世代によって差異がある。観光化される前は、若い世代と老年世代はともに伝統的な手作りの服装を全身に着用している割合が高かった。観光化された後、写真Ⅱ-4-7 のように老年世代のみが伝統手作り服装を着用している割合が高くなった。

若い世代は、観光客流入が多い村で、洋服を着用する傾向にある（写真Ⅱ-4-8）。洋服を取り入れるのは上半身からであり、伝統手作りのスカートを着用し続けていることも多い。さらに、定期市場で洋服の価格が安く、種類も多く、購入も便利になっている。素朴な伝統的服装の特徴が無くなったのである。



写真Ⅱ-4-7 布努ヤオ族の老婦人

(2013 年 6 月 25 日 筆者撮影)



写真Ⅱ-4-8 洋服を着る青年と伝統服装を着る婦人

(2013年6月25日 筆者撮影)

また観光化される以前、布努ヤオ族の人たちは季節によって異なる服を着用していた。例えば布努ヤオ族の女性は、暑い季節にスカートを、寒い季節にはズボンをはき、重ね着をすることは少なかった。しかし、観光化されて以降、観光客が訪問する村や町では重ね着がよく見られるようになった。観光客のニーズに応じて組み合わせられるため、季節性の特徴が無くなったのである。

(3) 色の組み合わせ

美学の視点から見れば、色は服飾において第一に重要なものである。色の組み合わせやコーディネートは服飾全体の美感に影響を与える。観光化される以前、布努ヤオ族の伝統の手作り服装は材料、制作技術、個人の審美観念、服装の色の組み合わせなどはあまり探求されなかった。また、長時間田畑で働くので、汚れやすい服装は避けていた。田畑では黒色と灰色の伝統的な手作り服装を着ている人をよく見かける。さらに、服装製作の材料も貧しくて、伝統手作り服装の色は単一な色調になっている。

本論文の第Ⅰ部の第1章で提示したが、布努ヤオ族の色彩豊かな伝統服飾は、中華民国中後期から現れている。1990年末には中国西部の大開発戦略が実施され、大化ヤオ族自治州政府の主導下で観光開発も進行し、少数民族の物質生活は昔よりようになった。観光化された後は、布努ヤオ族の服装のつくり方や技術が変化し、材料も豊かになった。観光客の流入、電化製品の普及などにより、若い世代の審美観念は変化しつつある。そして、布努ヤオ族の服装は鮮やかな色を使うようになった。単一な色調の服装を捨て、観光客の要求

に沿って現代的ファッションとなったのである。

(4) 装飾の図案

布努ヤオ族の服飾文化の中でも、服飾の図案には特別な意味がある。例えば写真Ⅱ-4-9のような十字形、人字形、三角形、四角形、菱形などの図案が、布努ヤオ族の服装に見られる。それぞれの図案は、男の子、女の子、花草植物、鳥類と獣類などを代表している。

『布努ヤオ族社会歴史』によれば、布努ヤオ族の人たちは、天、地、日、月、風、雷、電、鳥、河、山、樹などの靈魂の存在を信じているという。そして、布努ヤオ族の人たちは、自然の災害と人の生老病死などは神の力に関連すると考えるようになった。その結果、様々な自然崇拝に関する図案が伝統服装の上に刺繍されるようになった。

布努ヤオ族は従来、祭りごとに、それぞれ異なる図案がある服装をしていたが、観光化された服飾図案には特別な意味が無くなってしまった。観光化されたが、布努ヤオ族伝統的な服装図案は、伝統文化展示の役割を担っており、観光客の目の前に現われ、積極的に観光客に文化的発信をしているのである。しかし、目の前に現れた図案に対する、専門的な解説あるいはパンフレットがないと、服飾図案の意味と他の民族の服飾図案の意味との違いは観光客に認識されず、文化的錯乱を引き起こしてしまう。

大化ヤオ族自治県には、チワン族の割合が高く、観光客はチワン族の服飾図案と取り違えることも考えられる。図案の違いを認識したとしても、単に図案の美しさを追求するだけで、伝統的な服飾図案の意味は薄れている可能性が高い。



写真Ⅱ-4-9 布努ヤオ族服装の幾何図案の刺繍

(2013年6月25日 筆者撮影)

(5) 精神的象徴

少数民族の服飾と民族の儀礼、人生、季節時礼などは相互に密接な関係を持っている。もし民族習慣、儀礼、季節時礼、祭日などが存在しなければ、立派な伝統服飾も存在しない。換言すれば、少数民族の伝統服飾は人間の生活におけるいろいろな儀礼と民族風俗や習慣などの展示舞台である。また、服飾図案は、民族文化、社会心理、信仰などの民族の深淵な精神的世界の媒介者になる。しかし、現在のデザイン変容は、特に何らかの精神的意味を持つものではなく、単に観光客のニーズに呼応して演出するための道具にすぎない。昔から伝わってきた服飾文化は無くなったのである。

2. 観光開発が布努ヤオ族の建築文化に与えた影響

前述したように、本研究が調査対象としている大化ヤオ族自治県は、総面積の 92% が石灰岩地層で、布努ヤオ族はすべてカルストの地域に住んでいる。

少数民族は独自の特色ある民族文化を持っているが、居住建築物はその重要な構成部分である。周（1986）の「中国の高床式住居：その分布儀礼に関する研究ノート」は、ヤオ族の住居は、ほとんどが土間式住居（地床式住居）であるが、一部に高床式住居（干欄式）があることを指摘した。

本論文の第 I 部でも示したが、布努ヤオ族の伝統建物は、「干欄式」建築スタイルを第一としている。しかし、2009 年に、広西チワン族自治区政府は『広西チワン族自治区農村茅葺き建築改造方案』を出し、「新換旧」を目標として、農村施設改善を目指し、少数民族の伝統的な建物を改築している。特に、大化ヤオ族自治県政府の指導の下で、少数民族が集中居住し、民俗観光資源が豊かな村では、村民の収入を高めるため、方案実施の際に、茅葺き建築改造と「貧困援助、特色旅游開発、都市和農村風貌改造」の方針を結び付けて、大化ヤオ族自治県では、4,692 万元（表Ⅱ-4-6）を投入し、1,564 世帯の建物が改築されたと報告されている（表Ⅱ-4-7）。写真Ⅱ-4-10に見られるように、むかし布努ヤオ族の住居は、「干欄式」建築であった。

本章の第 2 節で示したが、天街別荘（弄歪深窪地）は、省級の観光資源となり、現在よく知られた観光スポットとなってきた。写真Ⅱ-4-11 の示すように、「天街別荘」という観光スポットとして改築された建物となり、レンガ主体で、まるで立派な現代の建物のように見える。

さらに、前田（2006）の『民族建築と観光開発：中国西双版納州における家屋の変容』が指摘しているが、雲南省西双版納州に居住している少数民族の建物は「干欄式竹楼」と称されていた。1949 年以降、観光開発と近代化の波が襲い、竹楼の外観を変えていった。その変化として前田（2006）は以下の 4 つの段階を示した。

第 1 段階は、屋根が瓦葺きになり、竹楼の側壁と天板は竹材から木材へ移行し、竹楼に占める竹材の使用は減少する。

第 2 段階は、竹楼を支える支柱がレンガ化し、竹楼を取り囲む外壁がレンガで覆われるようになる。

表Ⅱ-4-6 農村地区茅葺屋・樹皮屋の改築目標（2011 年）

No.	行政区	改築規模		投入資金 (万元)	完成年次
		屋舎数（軒）	面積（m ² ）		
1	金城江	2	100	6	2012
2	宜州市	1	0	3	2012
3	羅城県	64	2,600	192	2012
4	環江県	94	3,800	282	2012
5	南丹県	390	15,600	1,170	2012
6	天峨県	188	7,500	567	2012
7	鳳山県	1,842	73,700	5,526	2012
8	東蘭県	145	5,800	435	2012
9	巴馬県	330	13,200	990	2012
10	都安県	670	26,800	2,010	2012
11	大化県	1,564	62,600	4,692	2012
合計		5,290	211,700	15,873	-

資料：『広西消除農村茅草樹皮房攻堅戦実施方案』、18～19 頁により筆者作成

表Ⅱ-4-7 河池市における現存する農村茅葺屋・樹皮屋の改造統計表（2011 年）

（単位：軒）

No.	行政区	茅葺屋		樹皮屋		合計
		全面改築	一部改繕	全面改築	一部改繕	
1	金城江	2	0	0	0	2
2	宜州市	1	0	0	0	1
3	羅城県	3	0	61	0	64
4	環江県	11	0	83	0	94
5	南丹県	245	0	145	0	390
6	天峨県	187	2	1	0	190
7	鳳山県	1,105	0	737	0	1,842
8	東蘭県	142	0	3	0	145
9	巴馬県	329	0	1	0	330
10	都安県	424	0	246	0	670
11	大化県	1,564	0	0	0	1,564
合計		4,013	2	1,277	0	5,292

資料：『広西消除農村茅草樹皮房攻堅戦実施方案』、13 頁により筆者作成

注：樹皮屋は樹木の表皮で作られた建物。



写真Ⅱ-4-10 かつての布努ヤオ族の「干欄式」建築

(2013年3月22日取得 大化ヤオ族自治県旅遊局の写真)



写真Ⅱ-4-11 改築されたレンガ主体の建物

(2013年3月23日 筆者撮影)

第3段階は、竹楼そのものを取り壊し、コンクリートを用いた漢族風の建物、いわゆる「楼房」へと完全な建て直しをおこなう地域も現れる。外壁の竹材から木材への移行は、生活のありかたそのものを大きく変えるにはいたっていないが、コンクリートやレンガを用いた家屋の楼房化は、生活と村落の外観を大きく変える発端となった。

第4段階は、すべての村落がこうした傾向を踏襲しているわけではないが、いったんある村落で建て替えが起これば、その他の村落はこれに追従する傾向をもっている。

こうした開発によって布努ヤオ族の建物の外観と住居空間も変容が見られるようになった。第3章でも示したが、伝統的な布努ヤオ族の建物は、「干欄式」であり、上層、下層と屋根裏の三つの部分により構成され、上層は人が滞在し、下層では家畜を飼い、雑物を堆積して、屋根裏は主に食料を蓄えておくために使われた。筆者の現地調査（2013年6月25日）によれば、弄歪深窪地では、改築された建物は、「干欄式」の模様を残したまま、2階建てとなり、屋根裏は撤去され、上層は人が居住し、下層では家畜を飼い、雑物を堆積している。食料は二階に蓄えるようになった。しかし、多くの布努ヤオ族の世帯は、下層では一部分の食料と雑物を貯蔵している。家畜は、小さな畜舎を建て、「人畜分離」の方法で家のそばに設置されるようになった。また、観光客に好印象を与えるため、トイレと浴室も分離され、主屋の傍に独立して設置されている。それによって、伝統的な住居空間の機能が変容しつつあることが分かった。

布努ヤオ族の建物を変容させるほどの影響力として外来移住者の力を無視することはできない。前述した大化ヤオ族自治県のチワン族人口は31万人で、県人口数の70%を占めている。2000年代初めの観光開発ブームは投資を促進させ、観光地の雇用は拡大し、生活の向上がもたらされたし、多くのチワン族と漢民族の従業員雇用を生み出した。そうした、移住者にとって有用であるような、生活の利便性向上のため、売店、薬局、美容院などの近代的建物も建てられている。その結果、多くの近代的建物が増え、外来移住者に貸し出すところとなり、伝統的な建物の改築は加速していった。

さらに、大化ヤオ族自治県交通局は観光開発のために、2006年6月から2007年6月まで、2,100万元を投じて七百弄道路修繕工事計画を実施した。修繕後の道路は、県級道路3級のレベルに達していた。幹線の七百弄道路は全長38kmで、沿線には10ヵ所を越える観光スポットが分布している。大化ヤオ族自治県の統計データによると、道路の整備とともに、観光客が増加し、2009年の29万人から2011年の45万人へと増加した。交通の整備は、建築材料の運送が便利になり、道路に近い所にはコンクリートやレンガで建てた建築がよく見られるようになった(写真Ⅱ-4-12とⅡ-4-13)。その結果、道路沿いの村における伝統民族文化の崩壊や変容が加速した。



写真Ⅱ-4-12 道路沿いの村のレンガを主体とした建物
(2013年3月24日 筆者撮影)



写真Ⅱ-4-13 道の両脇に並ぶ建物
(2013年3月23日 筆者撮影)

3. 観光開発が布努ヤオ族の祭り文化に与えた影響

少数民族の伝統的な祝日は、特色ある民族歴史文化を持ち、民族文化を示す窓口として、大きい役割を担っている。しかし、現在「祭り文化」を核として観光開発が進められる時代には、民族の伝統的な祝日は産業化され、多くの伝統的祝日文化は、商品化され、民族的特色を喪失しつつある。

布努ヤオ族にとって一番の重要な祝日は達努節（ダーヌジェ）である。達努節は世界を創造した女神、密洛陀を記念して作られた祝日である。1986年広西チワン族自治区民族事務委員会は、布努ヤオ族人たちの希望によって、「達努節」という祝日名称を「祝著節」に変更し、毎年旧暦の5月25日から29日に祝っている。

現在、布努ヤオ族居住地では、観光を中心とした開発が、布努ヤオ族の伝統祭り文化に大きな影響を与えている。

(1) 祭り場所と服装の変化

祝著節は布努ヤオ族の重要な祭りとして、観光開発される前には、祝いの場所は各村の個人家屋であった。観光化された布努ヤオ族の祝著節を祝う場所は、1ヵ所の主会場と若干の分会場に分かれて、各種の民俗文化演出と大型パーティーを行っている。主会場は、交通利便性、施設・設備の点から、大化ヤオ族自治県の中心街である民族広場で行われる。主会場では、各村の代表的演出隊が観光客のニーズに応じて公演する。

少数民族は自分たちの民族的特色を有する服装を持ち、祭りを祝うに際しては、特定の服を着用するのが、少数民族の1つの特徴である。布努ヤオ族は、祝著節を祝う期間に、自分たちの伝統的な服装を着用するのが1つの特色ある風俗習慣である。しかし、観光開発によって布努ヤオ族の人たちは、祭りの時に、伝統的な服装を着ないで、洋服を着ている姿がよく見られる。特に、県の中心街である民族広場の祭り主会場と布努ヤオ族居住村の距離は遠いので、祭りに参加する布努ヤオ族人のたちにとって、伝統的な服装を着たままでバスに乗るのは不便である。出演する時にだけ伝統的服装を着ているのである。

(2) 精神崇拜活動から娯楽活動へ

布努ヤオ族は多神崇拜の民族で、祭りでは神々に天の恵み、無病息災を祈る。祝著節は、布努ヤオ族が世界を創造した女神密洛陀に感謝し、豊作を祈願する祭りである。

観光化された祝著節は、様々な娯楽活動を行い、各民族も参加する。確かに、観光化された祝著節は、経済効果を生んだ。布努ヤオ族の現金収入も増え、ある程度布努ヤオ族の伝統文化を観光客に伝え、布努ヤオ族の伝統文化に対する理解も広がっている。しかし、それらの娯楽活動は、神への崇拜儀式ではなく、ただ観光客のニーズと経済効果を追求するという形式化の産物である。伝統的祭りに内在した神への崇拜文化が失われたことになる。

さらに、近代化がもたらす多民族の融合、漢民族教育の流行と無神論の宣伝などの影響下で、神への崇拜の意識も変容し、伝統的祭り文化も弱体化し、祭り文化は崩壊しつつあるといえる。

第4節 考察

1. 観光開発か近代化か

以上、観光開発の推進が布努ヤオ族の伝統文化に与えた影響を検討したが、観光開発にともなって近代化が進むなかで、少数民族の伝統文化は変容し、それぞれの問題と直面しなければならなくなった。また、近代化の推進によって、市場経済が浸透しつつあり、布努ヤオ族の社会文明化が促進され、布努ヤオ族の伝統文化の崩壊が進んでいることも事実である。従来、観光人類学の分野では観光開発や近代化の推進によってもたらされた影響を必ずしも明確に判別することができなかったが、布努ヤオ族の社会でも観光開発や近代化とその影響を区別することは難しいと思われる。ここでは、観光開発と生活の近代化が少数民族の伝統文化に与えた影響を踏まえ、観光開発と生活の近代化との間にどのような関係があるのかを検討する。

近代化の進展による農村地域社会における大きな変化は「過疎化」である。曾（2002）によれば、中国では1958年に農村から都市への人口流出を防ぐために、「戸口登記条例」が公布・実施された結果、都市住民と農民はそれぞれ都市と農村に固定され相互移住が不可能になった。しかし、1978年末に始まった改革開放政策によって、農村部では人民公社が解体され、戸籍制度が緩和されることによって、西部地区から東部沿海都市への出稼ぎブームが起こった⁸⁰。また、1990年代になると、出稼ぎの現象がさらに盛んになっていくことに伴って、東部沿海都市の工場で働く若者たちが所得を一部農村部に残された老人や子供たちに送金するという現象がよく見られるようになった。こうして村人の生活を改善するために、冷蔵庫、電話、テレビなどの現代的な家電が農村部に普及していくことによって、村全体の近代化も推進されるようになった。このような生活の近代化は農村部の人々にとって決して悪いものではないと思われるが、その一方で、代々伝承されてきた民間伝承、歌、芸能の断片化、担い手不足による伝統行事の簡略化、伝統工芸や民間医療の後継者難、民族建築物の減少、伝統的な儀礼や習俗の衰退などといった問題が深刻なものとなってきた。この点における近代化の影響力を無視することはできないが、もう一つ新たな要因として出現したのが観光開発の影響なのである。

観光開発は、多くの観光客を誘致することで、その成果を経済に活かすことによって、少数民族の生活を改善し、地域社会の近代化をも促進している。先に述べたように、近代化によって出稼ぎの現象が顕著化することに伴って農村部の人口が減少するとともに、担い手不足による伝統行事の簡略化などの問題がひき起こされているが、観光開発の進展によって、農村地域社会での雇用機会が増加したため、若者たちが故郷に回帰する現象がしばしば見られるようになっている。塚田（2014）は観光開発の文脈では「文化資源の〈有用性〉や〈何かに役立〉ち、〈利益や効用を得る〉という側面が強調されがちであるが、この点は中国の場合に顕著である。中国では民族の〈文化資源〉は、とくに観光を含む文化

⁸⁰曾士才（2002）：「中国における少数民族の「観光出稼ぎ」と村の変貌」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造-アジア太平洋の底流』弘文堂、32頁。

産業と結びついて経済的な利益を生む資源ととらえられがちである」と指摘した⁸¹。塚田が指摘するように、少数民族の伝統文化は「有用性や何かに役立ち、利益や効用を得る」ものとして観光開発の手段となされ、経済的な利益を生み出したため、政府あるいは開発者たちはその保護にさらに力を入れると思われる。例えば、中国文化大革命の時期には数多くの少数民族の伝統儀礼が「陋習」として禁止されたが、エスニック・ツーリズムの推進によって、今やその「陋習」は地域の特色ある文化資源として政府によって回復させられている。このように、観光開発の推進は、地域社会の過疎化の問題を緩和し、伝統芸能の担い手を増加させることで、伝統文化の保護にとって有効な手段であるとも考えられる。しかし、観光の推進によって、舞台化された伝統行事における「文化の真正性」という問題が生み出されるだけでなく、伝統文化の商品化の問題も深刻になってきたのである。

2. 広西チワン族自治区におけるエスニック・ツーリズムとまちづくりの調和

西南中国広西チワン族自治区におけるエスニック・ツーリズムの進展が少数民族の社会に与えた影響および諸課題については、本論文においてすでに指摘してきた。今またここでその問題を概観すれば、以下の通りである。西南中国広西チワン族自治区では、観光開発が少数民族の社会にもたらす経済的利益が政府によって強調され、同時に政府自身が観光開発における起業家としての役割を果たす場合が多かった。また、観光企業の導入によって、企業化された管理を行うことが地域社会を振興するうえで顕著な効果を発揮する一方で、地域の自然環境や社会文化環境に対するインパクトについての関心が不足するという現象がしばしば見られるようになった。さらに、観光活動が活発化することによって地域住民の社会に大きな影響が及ぼされ、観光開発の直接的な効果として経済利益を得ることができるようになったことで、村民たちの観光化への志向性が強くなるという現象も見られるようになった。現代化と観光開発によって少数民族の生業形態は、2000年代よりも前の農業中心のあり方からサービス産業中心のあり方へと転換し、社会経済の構成は急激に変化しつつある。さらに、この地域では、伝統文化の保存のために積極的な方策が図られると同時に、観光開発において伝統文化の観光資源化が推進されている。そして、市場経済の浸透と「観光脱贫」政策の下で、地元住民には経済意識が芽生え、利益を得るために伝統文化を商品として〈売る〉という事態が生じている。

岡村（2009）は日本における歴史的町並みが残る地域を例として挙げ、観光まちづくりの成功例として評価されることができるのは、少なくとも以下の三つの潮流に当てはまるようなものだけだと指摘している。すなわち、第一の潮流は、家の整備を進め、土産物屋や飲食店として観光的な活用を進め、多くの人を観光客として受け入れ、経済的利益を生み出すことである。第二の潮流は、そうした利益の一部を地域の環境保全に還元されるような仕組みを構築することである。そして第三の潮流は、これまでの価値が誰にとっても比較的分かりやすい地域資源を対象としていたのに対して、地域での伝統行事や習俗など生活のなかで大事にされている資源を地域外のヒトに伝え、価値を共有することによって、

⁸¹武内屋司・塚田誠之編（2014）：『中国の民族文化資源：南部地域の分析から』風響社、275頁。

改めて地域に暮らすことの魅力を確認することである⁸²。

岡村のこのような指摘は広西チワン族自治区におけるエスニック・ツーリズムの進展とまちづくりにも当てはまるように思われる。なぜならエスニック・ツーリズムの進展によって、広西チワン族自治区の少数民族の村々では伝統的家屋が整備されて、新たな土産物屋や飲食店などの観光施設に転用され、多くの観光客を誘致することによって、確かに経済的利益を生み出したからである。

しかし、観光という手段で得られた収益の一部が地域環境の保全に投入されているものの（例えば、エコミュージアムの建設による村の原始状態の保全）、その関心が不足している現象がよく見られる。さらに、エスニック・ツーリズムの進展によって、少数民族の一部の人々には伝統文化が重要な民族文化財として認識されたが、その一方で地域での伝統行事や習俗など、生活のなかで大事にされている資源を地域外の人々に伝え、価値を共有しようとする意識は教育などの制約の条件によってまだ希薄であると思われる。西南中国広西チワン族自治区ではエスニック・ツーリズムの推進によって、地域振興が活発になっているが、観光開発によってもたらされた負のインパクトについて十分に認識されていない。また、観光で得られた収益を地域環境の保全にさらに投入する必要があると思われる。さらに、最も重要なことは、特にこれまで政府と企業が主導してきた地域において伝統行事や習俗など生活のなかで大事にされている資源を地域外の人々に伝えることに対して、地域住民が主体的に参入していくことであると思われる。

⁸²西村幸夫編（2009）：『観光まちづくり-まち自慢からはじまる地域マネジメント』、日本交通公社、41 頁。

第5節 まとめ

本章では、少数民族居住地域への観光客の流入によって、布努ヤオ族の伝統文化がどのように変容したかを明らかにした。具体的には、観光化される前の布努ヤオ族の服飾におけるデザイン、耐久性、生産体制、着用の有無、季節性、色の組み合わせ、装飾の図案と精神的象徴などを観光化された後と比較した。その結果、布努ヤオ族の服装は現代的ファッションの浸透に伴い、製作方法が変化したことが確認された。また、既製服が流行し、様式の過美化が進行したが、意味の希薄化が進んでいることを確認した。

そして、観光開発が布努ヤオ族の建築文化に与えた影響についても分析した。具体的には、政府主導下で「伝統的な茅葺き建築の方案」を実施し、布努ヤオ族の伝統的な建物を改築した。また、交通網の整備は、観光客の流入によって、道路沿いの村における伝統民族文化の崩壊や変容を加速させた。さらに、観光開発による伝統的祭りの商品化が進み、伝統的な祭りの意義が失われつつあることを指摘した。

また、観光開発と生活の近代化との間にどのような関係があるのかを検討した。その結果、生活の近代化は農村部の人々にとって決して悪いものではないと思われるが、その一方で、代々伝承されてきた民間伝承、歌、芸能の断片化、担い手不足による伝統行事の簡略化、伝統工芸や民間医療の後継者難、民族建築物の減少、伝統的な儀礼や習俗の衰退などといった問題が深刻なものとなってきた。この点における近代化の影響力を無視することはできないが、もう一つ新たな要因として出現したのが観光開発の影響なのである。

観光開発は、多くの観光客を誘致することで、その成果を経済に活かすことによって、少数民族の生活を改善し、地域社会の近代化をも促進している。観光開発の推進は、地域社会の過疎化の問題を緩和し、伝統芸能の担い手を増加させることで、伝統文化の保護にとって有効な手段であるとも考えられる。しかし、観光の推進によって、舞台化された伝統行事における「文化の真正性」という問題が生み出されるだけでなく、伝統文化の商品化の問題も深刻になってきたのである。

以上のような結果を踏まえ、エスニック・ツーリズムとまちづくりをどのように調和させていくことができるのかという問題を、観光まちづくりにおける地域社会、地域環境、地域経済の三つをめぐる地域マネジメントの視点から検討した。

結 論

本論文では、広西チワン族自治区河池市の少数民族におけるエスニック・ツーリズムを事例として、それが民族社会の変化に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。中国では、1978年から改革開放路線への転換以降「西部大開発」の政策を打ち出し、内陸部の経済発展と現代化を目指すなかで、少数民族の特色ある伝統文化や特殊な生活様式などを観光資源として活用し、エスニック・ツーリズムの振興に取り組むようになった。本論文では、このような伝統文化の活用によるエスニック・ツーリズムの振興は、大きな経済効果と貧困からの脱出という目的の下で、少数民族の生活を改善することに寄与する一方で、文化の「商品化」という問題を含んでいることを明らかにした上で、民族社会の変容の中で伝統文化をいかにして保存していくかという課題について考察した。

本論文は2部から構成されている。第I部は中国の少数民族の人口の推移とその分布地域を報告するとともに、本論文の研究対象であるチワン族とヤオ族に関する先行研究を、主として年中行事や建築文化などの面から取り上げた。また、西部大開発の構想と実施及びその経済効果を取り上げ、その実施がエスニック・ツーリズムに与えた影響について分析した。広西チワン族自治区には、さまざまな少数民族が居住しており、豊かな民族文化観光資源が存在する。しかし、近年では、数多くの人々が貧困に困窮している現状を踏まえて政府が少数民族の生活を改善するために、その地区の唯一の特色のある民族文化を観光資源として開発しており、エスニック・ツーリズムが発展している。そして、1980年代の鄧小平時代の「二つの大局」の戦略において西部大開発は初期の構想であり、2000年代になるとその実施がはじまって今日に至るまで西部地区の経済を推進し続けている。国家の観光政策や「観光脱貧」の政策の実施によって、エスニック・ツーリズムの発展は、経済の発展を推進する一方で、農村地区の社会に多大な影響を与えている。こうした理由から、西南中国におけるエスニック・ツーリズムの展開を理解するために、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の三つの地区のエスニック・ツーリズムの発展動向を把握した。その結果、これら三つの地区の少数民族は中国全土の少数民族の人口のうち41.71%を占めているが、多くの人々が貧困に苦しんでいるため、政府は東部地区の経済発展との格差を縮小することを目的として、その地区の唯一の特色である民族文化を観光資源として開発することになり、エスニック・ツーリズムの発展を推進した。

最後に、広西チワン族自治区河池市のさまざまな自然観光資源と少数民族の文化観光資源を取り上げ、西部大開発によって河池市の観光業が推進されていく中で、少数民族の伝統文化が活用されてきたことを検討した。西部大開発によって河池市のインフラの建設が促進されるとともに、観光業も発展するようになった。また、少数民族の伝統文化が観光活用されることによって、その成果が地域社会に活かされ、少数民族の人々の生活改善に貢献した。さらに、観光開発における市場経済の浸透とともに、少数民族の伝統的な文化を核とする観光開発パターンがよく見られるようになっていった。しかし、少数民族文化を活用した観光による経済発展は、その背後にある伝統の喪失や環境の破壊などといった問題を生じさせている。すなわち、少数民族の祭りを核とする観光開発は、先住民たちに収入増加をもたらす反面、先住民たちは伝統文化やアイデンティティを失うという状況に

至りつつある。さらに、市場経済の発展と文明社会の進展により、貴重かつ多様な民族の文化が画一化しつつあるが、それを防ぎ、文化の多様性を保持するうえでは、観光振興は有効な手段となり得ることを指摘した。しかし、伝統文化を観光客の目の前に再現しようとして、演出が過度なものになることが多く、こうした傾向がつづけば、伝統文化の商品化によって文化の真正性や民族的アイデンティティは変容させられてしまうことになる。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で提示した問題を踏まえ、近代化が少数民族の社会に及ぼす影響にも留意しつつ、観光開発が民族社会の変化に及ぼす影響がどのようなものかを明らかにし、エスニック・ツーリズムと民族社会文化の保存との間の関係について、地域マネジメントの観点から検討した。その結果は、以下の通りである。

まず、中国広西チワン族自治区河池市の布努ヤオ族の祝著節を事例として取り上げ、エスニック・ツーリズムの影響下でその祭りがイベントへと変質しつつあることを考察した。政府からバックアップされた祝著節として観光資源化されることによって、大規模なイベントへと変質すると同時に、多くの観光客を誘致した。伝統的な民族文化が商品化されることによって、その本来の意味は希薄になってきているのである。さらに、銅鼓の装飾化や、舞台の後方に新旧の銅鼓が無秩序に並べられている現状は、銅鼓の宗教的意味が喪失されていることを象徴的に示している。また、布努ヤオ族は今日に至るまで伝統的な銅鼓文化を伝えてきたが、少数民族居住地域の開発に伴う観光振興の中で、それが魅力的な観光資源として多くの観光客を惹きつけるようになった。

次に、布努ヤオ族の銅鼓文化が観光政策の目玉として扱われることにより大きく変容していくことが、民族的アイデンティティとどのように関わっているかを、イベント参加者に対するアンケート調査の分析結果により考察した。その結果、布努ヤオ族の人たちはもはやほとんど銅鼓を所有しておらず、日常生活の中で銅鼓を叩く習慣がないにも関わらず、なおも銅鼓を伝統的で重要な文化財として認識していることが分かった。さらに、観光客向けのショーとして伝統的な民族文化が商品化されることによって、この習慣と意識に変化が生じており、銅鼓の本来の意味は希薄になってきていることも明らかにした。他方で、元々ヤオ族の意図とは無関係に「達努節」、「二九節」などと呼ばれていた祭りを、ヤオ族の研究者の提言を契機として、ヤオ族自身が祭りの意義を自民族にとって重要な宗教的意味として再認識し、祝著節と呼ぶようになった事態は、そうした民族的アイデンティティの確立を示している。しかし、そのように再認識され、祝著節と呼ばれるようになった祭りが今や、銅鼓文化の観光化によって他の民族と頻繁に接触することで、本来の意味を喪失し、民族的アイデンティティにも変化が見られるようになったのである。イベント化された祝著節は、生活が現代的になって、銅鼓を叩く習慣が急速に失われつつある布努ヤオ族の人々にとっては、銅鼓文化を保存するための有益な方法として認識されている。しかし、このようにイベント化され、宗教的コンテクストから切り離された銅鼓文化は、祭りというよりも、むしろ伝統芸能として保存されているに過ぎないとも考えられる。また、この地域にとって観光振興は貧困からの有効な脱出手段であり、イベント化された祝著節はその点で大きな役割を果たしている。しかしその一方、伝統的祭りの意味の希薄化による民族的アイデンティティの変化、観光客の流入による文化の破壊、さらには居住地における生活環境の破壊などという代償も覚悟しなければならないことを指摘した。

また、布努ヤオ族の銅鼓文化そのものを主題として取り上げ、チワン族の銅鼓文化と比較検討しながら、祭りの観光活用のあり方について考察した。その結果、以下の点を明らかにすることができた。

第一に、研究の対象地域である広西チワン族自治区河池市の概況を記述し、多くの少数民族が暮らしている河池市では、昔から民間に豊かな民族文化が残存し、特に銅鼓文化が盛んで、「世界銅鼓之郷」と称されていることを述べた。特に、河池市の紅水河流域のカラスト地区に居住するチワン族と布努ヤオ族は、今日に至るまで古い伝統的な銅鼓文化を伝えていることを指摘した。

第二に、布努ヤオ族とチワン族の銅鼓文化を比較検討し、優れた民芸品であるとともに、宗教的な呪物でもある銅鼓の特色を概観した。そして経済発展と現代文明の進展が、銅鼓文化にこれまでになく大きな影響を与え、銅鼓の使用頻度が減少し、演奏できる人も少なくなってきたことを指摘した。その上で多くの若者は出稼ぎに行き、銅鼓を打つ機会がない上に、現代的な娯楽に惹かれ、銅鼓には無関心となっていることを述べた。

そして第三に、銅鼓文化が観光活用され、多くの観光者を惹きつけて、大きな経済効果をもたらしていることを、河池市銅鼓山歌芸術節、布努ヤオ族祝著節とチワン族蚂拐（カエル）節などの祭りを事例として検討した。それによって少数民族の日常生活世界に埋め込まれてきた銅鼓習俗が、広西チワン族自治区河池市政府の文化政策と市場経済の少数民族居住地域への浸透という外的要因によって規定され、変化しつつあることを明らかにした。また、中国西南部における未開発地の少数民族のホスト側と、経済的に優越した地位にある漢民族のゲスト側とがその文化的価値の相違や経済的な格差などによって、両者のコンタクトゾーンで絶えず摩擦を生じさせていることを指摘した。そして国家の優遇政策によってチワン族と布努ヤオ族の銅鼓文化が観光資源化されることで、日常生活から切り取られてエンターテインメント化し、観光者の目の前にさらされ、銅鼓文化の本来の意味は希薄になりつつあることを指摘した上で、観光化と同時に祭りの本来的意義を考慮する必要があることを述べた。

さらに、白褲ヤオ族の伝統文化の観光化を取り上げ、その中で伝統文化の観光資源化についてどのような問題点があるかを考察した。白褲ヤオ族の民族文化の観光化は 2000 年から始まり、現在まで 16 年が経過して、さまざまな効果をもたらしているが、観光地としてはまだ発展期にあると考えられる。この時期は、政府によって観光開発が白褲ヤオ族の社会にもたらす経済的利益が強調され、同時に政府自身が観光開発における起業家としての役割を果たす場合が多かった。また、観光企業の導入によって、企業化された管理を行うことが、地域社会を振興するうえで顕著な効果を有するものであることも明らかとなった。その一方で、地域の自然環境や社会文化環境に対するインパクトについての関心は不足していることがわかった。さらに、観光活動が活発化することによって地域住民の社会に大きな影響が及ぼされ、観光開発の直接的な効果として経済利益を得ることができるようになったことで、村民たちの観光化への志向性は強くなっているように思われる。現代化と観光開発によって白褲ヤオ族の生業形態は、2000 年代より前の農業中心のあり方からサービス産業中心のあり方へと転換し、社会経済の構成は急激に変化しつつある。白褲瑤生態博物館は、元々白褲ヤオ族の伝統文化を保存するために建設されたが、このように

現代化と観光開発の進展によって瓦屋根にコンクリートの家屋が建てられるようになった実態は、南丹県だけの特徴ではなく、中国全土の観光地でもよく見られるようになったもののなのである。この地域では、伝統文化の保存のために積極的な方策が図られると同時に、観光開発において伝統文化の観光資源化が推進されている。そして、市場経済の浸透と「観光脱貧」政策の下で、地元住民には経済意識が芽生え、利益を得るために伝統文化を商品として売るという事態が生じている。したがって今後は、過度の観光資源化による弊害を防ぐために、観光資源の分類、保護と利用を地域社会が主導的にマネジメントすることが考慮されなければならないのである。

最後に、少数民族居住地域への観光客の流入によって、布努ヤオ族の伝統文化がどのように変容したかを明らかにした。具体的には、観光化される前の布努ヤオ族の服飾におけるデザイン、耐久性、生産体制、着用の有無、季節性、色の組み合わせ、装飾の図案と精神的象徴などを、観光化された後と比較した。その結果、布努ヤオ族の服装は現代的ファッションの浸透に伴い、製作方法が変化したことが確認された。また、既製服が流行し、様式の過美化が進行するなかで、意味の希薄化が進んでいることを確認した。そして、観光開発が布努ヤオ族の建築文化に与えた影響についても分析した。具体的には、政府主導下で「伝統的な茅葺き建築の方案」が実施され、布努ヤオ族の伝統的な建物が改築されていった。また、交通網の整備は、観光客の流入によって、道路沿いの村における伝統民族文化の崩壊や変容を加速させた。さらに、観光開発による伝統的祭りの商品化が進み、祭りの意義が失われつつあることを指摘した。そして、観光開発の推進が布努ヤオ族の伝統文化に与えた影響を検討した結果、観光開発にともなって近代化が進むなかで、少数民族の伝統文化が変容し、それぞれの問題と直面しなければならなくなったことを明らかにした。

また、近代化の推進によって、市場経済が浸透しつつあり、布努ヤオ族の社会文明化が促進され、布努ヤオ族の伝統文化の崩壊が進んでいることも事実である。そして観光開発と生活の近代化が少数民族の伝統文化に与えた影響を踏まえ、観光開発と生活の近代化との間にどのような関係があるのかを検討した。その結果、近代化は農村部の人々にとって決して悪いものではないと思われるが、その一方で、代々伝承されてきた民間伝承、歌、芸能の断片化、担い手不足による伝統行事の簡略化、伝統工芸や民間医療の後継者難、民族建築物の減少、伝統的な儀礼や習俗の衰退などといった問題が深刻なものとなってきたことを明らかにした。これらの点における近代化の影響力を無視することはできないが、もう一つ新たな要因として出現したのが観光開発の影響なのである。観光開発は、多くの観光客を誘致することで、その成果を経済に活かすことによって、少数民族の生活を改善し、地域社会の近代化をも促進している。近代化によって若年層が出稼ぎに行くという現象が顕著化することに伴って、農村部の人口が減少するとともに、担い手不足による伝統行事の簡略化などの問題がひき起こされている。その一方で、観光開発の進展によって、農村地域社会での雇用機会が増加したため、若者たちが故郷に回帰する現象もしばしば見られるようになっている。観光開発の推進は、地域社会の過疎化の問題を緩和し、伝統芸能の担い手を増加させることで、伝統文化の保護にとって有効な手段であるとも考えられる。しかし、観光の推進によって、舞台化された伝統行事における「文化の真正性」とい

う問題が生み出されるだけではなく、伝統文化の商品化の問題も深刻になってきたのである。

以上のような結果を踏まえ、エスニック・ツーリズムとまちづくりをどのように調和させていくことができるのかという問題を、観光まちづくりにおける地域社会、地域環境、地域経済の三つをめぐる地域マネジメントの視点から検討した。エスニック・ツーリズムの進展によって、広西チワン族自治区の少数民族の村々では伝統的家屋が整備されて、新たな土産物屋や飲食店観光施設に転用され、多くの観光客を誘致することによって、確かに経済的利益を生み出した。しかし、観光という手段で得られた収益の一部が地域環境の保全に投入されているものの、地域環境の保全に対する関心が不足している現象がよく見られる。また、エスニック・ツーリズムの進展によって、少数民族の一部の人々には伝統文化が重要な民族文化財として認識されたが、その一方で地域での伝統行事や習俗など、生活のなかで大事にされている資源を地域外の人々に伝え、価値を共有しようとする意識は教育などの制約によってまだ希薄であると思われる。西南中国広西チワン族自治区ではエスニック・ツーリズムの推進によって、地域振興が活発になっているが、観光開発によってもたらされた負のインパクトについては十分に認識されていない。また、観光で得られた収益を地域環境の保全にさらに投入する必要があると思われる。そして、最も重要なことは、特にこれまで政府と企業が主導してきた地域において伝統行事や習俗など生活のなかで大事にされている資源を地域外の人々に伝える活動に、地域住民が主体的に参入していくことであると思われる。

今後、広西チワン族自治区河池市のチワン族とヤオ族だけではなく、中国の他の少数民族の伝統文化がエスニック・ツーリズムの進展の中で、どのように変容していくのかをも検討することにより、少数民族の伝統文化を持続可能な観光開発の中で保全するためには、エスニック・ツーリズムによるまちづくりのあり方について検討することが不可欠であると思われる。これについては今後の課題として研究を深めていきたい。

謝 辞

本論文の作成を進めるにあたり、多くの方々のご指導とご支援を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

まず、本論文の構成、文章の書き方から細部の表現、さらに日本語の訂正に至るまで、終始暖かいご指導をいただきました恩師の長崎国際大学大学院人間社会学研究科地域マネジメント専攻木村勝彦教授に厚くお礼申し上げます。また副指導である同専攻の池永正人教授、中村龍文教授には、本論文について貴重なアドバイスおよび細かなご指導をいただきました。ここに感謝の意を表します。本論文の審査を担当していただいた滝知則教授並びに坂本雅俊教授にも感謝申し上げます。そして、博士前期課程の時代に修士論文をご指導いただいた田渕幸親教授、城前奈美准教授に深謝を申し上げます。

授業や学会などを通してご指導を頂いた長崎国際大学のすべての先生方にも、心よりお礼申し上げます。また、毎週水曜日の恩師木村勝彦教授のゼミナールにおける議論を通じて多くの知識やアドバイスをくださいました大学院生の皆様にも深く感謝申し上げます。さらに、本研究を進めるにあたり、木村ゼミナールの一員で、2012年3月に博士号を取得して、現在長崎短期大学専任講師の職にある章潔先輩から貴重なアドバイスをいただきました。ここに感謝の意を表します。

本論文の作成に際しては、中国でのフィールドワークにおいて、大化ヤオ族自治州旅游局、大化ヤオ族自治州民族局、大化ヤオ族自治州七百弄人民郷府、巴馬ヤオ族自治州旅游局、巴馬ヤオ族自治州民族局、南丹県旅游局、東蘭県旅游局、東蘭県民間銅鼓収蔵館の方々、そして少数民族文化の代表的な研究者である蒙霊先生をはじめとする研究者の方々に、貴重な研究資料の提供、聞き取り調査の協力をいただきました。ここに記し深謝の意を申し上げます。

最後に、私のこれまでの学業を支えてくれた父・覃新朝と母・黄春美をはじめとする家族、友人に感謝いたします。

参考文献

日本語文献

- 足羽洋保（1997）：『観光資源論』中央経済社、第 5 頁。
- 阿曾村智子（2009）：「文化観光（Cultural Tourism）に関する一考察－日欧比較の視点から－」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』第 8 号、293-306 頁。
- 阿部嘉治（2013）：「インドネシア・タナトラジャの世界遺産登録プロセス－国・地方自治体・コミュニティが持つ期待の違いについて－」『日本国際観光学会論文集』第 20 号、137-142 頁。
- 生田真人（2012）：「東南アジアの観光開発－タイとインドネシアの 4 地方都市を事例に」『立命館大学人文科学研究所紀要』第 98 号、9-48 頁。
- 石井香世子（2004）：「少数民族観光とイメージ表象－北タイ「山地民」をめぐる観光を事例に」『NUCB Journal of Economics and Information Science』Vol.49 No.1、215-240 頁。
- 石井香世子（2005）：「エスニック・ツーリズムにおける観光産業と国家－北タイ山地民とトレッキング・ツアーの事例から」『NUCB Journal of Economics and Information Science』Vol.50 No.1、13-20 頁。
- 石井香世子（2006）：「エスニック・ツーリズムにおける自己表象－タイ「山地民」と観光ミドルマンの事例から－」慶應義塾大学大学院社会学研究科、博士学位論文。
- 石井香世子（2007）：『異文化からみる市民意識とエスニシティの動態』慶應義塾大学出版会。
- 石森秀三・山村高淑（2009）：「情報社会における観光革命：文明史的に見た観光のグローバルトレンド」『JACIC 情報』第 24 巻第 2 号、7 頁。
- 石森秀三（2008）：「観光立国時代における観光創造」『大交流時代における観光創造』No.70、16-17 頁。
- 石森秀三編（1996）：『観光の 20 世紀（20 世紀における諸民族文化の伝統と変容）』ドメス出版、14-15 頁。
- 稲村務（2014）：「棚田、プーアル茶、土司－〈ハニ族文化〉の〈資源化〉」武内屋司・塚田誠之編『中国の民族文化資源－南部地域の分析から』風響社、191-192 頁。
- 岩松文代（2002）：「茅葺きの里」の形成－茅葺き屋根の増減動向を中心に－『第 8 回観光に関する学術研究論文入選論文集』財団法人アジア太平洋観光交流センター、18-33 頁。
- 遠藤英樹・堀野正人（2004）：『「観光のまなざし」の転回－越境する観光学』、春風社。
- 尾家建生（2009）：「観光資源と観光アトラクション」『大阪観光大学紀要』第 9 号、11-19 頁。
- 王維（2013）：「再創成された地域ブランドと観光資源－春節祭を事例として」『香川大学経済論叢』第 86 巻第 2 号、73-129 頁。
- 王柯（2006）：『20 世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会。

- 大石嘉一郎 (1998) :『日本資本主義の構造と展開』、東京大学出版会、14-15 頁。
- 大塚和義 (1996) :「アイヌにおける観光の役割ー同化政策と観光政策の相克」『観光の二〇世紀』ドメス出版学会、112-116 頁。
- 岡田宏二 (1993) :『中国華南民族社会史研究』汲古書院、58-61 頁。
- 緒川弘孝 (2010) :「貴州省の民族観光地と観光地ライフサイクル論」『CATS (北海道大学観光学高等研究センター) 叢書』、189-201 頁。
- 門田岳久 (2013) :『巡礼ツーリズムの民族誌ー消費される宗教経験』森話社。
- 金丸良子 (2005) :『中国の少数民族ミャオ族の生業形態』、古今書院。
- 兼重努 (1998) :「エスニック・シンボルの創成ー西南中国の少数民族トン族の事例からー」『東南アジア研究』第 35 巻第 4 号、738-758 頁。
- 川村清志 (2015) :「民俗文化の「保存」と「活用」の動態：祭りと民俗芸能を事例として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 193 集、113-152 頁。
- 韓敏編 (2015) :『中国社会における文化変容の諸相：グローバル化の視点から』風響社。
- 窪田幸子・野林厚志編 (2009) :『「先住民」とはだれか』世界思想社。
- 黒河功・山本美穂 (2004) :「中国西南部カルスト山岳地域における少数民族の農家経営と農村振興ー広西壮族自治区大化落族自治県七百弄郷ー」『農経論叢』第 60 巻、19-31 頁。
- 佐々木信彰 (2001) :『現代中国の民族と経済』世界思想社。
- 周星 (2001) :「旅遊産業与少数民族的文化展示」横山廣子編『中国に民族文化における民族文化の動態と国家をめぐる』国立民族学博物館調査報告 (20)、185-231 頁。
- 周達生 (1986) :「中国の高床式住居ーその分布・儀礼に関する研究ノートー」『国立民族学博物館研究報告』第 11 巻第 4 号、905-908 頁。
- 周飛帆 (1996) :「二〇世紀中国における民族理論から見る国家建設の理念」『言語文化論叢』第 2 号 105-106 頁。
- 章潔 (2014) :『長崎の祭りとまちづくりー「長崎くんち」と「ランタンフェスティバル」の比較研究』長崎文献社、3-5 頁。
- 鐘雲瓊・秋山邦裕 (2016) :「中国における郷村観光の展開と「農家楽」の実態分析ー広西チワン族自治区桂林市恭城県を事例として」『鹿大農学術報告』第 66 号、37-44 頁。
- 城前奈美 (2008) :「タイにおける観光産業開発ー投資奨励と外資規制」『長崎国際大学論叢』第 8 巻、75-84 頁。
- 末成道男編 (1995) :『中国文化人類学文献解題』東京大学出版会。
- 鈴木晶 (2012) :「中国貴州省少数民族地域におけるインバウンド観光の考察ー黔东南苗族侗族自治州を中心にー」『別府大学短期大学部紀要』第 31 号、67-78 頁。
- 鈴木正崇 (1995) :「銅鼓の儀礼と世界観についての一考察：中国・広西壮族自治区の白褲瑤の事例から」『史学』、Vol.64、No.3/4 (1995.4)、p.13(267)-31(285)、三田史学会。
- 須藤廣 (2007) :「現代の観光における「まなざし」の非対称性ータイの山岳民族「首長族 (カヤン族)」の観光化を巡ってー」『北九州市立大学都市政策研究所』第 1 号、31-41 頁。
- 須藤廣 (2013) :「妖精たちを消費するーアジアにおける少数民族観光の構造と変容ー」『北九州市立大学国際論集』第 11 号、39-55 頁。
- 宗曉蓮 (2009) :「中国における観光人類学の誕生と発展ー論点の紹介を中心にー」『白山

- 人類学』第12号、83-87頁。
- 曾士才（2002）：「中国における少数民族の「観光出稼ぎ」と村の変貌」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造－アジア太平洋の底流』弘文堂、32-54頁。
- 曾士才・小林英俊・緒川弘孝（2010）：「曾士才教授インタビュー」『CATS 叢書』第3巻、北海道大学観光学高等研究センター、日本交通公社、203頁。
- 曾士才（1998）：「中国のエスニック・ツーリズム－少数民族の若者たちと民族文化－」『中国21』第3号、43-68頁。
- 曾士才（1998）：「民族観光による村おこし－中国貴州ミャオ族地区の事例研究－」『旅の文化研究所研究報告』No.6、57-67頁。
- 曾士才（2001）：「中国における民族観光の創出－貴州省の事例から－」『民族学研究』第66巻第1号、87-105頁。
- ソロンガ（2012）：「「伝統」の継承、再創造、移植－内モンゴル自治区における「白いスウルデ」祭祀の「復興」をめぐる」『ヒマラヤ学誌』No.13、211-224頁。
- 孫潔（2012）：「中国雲南省元陽県棚田地域における観光開発と地元民の対応」『文学部論集』第96号、佛教大学文学部、51-70頁。
- 高橋光幸（2014）：「観光資源の定義と分類に関する考察」『富山国際大学現代社会学部紀要』第6巻、109-125頁。
- 高山陽子（2007）『民族の幻影－中国民族観光の行方』東北大学出版社、第19-20頁。
- 竹尾茂樹（2008）：「台湾における「少数民族観光」の現状と課題」『PRIME』第28号、明治学院大学国際平和研究所、77-87頁。
- 田畑久夫・金丸良子（1993）：「ヤオ族の生業形態の研究：フィールドサーヴェイを中心として」『比較民族研究』7、97-151頁。
- 田畑久夫・金丸良子（1995）：『中国少数民族誌－雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房。
- 覃建恩（2013）：「中国布努ヤオ族の服飾文化の観光化」『長崎国際大学国際観光学論集第8巻』、81-91頁。
- 覃建恩（2014）：「観光開発による少数民族の文化変容に関する研究－中国布努ヤオ族を事例として」長崎国際大学人間社会学研究科観光学専攻修士論文。
- 覃建恩（2015）：「中国布努ヤオ族の祭りに関する研究－銅鼓文化の視点から」『長崎国際大学国際観光学論集第10巻』、17-27頁。
- 覃建恩（2016）：「エスニック観光における祭りの「擬似イベント化」－中国布努ヤオ族の「祝著節」を事例として」『長崎国際大学国際観光学論集第11巻』、15-29頁。
- 覃建恩（2016）：「中国布努ヤオ族の銅鼓文化と民族アイデンティティ」『宗教研究：第74回学術大会紀要特集』第89巻別冊、日本宗教学会、424-425頁。
- 覃建恩（2017）：「中国ヤオ族における伝統祭りの混乱」『宗教研究：第75回学術大会紀要特集』第90巻別冊、日本宗教学会、405-407頁。
- 覃建恩（2017）：「中国少数民族における伝統文化の観光資源化－白褲ヤオ族を事例として」『長崎国際大学国際観光学論集第12巻』、13-27頁。
- 崔銀姫（2012）：「「観光アイヌ」とは何か－まなざしの歴史的な変容をめぐる」『社会情報学』第1巻2号、93-108頁。

- 陳晶（2006）：「観光開発が少数民族観光村に与える影響について：中国貴州省黔东南苗・ドン族自治州郎徳上村を中心に」 ツーリズム学会編集委員会編『新ツーリズム学原論－自由時間会社の豊かさの質とは』 東信堂、89-107 頁。
- 塚田誠之（2000）：『壮族文化史研究－明代以降を中心として』 第一書房。
- 塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編（2001）：『流動する民族－中国南部の移住とエスニシテ』 平凡社。
- 塚田誠之（1983）：「唐宋時代における華南少数民族の動向－左・右江流域を中心に－」『史学雑誌』 92(3)、40-66 頁。
- 塚田誠之（1985）：「明代における壮 (Zhuang) 族の移住と生態－明清時代壮族史研究 (一)」『北大史学』 25、37-55 頁。
- 塚田誠之（1988）：「明末清初の広西におけるチュアン（壮）族－王士性・黄之隽の著作の分析を中心に」『史朋』 22、20-36 頁。
- 塚田誠之（1989）：「チュアン族と漢族との通婚に関する史的考察－17 世紀末～20 世紀初を中心に」『民博通信』 43、59-67 頁。
- 塚田誠之（1992）：「中国・広西北部龍勝県壮（チュワン）族の莫一大王祭一年中行事に現れた壮族文化の一側面」『民族学研究』 57(1)、21-39 頁。
- 塚田誠之（2000）：『中国国境地域の移動と交流－近現代中国の南と北』 有志舎。
- 塚田誠之（2014）：「広西チワン族の文化資源：その形成と地域性」武内屋司・塚田誠之編『中国の民族文化資源：南部地域の分析から』 風響社、278 頁。
- 塚田誠之編（2008）：『民族表象のポリティクス－中国南部における人類学・歴史学的研究』 風響社。
- 塚田誠之編（2016）：『民族文化資源とポリティクス－中国南部地域の分析から』 風響社。
- 角山栄・川北稔・村岡健次（1992）：『生活の世界歴史〈10〉産業革命と民衆』 河出書房新社。
- 土井文博（2014）：「観光社会学の可能性：J.アーリの「まなざし」論を超えて」『海外事情研究』、第 41 巻第 2 号、11-40 頁。
- 鳥居龍蔵（1980）：『中国の少数民族地帯をゆく』 朝日新聞社。
- 杜国慶（2012）：「中国雲南省における少数民族の分布について」『立教大学観光学部紀要』 第 14 号、75 頁
- 陶冶（2010）：「観光開発に見る「民族文化」の表象：中国貴州省雷山県の「苗年文化節」をめぐって」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』 No.69、117-129 頁。
- 永井義美（2009）：「ベトナム社会主義共和国における民族意識の変容－チャンパの文化遺産保護を中心に－」 埼玉大学大学院文化科学研究科、博士学位論文。
- 中井治郎（2014）：「〈ふるさと〉の文化遺産化と観光資源化：京都府南丹市美山町〈かやぶきの里〉をめぐって」『龍谷大学社会学部紀要』 第 44 号、114-126 頁。
- 中村優希（2011）：「アメリカ先住民史研究－ジョン・コリアを中心に－」『パブリック・ヒストリー』 第 8 号、79-92 頁。
- 中谷猛（2000）：「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理－国民国家論研究のためのノート」立命館法学、2000 年 3・4 号下巻（271・272 号）、681 頁。

- 西村幸夫編（2009）：『観光まちづくりーまち自慢からはじまる地域マネジメント』、日本交通公社、11-41 頁。
- 野原卓（2008）：「観光まちづくりを取り巻く現状と可能性」『季刊まちづくり』第 19 号、30 頁。
- 橋本和也（2001）：『観光人類学の戦略ー文化の売り方・売られ方』世界思想社。
- 長谷川清・塚田誠之編（2005）：『中国の民族表象ー南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社。
- 長谷川清（2006）：「エスニック観光と「風俗習慣」の商品化ー西双版纳タイ族自治州の事例」『国立民族学博物館調査報告』63、173-194 頁。
- 馮旭・山崎寿一（2013）：「中国西南地方・ナシ族モソ人の歴史文化村鎮保護に関する考察ー雲南省永寧郷者波中村、里格村を事例にー」『神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要』第 5 号、1-12 頁。
- 細見和之（2008）：『アイデンティティ/他者性』岩波書店、2-3 頁。
- 前田直人（2003 年）：「西双版纳傣族自治州の民族観光における文化表象の交錯：民族であるための方法について」『国際開発研究フォーラム』第 24 号、163-178 頁。
- 松岡正子（2003）：「中国・少数民族における改革開放後の人口移住ー四川省チャン族を事例としてー」『岡山大学大学院文化科学研究紀要』第 16 号、328-330 頁。
- 松村嘉久（2001）：「中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略」『東アジア研究』第 32 号、大阪経済法科大学、39 頁。
- 松本光太郎（2004）：「中国南部少数民族の直面する諸問題ー雲南の事例を中心にー」『少数民族の文化と社会の動態ー東アジアからの視点ー（国立民族学博物館調査報告 No.50）』国立民族学博物館、294-295 頁。
- 丸井ふみ子（2012）：「アイデンティティ研究の動向：異文化接触・言語との関係を中心に」『言語・地域文化研究（18）』東京外国語大学大学院、193-209 頁。
- 溝尾良隆（2008）：「観光資源論ー観光対象と資源分類に関する研究」『城西国際大学紀要』第 16 巻第 6 号、1-13 頁。
- 宮本佳範・大塚奈美（2012）：「ルーマニア北西部における伝統的生活文化観光の現状と課題ー観光対象へのアクセシビリティとオーセンティシティー」『東邦学誌』第 41 巻第 1 号、29-45 頁。
- 宮本佳範（2011）：「観光対象として“持続すべき文化”に関する考察ー持続可能なエスニック・ツーリズムへの視点ー」『東邦学誌』第 40 巻第 1 号、19-33 頁。
- 宮脇千絵（2010）：「民族衣装の既製服化ー中国雲南省のミャオ族衣装の変化の様相ー」『総研大文化科学研究』第 6 号、41-64 頁。
- 森重昌之（2012）：「観光資源の分類の意義と資源化プロセスのマネジメントの重要性」『阪南論集』人文・自然科学編、第 47 巻第 2 号、113-124 頁。
- 安村克己・遠藤英樹・寺岡伸悟・堀野正人（2011）：『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房。
- 山下晋司（2005）：『文化人類学入門ー古典と現代をつなぐ 20 のモデル』弘文堂。
- 山村高淑（2006）：「開発途上国における地域開発問題としての文化観光開発ー文化遺産と

- 観光開発をめぐる議論の流れと近年の動向」『国立民族学博物館調査報告』第 61 号、12-13 頁。
- 横山廣子 (2004) : 「観光を中心とする経済発展と文化－雲南省大理盆地の場合－」『少数民族の文化と社会の動態－東アジアからの視点－ (国立民族学博物館調査報告 No.50)』国立民族学博物館、181-204 頁。
- 横山廣子 (2011) : 「中国雲南省のチノ族における社会変動と民族文化」『コミュニケーション科学』第 33 号、17-46 頁。
- 吉原和男・鈴木正崇 編 (2002) : 『拡大する中国世界と文化創造－アジア太平洋の底流』弘文堂。
- 四谷晃一・八木匡 (2007) : 「ベトナム観光産業の発展と現状」『ワーキング・ペーパー』(同志社大学経済学会) No.31。
- 廖国一 著・戸崎哲彦 訳 (1999) : 「中国广西少数民族の習俗の住居建築に及ぼせる影響」『彦根論叢』第 320 号、179-195 頁。
- 脇田道子 (2013) : 「インド北東部国境地帯のツーリズム－アルナーチャル・プラデーシュ州の現状と課題－」『人間と社会の探究』(慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要) 第 75 号、119-148 頁。

中国語文献

- 陳報勛 (2005) : 『会戦東巴鳳－广西河池市東巴鳳三県基礎設施建設大会戦記実』广西人民出版社。
- 費孝通 著・西澤治彦・吉開将人・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・西澤治彦 訳 (2008) : 『中華民族の多元一体構造』風響社。
- 奉恒高編 (2007) : 『瑤族通史』民族出版社。
- 奉恒高編 (2008) : 『瑤族村寨的生計轉型与文化變遷』民族出版社。
- 奉恒高編 (2009) : 『公平与和諧：瑤族教育研究』民族出版社。
- 国家發展改革委員会 (2005) : 「中華人民共和國西部地区中等都市發展戰略設定調査」第 1 編西部地区中等都市發展戰略、5-6 頁。
- 国家發展改革委員会 (2007) : 「西部大開發第十一次五年計画」国家發展改革委員会、38-39 頁。
- 国家發展改革委員会 (2012) : 「西部大開發第十二次五年計画」国家發展改革委員会、60-61 頁。
- 国家發展改革委員会 (2017) : 「西部大開發第十三次五計計画」国家發展改革委員会。
- 広西大化七百弄国家地質公園画冊編委会 (2012) : 『山海奇觀：七百弄』広西大化七百弄国家地質公園管理局。
- 韓徳明 (2010) : 「東蘭銅鼓樂発探」『紅水河民族文化芸術考察研究』广西人民出版社、228-236 頁。
- 李柏文 (2009) : 「中国少数民族地区旅遊業發展 30 年：業績、經驗及趨勢」『中国広西大学学報』第 6 期、10-16 頁。

- 李默（2015）：『瑤族歷史探究』社会科学文献出版社、63-66 頁。
- 李小妹（2013）：「深圳中国民俗文化村における「少数民族」の表象」『人間文化創成科学論叢』第 15 卷、311-319 頁。
- 李肇榮・曹華盛編（2006）『旅游学概論』清華大学出版社、127 頁。
- 李樹民・陳実（2002）「論西部旅游業實施政府主導型戰略的宏觀分析」『人文雜誌』、66-68 頁。
- 梁富林（2000）：「河池伝世銅鼓の「神器」功能」『広西民族研究』、第 1 期、47-51 頁。
- 梁庭望（2000）：『壮族文化概論』広西教育出版社、473-483 頁。
- 梁晶晶・陈路芳（2011）：「論広西民族節慶文化的転承与発展：以南寧国際民歌芸術節为典型案例」『経済与社会発展』2011 年 01 期、86-91 頁。
- 劉碩良編（2013）：『広西地域文化要覧』広西師範大学出版社。
- 劉紫玲（1989）：「布努瑤創世史詩《密洛陀》」『民族文学研究』1989 年第 6 期、32-34 頁。
- 羅光勤編（2008）：『巴馬瑤族自治県概況』民族出版社。
- 滿丁華（2008）：「從祝著節看民族民間文化的伝承与保護：以広西巴馬布努瑤祝著節為個案」『河池学院学報』2008 年第 3 期、108-111 頁。
- 蒙有義（2014）：『密洛陀』北京科学技術出版社。
- 南宇（2007）『中国西部旅遊資源』清華大学出版社、4 頁。
- 農品冠（1987）：「祝著節散記」、『民族艺术』、1987 年第 4 期。
- 祁春英（1996）：『中国少数民族頭飾文化』宗教文化出版社、115-120 頁。
- 覃乃昌（2001）：「20 世紀的壮学研究」広西民族研究、2001 第 4 期。
- 覃乃昌編（2004）：『広西世居民族』広西民族出版社。
- 容小寧編（2007）：『超越・崛起：広西旅遊文化十大精品』広西人民出版社。
- 容小寧編（2010）：『紅水河民族文化芸術考察研究』広西人民出版社、240-243 頁。
- 王莉霞・張蕾：『中国旅游資源教程』陝西人民出版社、3-7 頁。
- 王文亮（2001）：『中国観光業詳説』日本僑報社、91 頁。
- 韋標亮編（2003）：『布努瑤歷史文化研究文集』貴州民族出版社。
- 韋標亮編（2010）：『布努瑤社会歴史』広西民族出版社。
- 韋麗春（2007）：「紅水河流域壮族原始宗教祭祀舞蹈及其文化特征」『南京体育学院学報』第 21 卷第 3 号、45-46 頁。
- 吳其付（2015）：『民族旅游与文化認同：以姜族為例』人民出版社。
- 謝銘（2001）：「西部大開發与河池地区民族旅遊」『河池市師專学報』2001 年第 1 期、54-57 頁。
- 謝銘・覃自昆（2009）「毛南族「分龍節」の淵源、現状及保護」『広西社会科学』第 7 期、広西社会科学雜誌編集部、13-17 頁。
- 瑤族簡史編写組編（1983）：『瑤族簡史』広西民族出版社、10-14 頁。
- 顏恩泉（1993）：『雲南苗族伝統文化の変遷』雲南人民出版社。
- 楊昇・王曉雲・馮学鋼（2008）：「近十年国内外民族旅游研究総述」『広西民族大学学報』第 3 卷、27-32 頁。
- 楊鵬（1997）：「背景与方法：中国少数民族服飾文化研究導論」『貴州民族学院学報社科版』

- 第4期、36-37頁。
- 玉時階（2005）：「試論広西民族旅遊資源の開発与保護」『広西社会主義学院学报』第16巻第1期、37-39頁。
- 玉時階（2005）：『瑶族文化変遷』民族出版社。
- 趙嘉裕（2010）：『中国大陸観光旅遊資源総論』秀威資訊。
- 張金萍（2015）：「布努瑶銅鼓考察：以都安、大化布努瑶为例」『中国古代銅鼓研究通訊』第20期、52-61頁。
- 張曉萍（2005）：『民族旅游の人類学透視：中西旅游人類学研究論叢/旅游訳叢与研究』雲南大学出版社。
- 張有隽（2011）：『張有隽人類学民族学文集（上/下）』民族出版社。
- 章尚正（1998）：「〈政府主導型〉旅游發展戰略の反思」『旅游学刊』第6期、21-22頁。
- 壮族簡史編纂組（1980）：『壮族簡史』広西人民出版社、119-120頁。
- 中国古代銅鼓研究会編（1993）：『銅鼓和青銅文化的新探索』広西民族出版社。
- 中国少数民族社会歴史調査資料叢刊 修訂編輯委員会編（2009）：『広西瑶族社会歴史調査資料（三）』民族出版社。
- 中国少数民族社会歴史調査資料叢刊 修訂編輯委員会編（2009）：『広西瑶族社会歴史調査資料（五）』民族出版社。
- 中華人民共和国統計局（2001）：『中国統計年鑑 2001年』中国統計出版社。
- 中華人民共和国国家統計局（2010）：『中国 2010年人口普查資料』中国統計出版社。

邦訳文献

- A. D. Smith（1979）：『*The Ethnic Origins of Nations*』Oxford: Blackwell.（A・D・スミス 著, 巢山靖司・高城和義 訳（1999）：『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会）
- Anthony Giddens（1989）：『*Sociology*』Polity Press.（アンソニー・ギデンズ 著, 松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・立松隆介・内田健 訳（2009）：『社会学（第5版）』而立書房）
- Boorstin, D. J.（1961）：『*The image: A guide to pseudoevents in Apsrica*』New York: Harper and Row.（ブーアスティン, D. J. 著, 星野郁美・後藤和彦 訳（1964）：『幻影の時代—マスコミが製造する事実』東京創元社）
- Dean MacCannell（1973）：『*Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings*』University of Chicago. Vol. 79 No.3. 589-603頁.（マッカネル, D. 著, 遠藤英樹 訳（2001）：「演出されたオーセンティシティ: 観光状況における社会空間の編成」『奈良県立商科大学研究季報』第11巻第3号）
- Erik H. Erikson（1959）：『*Identity and the Life Cycle*』New York: International Universities Press.（エリク・H・エリクソン 著, 西平直・長島由恵 訳（2013）：『アイデンティティとライフスタイル』誠信書房）
- James L. Peacock（1986）：『*The Anthropological Lens: Harsh Light, Soft Focus*』

- Cambridge University Press. (ジェイムズ・L・ピーコック 著, 今福龍太 訳 (1988) : 『人類学と人類学者』 岩波書店)
- Michel Beaud (1981) : *Histoire du capitalisme : de 1500 à nos jours*. Paris : Seuil. (ミシェル・ボー 著, 筆宝康之・勝俣誠 訳 (1996) : 『資本主義の世界史 1500-1995』、藤原書店、212-218 頁)
- R.M.Maclver (1917) : *Community: A Sociological Study*. London : Macmillan and Company. (R・M・マッキーヴァー 著, 中久郎・松本通晴監 訳 (2009) : 『コミュニティ』 ミネルヴァ書房)
- Valene L. Smith (1977) : *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. University of Pennsylvania Press. (バレーン・L・スミス 著, 三村浩史監 訳 (1991) 『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』 勁草書房)

英語文献

- Dean MacCannell (1976) : *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*. Macmillan Press.
- John Urry (1990) : *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. Theory: Culture and Society Series.
- Weiler, B. and Hall, C.M. (1992) : *Special interest tourism: in search of an alternative*. Belhaven Press.

統計年鑑

- 広西壮族自治区統計局 (1990) : 『広西統計年鑑 1990』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1991) : 『広西統計年鑑 1991』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1992) : 『広西統計年鑑 1992』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1993) : 『広西統計年鑑 1993』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1994) : 『広西統計年鑑 1994』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1995) : 『広西統計年鑑 1995』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1996) : 『広西統計年鑑 1996』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1997) : 『広西統計年鑑 1997』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1998) : 『広西統計年鑑 1998』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (1999) : 『広西統計年鑑 1999』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (2000) : 『広西統計年鑑 2000』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (2001) : 『広西統計年鑑 2001』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (2002) : 『広西統計年鑑 2002』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (2003) : 『広西統計年鑑 2003』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (2004) : 『広西統計年鑑 2004』 中国統計出版社。
- 広西壮族自治区統計局 (2005) : 『広西統計年鑑 2005』 中国統計出版社。

[illegible]

卷末資料

調查問卷（中国語）

关于旅游对铜鼓文化影响认识度的问卷调查

本问卷以居住在河池市的布努瑶族居民为调查对象,旨在分析旅游开发对当地居民铜鼓文化影响的认识度。本问卷采取不记名方式填写,仅作为本人博士论文的参考资料使用,希望您能给予配合。感谢您的合作与帮助!

长崎国际大学大学院 地域经营管理学专业 博士課程 覃 建恩

调查日期 2015 年 7 月 14 日

(1) 您的性别 1. 男 2. 女

(2) 您的年龄 () 岁

(3) 您的职业

1. 公司职员 2. 农民 3. 个体经营 4. 公务员 5. 学生 6. 失业
7. 其他 ()

(4) 您会敲打铜鼓吗?

1. 会敲打 2. 较会敲打 3. 说不好 4. 不太会敲打 5. 不会敲打

(5) 在日常生活中,您有敲打铜鼓的习惯吗?

1. 敲打 2. 只在宗教仪式时敲打 3. 只在游客访问的时候敲打
4. 几乎不敲打 5. 不敲打

(6) 您家里有铜鼓吗?

1. 有 2. 没有 3. 不知道

(7) 您想学习敲打铜鼓吗?

1. 想学 2. 较想学 3. 说不好 4. 不太想学的 5. 不想学

(8) 您学习敲打铜鼓的理由是什么。

1. 祭祀 2. 兴趣爱好 3. 为了工作 4. 为了向游客表演 5. 其他 ()

(9) 您了解关于铜鼓的历史文化和故事吗?

1. 了解 2. 较为了解 3. 说不好 4. 不太了解 5. 不了解

(10) 您认为铜鼓文化重要吗？

1. 重要 2. 较为重要 3. 说不好 4. 不太重要 5. 不重要

(11) 您想学习铜鼓文化吗？

1. 想学 2. 较想学 3. 说不好 4. 不太想学的 5. 不想学

(12) 随着旅游的发展，您觉得敲打铜鼓的习惯发生变化了吗？

1. 变化了 2. 略有变化了 3. 说不好 4. 几乎没变化 5. 没变化

(13) 您认为旅游的发展对铜鼓文化保护的提高来说有利吗？

1. 有利 2. 较为有利 3. 说不好 4. 几乎无利 5. 无利

(14) 对于铜鼓文化的旅游开发，您觉得对吸引游客来说是有利的方法吗？

1. 有利 2. 较为有利 3. 说不好 4. 几乎无利 5. 无利

(15) 对于铜鼓文化的旅游开发，您觉得对铜鼓文化保存来说是有利的方法吗？

1. 有利 2. 较为有利 3. 说不好 4. 几乎无利 5. 无利

(16) 您认为旅游业的发展对铜鼓文化造成破坏了吗？

1. 破坏了 2. 略有破坏 3. 说不好 4. 几乎没有破坏 5. 没有破坏

(17) 关于铜鼓文化保护和传承您有什么建议。

建议()

アンケート（日本語訳）

銅鼓文化に対するツーリズムの影響に関する認識度のアンケート調査票

このアンケートは河池市に居住する布努ヤオ族を対象として、銅鼓文化に対するツーリズムの影響に関する認識度を分析し、博士論文の資料として活用するものです。まことに恐縮ですが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

長崎国際大学大学院 地域マネジメント専攻 博士課程 覃 建恩

調査日 2015 年 7 月 14 日

(1) 性別

1. 男 2. 女

(2) 年代

1. 10 代 2. 20 代 3. 30 代 4. 40 代
5. 50 代 6. 60 代 7. 70 歳以上

(3) 職業

1. 会社員 2. 農業 3. 自営業 4. 公務員
5. 学生 6. 無職 7. その他（ ）

(4) あなたは銅鼓を叩くことができますか。

1. できる 2. ややできる 3. どちらともいえない
4. あまりできない 5. できない

(5) 日常生活の中で、銅鼓を叩くことがありますか。

1. よく叩く 2. 儀式の中でのみ 3. 観光客向けのショーの中でのみ
4. ほとんど叩かない 5. まったく叩かない

(6) あなたの家には銅鼓がありますか。

1. ある 2. ない 3. 分からない

(7) 銅鼓の叩き方を学びたいと思いますか。

1. 学びたい 2. やや学びたい 3. どちらともいえない
4. あまり学びたくない 5. 学びたくない

(8) 銅鼓の叩き方を学びたいと思う理由についてお答えください。

1. 祭祀 2. 趣味 3. 職業 4. 観光客向け 5. その他（ ）

(9) 銅鼓の歴史文化や物語を知っていますか。

1. 知っている 2. やや知っている 3. どちらともいえない
4. あまり知らない 5. 知らない

(10) 銅鼓文化は重要だと思いますか。

1. 思う 2. やや思う 3. どちらともいえない
4. あまり思わない 5. 思わない

(11) 銅鼓文化を学びたいと思いますか。

1. 学びたい 2. やや学びたい 3. どちらともいえない
4. あまり学びたくない 5. 学びたくない

(12) 観光化によって銅鼓を叩く習慣は変化しましたか。

1. 変化した 2. やや変化した 3. どちらともいえない
4. あまり変化していない 5. 変化していない

(13) 河池市が観光開発を推進することは、銅鼓文化の保護に役立つと思いますか。

1. 思う 2. やや思う 3. どちらともいえない
4. あまり思わない 5. 思わない

(14) 銅鼓文化を観光客向けに演じることは、観光客の誘致にとって有益な方法だと思いますか。

1. 思う 2. やや思う 3. どちらともいえない
4. あまり思わない 5. 思わない

(15) 銅鼓文化を観光客向けに演じることは、銅鼓文化の保存にとって有益な方法だと思いますか。

1. 思う 2. やや思う 3. どちらともいえない
4. あまり思わない 5. 思わない

(16) 観光業の発展は銅鼓文化を破壊すると思いますか。

1. 破壊する 2. やや破壊する 3. どちらともいえない
4. あまり破壊しない 5. 破壊しない

(17) 銅鼓文化の保存と伝承について、何か提言がありますか。

提言 ()

論文内容の要旨

エスニック・ツーリズムと社会変容に関する研究 ー中国南西部広西チワン族自治区の少数民族を事例としてー

1. 研究の背景

中国では1978年から改革開放路線への転換以降「西部大開発」の政策を打ち出し、内陸部の経済発展と現代化を目指すなかで、少数民族地域の観光開発に大きな期待が寄せられている。そして、1980年代初頭からエスニック・ツーリズムが中国全域に波及していく中で、特に雲南省がエスニック・ツーリズムの先頭を切り、少数民族の居住地には巨大な経済波及効果がもたらされた。そして、雲南省と隣接する広西チワン族自治区でも、チワン族やヤオ族などの少数民族の特色ある伝統文化や特殊な生活様式などを観光資源として活用し、エスニック・ツーリズムの振興に取り組むようになった。

このような伝統文化の活用によるエスニック・ツーリズムの振興は、大きな経済効果と貧困からの脱出という目的の下で、少数民族の社会発展のために企画されたのである。しかし、こうしたエスニック・ツーリズムは、少数民族の生活を改善することに寄与する一方で、文化の「商品化」という問題や伝統文化の保存という課題をも生み出した。すなわち、近代化の影響のみならず、観光開発によって流入する外来文化と伝統文化の両立という問題が生じ、少数民族は民族的アイデンティティ喪失の危機に立たされているのである。

2. 研究の目的

本論文では、西南中国広西チワン族自治区河池市の少数民族におけるエスニック・ツーリズムを研究事例として、それが民族社会をどのように変容させているかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本論文の目的を達成するために、まず先行研究によってエスニック・ツーリズム発展の背景を概観し、発展過程で生み出される問題点を把握する。また、歴史文化と民族誌に関する文献資料を分析し、研究対象地域における少数民族社会の伝統文化の歴史的経緯を明らかにする。こうした理論的研究と同時に、エスニック観光地としての河池市の現状について調査を実施し、同地の少数民族の社会発展動態を明らかにするとともに、アンケート調査の結果の分析により、エスニック・ツーリズムが少数民族の意識をどのように変化させているかを把握する。さらに、地元住民の生活の変化について聞き取り調査を行い、エスニック・ツーリズムに対する彼らの態度および評価を考察する。

具体的なフィールドワークの内容は以下の通りである。まず、2014年8月20日から9月10日までの間に河池市の少数民族居住地域で第一次の現地調査を行い、主に少数民族における銅鼓文化の歴史的変遷と観光活用の実態について調べた上で、エスニック・ツーリズムにおける少数民族の文化や祭りの観光活用の現状を考察した。また、2015年5月21日から6月10日までの間に第二次、同年7月13日から23日までの間に第三次の現地

調査を実施し、主にエスニック・ツーリズムにおける伝統的祭りの「観光資源化」と「擬似イベント化」という問題点について考察した。さらに、2016年2月3日から3月3日及び8月8日から23日までの間に第四・五次の現地調査を実施し、ヤオ族の伝統的に維持されてきた祭りの実態を調べ、ヤオ族文化の代表的な研究者である蒙靈にインタビューを行うとともに、観光開発における伝統的祭りのあり方を実際に調査した上で、「夢・巴馬」という山水と少数民族文化を舞台にした光のショーについても考察した。そして、2017年4月28日から5月21日までの間に第六次の現地調査を実施し、主にヤオ族の伝統的な祭りである祝著節が何百年間にわたって本来行われてきた場所の実態を調べ、村人に対する聞き取り調査から祝著節の現状を明らかにした。

4. 研究の結果

本論文は序論と2部から構成されている。まず序論では、本研究の背景と問題点、先行研究と論文の目的および方法、理論の考察、論文の構成について記述する。

第Ⅰ部は中国の少数民族の人口の推移とその分布地域を報告するとともに、本論文の研究対象であるチワン族とヤオ族に関する先行研究を、主として年中行事や建築様式などの面から取り上げた。また、西部大開発の構想と実施及びその経済効果を取り上げ、その実施がエスニック・ツーリズムに与えた影響について分析した。さらに、西南中国におけるエスニック・ツーリズムの展開を理解するために、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の三つの地区のエスニック・ツーリズムの発展動向を把握した。最後に、広西チワン族自治区河池市のさまざまな自然観光資源と少数民族の文化観光資源を取り上げ、西部大開発によって河池市の観光業が推進されていく中で、少数民族の伝統文化が活用されてきたことを検討した。西部大開発によって河池市のインフラの建設が促進されるとともに、観光業も発展するようになった。また、少数民族の伝統文化が観光活用されることによって、その成果が地域社会に活かされ、少数民族の人々の生活改善に貢献した。さらに、観光開発における市場経済の浸透とともに、少数民族の伝統的な文化を核とする観光開発パターンがよく見られるようになっていった。しかし、少数民族文化を活用した観光による経済発展は、その背後にある伝統の喪失や環境の破壊などといった問題を生じさせている。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で提示した問題を踏まえ、近代化が少数民族の社会に及ぼす影響にも留意しつつ、観光開発が民族社会の変化に及ぼす影響がどのようなものかを明らかにし、エスニック・ツーリズムと民族社会文化の保存との間の関係について、地域マネジメントの観点から検討した。その結果は、以下の通りである。

まず、中国広西チワン族自治区河池市の布努ヤオ族の祝著節を事例として取り上げ、エスニック・ツーリズムの影響下でその祭りがイベントへと変質しつつあることを考察した。政府からバックアップされた祝著節として観光資源化されることによって、大規模なイベントへと変質すると同時に、多くの観光客を誘致した。伝統的な民族文化が商品化されることによって、その本来の意味は希薄になってきているのである。さらに、銅鼓の装飾化や、舞台の後方に新旧の銅鼓が無秩序に並べられている現状は、銅鼓の宗教的意味が喪失されていることを象徴的に示している。

次に、布努ヤオ族の銅鼓文化が観光政策の目玉として扱われることにより大きく変容し

ていくことが、民族アイデンティティとどのように関わっているかを、イベント参加者に対するアンケート調査の分析結果により考察した。その結果、布努ヤオ族の人たちはもはやほとんど銅鼓を所有しておらず、日常生活の中で銅鼓を叩く習慣がないにも関わらず、なおも銅鼓を伝統的で重要な文化財として認識していることが分かった。さらに、観光客向けのショーとして伝統的な民族文化が商品化されることによって、この習慣と意識に変化が生じており、銅鼓の本来の意味は希薄になってきていることも明らかにした。他方で、元々ヤオ族の意図とは無関係に「達努節」、「二九節」などと呼ばれていた祭りを、ヤオ族の研究者の提言を契機として、ヤオ族自身が祭りの意義を自民族にとって重要な宗教的意味として再認識し、祝著節と呼ぶようになった事態は、そうした民族アイデンティティの確立を示している。しかし、そのように再認識され、祝著節と呼ばれるようになった祭りが今や、銅鼓文化の観光化によって他の民族と頻繁に接触することで、本来の意味を喪失し、民族アイデンティティにも変化が見られるようになったのである。イベント化された祝著節は、生活が現代的になって、銅鼓を叩く習慣が急速に失われつつある布努ヤオ族の人々にとっては、銅鼓文化を保存するための有益な方法として認識されている。しかし、このようにイベント化され、宗教的コンテクストから切り離された銅鼓文化は、祭りというよりも、むしろ伝統芸能として保存されているに過ぎないとも考えられる。

また、布努ヤオ族の銅鼓文化そのものを主題として取り上げ、チワン族の銅鼓文化と比較検討しながら、祭りの観光活用のあり方について考察した。その結果、以下の点を明らかにすることができた。

第一に、布努ヤオ族とチワン族の銅鼓文化を比較検討し、優れた民芸品であるとともに、宗教的な呪物でもある銅鼓の特色を概観した。そして経済発展と現代文明の進展が、銅鼓文化にこれまでになく大きな影響を与え、銅鼓の使用頻度が減少し、演奏できる人も少なくなってきたことを指摘した。その上で多くの若者は出稼ぎに行き、銅鼓を打つ機会がない上に、現代的な娯楽に惹かれ、銅鼓には無関心となっていることを述べた。

第二に、銅鼓文化が観光活用され、多くの観光者を惹きつけて、大きな経済効果をもたらしていることを、河池市銅鼓山歌芸術節、布努ヤオ族祝著節とチワン族蚂拐（カエル）節などの祭りを事例として検討した。それによって少数民族の日常生活世界に埋め込まれてきた銅鼓習俗が、広西チワン族自治区河池市政府の文化政策と市場経済の少数民族居住地域への浸透という外的要因によって規定され、変化しつつあることを明らかにした。また、中国西南部における未開発地の少数民族のホスト側と、経済的に優越した地位にある漢民族のゲスト側とがその文化的価値の相違や経済的な格差などによって、両者のコンタクトゾーンで絶えず摩擦を生じさせていることを指摘した。そして国家の優遇政策によってチワン族と布努ヤオ族の銅鼓文化が観光資源化されることで、日常生活から切り取られてエンターテインメント化し、観光者の眼の前にさらされ、銅鼓文化の本来の意味は希薄になりつつあることを指摘した上で、観光化と同時に祭りの本来的意義を考慮する必要があることを述べた。

さらに、白褲ヤオ族の伝統文化の観光化を取り上げ、その中で伝統文化の観光資源化についてどのような問題点があるかを考察した。白褲ヤオ族の民族文化の観光化は 2000 年から始まり、現在まで 16 年が経過して、さまざまな効果をもたらしているが、観光地と

してはまだ発展期にあると考えられる。この時期は、政府によって観光開発が白褲ヤオ族の社会にもたらす経済的利益が強調され、同時に政府自身が観光開発における起業家としての役割を果たす場合が多かった。また、観光企業の導入によって、企業化された管理を行うことが、地域社会を振興するうえで顕著な効果を有するものであることも明らかとなった。その一方で、地域の自然環境や社会文化環境に対するインパクトについての関心は不足していることがわかった。さらに、観光開発の直接的な効果として経済利益を得ることができるようになったことで、村民たちの観光化への志向性は強くなっているように思われる。現代化と観光開発によって白褲ヤオ族の生業形態は、2000年代より前の農業中心のあり方からサービス産業中心のあり方へと転換し、社会経済の構成は急激に変化しつつある。この地域では、伝統文化の保存のために積極的な方策が図られると同時に、観光開発において伝統文化の観光資源化が推進されている。そして、市場経済の浸透と「観光脱貧」政策の下で、地元住民には経済意識が芽生え、利益を得るために伝統文化を商品として売るという事態が生じている。

最後に、少数民族居住地域への観光客の流入によって、布努ヤオ族の伝統文化がどのように変容したかを明らかにした。具体的には、観光化される前の布努ヤオ族の服飾におけるデザイン、耐久性、生産体制、着用の有無、季節性、色の組み合わせ、装飾の図案と精神的象徴などを、観光化された後と比較した。その結果、布努ヤオ族の服装は現代的ファッションの浸透に伴い、製作方法が変化したことが確認された。また、既製服が流行し、様式の過美化が進行するなかで、意味の希薄化が進んでいることを確認した。そして、観光開発が布努ヤオ族の建築文化に与えた影響についても分析した。具体的には、政府主導下で「伝統的な茅葺き建築の方案」が実施され、布努ヤオ族の伝統的な建物が改築されていった。また、交通網の整備は、観光客の流入によって、道路沿いの村における伝統民族文化の崩壊や変容を加速させた。さらに、観光開発による伝統的祭りの商品化が進み、祭りの意義が失われつつあることを指摘した。

また、近代化の推進によって、市場経済が浸透しつつあり、布努ヤオ族の社会文明化が促進され、布努ヤオ族の伝統文化の崩壊が進んでいることも事実である。そして観光開発と生活の近代化が少数民族の伝統文化に与え影響を踏まえ、観光開発と生活の近代化との間にどのような関係があるのかを検討した。その結果、近代化は農村部の人々にとって決して悪いものではないと思われるが、その一方で、代々伝承されてきた民間伝承、歌、芸能の断片化、担い手不足による伝統行事の簡略化、伝統工芸や民間医療の後継者難、民族建築物の減少、伝統的な儀礼や習俗の衰退などといった問題が深刻なものとなってきたことを明らかにした。これらの点における近代化の影響力を無視することはできないが、もう一つ新たな要因として出現したのが観光開発の影響なのである。観光開発は、多くの観光客を誘致することで、その成果を経済に活かすことによって、少数民族の生活を改善し、地域社会の近代化をも促進している。近代化によって若年層が出稼ぎに行くという現象が顕著化することに伴って、農村部の人口が減少するとともに、担い手不足による伝統行事の簡略化などの問題がひき起こされている。その一方で、観光開発の進展によって、農村地域社会での雇用機会が増加したため、若者たちが故郷に回帰する現象もしばしば見られるようになっている。観光開発の推進は、地域社会の過疎化の問題を緩和し、伝統芸能の

担い手を増加させることで、伝統文化の保護にとって有効な手段であるとも考えられる。しかし、観光の推進によって、舞台化された伝統行事における「文化の真正性」という問題が生み出されるだけでなく、伝統文化の商品化の問題も深刻になってきたのである。

以上のような結果を踏まえ、エスニック・ツーリズムとまちづくりをどのように調和させていくことができるのかという問題を、観光まちづくりにおける地域社会、地域環境、地域経済の三つをめぐる地域マネジメントの視点から検討した。エスニック・ツーリズムの進展によって、広西チワン族自治区の少数民族の村々では伝統的家屋が整備されて、新たな土産物屋や飲食店などの観光施設に転用され、多くの観光客を誘致することによって、確かに経済的利益を生み出した。しかし、観光という手段で得られた収益の一部が地域環境の保全に投入されているものの、地域環境の保全に対する関心が不足している現象がよく見られる。また、エスニック・ツーリズムの進展によって、少数民族の一部の人々には伝統文化が重要な民族文化財として認識されたが、その一方で地域での伝統行事や習俗など、生活のなかで大事にされている資源を地域外の人々に伝え、価値を共有しようとする意識は教育などの制約によってまだ希薄であると思われる。西南中国広西チワン族自治区ではエスニック・ツーリズムの推進によって、地域振興が活発になっているが、観光開発によってもたらされた負のインパクトについては十分に認識されていない。また、観光で得られた収益を地域環境の保全にさらに投入する必要があると思われる。そして、最も重要なことは、特にこれまで政府と企業が主導してきた地域において伝統行事や習俗など生活のなかで大事にされている資源を地域外の人々に伝える活動に、地域住民が主体的に参入していくことであると思われる。

Abstract

Research on Ethnic Tourism and Acculturation in Ethnic Society: the Case of an Ethnic Minority Group in the Guangxi Zhuang Autonomous Region, Southwestern China

1. Background of the Research

From the implementation of the policies of reform and opening up to that of the Western Development policy, China had great expectations of the development of tourism in the areas inhabited by ethnic minorities in terms of economic advancement and modernization of its inland areas. Therefore, ethnic tourism began to spread across the whole nation in the early 1980s. In particular, ethnic tourism in Yunnan Province has created substantial economic benefits. In the areas inhabited by ethnic minorities in Guangxi Zhuang Autonomous Region, a province neighboring Yunnan Province, ethnic tourism, where the traditional cultures and lifestyles of the ethnic minorities like the *Zhuang* and the *Yao* are developed as tourism resources, have also been revitalized.

Ethnic tourism makes use of traditional ethnic cultures to boost the economy; it is vigorously popularized to acquire tremendous economic benefits, help ethnic minorities reduce poverty, and accelerate the development of ethnic society. Nevertheless, the development of ethnic tourism has caused cultural commercialization and difficulty in the preservation of traditional cultures though it has improved the life of ethnic minorities. In other words, modernization and tourism development have brought many foreign cultures, which has resulted in the problem of the coexistence of foreign and traditional cultures; meanwhile, tourism development has had an impact on the identity of ethnic minorities, and there is a risk that the ethnic identity will disappear.

2. Purpose of the Research

With the case of ethnic tourism in the areas inhabited by ethnic minorities in Hechi, Guangxi Zhuang Autonomous Region in Southwest China, this paper aims to explore the acculturation brought by ethnic tourism to ethnic society.

3. Method of Research

To realize the research purpose, this paper analyzed previous studies to summarize the background of the development of ethnic tourism and found problems in such development. By probing into relevant historical cultures and the local ethnography, I became acquainted with the traditional cultures and historical development of the research subjects. With these research theories, I conducted a field investigation into the current situation of Hechi where the subjects live. Moreover, a questionnaire survey was adopted to analyze the effect of the development of ethnic tourism on the ethnic awareness of the local ethnic minority groups. Additionally, I interviewed the local residents to understand their attitudes towards the development of ethnic tourism.

The details about the field investigation are as follows: From August 20 to September 10, 2014, the first survey was conducted in the areas inhabited by ethnic minorities in Hechi, with emphasis on the historical and tourism-oriented development of the Bronze Drum Culture. Meanwhile, I investigated tourism-oriented development of the cultures and festivals of the ethnic minorities against the backdrop of the development of ethnic tourism. From May 21 to June 10 and from July 13 to 23, 2015, the second and third surveys were conducted respectively, with a focus on the tourism resources and pseudo-events of traditional festivals against with the backdrop of the development of ethnic tourism. From February 3 to March 3 and from August 8 to 23, 2016, the fourth and fifth field investigations were made respectively. Both investigations laid emphasis on the reality of the traditional festivals that the *Yao* people had carried forward for 100 years. In addition, I interviewed Meng Ling, a representative of the research on the *Yao* culture and probed into the tourism-oriented development of the traditional festivals of the *Yao* people. Also, the large-scale performance called Dream in Bama, which was set in a natural landscape, was investigated. The sixth field investigation started on April 28 and ended on May 21, 2017. During the investigation, I explored the places where the Zhu Zhu Festivals of the *Yao* people was held and got acquainted with the current situation of the festival through interviews with the *Yao* people.

4. Result of the Research

This dissertation is comprised of an Introduction, Part I and Part II. In the Introduction, I elaborated on the background of this study, the research problem, the previous academic achievements, the research purpose and method, the theories, and

the structure of this dissertation.

In Part I, I described the changes to the population and the distribution of the Chinese ethnic minorities, analyzed the previous academic studies on the *Zhuang* and *Yao* peoples, and introduced the traditional festivals and architectural culture of the two peoples. Then, I probed into the concept, implementation and economic benefits of the Western Development policy as well as its effects on ethnic minorities. To delve into the ethnic tourism in Southwest China, I analyzed the development of ethnic tourism in Yunnan Province, Guizhou Province and Guangxi Zhuang Autonomous Region. Finally, I provided an overview of the natural and cultural tourism resources of the ethnic minorities in Hechi, Guangxi Zhuang Autonomous Region, and analyzed the tourism-oriented development of the traditional cultures of the ethnic minorities in the tourism development of Hechi during the implementation of the Western Development policy. With the above efforts, I have come to the following conclusions: (1) the implementation of the Western Development policy has significantly accelerated the infrastructure and tourism of Hechi; (2) tourism-oriented development of the traditional cultures of ethnic minorities has not only pushed forward the regional economy but also helped improve the life of ethnic minorities; (3) with the development of tourism and the penetration of the market economy, the tourism development mode, which centers around the traditional cultures of ethnic minorities, has become universal; (4) while the utilization of the traditional cultures of ethnic minorities has boosted economic development, it has caused the disappearance of traditional cultures and environmental pollution.

According to the issues mentioned in Part I, I paid attention to the effect of modernization on ethnic minorities and defined the impact of tourism development on the ethnic society in Part II. Furthermore, I discussed the relationship between ethnic tourism and the protection of traditional ethnic cultures from the perspective of regional operation and management. The research result is as follows: First, I explored the effect of the tourism development of ethnic minorities on the Zhu Zhu Festival of the *Pu Nu Yao* in Hechi. With the support of the government, the Zhu Zhu Festival was developed as a tourism resource and gradually evolved into a major ceremony, attracting a great number of tourists. But at the same time, it has resulted in the commercialization of the ethnic traditional culture, and the original meaning of the festival has begun to be weakened. Worse still, the decoration of the bronze drums and the disorder of the old and new bronze drums behind the stage have deprived the bronze drums of the original religious meaning.

Second, the Bronze Drum Culture of the *Pu Nu Yao* has changed under the influence of the tourism policies. Based on the results of the questionnaire survey for the festival

participants, I discussed the relationship between the change and the ethnic identity of ethnic minorities. The research results are as follows: First, although most of the *Pu Nu Yao* people don't have a bronze drum or keep the habit of playing bronze drum in daily life, they are still aware that bronze drum is an important ethnic cultural heritage. Second, the local people have developed the idea of showing performances to tourists, which has made the ethnic traditional culture more commercial and weakened the original meaning of the bronze drum and offering sacrifices to ancestors. Due to the proposal of the *Yao* researchers, the *Yao* people have re-discovered the meaning of Da Nu Festival or Er Jiu Festival, which was initially irrelevant to the *Yao* people, and re-defined its religious meaning. However, the festival was named as the Zhu Zhu Festival, which demonstrates the ethnic identity. Because of frequent exchange with others and the tourism-oriented development of the Bronze Drum Culture, the festival has lost its original meaning. It is also found that the ethnic identity of the *Yao* people has changed. For the *Yao* people who have been living a modern life, the celebration of the Zhu Zhu Festival has been regarded as an effective way to preserve the Bronze Drum Culture as the practice of playing the bronze drum has gradually disappeared. The festival has separated the Bronze Drum Culture from its religious background; it has been preserved as a traditional art rather than as a festival.

Third, I compared the Bronze Drum Culture of the *Pu Nu Yao* with that of the *Zhuang* to explore the tourism-oriented development of traditional festivals. The research results are as follows:

First, I made a comparison of the Bronze Drum Culture between the *Pu Nu Yao* and the *Zhuang* and described the features of the bronze drum. The development of the economy and modern civilization has had significant influence on the Bronze Drum Culture: the bronze drum has been played on a less regular basis and the number of people who can play the bronze drum has become ever smaller. Many young people have chosen to work in a city away from home; hence, they have fewer opportunities to play the bronze drum. Fascinated by modern entertainment culture, they have lost interest in the bronze drum.

Second, I analyzed the Bronze Drum Culture in the Bronze Drum Folk Music Festival, the Zhu Zhu Festival of the *Pu Nu Yao*, and the Maguai Festival of the *Zhuang* in Hechi and found that the tourism-oriented development of the Bronze Drum Culture has attracted many tourists and created great economic benefits. Due to the cultural policies by the government and the penetration of the market economy, the practice of playing the bronze drum in daily life among ethnic minorities has been changed, and so has the Bronze Drum Culture. With a lower economic status, the

ethnic minorities in Southwest China lag far behind the Han people in terms of economy and culture, and continual friction is inevitable in the communication between them. As the bronze drum cultures of the *Zhuang* and the *Yao* have been developed towards tourism with the national preferential policies and have been separated from daily life and become entertainment-oriented, the original meaning of the cultures have been weakened. Therefore, attention must be paid to the preservation of the original meaning of traditional festivals in tourism development.

Aside from analyzing the tourism-oriented development of traditional culture of the *Bai Ku Yao*, I pointed out problems in the process. The development started in 2000. In the past 16 years, it has created tremendous economic benefits, but it is still regarded as the being in the early stages of tourism development. As the development could generate social and economic benefits in this stage, the government strongly advocated it and participated in it as an enterprise. Moreover, I found that the government was active to attract investment from external enterprises and strengthened enterprise management, which greatly fueled the development of local communities. Nonetheless, the government did not pay adequate attention to the negative effects of the development on the local natural, social and cultural environment. Worse still, tourism development has brought economic benefits, so many of the villagers strongly support the tourism-oriented development of traditional cultures. Under the influence of modernization and tourism development, the agriculture-oriented economic structure of the *Bai Ku Yao* has changed into a service-oriented one, and the social and economic structure has been changing rapidly. In the local community, the government is enhancing the protection of traditional cultures while boosting tourism development. With the penetration of the market economy and tourism development, local residents have begun thinking of putting their business ideas into practice, which has resulted in frequent commercialization of traditional cultures.

Finally, I investigated the impact of the huge influx of tourists into the areas inhabited by ethnic minorities on the traditional culture of the *Pu Nu Yao*. Specifically, I made a comparison in the design, abrasive resistance, production, dressing, seasonal feature, color collocation, decorative pattern and symbolic meanings of the costumes of the *Pu Nu Yao* before and after the tourism-oriented development. The research result is as follows: the production of folk customs has changed due to the penetration of modern design culture. This has been confirmed. Meanwhile, the popularity of ready-made garments and excessive beautification of clothing styles has weakened the original meaning of costume. Then, I probed into the effect of tourism development on the architectural culture of the *Pu Nu Yao*. Specifically, the implementation of the Plan of Renovating the Traditional Thatched Houses by the government has led to the rebuilding or destruction of many traditional buildings. Worse still, transportation

development and the great influx of tourists have quickened the disappearance of the traditional cultures of the villages along the road; tourism development and the commercialization of traditional festivals have been depriving traditional festivals of their original meaning.

Modernization and the penetration of the market economy have promoted the development of the social civilization of the *Yao*, but they have also accelerated the destruction of the traditional *Yao* culture. Therefore, I explored the effect of tourism development and modernization on the traditional cultures of ethnic minorities to discuss the relationship between tourism development and modernization. The research result is as follows: I do not believe that modernization is something disadvantageous for people living in rural areas, but it is true that it has caused many problems, such as the disappearance of the traditional folk music and dance, the oversimplification of ceremonies of traditional festivals, a lack of the inheritors of traditional handicrafts and folk medicine, the reduction of ethnic buildings, and the decline of traditional customs. We cannot neglect the impact of modernization on traditional cultures, but there is a new factor which influences them -- tourism development. The above problems are caused by modernization which drives young people to work away from home and thus leads to an ever smaller population in rural areas. But it is often seen that many young migrant workers have returned for work thanks to the large number of job opportunities brought by tourism development. Therefore, promoting tourism development will effectively alleviate the reduction in the population of local communities and increase the number of traditional cultural inheritors. It is true that tourism development is an effective way to protect traditional cultures; however, tourism development has also caused some problems, including the loss of the authenticity of traditional cultures and the commercialization of traditional cultures.

Finally, I elaborated on the balanced development of ethnic tourism and urban planning according to the relationship between society, environment and economy. To develop tourism, the ethnic minorities in Guangxi Zhuang Autonomous Region repaired and maintained the buildings of primitive villagers, and many buildings were transformed into souvenir stores or restaurants, which has attracted a large quantity of tourists and created economic benefits. Nevertheless, tourism enterprises only spend a small sum of the earnings brought by tourism development on maintaining the local environment. This indicates that the environment has received inadequate protection. As tourism develops, some villages of ethnic minorities have become conscious that traditional cultures are important cultural heritages. But due to restrictions on education, such traditional ceremonies or customs and other cultural heritages have not been well popularized, and a value consensus has not been reached.

Moreover, I believe that more earnings brought by tourism should be spent on the protection of the environment. Most importantly, local residents should take part in traditional cultural activities dominated by the government and enterprises.